

---

# 僕は友達が少ないIF

としまく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕は友達が少ないIF

### 【Nコード】

N3974U

### 【作者名】

としまく

### 【あらすじ】

この話は残念系ラブコメ”僕は友達が少ない”の二次創作である。くすんだ金髪とツリ目が原因でヤンキーと間違われる少年”羽瀬川小鷹”と美人だが無愛想で対人恐怖症の少女”三日月夜空”。この二人には一つの共通点があった。

”友達が少ない”

そんな日常から脱却すべく、三日月夜空が”隣人部”なる部活を創部。それに巻き込まれる羽瀬川小鷹。

様々なキャラ視点で描かれるはがないの世界、原作とはまた違ったはがないの世界。

これは一人の少年と少女の、美少女だがどこか”残念”な一面を持つ美少女達の物語である。

プロローグく出会いく(前書き)

プロローグとなります。

「三日月夜空」視点。

## プロローグ〜出会い〜

初めに言っておくが、私はそこまで落ちぶれていない。

勉強もそれなりに出来て、クラスの順位もいい。

運動もそれなりにできるし、自分で言うのもなんだが容姿も完璧だと思っている。

ここまで書けば、誰もがそれを”リア充”と思うだろうが現実はその甘くはなかった。

そう……私、”三日月夜空<sup>みかづき</sup>”は、”友達が少ない”

いったいなんでだろうか……？まあその理由は私が常に無愛想であることと、非常にサディストだからだ。

完璧な人間などこの世にはいない、人間必ずしも欠点があるというものだ。

勉強が出来る反面容姿が悪かったり、容姿が良い反面社会性が欠けていたり。

私の場合は、文武両道で容姿が良かった反面、性格に問題が出てしまったわけだが……

どうも昔から女っぽく振る舞えなく、男の子がするような格好ばかりし、並大抵の男になら喧嘩でも勝っていた。

そういう頼りがいのある女は大抵同姓にモテるという話を聞いたことがあるが、私の社交性の無さから 同姓すら寄りつかない始末。

だが、友達が居なくとも学校できちんとやっていたれば単位も取れるし、学生生活に支障が出るわけでもない。

付き合う友達がいない分、個人的に出来ることをのばしていけば立派に生きていけるはずだ……

……そう思っていた時期が私にもありました。

「あゝこのレポートはダメだねえ、だってこれ多人数で組んでやる課題だし」

そう私に失敗したレポートを突きつけてきたのは、この学園、聖クロニカ学園のシスターである”高山<sup>たかやま</sup>ケイト”先生だった。

銀髪の美人で社交性もあるし頭も良い、文章だけ見れば完璧な先生であるう……

と、さっき私が言った言葉を使うのならやっぱりこの先生にも欠点がある。

この先生、人前でゲップは平気でするわ屁はこくわ……女性らしさなど微塵も感じさせないほどオッサンくさいのであった。

私自信やこの先生を見てみると、いかにこの世に完璧という言葉が存在しないかが分かる。

と、ケイト先生の紹介はこれくらいにして、友達がいなくても生きていけると豪語した私が躓いている理由はというと……

「ただ勉強が出来ても、容姿が良くて、運動が出来てもクリアできない課題……」他の人と組んで行う課題』だ。

先生はこの課題を出すとき、「好きな子と組んでも良いし、最悪三人組でも良いので誰かと一緒にレポートを書いてください」と言っていた。

みんなのトラウマ、「はい、二人組つくってー」という悪魔の言葉、もしクラスの人数が”奇数”だったらそれは大変なことになるだろう。

”一人余る”のである。その運命からは逃れられない、そして余る人間は必然的に友達がいないやつとなる。

しかも三人組も良しとまで言われてしまっっては、偶数であっても

ハブられる人間は出てしまう。非常にやっかいな課題であった。

そしてこの課題のタイトルはというと、「人とうまく付き合うにはどうすればいいか」である。知るか!!

そんなもの能力のある人間が勝つに決まっているではないか! 確かに裏を読まれないよう良い人間が付き合えるに決まっているではないか!

そのような課題をこの三日月夜空に出されても、私はまともな人と付き合ったことなどない。そしてこの課題をクリアするにあたって組む相手などいるはずもない。

結局余った私は一人で、なんとかインターネットで調べながら、そして私の得意技である綺麗事をフル活用して最高のレポートを書いたつもりであったが。

「そもそも二人以上でやるレポートを一人でやるほうが間違ってるよん、通るわけないじゃん」

とケイト先生に言われ見事に玉砕した私なのであった。

しかしこの課題が通らないと補修うんぬんが待っており、結局「誰でも良いから組め、先生でもいいから」と哀れみを言われてしまうのである。

先生と組むという選択肢は友達が居ない奴の専売特許だ。いわゆる恥を忍ぶでの最終手段だ。

私自身がプライドが高くなければそれでもかまわないのだが、残念なことに私は非常にプライドが高いのだ。

それだけはいやだ。そう悩んでいる私にケイト先生はこう言った。「あんたが恥を忍んで先生と組むような人だとは思ってないし、このケイトちゃんが救いの手を差しゲツプう伸べてやるう」

と、後半ゲツプで良い言葉が台無しになった気もするのだが、ケ

イト先生は困っている私を救ってくださるらしい。

こうなったら多少変な条件でも呑もうではないか、と決心する私にケイト先生はその条件を提示した。

「あんと同じ、この課題を一人でやった愚か者がいる。なのでそいつと二人協力して課題をクリアしてちょうだいな」

どうやら私の同類がいたらしい、まあいないのも不思議ではないな。

結局条件は、孤独同盟の赤の他人と組んで課題をクリアしろというわけか、少々めんどくさかったが私はその条件を呑むことにした。私はケイト先生に言われるまま、学園の敷地内にある礼拝堂へとやってきた。

それはまさに教会といった感じで、結婚式やミサなどが行われそうな雰囲気と、懺悔室などもありいかにもそれらしい雰囲気を醸し出していた。

その中の一つである『談話室4』、もう少しでそいつが来るからそこで座って待ってなさい。とケイト先生に言われ私はそこで待つことに……

広さ八畳ほどの小綺麗な部屋で、テーブルやソファ等一通りの物が揃っている。

こんな場所で、今日私は赤の他人と課題をやるのだと思うと先が思いやられる。

まず自己紹介から始まり、じれったく「よろしく」と言ってカチカチとした空気が漂う。

そして私自身も無愛想かつあまり人と話すのも得意ではないため、きつと相手は途中で逃げ出すと思う。というか絶対に逃げ出すと思う。

でも逃げ出されては課題にならないし、その相手を気遣いながら課題をやるというのも面倒な話だ。



談話室に入って10分くらい、私が丁度イラつき始めた辺りで、ドアがコンコンと鳴った。

おそらく私と組む相手だろう、男なのか女なのか……どのような趣味でどのような性格なのだろうか……

そういう情報も一切知らされていない中、そのドアがゆっくりと開く。

少しばかり緊張しながら、私はいつもの無愛想な面で入ってくるそいつを迎える。

ドアが完全に開き、そこに立っていたのは男であった。

金髪……というよりは茶色掛かった濁った金色、まるで金髪にしようとして失敗したような髪の色をした男がそこに立っていた。

「あ……よ、よろしくな……」

そいつはさつき私が語ったシナリオをなぞるように、堅く「よろしく」と言った。

「……おまえは」

そう呟いたのは私だ。今思えばどうして無愛想な私が赤の他人を見てそう呟いたのか……

なぜか知らないが、そいつを見た時の私はどうにもいえないような顔をしていた。

まるで意外な人物が来たかのように、そしてそれを待ち望んでいたかのように……

そう……それが私と”羽瀬川小鷹”はせがわ こたかの出会いだった。

これが出会いという名の”再会”であったことは、後にわかることである。

人命救助（前書き）

1話目となります。

「三日月夜空」視点

## 人命救助

隣人部が設立してから10日目、等々事件が起きてしまった。

私は見てしまった……恐るべき物を……

ある程度の状況にも対応できる自信があつた私であつたが、さすがに”あれ”は一人では対応できないだろう。

だから私は走っている。我が隣人部の愉快なメンバーに助けを求めするために。

「小鷹—————!!」

「うお!?!」

私の叫びに小鷹がびっくりした。

当然であろう、急に部室のドアが勢いよく開き、部長である私に名前を呼ばれたのだから。

おっと、先ほど私は隣人部の愉快なメンバーと銘打つたが、謝ることが一つある。

そのメンバーは”一人だけ”だ。期待した人が少しでもいたなら謝ろう。

金髪のヤンキーである羽瀬川小鷹、頼りになる我が下僕である。

「誰が下僕だ!?!しかも俺はヤンキーじゃねえ!!!」

「おっとどうやら口に出していたか、許せ下僕よ」

「だからちげえって……」

と、小鷹にさっそく突っ込まれた私であつたが、今はそんなことを気にしている暇はない。

私は伝えなければならぬ、小鷹に今回の隣人部の活動の内容を

……

「小鷹、今より本日の隣人部の活動内容を伝える」

「三日ぶりの活動か、それまたいったい何があつたんだ？」

そう、我々隣人部、立派な部活とは言つたもののここ最近はまともに活動すらしていなかつた。

『キリスト教の精神に則り、同じ学校に通う仲間の良き隣人となり友誼を深めるべく、誠心誠意、臨機応変に切磋琢磨する』という理想を掲げ創部したのだが、全く入部者がやつてこないのである。

かれこれ10日、ここにいる金髪と二人つきりで部室にいるわけだが、そろそろ誰か来てくれてもいいのではないか、と私は少しばかり願つていた。

さらに創部してから3日後に副顧問のケイト先生から、「人数も集まらんし、たいした部活もしないんなら先生の仕事の手伝いしちよくれよ」と文句を言われ活動する以前に書類作成に没頭する毎日、言うなればそれが隣人部の活動である。人付き合いを極めるのではなく単に1人の先生の手伝いが部活動になつてしまつてるのである。そこにいる副部長の羽瀬川小鷹とはそれほど関係が拗れているわけでもなく、同士として同類としての、いわゆる”旅は道連れ感覚”で一緒に仕事をしている。

そろそろそんな日常からも脱却したいと思つていた今日、私はこんな一言を小鷹に発した。

「人命救助だ」

「……………はあ？」

当然の反応であつた。おいやめろ、追いつめられて頭おかしくなつたとかそんなことないからそんな哀れみの目を私に向けるのをやめろ。

私が急にそんなトンデモ発言をしたのにはきちんと理由があるの

だ。

「先ほど廊下を歩いていたらな、理科室から大きな音が鳴って、強烈な異臭が漂う中理科室を覗いてみたら、女子生徒がぐったり倒れていたんだ」

「そりやまた一大事……ってこんなところで呑気に話してる暇ないだろうが!!」

小鷹の言うとおりであった。一刻も早くその女子生徒を助けに行かねば。

小鷹は私の言うことを一つも疑わずに、その理科室へとダッシュで向かった。

そして理科室につくなりあの異臭が漂ってきて、私たちは息を止め、すぐさま女子生徒の元へと足を運んだ。

女子生徒を見つけるや否や、小鷹はその少女を抱きかかえ、すぐさま理科室の外へと出た。

そして私はすぐさまその少女の様子を窺う。

黒い髪を後ろで結んで、制服の上から白衣を着ている眼鏡をかけた少女。

どうやら死んでいるわけではなく、安らかな寝息を立てていた。

寝ているだけ……か……

だが油断はならない、理科室の中はとても荒れていて、ピーカーからは変な色の煙が立っていた。

ここから早く離れなければ、私たちはとりあえずその少女を部室へと連れて行った。

「……なんか誘拐みたいになってしまったが、どうする?」

私はとりあえず小鷹に聞いてみたが、小鷹は「知らねえよ」と答えた。寂しい奴だなお前は。

もしこのまま目を覚まさなかったらどうなってしまうんだろう、私はふと考えた。

ひよつとしたら変に関わってしまったのが原因で、私たちが疑われてしまうのではないか。

人を救ったつもりが、逆に犯人に仕立て上げられてしまう、ひよつとすればそんな大変な事態に発展することもあり得るのではないか。

無計画で動くところくな事にならないとはこのことを言うのだろうか、少なくともこの状況を小鷹以外の人間に見られるわけには……

「ずいぶんつまあ面白いことやってるねえチミ達」

「「ケイト先生!？」」

私と小鷹は同時に驚いた。この先生いつのまに私たちの後ろにっいていたんだ。いやひよつとしたらこの事件に最初に関わったときからすでに……

もしかして、隣人部という存在に愛想を尽くしたケイト先生の計画だったのか、いやだとしてもそんな……

「こ……これは違うぞケイト先生! 私たちは理科室で倒れているこの子を助けに行っただけだ!」

「そ……そうだ! 決して俺達が襲った訳じゃ……」

「まだ私は何も言ってないんだけどねえ……」

私と小鷹の主張に対し冷静に答えるケイト先生。

まずい、このままでは本当に犯人に仕立て上げられるかも知れない、そして私たちはこの学校から追い出され路頭に迷って……

は! ? もしかしてケイト先生、私たちが友達が少ない出来の悪い生徒だから、この学校の脅威になると考えて……

「さつきからものすごく失礼なこと考えてないかい？というか思いこみ激しすぎでないかい夜空ちゃん？」

「わ……私は屈しないぞ、そうだ私にはロシアでエージェントをやっている友達のロシちゃんが！」

「いやそのエア友達設定は無理があるだろ！！」

テンパる私に小鷹が突っ込む。

そしてケイト先生は私たちを宥めるようにこういった。

「まあまあ落ち着きなさいな、見たところその子眠ってるだけだしさあ。それに君たち結構評価高いことをしたっばいよ」

ケイト先生のその言葉が、私たちにはしばらく理解できなかった。そんな話をしていると、噂の少女が目を覚ました。

よかった……これで私は罪人にならずにすむ……

「うーん、あれ確か理科は理科室で……」

「目が覚めたか？」

状況がいまいち理解できていないその少女に、私たちはこれまでの経緯を話した。

「そうなんですか、わざわざありがとうございます。おかげで助かりました」

おお、人を助けてお礼がもらえるとは久方ぶりの感覚、恩を仇で返すのが人の専売特許ではなかったんだなあ

まあ私自身普通は人を助けるくらい心の広さは持ち合わせていないとして、そこにいる羽瀬川小鷹は良いことをしても全て悪い噂になって飛び散るらしいのでこの感動がよりいっそう現れたらしい。

小鷹の 体がわなわなと震えてるのがその証拠だ。

こうして私たち隣人部は、創部10日目にしてようやく結果を出したのであった。

「私は志熊理科といいます。それでその……少しばかりですがお礼がしたのです」

「ふっ、気にするな、私たちは人助けをしたまでだ」

と、本来の私なら絶対に言わないであろう一言をそれなりにかっこよく言ってみた。今の私は隣人部の部長としての三日月夜空、少しでもこの部の評判を上げなければ……

小鷹とケイト先生がジト目でこちらを見ているが、気にしたら負けだ。

一方で理科はというと、どうやら義理堅い性格なのか、こんなことを私たちに言ってきた。

「そういうわけにはいきません、労働には対価を、目には目を歯には歯を、これ即ち等価交換の原則。質量保存は人の行動にも適用されるべきです」

あれ？ちよつと難しい単語を多く使ってきたぞこいつ……

なぐんか違うな、素直にお礼を言える常識人かと思っただがなぐんかずれてきたぞ。

こいつからは少しばかり小鷹と同じ残念な匂いがしてきたぞ。

「お前が言っな！お前主人公扱いされてるからってそのあふれ出る残念オーラを隠し通せると思うなよ！！」

後ろで小鷹が変なことを言っている。はっはっは何を言い出すのやらこの黄土色ヤンキーは、この私が残念な美少女だって？



常に無愛想で人付き合い苦手で、というか人混みを見ると吐き気を催して、催すだけで飽きたらさぶつちやけいと吐いて。

そして友達と呼べる友達がいないのでエア友達という、自分にとって都合の良い友達設定を作ってはそれをいるように自分で錯覚させる……あれ、おかしいなちよつと泣けてきたぞ。

話を戻すが、そこにいる志熊理科、どうやら普通の少女と違っていたが何か訳ありのようだ。

「先輩達は私の命の恩人です。命相応の対価を払わなければなりません」

「いや、そんな大げさな……」

その理科の言動に、思わず小鷹も戸惑っていた。

小さな人助けのつもりが、どんどんとスケールが広がってきている。

このままでは面倒なことになりかねない、とりあえず理科には今日はお帰りいただく。

そして理科には、「その話は今度」とだけ言ってなんとか返した。

「なんやかんやで隣人部としては初めてまともな活動ができたんじゃないか？」

「そうだな、ケイト先生の手伝いよりは達成感があった」

「おいおいそりゃあないんじゃないかい君たち……」

今日の活動に満足する私と小鷹の発言にケイト先生は少しばかり納得がいていなさそうであった。

隣人部として貴重な一步を踏み出したと確信し、今日は解散すること……

そろそろ誰か新入部員が来てもおかしくはない、そう思う私であった。

「にしても初めての成果がまた、どえらい人物と関わっちゃったねえ、こりゃあ楽しみだ」

最後にケイト先生が何か言った気がしたが、どうでもよかった。そして私たちは知ることとなる。後に隣人部の3人目のメンバーとなる志熊理科の秘密を……

即席コンビ結成（前書き）

第2話となります。

「羽瀬川小鷹」視点

## 即席コンビ結成

「はいこれやり直し、多人数でやる課題を個人で出してどうするんだい君？」

と、いきなり先生から怒られるシーンで始まるのが少々恥ずかしい。

しかしこんなことになったのにはきちんと理由がある。

俺、”羽瀬川小鷹”は、”友達が少ない”

その理由は大きく二つある。この髪、そしてこの目つきである。

髪の色は金髪、それも茶色が混じったような……例を挙げるなら金髪に染めようとして失敗したような髪の色である。

だが俺はけして金髪に染めようとしてハジけようとしたわけではない。この髪の毛は地毛だ。

信じられないかもしれないが、俺は日本人の父親とイギリス人の母親の間に生まれた。いわゆるハーフである。

しかし受け継いだのは金髪だけ、それも中途半端に。

顔立ちは日本人そのもの、クォーターも真っ青なくらい一部しかイギリスが入っていない。というかこれならむしろ入らなくてよかったのに……

まあこれでもまだまだもな顔立ちならよかったのだが、俺は自分でさえも認めるほど本当に目つきが悪く。町で歩いている本物のヤンキーとただ顔が合っただけなのに、「すみませんでした」と小言で言われたことがあるくらいだ。

かといってこれでグレしているわけでもない、俺自身は人には優しい良心の持ち主だし、大きな事件を起こしたこともないし補導されたこともない。

だけどやっぱり人っていうのは見た目で判断されるもので、昔から他人が寄りつかないのである。

とまあ自分の解説が長くなってしまったが、話を戻そう。

今俺の目の前にいるのは今回の課題を出した高山ケイト先生だ。

俺よりも年下だが大人びており、光り輝くような銀髪の美少女であり俺も最初見たときは思わず見とれてしまった。

……だがこの教師、しゃべり出すと印象ががらりと変わり、一言で言うと”ものすごく下品”なのだ。

授業中にコーラ飲んでゲップするわ屁は人前でこくわ、どうしてそんな容姿でそんなことができるのかまるで理解できなかった。

まあこの世に完璧な人間がいないのはわかっている。利点もあれば欠点もある。俺の場合は性格が良いが容姿が怖いので中身を全く見てもらえない。

そんなケイト先生が出した課題というのは、『人とうまく付き合い方にはどうすればいいか』というコミュニケーション系のレポートである。

この課題を一人で勝手にやって通るのなら俺もそこまで苦労はしなかったのだが、この課題、不幸なことに『二人以上組んでやる課題』。

もちろん他の生徒ならね、「俺と組んでやるうぜ」だの、「適当にしやべくりながらレポート書けばいいじゃん」だの呑気なことを口にできるのだが。

じゃあ問おう、俺みたいに『組む相手がない人間』はどうしたらいい？

レポートを出したくても、出せないのです。なんですかこの差別は？ああ思わず敬語になってしまった。

結局どうしたかというと、大目に見てもらえることを信じて一人で必死に書いたのだが、門前払いを食らってしまったのだ。

「でも、組む相手いないんですよ、これじゃあ課題出せませんよ」

俺の口から思わず弱気な発言が出てしまった。

そんな俺にケイト先生は……

「まあクラスで孤立する人間は必ずしも一人二人はいるってね、先生がそんなことを予測できていないとでも思ってるのゲップウイかい？」

後半のゲップで色々台無しにしている気がしたが、気にしないことにした。

ケイト先生がそういうからには、なにか秘策があるのだろうか、俺は改めてケイト先生に問う。

「君と同じ、この課題を一人で出した馬鹿者がいる。なので今から3時間そいつと二人で協力してレポートを出してちょうだい。赤の他人といきなり馴染めないとか甘えは許さないよん」

ということらしい、どうやら俺とそのもう一人はそうとう追いつめられているようだ。

いったいどんなやつなんだ。クラスメイトの名前と顔はある程度一致してはいるのだが。まあ孤立してるほど存在感のないやつだろうし検討がつかないのもしかたないか。

孤立してるやつと孤立してるやつが引かれ合うという法則はないだろうし、やっぱり人間付き合い合というのは難しい物だな。

そしてケイト先生に言われた、『談話室4』という部屋を目指して俺は歩き出した。

それは聖堂の中であって、とても不思議な空気に満ちていた。

ここで昔儀式とか色々あったのだろうか、今でもそれらをやっているような、そんな感じがした。

そして色々な部屋が並ぶ中で、そこにあった『談話室4』。中にはいつたいどんなやつがいるのだろうか、もし弱気な眼鏡くんとかだったら速攻でアウト確定だろう。逃げ出すよな……いや絶対逃げ出す。

俺は緊張しつつ、勇気を振り絞ってそのドアを開けた。

ガチャ……

そこにいたのは、女の子だった。それのかなりの美少女。

長くスラリとした黒い髪、そして整った顔立ち……どうしてこんなやつが俺とパートナーを組むことになったのだろうか。

こんなのがクラスの中央にいれば誰もが注目するだろうし、ぶっちゃけ言うともものすごくモテるとおもう。

いったい何があったのか、その理由はすぐさま明らかとなる。

「おまえは……」

「……？」

その少女の口がゆっくりと開いた。

声もまた透き通っていて、ますますそいつがそこにいる理由がわからなくなった。

だが一つ気がついたことがある。あつて早々そいつはとても不機嫌な、無愛想な面をしていた。

……ああそういうことか、俺は少しばかり理由が分かったのだが、それよりもさらにそいつの孤立を決定づける事実を俺は知ることになるのだ。

「あ……その……よろしくな」

「……ずいぶんとテンプレな挨拶だ。正直言っつたらん」

少女の口からいきなり出てきた毒舌、会って早々どうして赤の他人にそんなことが言えるのだろうか。

こりゃあ性格も悪いんだな……そいつの言葉を聞いた俺自身も、少しばかり緊張がとれた。

よかった……根暗なやつよりはまともに話ができそうだ。

「悪かったなテンプレで、まあそんなことよりも……お前が俺のパートナーか？」

「そうだが……お互い災難だったな。無駄話はやめてさっさとレポートを書いてしまっか。このレポートを書く以上にお前となれ合うつもりはない」

ぐ……こいつ、ここまでくると性格が悪いで済む話じゃない。

明らかに人を拒絶しているその目、その口……どうして容姿が良い奴に限って性格に支障が出るんだよ……

俺は少々不服だったが、そっちがそういう態度で出るのなら俺も極力関わらないようにしよう。

「一応名前を聞いておくか……君、名前は？」

「……羽瀬川小鷹」

俺はとりあえず名前を答えた。

「お前」とか「貴様」とかで呼ばれるよりは、「羽瀬川くん」とでも呼ばれた方が気分的には良い。

「羽瀬川……ああ、誰かと思えば、クラスでいつも一人でいる転校生ではないか」



今気づいたのかよこいつ……

そう、俺はここ聖クロニカ学園に転校したのはつい最近の話。

転校した初日に遅刻をして、息を切らしたまま教室に入った俺は、話す内容も思いつかずとりあえずとびっきりの笑顔で……

「転校生の、羽瀬川小鷹です」

と言ったのが運のつき、認めたくないのだが俺は笑った顔が一番怖いらしい。

俺の言葉の後にクラスの全員がビクウ！となったのが一目で分かった。そして休み時間、放課後、俺に対して話しかけてくる奴など一人もいなかった。

転校して早々失敗をした俺なのであった。そこにいるそいつは俺に対して恐怖を抱いていないようだが、内心では俺を拒絶していたのだろう。

「そうかそうか、転校していきなり拒絶されるとはかわいそうな奴だな、笑顔一つで聖クロニカの天辺を取れる男か。応援しよう」

「すんなバカ！天辺なんぞ取る気なんてねえよ！！」

次から次へと失礼なことを言ってくるそいつに俺は思わずツッコミを入れた。

というか……

「お前、他人に名前を名乗らせておいて自分は名乗らないのかよ？」

「ああすっかり忘れていた。」三日月夜空”だ。覚えておけ」

三日月夜空ねえ、またまた名前は立派なものだ。

こうして俺は三日月と組んで、このレポートを書くことになったのだが、大丈夫だろうか。

「んで小鷹はこの課題、どんなことを書いたのだ」

いきなり呼び捨てかよ、なにげにこいつ積極的な奴だな。  
とまあ内心ではちょっぴり嬉しかったりもするんだが、なるべく顔には出さないようにしよう。

「人と付き合うんだから、やっぱり積極的に話しかけたり、同じ趣味を見つれたりそういう努力をする必要がある。そんなことを書いた気がする」

「模範的回答ありがとう、たいした面白くもない」  
「とことん失礼な奴だな」

俺はそんな三日月に軽く腹を立てた。  
そこまでいうならと思って俺も聞き返すことにした。

「そういうお前はこういう風に書いたんだよ」  
「聞きたいか？というか……」

三日月はそう言った後、少し俺を睨みつつこう返した。

「私はそっちを名前で呼んでやってるのにそっちは私をお前呼ばわりか？ずいぶんと偉くなった物だな」

三日月は軽くムツとした顔でそう言った。

ああ、確かに今のは俺が悪かったかも知れない。

「ああすまねえ、三日月さん」  
「他人行儀だな、先ほど貴様が熱弁した模範的回答に利に反しているぞ」

「……………三日月夜空ちゃん」  
「ていー」

若干やけくそに言った俺に、どこから取り出したかわからないが三日月は八工叩きで俺を叩いた。それまた結構痛かった。くそ……

「痛ってえな！」

「普通に”夜空”で良いだろう、というか今度からそう呼べ」

「ったく、わかったよ……夜空」

俺はぎこちないながらも、そう呼んでやった。

このレポートを書く作業が、後々俺達の回りで起こる様々な出来事の……

後の隣人部となる俺達にとって最初の……

俺と夜空にとっての、最初の試練なのであった。

というか……色々無駄話してて、気がつけば30分も立っていた。  
くそ……

羽瀬川小鳩と三日月夜空（前書き）

第3話です。

「羽瀬川小鳩」視点

## 羽瀬川小鳩と三日月夜空

クッククク……今日も凶鳥の囁りが聞こえてくる。

この夜こそ、私の生きる世界の姿であり、そして私が支配する真実の世界……

青と赤の魔眼、金色に光る髪、その姿でさえ偽りなのだ。

この偉大なる夜の王、「レイシス・ヴィ・フェリシティ・煌」が、この世界を全て黒く染める日も近い……羽瀬川小鳩？はせがわ こはと我はレイシス・ヴィ（ry

この世界に光り浴びる愚かなる者達へ、恐怖という真実を見せてやるばい……

……

クッククク……そこのお前、今「俺見る小説間違えたわ」とか思わなかったか？

いや合ってるよ、この小説は間違いなく「僕は友達が少ないIF」だぞ。

この偉大なる夜の王、「レイシス・ヴィ・フェリシティ・煌」のあらすじを理解できぬ愚か者め、せっかくだからわかりやすく説明してやるうではないか……

あんちゃんが……最近帰ってくるのがおそいんじゃ……

ちなみに”あんちゃん”というのは私の兄の”羽瀬川小鷹”のことじゃ。

なんか「隣人部」って部活に入ったらしく、最近帰りがおそいんじゃ……

なにしちよるか知らへんけど、おかげで最近私が食べる夜ご飯はインスタントラーメンばかりじゃけん。

栄養も偏り味にも飽きてきた、そろそろあんちゃんの手作り料理が恋しくなってきたばい……

く……クックック、我が眷属が生け贄を粗末にしてるせいで私の怒りゲージが上がってきて、世界の進行が少しだけ早くなりそうじゃ……

あんちゃん！早く帰ってきてー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！

ドンドンー！！

ぬ！？な……なんじゃ！？

あんちゃんか……？でもあんちゃんならスペアキーでドアを開けて入ってくるはず……

も……もしかしてこの偉大なる夜の王を殺しに来た人間……？クックック……ちょうどいい、今の私は飯に飢えてる……

返り討ちにして、お前の肉を……血を最後の最後まで食らい尽くしてくれる……

クックック……く……誰？セールスなら帰ってくださいって言うってあんちゃんに言われてるんやぞ？

私は恐怖を抱きながら、そのドアの方へと向かった。いったい誰が私の家に……

カチン、ガチャ……

私は鍵を開けると、ドアがゆっくりと開いた。

そしてそこにいたのはあんちゃん……ではなく、聖クロニカ学園の制服を着た女子生徒が……

長い黒髪に整った顔立ち、すらっとした体型だった。

その人の表情は、第一印象から言わせてもらおうと「怖かった」。

ツリ目で、無愛想で、私と目があっていきなりキッとにらみ付け

てきた。

クッククク……この私を眼力で黙らせるとはこやつ……クッククク……うえ……誰じゃこいつ？本当に私を殺しに来た刺客なのか？

「おい……」

「びくう！」

私はもうレイシスであることも忘れ、素でビビりこいてしまった。怖い……怖いぞこいつ………いつたい何者なんじゃ………闇の使者か？あだしを殺害しに来た闇の使者なんか？

「とりあえず入るぞ」

「え？ええー！？」

こいつ、私になんの断りもなく家に入っていったぞ。こいつがいつたい何者で、私の所になにをしにきたのかもさっぱりわからんのに……聞かなければ、こいつが何者が……聞かなければ！

「あ………あんた誰じゃ！？」

「ああん？」

ひいー………

なんつう眼力じゃ、レイシスの100倍は怖いやないかばかたれ………

そしてこのオーラ、鉄のネクロマンサーに出てくるレンヴィーか！？レンヴィーなのかー！？

とか思っていたとき、そいつは私のところへ近寄ってきた。

やられる………私の永遠に生き続けた命はここで尽きる………！？

「ちつ、小鷹の言うとおりそうとうのひねくれ者だなこいつは……  
というかこいつ本当にあのヤンキーの妹なのか？」

「こた……か……？私のおんちゃんがどうしたんじゃ？」

「頼まれたんだよ、あいつ今日いつも以上に遅くなるそうだから、  
妹になんか食わせてやってくれって……」

頼んだ？おんちゃんがこいつに……

こいつ、いったいおんちゃんのなんなんじゃ？おんちゃんは私と  
同じで友達いないはずやぞ……

「私は三日月夜空、お前の兄貴と同じ部活の部長だ」

「三日月……夜空……？まさかあんたも夜の王か？」

「……偽名じゃないからな？言っておくが本名だからな？」

どうやらこいつの名前は夜空というらしい、しかも本名やと……  
ちよつとつらやましい。

何がなんだかわからなくなっている私に、夜空が事情を説明して  
くれた。

「あいつが担当してる書類がまだ大量に残っててな、ケイト先生に  
明日までになんとかしなきゃいけないから手伝えと言われ、残らさ  
れてる。現在5時半、現在進行形で小鷹は仕事をしてるので当分の  
間は帰ってこれない」

「なんやと……？んで代わりにあんたが来たつちゆうことか？」

なんちゆうことじゃ……大好きなおんちゃんの代わりに来たのが  
こんな無愛想で怖い女だとは……

魔法少女とかそういうのより、魔王少女やないか……

本物の魔王じゃ……今にも黒い翼を出して世界を混沌に染めてし  
まいそうなオーラを漂わせている。



と、私が色々妄想していると、その夜空が私の方へ不機嫌な顔で近づいてきてこう言ってきた。

「おい、お前中学二年生だろ？私は高校二年生だ。年上相手に「あんた」はないんじゃないのか？」

「う……よ……夜空……ちゃん？」

「てーいー！」

「ぶぎゃー……！！！」

なんやこいつ！？八工叩き召喚しよつたぞ！？

魔剣でもなくロッドでもなく八工叩き、魔剣八工叩きやー！！！！  
もうあかん、あんちゃん早く帰ってきてー！！

「よ……夜空お姉さんはいつくらいまでここに居るつもりですか？」

とりあえず私は慣れない言葉遣いで、しかも慣れない呼び方で接することに……

一応夜空……お姉さんは私になにか食べさせてくれるみたいだし、こうなったら素直にしておいたほうがいいだろう。

クッククク……隙あらばその魂を食らってくれるわ……クク……  
逆に食われるかも……

「とりあえず何でも良いな、私は料理得意というわけでもない、冷蔵庫あさるぞ」

そういってお姉さんは冷蔵庫をあさりだした。少しでも気を紛らわそうと私はテレビをみることに。

この時間はニュースしかやってへん、こんな時こそアニメがみたいのに……

そして数分後、お姉さんは何かを運んできた。

「腹減ってるだろ？とりあえず餃子食ってる、他の物は後で用意する」

餃子だった。

そういやあんちゃん、前に安売りしていたとかで大量に買ってきたっけ……

ニンニク好きな我のためにか、クッククク……良くできた眷属だ。しかしまたずいぶん多く焼いたなあ、30個？こんなに食えるわけないやないかばかたれ！！

だけど文句を言うともまたあの魔剣八工叩きで叩かれるだろうし、とりあえず私は黙って食べることに……

12個辺り過ぎたところで腹がきつくなってきた。そして味にも飽きてきて別の物が食いたくなかった。

そんな時、お姉さんが別の料理を運んできた。お腹いっぱいだがとりあえず気を紛らわすために食べよう。

「付け合わせの水餃子だ」

「また餃子かい——————！！」

水餃子だった。

おいお姉さん！私今さっき餃子食ったばかりやぞ！

ジャンルは違うとはいえ餃子の後に餃子って、殺す気がバカたれ——————！！

「水餃子はメインディッシュだ、その後にデザートのエビ餃子が待っているぞ」

「全部餃子じゃないか！なんやその餃子へのあふれ出る愛は！？」

このお姉さん、もしかして餃子しか作れないのか、はたまた餃子

が好きなのか……

しかも普通の餃子でさえ、あと18個残ってるというのに、エビ餃子も20個くらいあるやないか……

あほー！こんな餃子だらけ食えるわけないやろが！！

「さて私も食べるとしよう……」

「お姉さんも食うんかい……」

「小鷹から適当に夜飯食べてっていいぞと言われている。せつかくだしお言葉に甘えることにしよう」

お姉さんはそういつて、餃子を食べ始めた。

「お姉さん？餃子好きなんか？」

「ああ、マジでどんきーとかダストやメクドナルドはリア充が集まる場所だ。いるだけで吐きそうになる。その点餃子の皇将はリーマンしかない。非常に居心地が良い上に味も良い。まさにパラダイスだな」

という理由らしい、という理由じゃそりゃ……

そんな都合でこんなに餃子ばかり出されても困るんじやが……

しかも私が残そうとするとこのお姉さんは、「強くなりたくば喰えー！！」と言ってくる。強くなりたいとか一言も言った覚えないんじやが……

結局無理していっぱい食べて、後でお姉さんが見てない隙にトイレで吐いた。

その後あんちゃんに頼まれてるとかで、宿題を見てもらった。

半分以上放置プレイだったが、教えてもらうつところは教えてもらったので宿題は思いのほか早く終わった。

気が付けば夜の7時半、携帯が鳴りあんちゃんからのメールが届

いていた。

「今終わった。もうすぐ帰る」  
とのことだ。あんちゃん、早よ帰ってきて〜

「そうか、もうすぐ小鷹が帰ってくるのか」

お姉さんはそういつて、一息ついたように椅子に座った。

お姉さんが来た当初の私なら、「帰れ帰れ」と言っていただろうが、今となってはなんかどうでもよかった。

八工叩きで叩かれたり餃子を無理やり食わされたりもしたが、なぜかお姉さん、夜空に対して私はなにか近いものを感じ取っていた。

「お姉さん？お姉さんはどうしてそんな凶悪なオーラ出せるんじゃない？」

「どういう意味だそれは？」

「うちもそういつ夜の王的なキャラを目指しているのじゃ……」

「ふん、良い具合に厨二病が感染してるなお前、オッドアイにゴスロリって救いようのないレベルまで達している。小鷹も大変だな」

「厨……厨二病ちゃうもん！」

私は厨二病つて言われるのが一番いやだった。

まさにその通りなのだからダイレクトに言われるのが一番答えるんじゃない……クツクツク……

「だが、私にも覚えがある。というか……今の私を演技だと思ってるんじゃないだろうか？」

「……ちやうどの？」

「てい！」

「ふぎゃー！また叩いた！痛いっちゆうとるやるそれ！」

だって明らかに重みのあるしゃべり方やろそれ！？てかそれが素のしゃべり方のやつに厨二病言われたくないわバカたれ！！

「今のは少々傷ついたぞ、小鷹が来る前に貴様を闇夜の生け贄にしてやるのか……」

「ほ……ほら！私に近いこと言っとするやないか！！」

「い……言っていない」

「言った！」

「言っていない！！」

……

「……ふふ、くくくこいつ……」

「ど……どうしたんじゃ？」

お姉さんは急に笑い出した。

なんじゃ？私なんか変なこと言ったか？

「なんでもない、今度隣人部の部室に遊びに来い、待ってるぞ小鳩」  
「ふえ？」

そういってお姉さんは私の頭を撫でて、そして恥ずかしそうに帰っていった。

いったい最後のはなんだったんじゃ？というか最後に私の名前を

……

……でも今思えば、なぜ対人恐怖症の私があんな年上の女子高生とこころ仲良くしゃべれたんだろう。

やっぱり似てたからかな？私に近い物をようやく見つけたような……そんな気が……

「ただいま小鳩ー」

「あ、あんちゃん！」

あんちゃん帰ってきた！

やっぱりあんちゃんが一番じゃー

「すまなかったな、夜空になにかされなかったか？」

「うんにゃ」

「……なんか嬉しそうだな小鳩」

「えへへ」

三日月夜空……

もしかしたら私があんなに話した相手は、あんちゃん以外では初めてだったのかも知れない……

隣人部……か……あんちゃんが入ってる部活……そしてあんちゃんとの仲の良い部長……

「あんちゃん……今度隣人部の部室に行ってもいい？」

私の新たな居場所ができそう……そんな気がした。

隣人部誕生（前書き）

第4話です。

「羽瀬川小鷹」視点。

## 隣人部誕生

あらずじ。

課題が通らなかつた俺”羽瀬川小鷹”は、同じく課題が通らなかつた”三日月夜空”と組んでレポートを書くことになった。

しかしお互いに話がまとまらず硬直状態になっているのが今の現状だ。

外見がヤンキーな俺と、中身がレディースな夜空……レディースは言い過ぎたかもしれんが……

とまあお互いに怖い一面を持ったもの通しがこうして協力し合っているのだが、俺はともかく夜空はともめんどくさそうにしていた。

俺だって本当は気の合うやつと組みたかったよ、でも俺達二人には共通点が一つあってだな。

”友達が少ない”

の一言につきる。え？”いない”の間違いじゃなくて……だと？この課題もお互いに組む友達がなくてこんなことになったわけだ。

夜空は他人を遠ざけているからまだあれだが、俺なんてなあ、近づいたら逃げるんだぜ相手が……

夜空なんて吹っ切れて明るいキャラとかやったら三日で友達10人も夢じゃないって言うのに、俺なんて外見でアウト宣告出されてるんだぜ？なにこの差別……

まあ俺自身、この”くすんだ金髪”を黒く染めれば少しは問題も解消されるはず……なんだろうけど……



俺はこの金髪を染めるつもりはない……………就活になったらまあ考えるけど……………

話を戻して、俺は夜空にこのレポートのことを質問する。

「んで聞きそびれたけど、夜空はこのレポートどんな風に書いたんだ？」

ちなみに俺は、「積極的に話しかけたり、同じ趣味を見つけたりそういう努力をする必要がある。」と答えた。

それを聞いた夜空は、「テンプレ乙」と言ってきた。俺はとても腹が立ったよ。

そこまでいうならこいつだって、という気持ちで質問した俺に、夜空はこう答えた。

「演技力が必要、つまりあれだ。どんなことがあっても最高の人間を演じ続けることだろうな」

「最低だなお前」

俺は夜空を軽蔑した。

もしこれが本心から言ってるのであれば、今すぐにもここから出て行きたい。

こんな最低なやつと一緒に組めるか！

「まあそれは人付き合いの方法の一つということ、他にも色々書いて教えるのはめんどくさい」

先ほどの最低発言は一つにすぎないらしい、多分他に書いたものも全部最低なことなのだろう。

大丈夫かなこいつ、本気で心配する俺に夜空は寂しそうにこう言った。

「だが、友達という関係が築けたのなら、それは失いたくない。せつかく出来た繋がりなのだから……」

「……そうか」

どうやら夜空にも、真つ当な気持ちはあるようだ。

しかしその顔、過去になにかあったのうだろうか……

ちなみに俺にもそんな暗い過去がないわけではない、俺は一度友達関係を自分で壊したことがある。

今でも後悔している。そう俺は……”親友を裏切った”ことがある。

そのことを思い出していたのが顔に出ていたのか、夜空が神妙な顔でこう聞いてきた。

「……なんでお前が落ち込んでいるんだ？」

「あ、いやなんでもない。そんなことより1時間立つが……レポートにはまだ1文字も書いてねえな」

「あ……だ、大丈夫だろう。とりあえずケイト先生が来るまでにある程度のことを書いておかねば……」

夜空がそんな一言を言った時であった。

「誰が来るまでに……だつてえ？」

「ケイト先生!？」

噂をすればケイト先生がそこにいた。

なんとということだ……というかあんたいつのまに入ってきた!? 俺達が話し込んでいて気づかなかったのか……いやしかしドアの

開く音すらしなかつたはず……

「このケイトちゃんを出し抜こうなんて百年早いよ君たち、本当に文字も書いてないじゃないかええ〜」

ケイト先生はレポート用紙を揺らしながら俺達にそれを突きつける。返す言葉もないぜ……

「といっても私と小鷹の意見がかみ合わないのだ」

夜空はそう文句をつけた。

かみ合わないのは本当のことだ。

「なら互いにじぶんの経験談とか色々なことを話し合えばいいだろう？どうせ二人で黙り込んでいたんでしょ？」

「いや、結構話はしていましたよ。むしろ話に夢中で書いていなかったと言った方が正しい」

「ほう、そこまで仲良くなったか二人とも……ってレポート書きや意味ないだろうが!!」

俺の答えにケイト先生が突っ込む、しかもなかなかのキレのいいツッコミ……

そう言っただけでケイト先生はそこに居座った。どうやら自分の仕事は終わったみたいだ。

ここからは俺と夜空、ケイト先生の3人で話し合うことに。

「はいじゃあ腐ったプリン、お前から意見いいなさい」

「腐ったプリンはやめてくださいよ、せめてミカンでしょ」

ケイト先生が俺に失礼な言い方をしてきた。

その呼び方だけはやめてくれよ、リアルに傷が付くわ。

「ふふ、腐ったプリンか……ぴったりだな小鷹よ」

夜空も笑いながら絶賛していた。失礼なやつだ……  
というかこいつ、笑うとかわいいやつだな。  
まあいいやと俺はとりあえず意見を出していく。

「そうだな、あだ名をつけるとかどうかな……夜空にはなにかあだ名とかないのか？昔のでもいい」

俺がそういうと、夜空が腕を組みながら答えた。

「ああ……ある。”あつた”よ……あだ名」

夜空にもあだ名はあったらしい。

それがどういふことかというと、やっぱりこいつにも昔は友達がいたということだ。

いやまてよ、あまりの恐ろしさにつけられたあだ名とか、いじめられた時のあだ名か……

「へえ？友達とあだ名で呼び合っていたのか？」

「……ああ」

俺の言葉に夜空はうつむきながら答えた……

………なんだこの感覚、なんか俺失礼なこと言ったか？

俺はその夜空のあだ名が気になり、聞いてみることに……「レディース総長」とかだったらどうしよう。

「なんて呼ばれてたんだ？」

「……教えない、あだ名は………友達同士で使う物だからな」

そう答えた夜空の顔は、とても寂しそうな笑顔だった。やっぱりなにかあったのだろうか……それを聞いていたケイト先生が、第三者の立場で俺にこう聞いてきた。

「んでプリンくんには何かあだ名はあったのかい？」

「プリン言うなし、一応あったぞ立派なあだ名が……」

「プリンだろ？」

「違うわー!!」

答えようとする俺に夜空がちよっかいを入れてきた。

はいはいわかりましたよ、そんな態度をするなら俺も教えてやらねえよ！

「俺も教えてやらねえよ」

「そうか……むしろその方がいい」

「え？」

夜空の言葉の最後の方がよく聞き取れなかった。

まあどうでもいいか……とりあえずレポートには、「あだ名で呼び合うこと」と書いておこう。

次に夜空がこんな提案をしてきた。

「金を払って友達になってもらうというのは？」

「愛人契約……いや友人契約かよ」

「うまいこと言うな、大爆笑。僕と契約して友達になってよ〜だな」

微塵も面白くなさそうに夜空は淡々と言った。

こいつの意見を聞いてくるとイライラしてくる。せっかくだしケイト先生にも意見を聞いてみよう。

「ケイト先生はなにかあります？意見がほしいんですけど」

「ん〜そうだねえ、部活に入るとかどう？」

「部活？」

俺と夜空は口を揃えて反応した。

「君たち部活に入っていないでしょ？部活には色んな出会いがあるよん？」

「却下」

ケイト先生の言葉に夜空が不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「なんで？」

「恥ずかしいからだ」

「おい……………」

俺の質問に夜空はきつぱりとそう答えた。

まあ確かにこの時期に俺達のようなやつらが急に入ってきたら部活の人達も困るだろうな…………

友達作りに来ましたという理由で入って逆に嫌な思いをするかもしれないだろうし…………

この意見はだめだな…………そう思った時だった。ケイト先生が俺達にこう言った。

「部活に入るのがだめなら、部活を作ればいいんじゃないかねえの？」

ずいぶんと軽々しく言うものだ…………

創部なんて簡単にできるものじゃないだろう、学校側に許可をもらわなきゃいけないし…………

しかし夜空はというと、それを聞いて真剣な顔で悩んでいた……  
そして……

「部活か……部活を作る……それだ――――」

いきなり叫ぶ夜空に俺は思わずびくつとなった。  
え？なに？なんか思いついたのかお前！？

「ケイト先生、このレポートの内容なんだが……私が今考えた部活の内容を書いて出してもかまわないだろうか！？」

「あ、ああ構わないが……何か思いついたなら書けばいいし、良い内容ならそのまま課題もクリアでいいよん」

ケイト先生は夜空の気迫に押され、若干戸惑ったようにそう答えた。

そして夜空は俺とケイト先生など置いてけぼりで、モリモリとレポート用紙に字を書く。

そのレポート用紙をケイト先生に見せたところ……

「こ……これは夜空、最高じゃないか！！よし作ろう！この部活作っていいぞ！！」

「わかってくださいますか！？この理念を！！」

え？なに？何が起こったんだ一体……

夜空とケイト先生が勝手に話を進めている。おい、ここにもう一人いるぞ！

無視か？俺の意見無視か！？

「おい！何がどうなってやがる！？」

「あ、そういえば小鷹もいたな」  
「俺もはや空気キャラか!？」

この女……せめてどんな部活にするか俺に言えよ。

俺は夜空の手からレポート用紙を取り、すぐさまそれに目をやる

……

その用紙には、こう書かれていた。

「り……」隣人部”……?」

俺の言葉に夜空が頷く。

そこには隣人部とでかどかと表記されていた。

そしてその下には色々と長ったらしいことが書かれている。

「『キリスト教の精神に則り、同じ学校に通う仲間の良き隣人となり  
友誼を深めるべく、誠心誠意、臨機応変に切磋琢磨する』部活動  
だ」

「うさんくせーなまた……」

俺は素直にそう言った。

ケイト先生を見ると、すごい絶賛しているではないか……

というかこれじゃあ何やる部活なのかわからないだろうが!!

「まあ別にいいんだが、ということは顧問はケイト先生がやること  
になるのか?」

「いいや、この私よりもふさわしいやつがいるので顧問はそいつに  
任せて、私は副顧問をやる。部活といえば部室が必要だな……この  
談話室4使っていいよん」

ケイト先生は迷うことなくそう言った。こんな簡単に決まって良



いものなのか……

「そうですか……良かったな夜空、これでお前の目標ができたじゃないか」

俺がそういうと、夜空はきよんととして……

「は？何を他人事のように言ってるのだ貴様は？お前は隣人部の副部長だろうが」

なん……………だと……………？

なんで勝手に決めるのこいつ……………バカなのか？バカじゃないのこいつ……………

「私の方も夜空が部長でプリンくんが副部長ということで話を進めちゃったんだけどねえ、君も隣人部のメンバーとして更正しておくれ」

「更正もなにも俺はヤンキーじゃねえって！！」

ケイト先生も結局俺をヤンキー扱いするのだった。死にたいわ、死んでこの外見なんとかしたいわ。

そんな俺などお構いなしに夜空は……

「というわけで来週から部活を始める。よろしくな副部長」

そう言っって夜空は帰っていった。

レポートもそれでOKらしい、ケイト先生も俺に「がんばれ」と言っって帰っていった。

おいおい、なんで俺までそんな部活入らなきゃいけないんだよ……………

とまあなんやかんやで俺も隣人部の一員として活動することになった。

ちよつと残念な部長の三日月夜空と、ちよつと下品な副顧問の高山ケイト。

そして天才少女の志熊理科。おとこのなかのおとこを目指す楠幸村。

俺の妹の羽瀬川小鳩に、ケイト先生の妹で顧問の高山マリア。理事長の娘の柏崎星奈。

俺と夜空の出会いが、後の隣人部の物語となる。

3人目は後輩で天才少女（前書き）

第5話です。

「三日月夜空」視点。

### 3人目は後輩で天才少女

私たちは相も変わらずつまらない日常を過ごしている。

隣人部を創部してもうすぐ2週間立つというのだが、部室にいるのは部長の私とそこにいる金髪のバカだけ。

たまに副顧問のケイト先生が来るのだが、よく考えると顧問が一度もこの部室に顔を出したことがない。

それって見捨てられてるということではないのだろうか、副顧問に全部押しつけてるってことではなからうか。

ついでに言うとその顧問が誰なのかすら私たちは知らない、顔も知らないし名前も知らない。謎のエージェントその正体はわからず。そして副顧問も、とうとう我々を装備扱いし始めた。確かに先生の仕事手伝ってるだけだからな。

つまらない日常だね、リア充全員死ねばいいよね、そうだねプロテインだね。

「さてと羽瀬川プリン小鷹よ、今日は何で役割分担を決める？」

「あだ名がフルネームよりも長くなってることに突っ込むべきか？」

私の呼び方が気に障ったのか、小鷹は機嫌を悪くしたようだ。

まあこんなやつ機の嫌を取って得をすることなどないだろうし、さっさと始めてしまおう。

今日もまた、ケイト先生の書類作成を巡って小鷹とゲームをするところだ。

勝ったやつは2割、負けたやつは8割担当するのが我々のルールだ。

ちなみに今のところ8戦6勝と私が勝ち越している。オセロだろうとトランプだろうと私のほうが一枚上手なのだ。

唯一将棋だけはこいつに勝てなかった。1回は将棋で、もう一回

はジャンケンで負けた。

そんなわけで、今日はどんなゲームでこいつをこてんぱんに叩きのめそうか、そう考えた時であった。

ドンドン……

「うん？誰か来たぞ……」

「どうせケイト先生だろう……」

いつも通りケイト先生がちゃちゃを入れに来たのだろう、私はそう決めつけドアを開ける。

ドアを開けるとそこにはケイト先生が……いなかった。

なんとそこにいたのは、つい先日私たちが人命救助をした白衣を着たポニーテールの少女、”志熊理科”が立っていた。

「お久しぶりです隣人部のみなさん、いつぞやのお礼をしにやってきました」

来て早々頭を下げる理科。

そういえばそんな話があったな、あの時はめんどくさいことになりそうだったので帰ってもらったが。

やはりこいつは律儀なのかきちんとお礼を果たしにやってきた。

「別にお礼なんていいんだがな……」

「まあ話くらいは聞いてやろうぜ」

戸惑う私に後ろから小鷹がそう言った。

無理矢理返すとまたやってくるだろうし、こつなったらこつでこの問題は終わらせてしまおう。

理科を中にあげると、理科は椅子に座って一息ついた。

「ありがとうございます。そして先日はありがとうございます」  
「ああ……」

理科にお礼を言われた私は、とりあえずそう答えた。すると……

「おい夜空、さすがに無愛想すぎないか？というかめんどくさがってないか？」

小鷹の言つとおりだった。私は正直この理科に対してどうでもよくなっている。

とりあえず受け答えは小鷹に全部任せてしまうか。

「あとは頼む小鷹……」

「へいへい……」

私はそう言つて、奥でコーヒーを入れに行った。

とりあえず小鷹が適当に話をつけてくれるだろう、そう思って他人事のように振る舞うことに……

小鷹は理科にこう質問する。

「それで、お礼つて言つのは……？」

「そうですね、色々考えたのですが……」

そして理科は、私たちの想像を超える一言を言ってきた。

「私、この隣入部に入部しようと思います」

「……はい？」

なんとということだ。ここに来て……もうすぐ創部して二週間とい

うところで入部希望者が……

きたのか…… ようやく来たのか…… ここにきてようやく入部希望者が……

しかも…… 後輩とは…… あは、あはははははは。

「そそそそそうか…… 入部したい…… のか？」

「夜空、顔がにやけてるぞ」

小鷹の言うとおり、どうやらこの感情は表に出ていたようだ。

部というものを作り、部長という立場につき、ノリでここまで来たとはいえ入部希望者がやってくるというのがここまで心震えることだったとは。

そこにいる金髪は”とある理由で”巻き込んだだけだったし、一人よりも二人の方がよかつたしな。

「にしてもこのポスター、絵はともかくずいぶん古くさいことやってますよね。斜めに読むと」ともだち募集」って書いてあるじゃないですか」

なんと……この後輩、私の真意を読み取った……だと。

と、いう風に感激していたのはおそらく創部してから3日くらいまでだっただろう。

この隣人部のポスター、活動初日に私が作ったものだ。

どんなことが書いてあるかというと……

『と』にかく臨機応変に隣人と『も』善き関係を築くべくから『だ』と心を健全に鍛えたびだ『ち』のその日まで、共に想い『募』らせ励まし合い

皆の信望を『集』める人間になろう

という風に書いた。親切にカギ括弧をつけておいたからリア充にもわかる親切仕様になっているぞ。

作った当初は中々の出来だと自分を褒め称えていたんだが、5日目くらいからそんな気分はどこかへと行っていた。

まるで「このアイデアはいいかも」と小説を書き始めたは良い物の、途中から何かが違つと話が思いつかなくなり、結局未完で終わってしまうような感じだ。

というわけでこの真意を理科が読み取ったことは、今となっては少々恥ずかしいのだ。

「まさかあんなくだらん仕掛けに気づくやつがいるなんてな……」

「うるさいぞ小鷹！ ってちよつとまてよ……」ということはお前も人付き合いで悩んでいるのか？」

そうだ。「ともだち募集」という言葉に反応したと言うことは、そこにいる志熊理科も私たちと同じで友達が少ないということになる。

隣人部に来るものは皆同類ということか、ケイト先生は違つようだけど……

小鷹はそんな理科に事情を聞いた。

「お前同学年に友達何人くらいいるんだ？」

「この学校には友達はいません、というより先生以外の人と関わることが少ないんですよ。理科はいつも理科室にこもってますから……」

……

理科はそう答えた。

理科室にこもっている。それって特別教室みたいなものか……



この学校で何かあって、クラスから追い出されたとかそんな感じなのか……

こいつも大変なんだな、私がそんなことを思っていると……

「トウトウル、ケイト先生がやってきたぞ」

「おい、別作品のネタを持ってくるな……」

「というかいつのまに……」

火のあるところにケイト先生、小鷹と私はそんなケイト先生にツッコミをいれる。

部屋に入るや否や私のコーヒーを飲み干し、理科を見て驚いたようにケイト先生はこう言った。

「おお君たち、ずいぶんと大物ルーキーを勧誘したようだねえ」

「それってどういう意味だ？」

ケイト先生の言葉に私は頭にハテナマークを浮かべる。

友達いないやつに大物ルーキーとかあるのか……

そう思う私に、ケイト先生はまったく的はずれなことを言ってきた。

「実はここにいる志熊理科ちゃんは、この学校一の天才少女なのさ。この学校の理事長が頼み込んでまで入学してもらったほどの存在なんだよん」

「「ふえ？」」

その言葉に私と小鷹は口を揃えた。

「いったいどういうことだ？ 孤立少女？ 天才少女？」

わけがわからなくなっている私たちに、ケイト先生は説明を始めた。

「理科ちゃんは16歳という若さながら、プログラムから薬品開発まであらゆる知識に長け、数多くのヒット商品を生み出している。数多くのスポンサーと契約を結ぶまさに天才少女なんだよ」

「な……なんだって……」

……  
なんとここにいるポニテの後輩、まさかそんな秘密があったとは

……  
というかそれってリア充じゃ……いやリア充というよりリア充を超えた別の何か……でもちよつとまてよ……

「なんで、そんな学校の華となりうる天才少女が学校で孤立してるのだ？これって待遇悪すぎではないのか？」

私の言葉に、今度はケイト先生が頭にハテナマークを浮かべた。

「ああ『理科室』のことかい？理科ちゃんは理事長が特別に全学科全授業免除という処置をとっているのよ。なんで理科ちゃんにのみ与えられた専用の教室、『理科室』でこの3年間好きなだけ実験をしていてOKという、まあいわゆるVIP待遇ってやつかね」

理科室って、そういう意味だったのか……

孤立少女だと？全然真逆の立場じゃないか！追い出されたのではなく単に自分から関わっていないだけだったじゃないか！！

同情して損した。私の同情返せ！！

「ということなのです。そんな私に初めて関わってくれたみなさんがちょっと気になったのでケイト先生に聞いたんです。すると今部員不足で困っているとのことではありませんか、なので入ってみようかなって……」

「と……いうことらしいぞ部長。こりゃあひよつとしたらチャンスじゃないのか？」

小鷹が少し笑みを浮かべながら私にそう聞いてきた。ぐ……ぐむむ……

この特別扱いを隣人部に……恵まれた才能に恵まれた環境にいるくせに……

しかしここで断って理事長とやらに言いつけられては私もこの学校に居づらくなる。

こいつがそんなやつだとは思えないが、我々隣人部も正直限界が近い……

ここらへんで、後輩の一人は歓迎すべきか……

「わかった……歓迎しよう志熊理科。今日からお前も隣人部の部員だ」

「ありがとうございます。夜空先輩！小鷹先輩！」

こうして3人目の部員、志熊理科が隣人部に入部した。

私と小鷹以外の初めての部員、しかも後輩ではないか……

この天才少女が果たして隣人部に何をもたらしてくれるのか……出来ればお前の売り上げの一部から部活の予算をだな……

と、呑気なことを思っていた私にこいつがもたらしたのが”トラウマ”だったことは後になってからわかることである。

なぜこの時、志熊理科の入部を断らなかったのか……今になって後悔している私なのであった。

ストーリーカーには要注意（前書き）

第6話です。

「羽瀬川小鷹」視点。

## ストーカーには要注意

「なんか最近、誰かに見られてる気がするんだよね……」

ある日の放課後、部室にて……

俺が深刻な顔でぼつりと呟くと……

「ほお、そりやまた一大事だなあ」

と夜空が他人事のように、どうでも良いことのように答え……

「小鷹先輩は敵が多いみたいですからね、本格的に狙われてるんじゃないですか？」

と理科がなにかと物騒なことを言ってきた。

「いや、そんなんじゃないだよ。羽瀬川小鷹を囲んでランチしてやるうとかそういう殺気だったものではなく……」

というか、聖クロニカ学園にはそんなグレた連中にはいないだろうし、俺を外見だけでヤンキーと誤解して怯えるような奴らの集まりがこの学校だ。

そんな学校のやつらが、一人の人間をランチにしようだなんて思わないだろう。

そういうのとは違う、何か違う視線なんだ。

「とにかく本当なんだよ……」

「そうか。それならば本当のことなんだろう」

俺が無然とした顔で食い下がると、夜空は意外にもあっさりと認めてくれた。

「あっさりと信じてくれるんだな」

「ああ、小鷹が誰かに見られているような『気がする』のが本当だと」

まったく信じてくれなかった。

この野郎どんだけ根性ひねくれてるんだよ……少しは思いやりの心とか持てや。

俺は心の中で夜空に意見をした後、その状況を説明した。

「……………トイレの時とか、飯食ってる時とか、廊下を歩いているときとか、妙な視線を感じるんだ」

「それってやっぱり小鷹先輩を警戒してるんですよ」

理科の推測を俺はきっぱりと否定をする。

「ちがう。そういう視線には慣れてるからはつきりと違いが分かる。そういうのは俺を見るとすぐに怯えて逃げ出すし……………」

自分で言うのもなんだが、人に警戒されてるのはしょっちゅうだ。昨日もこの間も図書室に行ったら勉強してた後輩の男子達がそわそわしてすぐに逃げ出したし。

グラウンドに立ち寄って落ちてるボールを投げただけで、本気で謝られたし……………」

ぶっちゃけ……………悲しい生活なわけだ。これがな。

ああ、自分で言っておいてなんだが悲しくなってきたわ。

「それで、具体的にどのような視線を感じるんだ？」

夜空は俺にこう質問をしてきた。  
俺はその質問に詳しく答える。

「具体的にねえ、なんつうか……俺のことを監察してるっつうか、妙に冷え切った感じつつうか、こっちが目を向けると消えるんだけど、目をそらすとまた感じるようになる」

「小鷹先輩、最近色んな事がありましたもんね。今はゆっくり休んでください」

「たのむから急に優しくするのやめてくれないか？」

優しい後輩キャラになる理科にとりあえず俺はつつこむ。

「ああもう、これだけは言いたくなかったがぶっちゃけて言っしかないか。もう玉砕覚悟で……」

そう言っただ俺は息を呑む。

他の二人も俺を見て、「こいつ何を言い出すつもりだ」と言わんばかりに俺を見てくる。そして俺は、勢いよく言った。

「……………」『ストーカー』ってやつ……………かな」

俺の言葉のあと、しばらく場の空気が凍った。

そして理科がゆっくりと読んでいた本を机に置き、俺の方を見てこう言ってきた。

「小鷹先輩、自分が何を言っているのかわかっているのですか？あなたみたいなのプリン頭のヘタレヤンキーをつけまわすストーカーがいると思いますか？そもそもストーカーって恋愛感情のもつれからくるものなんですよ。もつれたんですか？この学校来てから恋愛関

連でもつれたんですか？というかはつきりと言います。あんたバカなんじゃないですか？」

え……ええ……

そこまで言いますか理科後輩……

おいおい俺はこれでもマジで悩んで、ここまで言われることを覚悟に……ここまで言われるとは思わなかったけどぶちまけたんだぞ

……  
そして意気消沈してる俺に、夜空が静かにコーヒーを差し出し……

「これでも飲んで忘れる小鷹。そしてゆっくりと眠れ……数時間後にはお前の幻想は打ち砕かれている」

「フオローになってねえぞ夜空……」

めずらしく優しい夜空に俺は涙目でつつこむ。

優しさの裏の非常とはこのことを言うんだろうな、夜空……恐ろしい子……

この黒髪ドSコンビに質問した俺がバカだったのかも知れない。

「主人公なんだからそういうイベントの一つや二つくらいあってもいいじゃねえか……」

「主人公がなんでも人に好かれる属性を持つてると思っな、貴様のような人望のない主人公なんぞ見たこともないわ」

「お前だつて主人<sup>オレ</sup>公のくせに……」

「貴様とて主人<sup>ワタシ</sup>公だろうに……」

俺……  
なんだかヘンテコな会話を夜空とした。やっぱり疲れてるのかな

すると今度は理科がこんな話をしてきた。



「そういえば……理科も最近視線を感じるんですよねえ」

「おめえもかよ、人のこと言えねえじゃねえかよ」

すると今度は夜空が……

「ああ、私も最近なんか視線を感じる気がする」

「なあ……無理して俺に合わせてるとかじゃないだろうな？やめてくれよこの黒髪DSコンビ……」

意図的に俺を傷つける夜空と、素の感情で俺を傷つける理科……

ひよっとして俺、とんでもない部に入ってるのではなかるうか……

顔は整っている美人が2人、でも性格に難あり……

俺が複雑な気持ちでいた時、夜空がこんな提案をしてきた。

「せっかくだし、明日はストーカー探しをしよう。これも隣人部の活動だ」

ということとで明日の隣人部の活動は「ストーカー探し」に決定した。

真剣に悩んでいる俺に対してなんともお遊び気分で……いいよな外見が整っているやつは……

そして次の日の昼休み……

「では、これよりストーカー探しを開始する。妙な視線を感じたらすぐさま報告するように……」

夜空が戦陣を切って俺達にそう言う。

すると理科がいきなり視線を感じたようだ。

「確かに妙な視線を感じますね、数は10……いや、30くらいですか」

「なんと、小鷹のストーカーが30人だと？小鷹貴様……実はリア充だったんだな？」

夜空が若干怒りながらヘンテコなことを言っていた。俺がリア充だったらこんな部活になどいないわ！

まあ確かに視線は感じるよ……たくさんの生徒から……でも……これは……

「シリアスなところ悪いんだが、これは俺の言ってた視線と違う……

……  
「「？」」「

夜空と理科が怪訝な顔をした。どうやら気づいていないらしい。

「なんか普通の生徒からも注目されてるんだよ！これじゃあ犯人なんて見つかりっこねえ！！」

「「あ……」」

右に夜空、左に理科……

そして外見がヤンキーの俺。

おわかりいただけだろうか……某心靈ビデオ風に言ってみた。

黒髪美少女二人とあぶれ物の不良扱いを受けてる男が3人揃ってれば、誰だって注目する。

無数の視線に紛れてしまい、誰が目的の相手なのかさっぱりわからない。

……しかも気になるのは、俺達を（というより俺を）見てるその視線から、嫉妬のような刺々しさが感じ取れることだ。

これって、何か誤解されてるのではなからうか……

その日より、「羽瀬川小鷹が美少女二人を手込めして無理矢理連れ回していた」という噂が学年中を駆け回った。くそつたれが……

「あの野郎……かどつかは知らないけど、絶対に捕まえてやる！」

放課後。

俺は一人で周囲に注意を払いながら学校中を歩き回っていた。

例の視線は、他の生徒に混じりながらもひっそりと感じていたのだ。

これまでは実害がなかったから放っておいたが、そいつのせいで妙な悪評が立つことになったわけだ。

とりあえず文句の一つくらい言わなきゃ気が済まない。

「でも、それもなんか違う気もするんだけどな……」

いやいや羽瀬川小鷹！ここで心に気を許すから再び悲劇が降りかかってくるんだ！

これ以上の悲劇を生まないためにも、ここでやつを叩かなければいけない。

例の視線は今でも感じる。

好奇の視線に混じって、こちらを監察するような冷静な眼差し。

俺はとりあえず人気のない所へと場所を変える。

階段を上がり、資料室等あまり使われていない教室が並ぶ階へ。すると……

「小鷹、貴様も感じるようだな……」

そこにいたのは夜空だった。

いったいどうということだ。俺が意味不明そうな顔をしていると。

「その視線だ。私も見られているのだ。監察するような冷たい視線に……」

その口ぶりから、どうやらそれは俺に気を遣って話を合わせているわけではないらしい。

その話は本当だった。その視線は俺だけではなく夜空にも向けられていた。

すると今度は理科が前から走ってきた。

「小鷹先輩！夜空先輩！さっきから理科も視線を感じます！！」

「そうか……やはりそういうことだったか……」

「そういうことだった……？」

夜空の言葉に俺が質問をする。

「その視線は小鷹だけに向けられていたわけではない、我々”隣人部”に向けられたものだったんだ。即ちそのストーリーカーは……隣人部のストーリーカーだ！」

そう、その視線は隣人部を見ていた物だった。隣人部が何者かに監察されている……もしか、ここにきて等々”嫌がらせ”というやつが……

確かに俺が所属していることと、変な部活であるということが揃っていればあり得ない話ではない……誰かが、隣人部に嫌がらせをしようとしているのか……？

「犯人はこの階にいるはずだ。3人で囲んで捕まえるぞ」

「わ……わかった」

「わかりました」

夜空が小声で指示した作戦に俺と理科は静かに答える。  
夜空と理科は何食わぬ顔で適当な教室へと入り、俺は後ろの隙間に隠れている犯人に気づかぬふりをして廊下の端の方へ……  
そしてその場から動かずに待機、すると数秒後……

どんっ！

「ひゃ！」

誰かが俺の体にぶつかって、どこか気の抜けたような悲鳴を上げて尻餅をついた。

きつとこいつが犯人なのだろう。犯人の声を聞いて後ろから夜空と理科もかけつけた。

「犯人覚悟しろ！ いったいどんな間抜け面だ………え？」

夜空がそいつの姿を見た瞬間、呆気にとられたような顔をした。  
そしてそれは理科も、俺も同じだった。  
俺は思わず少し見とれてしまった……  
そいつはものすごく可愛い顔をしていた。単純な印象を受ける少し幼い感じの顔。

ややキツイ感じのする夜空と、普通っぽい感じのする理科とはまた違う、美少女という表現がぴったりの子だった。

しかし俺達はその美少女の服装に違和感を覚える。

……その美少女は、何故か男子の制服を着ていた。

舎弟ができました（前書き）

第7話です。

「羽瀬川小鷹」視点。

## 舎弟ができました

隣人部をストーカーする奴がいる。

最終的にはそういう結論になり、俺と夜空と理科はそのストーカーを捕まえる作戦を決行した。

その結果ストーカーを捕まえることに成功、あとはそいつを尋問するだけだった。

だがそのストーカーは、これまた奇妙なやつだった。

恰好は男子の制服を着ているので、男子生徒の仕業だとわかる。だがその男子生徒の顔を見ると、俺は思わず見とれてしまった。

だってそいつの顔は、どう見たって美少女なんだから。

しかもひ弱そうな、ぼーっとした雰囲気のかわいい美少年（美少女？）。こんなやつを尋問するのは正直気が進まない。

俺は夜空と話し合い、ひとまずこいつを部室に連行することに……

「これはいわゆる……だれもいないところにつれていき、3人でわたくしをリンチして口止めというやつですね」

「「違うわ!!」」

部室について早々少女？が物騒なことを言ってきた。

俺と夜空が全力でツッコむ。

まあこの流れで行けばそう勘違いされてもおかしくはないのだが

……

「わたくしは、楠幸村くすのきゆきむらともうします。いちねんいちくみです」

少女？は柔らかな声でそう名乗った。

その名前を聞いて夜空が反応する。

「楠幸村……なんか戦国武将みたいな名前だな、幸村ちゃんと呼ぶにはどうも抵抗を覚える」

夜空が言った。

確かに俺もそれは気になった。

女の子なのに幸村？というかそれ以前に恰好が男子制服だし……いやいやそんなバカな、あんなものは二次元だけの話のはずだ。俺はそう思いながらも、一応確認のつもりで幸村に質問する。

「お前つて、性別どっちなんだ？」

「おかしなことを聞きますね、わたくしはれっきとしたにっぽんだんしですが？この名前も父と母が真田幸村のようなりっぱなになっぽんだんしになるようにと名付けた名前なのです」

幸村はきっぱりとそう答えた。

Oh……なんとということだ。俺はこの学校でこんな希少種と出会ってしまった。

美少女のような顔を持つ男。そんなものは二次元世界だけの産物だと思っていたが。現実にもいるもんなんだな。

にしても……どう見てもその顔は美少女そのものだ。つかこいつ絶対に男じゃねえよ！！

「小鷹……お前さつきからこいつのことガン見してるぞ、正直キモイ」

俺を現実に戻すように夜空がそう言った。

確かにキモかったかもしれない、けどそう直で言わんでも……

「っ……つまり……」



っとそこで、さっきまで黙っていた理科が口を開いた。

「幸村……くんは……男ってことですか？演技とかではなくモノホンの……」

「はい、わたくしはりっぱなにつぼんだんです」

理科の質問にも幸村は迷いなく答えた。

「……男の娘？本物の……男の娘」

理科はワナワナと体を震わせている。

俺は何か不審に思い、理科の肩を叩く。すると……

「おい理科……いったいどうし……」

「キタ――――」

「――――」

え……？

理科が急に叫びをあげた。

その叫びに俺と夜空は思わずびくっとする。

「おい理科！いったい何がどうしたんだ！？」

「だって男の娘ですよ！やばいです激熱です！！理科のテンションマックスです！！」

……あれ。俺の中の志熊理科のイメージが……

いったい何がどうなってやがる。至急機関に応答を願いたい俺など眼中なしに理科は鼻息を荒くしている。

「おい小鷹、こいつまさか……」

「いやいや夜空、幸村が男だつて言うのだけでも俺は十分衝撃を受けているというのに、ここにきてクールな博士キャラの志熊理科が

……」

「“クールな博士キャラ”？いえいえ理科は”変態腐女子キャラ”です」

「“あつさり言ったよー！”」

衝撃の発言をする理科に俺と夜空は全力でツッコんだ。

Oh……なんとということだ。俺はこの学校でこんな変種と出会ってしまった。あれ、この展開って今日で二度目？

「話は戻るが幸村、お前が我々隣人部をストーキングしていたのはなぜだ？」

荒ぶる理科はとりあえず奥の隅っこに放置しておき、夜空は話を元に戻す。

幸村は相変わらず表情一つ変えずに淡々と答えた。

「実はわたくし、いじめにあっているのです」

「いじめ……」

幸村のその言葉を聞いて、俺は憂鬱な気持ちになった。

俺のようなヤンキーみたいな外見のやつが浮いてしまうほどの穏やかな校風のミッションスクールでも、やっぱりいじめはあるのか

……

「この学校でもあるんだな、そういうの……」

「あたりまえだろう、いじめのない学校など存在しない。人間が欲のある生き物である以上それはしかたのないことだ」

平然と夜空は断言した。

肯定したくはないが、俺も夜空とほぼ同じ意見だった。

転校を繰り返して色々な学校に通ってきた俺だが、ほとんどの学校でいじめやいじめの気配はあった。

それに、俺にも覚えがある……

おっと、ここで俺が加害者と決めつけるのはやめてくれ、被害者のほうだ。

「なんであるんだろうな……いじめって」

「楽しいからだろう」

当然のように夜空はさらりと言い放った。

「……楽しいか？」

「実行するかはさておき、ほとんどの人間はいじめ……自分が傷つかずに他者を攻撃するのが本能的に大好きだ」

「……お前はどうかんだ？」

俺は探りを入れるように質問すると、夜空が少し怒った顔でこう言った。

「私をそんな連中と一緒にするな、私は……いじめは嫌いなんだ」

寂しさと怒りが混じったような声。

聞かないほうがよかったかもしれない。

「話を戻すが、それがどうして隣人部を付け回すことになるのだ？」

この話題を嫌ったか、夜空が強引に話を戻した。

確かに、俺達隣人部をつけ回していた理由が、「いじめられているから」というのは因果関係がよくわからない。

幸村が答える。

「この隣人部は、このがくえんをしいしようとしている最強の集団だという噂が流れています。なのでここにくればわたくしも強くなれるかと……」

「だ……誰だそんな変な噂を流したのは……!?」

幸村の言葉に夜空が怒りを露にしている。

「いったいどうしてこの隣人部が最強の集団になるんだ……? 幸村が少しはにかみながら答える。

「この”がくえんさいきょうのおとこ”である小鷹せんぱいと、”ころこのびしょうじょと”恐れられている夜空せんぱいが同盟を結び、そして最近”まっどさいえんていすと”まで引き入れたらしいではないですか」

学園最強の男……? 孤狼の美少女……? そしてマッドサイエンティスト(恐らく理科のこと)だと……?

まず一つ訂正するが俺は最強でもなんでもない。外見だけでそう呼ばれてるんだとしたらこの学園はなんとという失礼な連中ばかりなんだ!!

つつか……夜空にも悪名はあつたんだな。”孤狼”とはまた的中するような例え……

そして極め付けにマッドサイエンティストときたか。隣人部って悪名だらけだな……

「言っておくが俺は最強じゃねえぞ」



物になれるでしょうか」

「い……偉大な人物とまで……」

「なんかいい感じですね、最強のヤンキー×男の娘ですかあ……ゾクゾクします」

「なんだがベタ褒めされすぎて鳥肌が立ってきた俺、そして理科は俺達とは違う世界へと旅立とうとしている。」

「教えてあげればいいじゃないですか小鷹先輩、そして二人で最高のストーリーを描いちゃってください。理科、その話で3ヶ月はイケます」

「いかにいいわ」

「気軽に言う理科に俺はツッコむ。だめだこいつ……早くなんとかしないと……」

「つつか、いじめってどんなことされてるんだ？あまりにも酷いものなら先生とかにも頼った方が……」

「はい、ぐたいてきには、同じがくねんのだんしたちがわたくしを仲間はずれにするのです」

「淡々と言う幸村。」

「仲間はずれ？」

「夜空が質問する。」

「はい。たとえば体育のじかんの前にわたくしがえをはじめると、なぜかまわりにいた人たちがみんなはなれてゆきます」

「……………」

……あれ？なんか違和感が……。

「いっしょにあそんでいて汗をかいたので服をぬぐうとしたら、急にみんないなくなってしまうたり」

……。

「ほかにはどっじぼーするときわたくしだけねらわれなかったり」

……。

「さむらいのかっこうをしたいというわたくしを、むりやりじょそっさせられたり」

……。

「中学のときのじゅうどうのじかんなど、だれもあいてをしてくれなくてかなしかったです」

……それ、いじめとかじゃなくて、幸村が女みたいな姿だからどう接していいかわからずに避けてるだけじゃないのか？

俺だって幸村が柔道の相手だったら、男だっつてわかってても気まずくなると思っし。

「夜空……どう思っつ？」

「こいつは私達とは違う、ただ平和ボケしてるだ……いたっ！」

夜空がいきなり理科にはたかれた。

「幸村くん！辛かったでしょうねえ……理科は正直に可哀想だと思います。同情のあまりもらい泣きしてしまいそうです」

なんか勝手に話を進める理科。

「ありがとうございます。つまりわたくしが女々しいからこのようなしうちをうけるのです。ゆえにわたくしがおとこらしくなれば、きつといじめもなくなるにちがいないのです」

「いや、それはいじめじゃなくて……」

今度はそう言おうとした俺が理科にはたかれた。

「……なんなんだよ理科さつきから」

「いいから小鷹先輩は黙っていてください」

小声で言う理科。再び幸村に。

「幸村くん。あなたも是非隣入部に入ってみてはいかがですか？あなたが見込んだとおりこの隣入部にはあらゆるジャンルで強い人材がそろっています。特に私たちのリーダーである羽瀬川小鷹はまさしく強靱！無敵！最強！！小鷹先輩のもとでしっかりと強者の道を学んでください！」

「いや、リーダーは私なのだが……」

夜空はさりげなく訂正を入れる。問題はそこじゃねえだろ。俺人間どころか攻撃力3000のドラゴンみたいになってるだろ！

「ありがとうございます。しかとまなばさせていただきます」

そう言って幸村は、夜空が持ち歩いていた入部届けをもらい、そ



ここに名前を書く。

さらさらさら……

夜空からもらった入部届けに、優美な文字で楠幸村の名が書き込まれていく。

なんとということだ……。

「おい理科どういっつもりだ？」

「あんなヘンテコなやつを引き入れてどうするつもりなのだ？」

俺と夜空が理科に小声で尋ねると……

「いいじゃないですか。幸村くんも人間関係で困っているようでしたし、それに理科も同学年の部員が欲しかったのです。これで2学年2人、1学年2人とバランスのとれた部活になりましたね」

「……それらしいことを言っているようだが……本音は？」

空が理科に小声でそう問いただすと……

「男の娘なんて希少種、理科としては見逃すわけにはいきません。是非とも小鷹先輩と幸村くんのBホーイスマツLで3ヶ月はイキたいものです」

「イカせてたまるものか!!」

俺は即座にツツコミを入れた。

「まあ、ちょうど隣人部にも雑用が欲しいと思っていたしな」

「お前も最低だな」

夜空まで色々とのってきたではないか。

「よかったな小鷹、少々女っぽいが舎弟ができたぞ。これでお前も

いっぱしの不良だな」

「なにが「よかったな」だ!？」

「しゃてい、ですか」

舎弟という言葉に、幸村は強く反応した。

「わたくしが、小鷹せんぱいのしゃてい……………」

「いや幸村。こいつの戯言は無視していいから……………」

「うれしいです」

心なしかうつとりしたような顔で幸村は言った。

「……………は?」

「小鷹せんぱいのようなすばらしいおかたのしゃていにしていただけるなど、こつえいのきわみです。わたくし一生懸命こぼしさせていただきます。小鷹せんぱいのためならどのようなことでもいたします」

「いや、あのな?」

「ミナギツテキター……………!」

戸惑う俺、そして何かしらんが発狂してる理科。

これまでの人生で一度も向けられたことのないようなキラキラとしたまなざしを送ってくる幸村に、俺は何も言うことができなかつた。

「……………まあその、頑張れ……………」

「はい。ときに小鷹せんぱい」

「あ?」

「あにきとおよびしても?」

「嗚呼……………もう好きにしてくれ」

投げやりな気持ちで頷く俺に、幸村はこれまた可憐な顔をほころばせた。

強くかつこいい日本男児への道のりは遠そうだった。

今日の俺の隣人部ポイント……絵師が同じなのをいいことにパクってみた。

舎弟ができた…… + 1

理科のあらぬ趣味が判明…… - 10

……順調にまっとうな学園生活から遠ざかっている気がする今日このごろです。

「はあはあ……では幸村くん……さっそく小鷹先輩にご奉仕とやらを」

「せんでええわ!」

今後は理科にも注意を払わなきゃいけないな……俺は改めてそう思うのであった。

夜の王、隣人部に赴く（前書き）

第8話です。

「羽瀬川小鳩」視点。

## 夜の王、隣人部に赴く

ここはどこだ……全てを映し出す教会か……  
数万年も前から儀式が行われていそうな、そんな雰囲気私の血を滾らせる。

この礼拝堂を歩いて行った所に、談話室4……隣人部の部室があると聞かされている。

クッククク……このようなところに拠点を構えようとはなかなかセンスのあることをしてくれる……

というわけでこの偉大なる王、レイシス・ヴィ・フェリシティ・煌は本日、あんちゃん……もとい我が眷属が所属しているという隣人部の視察にやってきたのだ。

なぜ私のような偉大なる存在が態々赴く羽目になったかということ

……

それは忘れられない、あの地獄の惨劇（80%ギョウザ関連）を

……

いつも通りあんちゃん……もとい我が眷属が帰ってきたと思ったら、そこにいたのはとてつもないオーラ（不機嫌オーラ）を身にまとった魔王が立っとなった。

名は三日月夜空（本名らしい）と言い、この私も思わずちびってしまった。本気で怖かったんやもん……

その魔王は家にズカズカと入ってきて、私の世話をしてくれと頼まれたといい、拷問のようにギョウザを食わされた。

逆らおうものならその眼光がまた怖く、もう本気で泣こうかと思っ

た。  
あんちゃんなら……もうあんちゃんでもいいや。きつと何とかしてくれるとあんちゃんが帰ってきてくれることを必死に願うことしかできなかった……



30分どうしろっっていうんじゃ……この魔王と2人で30分、私は心臓を握られているような感覚に陥っていた。

茫然とドアの前に立ちふけてっていると、後ろから声をかけられた。

「あの、君そんな所にいると邪魔ですよ？」

振り向くとそこには白衣を着た女子学生がいた。

もしかしてあれかな……まっどさいえんていすと？

その隣にはまたも女子学生……なんだけどなぜかそいつは男子の制服を着ていた……変なやつ……

人見知りの激しい私は、すぐさま横にずれて軽く会釈をした。

「にしても随分とまあ派手な格好の女の子ですね……目の色が左右違いますし、リペイントでも持つてるんですか？」

「それ別の作品の設定やないか、絵師が同じなだけや……」

白衣の人の言葉に私はすぐさまツッコミを入れる。

「聞いて驚くなよ、そいつは小鷹の妹だ。名は小鳩という」

「なん……だと……」

魔王夜空の言葉があまりに衝撃だったのか、白衣の人はそう言うてしばらく空いた口が閉じなかった。

確かにあんちゃんとは兄妹に見られないことが多い、そんなに似てないかなあ……

そして口が動いたかと思えば白衣の人はこんなことを言い出した。

「小鷹先輩のDNAには本当に驚かされますね……あんなプリン頭のヤンキーの妹がこんなかわいらしい女の子だなんて……100兆分の1の奇跡ですよ」

「そこまでいうんかい……」

100兆分の1の確率か……あ、結構悪くないかもしれん……  
100兆分の1が私という偉大なる王を生み出したのだから……  
私がそんなくならないことを思っていると、今度は白衣の人の隣  
の男の子……男？女の子……女？が私に話しかけてきた。

「あにきの妹君ですか……このかれんなようしににあわず、きつと  
あにきにまけを劣らず数多のてきをけちらしてきたのでしょうか……」

な……こいつ、私の本質をみぬいた……  
そう、私は数多の敵を蹴散らした……

「ああ、こいつにそういうことを言つと図に乗るぞ、中二病だから」

私の設定を軽々とぶつ壊す魔王だった。本気で恐ろしい魔王じゃ

……

「さてと、小鷹は来ていないがある程度のメンバーが集まったので  
紹介してやる。マッドサイエンティストの理科と性別はまたこんど  
の幸村だ。お前さんと同じで色々と特殊能力を有している。お前の  
同類が多い部活でよかったな」

魔王は私に気を使ってくれたのか、私に合わせた紹介をしてくれ  
た。

常識言つと無駄な優しさ、そう紹介してくれるあんたがむしろ私  
の同類じゃ。もう暴露してしまえ、あんたは私の同類じゃ。

にしても、夜空に理科に幸村……3人目はどうかしらないけどあ  
んちゃん随分とまあ幸せな部活にいることで……

自分の兄が本当に女の子を侍らせているヤンキーではないかと妹



として少し心配になってきたぞ……

「にしても小鳩ちゃんでしたっけ？さつきから全然しゃべっていないですね？ひよっとして緊張してます？」

「ふえ？いや……その……」

理科のその質問に私は口ごもる。

先ほども言ったが私は大の人見知り、正直今も逃げ出したかった。この人たちが悪い人ではないのはわかる。だが私は昔からあんちやんばかり懐いてきた。

それ故にあんちゃん以外の人と話すのは苦手、接し方がわからない。だから私は友達が少ない。

だから私はそんな自分を変えるため……変えるところまかして、アニメのキャラにあこがれてこんな格好までして……

「ふう……理科、そいつも私たちと同じのようだ」

「確かにそのようですね……」

夜空と理科が何かを察したようだ。

そして夜空が私のところへゆっくりと近づいてくる。ああ……魔王に食われる。

恐怖の最中でもそういう解釈をできる自分に若干呆れながら、私はその場を動くことができなかった。

いったいどうなるんじゃ……私が半分何かを覚悟した時、夜空が私にこう言葉を投げかけた。

「ゴホン……羽瀬川小鳩よ、選択の時だ。貴様は今この状況を脱却したいか？」

「え……なんじゃいきなり……」

「このポスターを……見る」

と、夜空は若干顔を赤らめて変なポスターを私に見せてきた。  
……うわぁ、なにこれえ……人がおにぎりのな何かを食つとる。  
おにぎりに顔あるし、食べたたら暴れそう。胃の中に行つてもずつ  
と暴れていそう……  
そしてなんか長つたらしい文章が書いてある。

「この文章を見て、どこか気がつくところはないか？」

「え？え」と……あ

「気がついたか？」

「ともだち……募集？」

うわ、なんやこの仕掛け……

斜め読みとか、立て読みだと味気ないとかで斜めにしたあたりの  
ちよつとひねつた感じがまたいやらしい……

三日月夜空、ひよつとしてこのお姉さん私が思った以上にアレな  
人なんじゃないだろうか……

「おい、お前今とてつもなく失礼なこと考えてただろ？」

どうやら顔に出ていたようだ。そりゃ顔にも出るじゃろこんなも  
の見せられたら……

「ゴホン！とりあえず入部資格はクリアしたも同然、さてと  
羽瀬川小鳩、この隣人部に入部する気はあるか？」

「お断りします」

「即答！？」

「こんなダサイ部活に入れるか」

ただでさえ私には悪評が多いのに、こんな部活に入ってることが

知らればどうなることが……

私は今のままでいい、十分満足してる。

と、そんな私の心を揺さぶるかのように、理科が悪魔の囁きをしてきた。

「あら残念ですね、この部活に入ればあなたの大好きなお兄さんと一緒にいる機会が増えると思いますよ？」

「な!？」

この一言は私の心を揺さぶるには決定的な一打だったことは言うまでもない。

というかあんちゃんを出してくるとは、このまっどさいえんていすと、侮れない……

確かに最近のあんちゃんの帰りは遅い、そしてその原因はこのサイ部活にある。

まっどさいえんていすと……これほどの威力の高い上級魔法は生まれて初めてじゃ!!

「あは……そうだなあ、確かにこの部活に入ればお前の兄貴と同じ立場にいることができるなあ」

魔王まで乗ってきた。ここで追い打ちとはやはり貴様はサデイス ティック星の魔王だったんか!?

くっそ、頼むからこれ以上私の心を揺さぶらないでくれ、もう9%は傾いてる……あ、もう手遅れやないか。

「というわけで今日からお前も隣人部の一員だ」

あ、勝手に決められた。魔王は腕を組みこちら見ている。

こうなったらあんちゃんのためじゃ。この茶番に付き合うことに

しよつ。

さすがは夜の王、我ながら寛大な心だ。

「こいつの場合まずはこの痛々しい言動をなんとかしないとイケないな、あとオッドアイとかやめておけ。そういうのは二次元世界の特権だ」

「……痛々しい言動ならお姉さんも同じじゃ」

「ああ!?!」

どうやら魔王は地獄耳のようだ。

今軽くちびりそうになった。むっちゃ怖かった。

「まあ私も覚えがあるけどな、現実逃避をしていたところにちょっとだけ」

現実逃避……

その言葉が出た時の魔王の顔には悲しみの表情が出ていた。

そして私自身も少し共感していた。確かに私も現実逃避をしている最中。

だからあの日、三日月夜空が家に来た時に感じたあの感覚、私とどこか似ていると感じ取ったのだ。

「現実逃避……なんかあったん……ですか？」

私は前と同じくくなれない口調で魔王に……お姉さんに聞いた。

「私をこんなにしたのも元はと言えばお前の兄貴の……」

「え?」

「……いや、なんでもない。まだ全てがわかったわけではないからな」

お姉さんはほそりとそう言っただけで苦い笑みをこぼした。いったいお姉さんは何を言おうとしたんだろうか……

見渡すと他の二人も少しばかり表情が曇っていた。この部活にいる人たちにはそれぞれ事情があるのだろう。

過去のトラウマ、何かしらの事情、それによって人を怖いと思うようになってしまいわすれてしまったんじゃない。人と付き合う方法を

……  
とりあえずこの空気をなんとかするべく、私ははぐらかしてみた。

「お姉さんもカラコンつけてみたら似合うと思うんじゃないが、金色と赤色とか」

「それ、私と違うキャラになるだろ。私の中の人的な意味で色々……」

「夜空先輩は容姿が地味な方がいいですよ、髪の色とか目の色が派手なのが売れるという法則は真つ赤なウソです」

「つんでれにすればうれるというほうそくもウソでしょう、石田光成が徳川家康にでれても、けっきょくは伊達と真田には勝てません」「おいおいなんの話をしてるのだお前たちは」

まっどさいえんていすと性別不能も話にのってきてくれた。

今思えば私にあんちゃんとしか話していなかったのも、このような賑やかな雰囲気は久しぶりだった。

まだ堅苦しさはあるけど、それでもこの部活は盛んだ。この雰囲気慣れずにいる私はちよっぴり悔しい。やはりまだ受け付けるには時間がかかるかもしれない。

そして数分後、あんちゃんが帰ってきた。

「おう、みんな集まってるな。って……小鳩？」

「あ、あんちゃん！」

私は何千年も囚われ、ようやく解放されたような感覚に陥った。やっぱりあんちゃんがいちばんじゃ。あんちゃんが最高なんじゃ。思いつきり抱きつく私を、あんちゃんは優しくなでてくれた。

「そうか、小鳩も隣人部に……」

「その方がこいつもさびしくなくていいだろう、それに私の見立てた通りこいつも私たちと同じのようだし」

こうして私は隣人部に入った。

クッククク……この部活を必ず私の闇で覆い尽くしてやる……

と思ったが、お姉さんが怖いのでたぶん無理な気がする。レイシスの野望がまたひとつ遠退いた1日であった。

「さてと部員も多くなってきたし、今からみんなで皇将行って餃子でも食べに行くか」

「それだけは勘弁!!」

もう餃子は食べたくないんじゃ……

**はがない刑事（前書き）**

今回は番外編でございます。

主に「羽瀬川小鷹」視点。

## はがない刑事

遠夜の外れにあるクロニカ署、その中の捜査第四課にて一本の電話が鳴った。

チリリリリリリン……ガチャ！

「はい……こちらクロニカ署第四課……市内で殺しの事件だと？わかった」

ボスと思われる長い黒髪のスーツを着た不機嫌そうな女性が、その電話を取り溜息をつく。

電話が終わるとソファアをならして、部下の方へと目をやる。

「殺し……ですか？」

「ああ……プリン刑事、武将刑事と共に現場に向かってくれ」

プリン刑事と呼ばれたスーツを着たくすんだ金髪の男がすぐに身支度をする……と、その前に……

「その、プリン刑事って呼び方はちょっと……」

プリン刑事はその呼ばれ方が不満なのかボスに異論をする。

一方ボスは、相変わらず不機嫌そうな顔でプリン刑事を一瞥し……

「貴様のあだ名がそれしかなかったのだ」

「それなら小鷹刑事の方がよかったですよ、叶うならばホーク刑事と……」

「プリン刑事、すぐに現場に向かってくれ」



「……」

不満そうな表情を浮かべ、プリン刑事（本名：羽瀬川小鷹）は黙って身支度を続けるのだった。

「マリナさん、わたくしのじゅんぴは終わりました。あとあにきの準備もしておきましたので」

「さすがは武将刑事、対応が早いな」

「ああすまねえな幸村……いや武将刑事」

プリン刑事が感謝すると、幸村こと武将刑事は笑みを浮かべて会釈をする。

この武将刑事、豪快な名前であるが茶髪で美少女のような面を持っており、署でも人気が高い。

メイド服を着てることもあり、そのニックネームからさらに印象がかけ離れている。性別の方はとりあえず割愛。

「じゃあ行つてきますよマリナさん……」

「行ってまいります」

「おっ」

プリン刑事と武将刑事はすぐさま現場へと向かった。

数分後、後ろからミニスカートの特徴の金髪の胸のでかい刑事がマリナさんの方へ向かってきた。

「ボス、私は何をしたらいいの？」

「赤いカラコンをしている金髪オッドアイの少女が路上で中二的発言を連呼してたので、署の豚箱に放り込まれた。少女の愚痴を聞いてやってくれ」

「つ・ま・り、私と小嶋ちゃんのあるシーンやこんなシーンがた

「つぷりと……」

「そのシーンはシナリオに書かない」

マリナさんの言葉に金髪の刑事が（・・）という顔をしている。

マリナさんが付け足すようにこう言った。

「貴様が正式に登場するのは次の章からだ。現在やってる章ではこれ以上どうやっても出てこない。原作一の人気キャラだけに惜しいかぎりだな」

「いやあんた全然そんな顔してないわよ!」

「とりあえず頼むぞ、柏崎刑事」

「……なんで私にはニツクネームないのよ？原作じゃあんた私の名字すらロクに呼んでくれないじゃないのよ？」

柏崎刑事は、マリナさんのその呼び方に違和感を感じ、意を唱える。

マリナさんは柏崎刑事のその意に、「ふっ……」と鼻で笑ってごまかす。

そんな二人の元へ、今度は白衣を着たポニーテールの刑事がお茶を持ってきた。

「マリナさん、お茶を持ってきましたよ」

「ありがとう博士刑事、私的にはコーヒーがよかったな」

二人はそんな途方もない会話をしている。

そこで柏崎刑事はあることに気づき二人の間に入った。

「ちょっと夜空、あんたのそれって本名なんじゃ……」

「今の私はマリナさんだ。中の人なんていません」

「いるじゃないのよ！思いっきり外側に飛び出してるじゃないのよ！！」

「いいから早く取り調べに行つてこい、ちなみに度が過ぎて小鳩を泣かしたりしたら貴様も豚箱行きだからな」

柏崎刑事の指摘にマリナさんは顔が引きつる。めんどくさかったので小鳩の名前を使い柏崎刑事を追い出した。

柏崎刑事は小鳩が待っていることを思い出し、目の色を変えて取り調べ室へと直行した。

- - -  
- - -  
- - -

現場についた俺、羽瀬川小鷹ことプリン刑事は、同僚の楠幸村さんと武将刑事と共に現場を搜索する。

あたりに色んなものが散乱しているアパートの一室、いまだに事件の雰囲気が残っていた。

室内を調べ終わると俺たちは、被害者の親族が来ているというので話を聞くことにした。

これで何かがわかるといいのだが……

「あにき、ひがいしやの高山マリア殿のあねぎみにあたる高山ケイト殿です」

「うう……妹はまだ10歳でこれからの人生も楽しいことがあったというのに……マリアアアアアアアア！！」

被害者の姉、高山ケイトは地べたに手をやり号泣している。

気持ちは察する。刑事として俺もこの事件は許せない。

にしてもマリア、お前はこの章から登場予定だっというのにいき

なり死体とはな……

「きつと妹さんは天国で元気にしてますよ、この事件の犯人は必ず俺たちが捕まえて見せます」

「あにき……ぽっ……」

なぜそこで顔を赤らめるんだ武将刑事。

お前は一応署では男で通ってるだろ、俺にときめく理由がわからないぜ。

「必ず犯人を見つけてくれ！！犯人捕まらなかったら私がお前らを殺す！！」

「いや、それだとお前も捕まるだろ」

ケイトさんはよほど妹を愛していたのだろう。こりゃ絶対に犯人を捕まえないとな……じゃなきゃ殺されるし。

俺たちは聞き込みを終え、部署に帰還する。

部署に変えるとマリナさんが相変わらず不機嫌な顔で俺達を出迎える。何があってもいっつもその顔だよねあんたって……

俺は被害者の身元および調査で得た情報をマリナさんに提示した。

「被害者の名前は高山マリナ、死因は打撲だそうだ。何かで殴られて殺されたってことですね」

「現場に証拠らしきものはなかったのか？」

「指紋なども調べましたが犯人の証拠らしきものは一切見当たりませんでした。おそらく計画的犯行……犯人も用意周到ってわけですね」

あの散乱したアパートの一室には、被害者を殺害したであろう鈍器らしきものも何も見当たらなかった。

ケイトさんに話を聞いたところ、見つけた時にはリビングで被害者が頭から血を流してぐったりしていたという。

「いったいいつ、どうやって被害者を殺したのだろうか……」

「このままでは拉致が明かないな、明日また皆を招集して検討しよう。ところでプリン刑事……どうだ？今夜一杯……」

「いいですね、お供しますよ」

マリナさんに誘われ、今夜近くの居酒屋に飲みに行くことに。

と、そこで取調室から柏崎刑事が、蔓延の笑顔で出てきた。その笑顔に正直俺は引いた。

「むふふふふ〜こぼとちゃ〜んかつわいい〜むっふっふ〜」

「そういえばこいつ、別の人物の取り調べをやっていたとかなんとか……」

「いったいどんな取り調べやってきたんだよ、柏崎刑事は胸を高鳴らせて報告する。」

「もうねえ、私が優しく取り調べしてあげたらおびえた顔して可愛かった！「あんちゃん助けてえー！」とか「怖いから近寄るな〜」とか、もう小鳩ちゃんったらツンデレなんだから〜！！」

「それ本気で怖がってるんじゃないのか？それをツンデレと例えるなら貴様の頭の中はどれだけお花畑だ」

マリナさんは半分脅えたような顔をしていた。

「どうしてこいつにそんな取り調べなんてさせたんだろうか、俺もその報告には少しばかりの恐怖を抱いていた。」

「次からは博士刑事に任せる」

「なんでよ！これからがお楽しみなのに！！」  
「いや、それが怖いんだろうが」

俺はとりあえずツッコミつつ……

その日の夜、居酒屋にてマリナさんと合流。日頃の疲れを乾杯で分ちつつ、つまみを片手にお酒を飲むことに……

「しかしこの事件、はたしてどう転がるか……」

「俺たちは警察です。不安を抱くよりも行動あるのみです」

「そうだな……貴様のような右腕を持つて、私は誇り高いよ」

「恐縮です」

マリナさんとはかれこれ付き合いが長い。部署に入った当初はよくこき使われていたものだ。

マリナさんは元々人に肩を預けない、人を信用しないような人だったのだが、色々あつて今に至る。

数々の難事件をマリナさんの元で解決してきた俺にとっては、まさに尊敬すべき人だ。と、ここでマリナさんは暗い話もなんだがと話題を変えてくる。

「そういえばこの作品もアニメになることだし、今よりもメジャーになることだろう。200万部は伊達ではないさ」

「そうですね、でもこの作品主人公の俺がちよつとばかり待遇悪いのが難点なんですよね。京介さんとか上条さんとかそれくらいは活躍したいです。あと表紙飾りたいです」

「京介のと比べてこの作品は女キャラのインパクト強いからな、上条さんはお前と違って主人公という役割をきちんとなしているし……そもそもアツシとユウイチに比べてリョウヘイってのもちよつとなあ」

「おいおいリョウヘイ舐めんじゃねえよ、東のエデンどんだけヒツ

トしたと思ってるんだよ?」

「個人的にはテツヤでもよかったかなあ」

「それだと天元突破するだろ、中の人つながりでしょどうせ?」

そんな下らない話をしていたら、時間だけがこくこくと過ぎていった。

この話題に飽きたのか、次はこんな話題に……

「はがないトップ3が世間的には肉、理科、小鳩で固まっているんだが（人それぞれだが）、なんでメインヒロインの私がこくも落ちぶれてしまったのだ?これではモッピーではないか」

「主人公の俺の扱いよりはいいでしょ?マリナさんも柏崎刑事には負けてますが人気高いですって」

「私の特徴という特徴がエア友達のトモちゃんしかないとっていうのが辛いところか、しかも原作4巻以降くらいからトモちゃんめつきり出てこなくなってしまうた」

「特徴を削がれたってことっすか?」

「そんなところだ。まあメインヒロイン〓1番人気とは限らないのが世の摂理だ。今人気投票やったら主人公が6位とかになりそうだしなこの作品」

「リアリティあふれること言うんじゃねえよ、本当にそうなる可能性大じゃねえか」

「主人公に勝てれば満足だ。ちなみにこのはがないIFでは私はヒロインではなく主人公扱いなので「メインヒロインなのに……」という愚痴も言われずにすむ」

「ちなみに俺も主人公（キリッ）」

「私が光熱斗なら、貴様はロックマンといったところだな」

「ロックマン俺かよ!!!」

酒もすすみ、仕事場では話せないようなどうでもいい事を語りつ

くせたような気がした。

プライベートタイムは終わりを告げる。明日からは気合いを入れるぞ。

そして明日こそは、必ず何かでかい情報を見つけて見せる。俺はそう自分に誓った。

翌日……

マリナさんが俺達全員を呼び出す。

そしてそれぞれ情報を提示するのだが。

「だめか、これでは捜査が降り出しだ」

マリナさんの表情が曇る。

証拠が不十分すぎるのだ。犯人の年齢、特徴など全く割り出せない。

はたしてどこに隠れているのだから、俺たちにも焦りが見えてきた。

「高山マリアに関連する重要参考人は姉のケイトしかいないのか？」

「それがですね、高山マリアは友達が少ないらしく、ここ数年関わったのが姉のケイトだけだそうです」

俺の情報に、マリナさんはため息をつく。

てかそんなやつがどうして殺されたのだろうか、俺はそこから疑問を抱くことに……

そんな時、博士刑事がこんな情報を提示した。

「そつえば姉のケイトさんから聞いたのですが、最近被害者のマリアちゃんが、よく『吸血鬼』と呟いていたらしいです」



「吸血鬼？」

俺が真っ先に反応した。

ひよっとしたらその吸血鬼が何か関わってるかもしれない。

「その吸血鬼が犯人かもしれないな、吸血鬼というのはコードネームで、犯人は一種の殺し屋だったのかもしれない」

「でもマリナさん、どうして友達もいないマリアちゃんが殺し屋に狙われるんです？」

「シスターで幼女だからな、一部の男には高く売れると踏んだのではないか？ だけど失敗して殺す羽目になった……とか」

ないな、とマリナさんは言葉を続けた。

俺もそれはあまりにも出来すぎていると思う。

しかし吸血鬼……外見を表しているのか？

俺が色々と考えている時、柏崎刑事がこちらに向かってきた。

「そっちの事件はどう？ 解決した？」

「まだ解決していない、柏崎刑事は口を挟まないでくれ」

興味津津の柏崎刑事をマリナさんは軽くあしらう。

この二人ってあんまり仲良くなかったよな、と俺はどうでもいいことを思い出した。

ぶすつと顔を膨らませ、柏崎刑事はぷいっつとその場を立ち去る。

「なによ、この神である私が心配してやってるのに。もういいわ、小鳩ちゃんの尋問をしてこよっつと」

「それはもうお前の役目ではない、お前本気で豚箱に放り込まれたのか？」

「昨日みたいな激しい尋問はしないわよ」

「その激しい尋問の内容が異様に気になるのだが……」

「いったいどんな尋問をしたんだこいつ……」

「一応本編では俺の妹なんだ。IF世界だとしてもやりすぎるのはやめてほしい。」

「だってかわいかったんだもん血まみれ衣裳の小鳩ちゃん、「とうとう吸血鬼が女神を駆逐した」とか痛いセリフも言ってたし、今度は私が小鳩ちゃんを駆逐したいわ!!」

「貴様はどこまで残念なのだ……」

柏崎刑事の残念発言に、マリナさんのため息は止まらない。

「……………ん？」

「ちよつとまで、今なんか重要な言葉が出てきたような……」

「柏崎刑事、今なんて?」

「なによプリン刑事、私が小鳩ちゃんを駆逐するって……」

「その前」

「血まみれ衣裳で吸血鬼が女神を駆逐したって……」

「……………おい、それって……」

「マリアさんはその言葉を聞いて、机に手を強く叩きつけ柏崎刑事を怒鳴り散らす。」

「貴様……!なんでそれを早く言わなかった!?!」

「え!?!ちよつと何々!?!」

「その吸血鬼が高山マリアを殺したかもしれないんだよ!!」

「はあ!?!」

俺の発言に柏崎刑事は本気で驚く。

今すぐ、その吸血鬼から事情聴取する必要がある。  
俺たちはダツシユで吸血鬼の元へと向かうが、時すでに遅し、その吸血鬼はいなかった。

「くそ！逃げられたか！おい肉う……貴様が手引きしたのではないだろうな！」

「そんなことしてないわよ！てかあんたようやく私を肉って……」

「プリン！すぐに吸血鬼を追うぞ！！私自らも前線に出る！！」

「了解！！」

「つてちよつとー！！」

武将刑事と博士刑事にも手分けして探すよう言った後、俺とマリナさんと柏崎刑事、武将刑事と博士刑事で別れた。

吸血鬼はまだ子供だ。そう遠くには逃げていないはず……  
署を出て数分後、それはあっさりと見つかった。

「見つけたぞ吸血鬼！！」

「ふえ！？」

マリナさんの叫び声を聞いて、俺と柏崎刑事もすぐさま向かう。

「小鳩ちゃん！やっぱりかわぐふう！」

「お前はちよつと黙ってる」

俺は柏崎刑事を軽く小突いて黙らせる。

吸血鬼を見ると、衣装も血まみれ、持っているウサギの人形も頭の方にべつとりと血がついている。

あのウサギの人形が凶器というわけか……

「くそう、もう少しやったのに……」

「おそらく指紋がなかったのは、衣装の一つで手袋かなんかをつけていたからだろう、靴も脱いで裸足だ。血まみれなのも裸足なのも、コスプレの一貫ということでごまかせば通らないこともない。お前と被害者がどのような関係かは知らないが、その血痕を調べればすぐにでもわかる。事件は解決だ」

「し……仕方なかったんじゃ……ぐすう」

「理由は署でゆっくりと聞こう、このIFではお前と私の関係性なども重要視されてるらしいし……」

マリナさんがそう言って、吸血鬼を連行する。

だが柏崎刑事が、その行く手を止めた。

「おい柏崎刑事、何の真似だ？」

「小鳩ちゃんが……そんなことするわけないじゃないのよこのバカ夜空！！」

「お前は何を……根拠は？」

「こんなかわいい子が犯罪なんてするわけないじゃないのよ！！」

柏崎刑事は断固としてそこを譲るつもりはなかった。

正直何を言ってるのか俺も全く理解できなかった。なんちゅう理不尽発言してるんだよ……

マリナさんもあきれ顔。柏崎刑事はものすごく真剣な顔をしているが、何が彼女をそこまで突き動かしているのだろうか……

そしてマリナさんは、あきれ顔から真顔に変わり柏崎刑事にこう言った。

「じゃあ柏崎刑事は、犯人をかばうってことでいいんだな？」

「そういうことよ！」

「そうか、じゃあお前を代わりに逮捕しよう。はい逮捕！」

「それでいいのよ……ってええ！？」



とある隣人部の顧問の正体（前書き）

第9話です。

「楠幸村」視点。

「志熊理科」視点。

「羽瀬川小鳩」視点。

「三日月夜空」視点。

## とある隣人部の顧問の正体

みなさんこんにちは、わたくしは楠幸村ともうします。

ほんじつも小鷹の兄貴から『漢の中の漢』をまなぶため、りんじんぶのぶしつへとむかうさいちゅうです。

夜空の姉御から「こうはいはせんぱいよりもさきにぶしつに来てそうじをやるのがじょうしき」と申されているしよぞん。

ほんじつも兄貴と姉御、理科殿に妹君がきぶんよくぶかつにはげめるよう、がんばりたいとおもいます。

わたくしはいつものように、ぶしつへと入りました。すると……

「ぐう〜すう〜」

なんとということでしょう。

見慣れないこどもが、りんじんぶのぶしつにはいつているではありませんか。

きれいなぎんぱつの、シスターの服を着た幼いおなごがソファアで寝ていました。

りんじんぶによそものが、これはいわゆる「くせ者」というやつです。本来ならばおいださなければなりません。

しかし相手はまだこども、それもおんなのことあつては無理やおいだすのは骨が折れそうです。

こういづばあいは話し合いでかいけつするしかありません。

「もしもし〜」

「うう〜ん……なんだ……おまえは？」

幼子は熟睡していたのか、すこしばかりきげんがわるい「ううす。しかし話し合いをしないと先にはすすめません。





とまあ天才キャラかつエロキャラかつ後輩キャラな理科は、今日もホモサピエンスへの興味を深めるために隣人部の部室へと向かっています。

おそらくもうみなさん集まってるでしょう、部室に入って早々夜空先輩にでも下ネタを振ってみましようかね……

ガラガラガラ〜と、まさだおかだではありませんが自分でSEを言いながらドアを開けると……

「ぐう〜すう〜」

「……………」

私は思わずソファで寝ているそれに見入る。

そこで寝ていたのは、銀髪の幼女でした。

金髪吸血鬼が隣人部に入った直後に銀髪シスターとききましたか……この部活に居ると現実ではあまり見れない人種を見ることが多いですね。

にしても幼女が寝ているというシチュエーション……エロイですね。

なにがエロイかといいますと……まあ、エロイですね。

ここから先の展開を妄想すると、触手が徐々に幼女の方へと近づいて行って、幼女が目を覚ました頃には……

「……………あふん」

私の妄想力は相変わらず天を射抜いているようですね。

今日も健全な理科です。とりあえずこの幼女が何者かを知る必要がありますね。

「あの〜もしもし〜」

「うう〜ん……………はっ!?!もしかしてまた来たのか女顔!?!って……………」

お前は誰だ？」

少女は私を見ると飛び上った。誰かと勘違いしたのでしょうか……  
女顔ってことは幸村くんのことかな？

そついえば昨日幸村くんは、「今日は大きいゴミがあつて大変でした」って言っていたような、大きいゴミってこの子のことが……

私は幸村くんの内にひそむSな心を感じ取りつつ、この少女に質問する。

「あなたはどうしてここで寝ているんですか？ここは隣人部の部室ですよ？」

「隣人部！？ってことはお前もあの女顔の仲間か！？帰れ！ここはマリアの寝る場所だぞ！！」

うーん、会話が成り立ちませんねえ。

このままでは部活が始まりませんね、部外者がいるのは少々問題でしょうか……

相手は子供ですし、平和的解決でここから出て行ってもらいましょう。

と、私は鞆からポータブルDVDプレイヤーと、R・18マークのついた健全なDVDを取り出し、少女にそれを見せることで部室から追い出すことに成功しました。

さすが理科です！すばらしく平和的ですね！！

.....

翌日……

クッククック、今日もまた隣人部という下界へと降りたとうではな

いか。

大好きなあんちゃん……もとい私の眷属に合わなければならぬしな。

だが眷属の周りにはこのレイシスと同等、というか私以上の力を持った魔王が傍らにいるのがぶつちゃけ怖すぎ……もとい厄介だった。

なんか魔王のお姉さんは私をおもしろいおもちゃを手に入れたかのように脅かしてくるし……うう……怖い。

にしてもいつも以上に早く来てしまったではないか、しかたない、先に部屋に入って待っているか……

「ぐう〜すう〜」

な……なんだこの銀髪のシスターは……

まさにその姿は、吸血鬼である私と対をなす、天使ではないか……ここにきて宿敵に出会うとは、これもまた……運命石の扉の選択か……

私が得た新たな知識を披露したところで、私はこの銀髪に目をやる。

こんな銀髪、隣人部にはいなかった。もしか本当に私を滅ぼしに天界から舞い降りた天使……

「なんじゃこいつは……えい!!」

「ふぎゃ!!」

私はおもいつきり手に持っているうさぎの人形で銀髪を殴った。

銀髪も驚いたのか、殴った瞬間に飛び起きた。

これで状況はイーブン、寝ている相手を倒しても意味はないのだ。

「ななな、女顔と変人に続いて今度は……ちびっこ?」

「あんたもちびやないか!!」

ちびにちび言われた!!

私は少しイラッと来て、さらに人形でそいつを殴る。

「ふぎや!! なんなのだお前は!?!」

「クツクツク、私は夜を支配する吸血鬼ばい……」

どうだ天使、この偉大なる夜の王、レイシス・ヴィ・フェリシテ  
イ・煌に恐れをなしたか?

さっさとこの部屋から出ていくがいい、と私が心の中で余裕をこ  
いていると……

「吸血鬼!?! お前も悪いやつだな!! この間と昨日の分の恨みをお  
前にぶつけてやるのだ! お前相手なら勝てそうなのだ!」

「んぎゃ!! 何をするんじや!?!」

銀髪はいきなり私を十字架のペンダントで殴ってきた。

かどつこが痛い、ううう尋常じゃない痛さやぞこれ!!

「お前も隣人部とかいうやつの一員だな!?! ここは私の寝る場所な  
のだ!! 今度こそ渡さんぞこのうんこ!! うんこ!!」

「痛い痛い!! うう……痛いって言うてるやるあほたれ……」

「……………」

このままでは負けてしまう!! この銀髪には絶対に負けたくないん  
じや!!

この夜の王に向ってうんこだと!?! ゆるさんぞ!! うち絶対  
お前をゆるさんからな……!!

そのあと10分程の死闘の末、そいつを追い出すことに成功した。

タッチの差で私の勝ちだった。どうだ見たか！！私こそが最強な  
んじゃ！！

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

翌日……

今日はしばらくぶりに隣人部の部室へと向かう。

クラスで1位の成績を誇るこの三日月夜空だが、最近出された課  
題がなんと3人でチームを組む課題だった。

前みたいに2人だったら小鷹と組めば解決だったのだが、3人で  
トリニティだと？ケイト先生は本当に手ごわい相手だった。

最終的に後輩を入れていいということになったので、幸村を巻き  
込んでこの日まで課題に勤しんでいた。

これでようやく自由の身だ。さてと隣人部の部室で読みかけの小  
説でも読むか……

「ぐう〜すう〜」

……ボタン

私は思わず手に持っていた小説を落とした。

とんでもないものを目にした。まさか……まさか……

「ケイト先生が……小さくなって寝てる……」

あのケイト先生が、少しばかり小さくなっていた。

この奇天烈な減少を引き起こせるであろう人物は、天才少女の志  
熊理科くらいか……

あいつ、いつの間にアポトキシンを開発していたんだ……という

ことはあいつ黒の組織の一員だったのか？

とりあえず私は、小さくなったケイト先生に事情を聴くことに……

「お……お……い」

「うう……ん…… って今度こそやられるかばーか……！」

かちーん！

と、いきなり飛び起きた小さくなったケイト先生にペンダントで殴られた。正直今のは私自身もかちーんときたぞ。

小さい子相手にむきになるのは大人げないのだが、あいにく私は我慢弱く、落ち着きのない女なのだ。しかも、姑息な真似をする輩が大の嫌いときている。ナンセンスだが、動かすにはいられない。

とは言ったものの……とりあえずなんとか我慢して話を聞くことにした。

私自身、その……子供は嫌いではない。

「な……なにをするんですか？いきなり……」

「貴様も隣人部とかいうやつの一員だな！もう私は屈しないぞ！！女顔と変人と吸血鬼にひどい目にあわされて黙っているほどマリアは甘くはないのだ……！」

どうやらこのお子様、隣人部によほどの恨みを持っているようだ。女顔と変人と吸血鬼……あの3人のことを言ってるのか？

そして私はとあることに気づいた。「マリアは」ってことは、こいつはケイト先生ではなくマリアというやつみたいだ。

そういえばケイト先生は妹がいるとか言っていたが、このお子様がそうなのか？10歳で教師をやっている。自慢の妹だと言っていたが……

「お前、ケイト先生の妹なのか？」

「ババアを知ってるのか？ってことは隣人部とババアが私を懲らしめるために差し向けた刺客なのか！？帰れこのうんこ！！」

人に向ってうんこって……

このくらいの子供は下品な言葉を使ったがる傾向にあるが、こんなかわいらしいお子様がうんこことというのは絵的にまずいな……

こいつも色々ひどい目にあっているようだし、私には似合わないが話し合いで優しく解決しよう。

「ここ談話室4は私たち隣人部の部室なのですが……部屋を間違えているのではないでしょうか？」

「はあ！？この談話室4は元々私に与えられた部屋なのだ！！この低脳うんこが！！」

低脳……こいつ今私に低脳って言ったのか？

「ぐぐ……いやでも、副顧問のケイト先生が実際に承諾してくれましたし、顧問にも話がついているらしいのですが……」

「そんなもん知るか！！マリアは何も聞いてないぞこのうんこ！！死ねばーか！！」

……殴ろうか。

私はあふれ出る怒りを必死で抑えつつ、こうなったら物で釣るかとかばんの中にチョコレートがあるのを思い出した。

お子様はこういう安物のお菓子に吊られるものだ。最初からそうすればよかった。

「と……とりあえず落ち着いてください、あなたにいいものをあげましょう」

「いいもの……？」

お子様の顔はぱあつと明るくなった。

生意気なお子様の典型的な反応、小鳩にも言えることだが小さい子の相手は楽勝だな。

と、私は鞆からチヨコレートを取り出そうと手を突っ込む、しかしそのチヨコレートが教科書やノートに挟まれてなかなかとれない。

「あつた……とりづらいな……よしとれた」

と、私は鞆から勢いよくチヨコレートを取り出した。

バシッ!!

勢い余ったのか、私の右手の甲が、見事な裏拳となってマリアの右の頬にクリーンヒットした。あ、こりゃあ痛いわ……

「ふえ……ええうええええっえ」

マリアの目から涙がぶわりと浮かび上がる。

「あ……」

すまない、と私が謝るよりも早く。

「ふえええええええええええん!! いいものやるっていつておいて不意打ちとはひどいのだあ!! なんなのだこの数日間変なやつがマリアの居場所を奪いに来て!! ふざけんなこのうんこ!! 死ぬ死ぬ死んでしまえこのうんこー!!」

マリアは夜空を睨みながら大声で泣きわめき始めた。

こりゃあもう私が何を言っても話にならないだろうな……正直すまない。



しかしこのまま部室で泣かれています、妙な誤解を生んでしまう。性格に難があるとはいえ私とて人の子だ。子供を泣かす趣味などない。

だがこうなっては仕方ない、許せよ……

「ふん、馬鹿め!!これが作戦というやつだ!!」

「なにい!?!」

私の切り替えの早さにマリアはびたつと泣きやむ。

ここまでできては私は悪を演じるしかない、悪を徹してマリアを黙らそう。

「さてと、次はどうされたい?」

「う……うううううええええん!!」

「黙れ、静かにしろ。でないと……」

「ひゃう!!」

マリアが予想以上にヘタレでよかった。

こつもあつさりと私に屈服するとは……嗚呼、子供相手に本気の私というのはなんと小さい存在なのだろうか……

小鷹にケイト先生を連れてくるよう頼み、マリアが逃げ出さないよう私は見張る。

そして数分後、小鷹とケイト先生、その他後輩3人が部室にやつてきた。

「ケイト先生、説明してもらいましょうか?」

私がそう言うと、ケイト先生は頭をボリボリ掻きながらこう説明した。

「実は元々この部屋はマリアのものだったんよ、けどもマリアがこの部屋に閉じこもってしよっちゅう仕事をさぼるもんだから、なんとかできないかと思ってねえ。そんな時夜空ちゃんが部活を作りたいたなんて言ったものだから、部室としてこの部屋を明け渡してしまえば……ってね」

「それでこのお子様に何も言わずに勝手に話を進めたんですか？」  
「まあそんなところか、一応こいつが寝てる間にこいつのハンコ使つて承諾書にサインはしたんだけどねえ」

ケイト先生は笑いながらそう言った。

それって一種の詐欺では？と私は心の中でつつこむ。

「そっいえば前に顧問がいるって言ったじゃん？そう、このマリアこそこの隣人部の顧問だ。なので仲良くしてやってちょ」

「おいババア！何を勝手にんぎゃー……！……！……！……！」

マリアが反論するが、それをむりやりげんこつで黙らせるケイト先生。

この先生鬼だ……やっぱりこの人には勝てそうにない……

「ってことらしいが……」

「まあ、いいんじゃないか？」

「わたくしもいるんはありません」

「顧問が幼女だなんて……エロイですね」

「ううう……あんちゃんうちこいつ苦手じゃ……」

小鷹と幸村は受け入れてくれるようだ。理科の言っていることはよくわからん、小鳩は……なんかあったのだろうか……

こうして私たち隣人部の顧問が判明した。高山マリアというシス

ターの幼女が我が部の顧問だ。

こりゃあまた騒がしくなるな……部長の私にまたも苦勞が増える。

この部活の、『本当の目的』すら成し遂げていないというのに…

…

CONNECT (前書き)

第10話です。

「三日月夜空」視点。

## CONNECT

隣人部を設立して早くも1か月ほど立とうとしている。

同級生の小鷹の他に後輩が3人も入り、顧問と副顧問までついており私は正直驚いている。

部活を創設し、成果という成果は十分に出している。軌道は波を描いているのだ。

だが、私にとってその成果とは正直小さいものだ。私の心は未だに満たされていなかった。

表向きは友達作りの部活、だがそんなものはあくまでスローガンだけであって、部活に入った目的など個人個人違うものだろう。ぶつちやけると、部長の私にすらこの部活には本当の狙いが存在する。

私はこの部活で失ったものを取り戻す。そのために私は動き出したのだ。全てから逃げ出したこの私が……

「……今日は誰もいないか」

私は一人部室に入り、誰もいないことを確認し小説を開く。

少し前の私ならば、エア友達のトモちゃんとお話をして自分を満たしていたのだろうが、今は正直トモちゃんと話す気分ではない。

その時の私には『希望』すらなかった。だからエア友達というヘンテコな趣味を作り自分を保っていた。

だが今の私には『希望』がある。そう、隣人部という希望が……と、私は今嘘をついた。隣人部はあくまでその希望を逃がさないための枷なのだ。

私にとって本当の希望とは、『羽瀬川小鷹』なのだ。

実は私はいつのことを『知っている』。だがやつは私のことを知らない。

いや、『気づいていない』……と言った方が正しいだろうか。  
あの時補習でコンビを組まれたあの日、いや……あいつがこの  
学校に転校してきたあの日から。  
絶望だらけの世の中にあきれ返っていた私に変化が見られた。

.....

私と小鷹は10年前、『親友』同士だった。

転校初日に見た時は「嘘だろ……」と思ったが、あのくすんだ金  
髪を忘れるはずがない。

10年前に多人数のガキに絡まれてたあいつを助けたのが羽瀬川  
小鷹との出会いだった。

それはまさしく運命の出会いだったよ、当時の私は非常にひねく  
れ者で、女なのに女っぽくしようともしない、男勝りの女の子だっ  
た。

無駄に正義感が強く、喧嘩も強かったから同姓の子からは遠い目  
で見られ、異性の子にすら恐れられた。

つまらない毎日に嫌気をさし、たまたまいじめられていた金髪の  
同い年の子供がいたから、正義の味方気取りで助けてやった。

「弱いものいじめはやめろ！」

私はそう言って意気揚々と現れ格好つけた。ここでいじめられて  
いるやつを助けてやればカッコイイと思った。感謝されて当然だと  
思った。

だけど、その時そいつ、助けた私をどうしたと思う。

『殴り返して』きたんだよ。

助けてやったのにそいつは私を殴ってきた。

予想外の行動に、私の目が点になった。

恩を仇で返すとはそのままの意味だろう、そしてそいつは……小鷹は私にこう言った。

「俺は弱いものじゃない！！」

私に向ってそう言ったそいつの顔には覇気があった。私にそう言われたことは、多人数から殴られること以上に辛かったことを物語っていた。

その言葉を聞いた時、私は笑った。笑ってこう返してやった。

「上等だ！」って。

弱くないというなら証明してみる。私はそういう気持ちで小鷹と殴りあった。

自分が女だということを忘れるほどに、男の子同士のガチの殴りあいを演じてやった。

それを見ていた多人数のガキどもが、無視をするなど私たちに向かってきた。

だが私と小鷹はそいつらをたった二人で返り討ちにしてやった。こいつと二人なら10人の相手にでも勝てる。その時はそう思えた。そいつらを返り討ちにした後も、私は小鷹と殴りあいを続けた。死闘の末、結果はドロー。お互いに倒れ青春ドラマのようなセリフを吐いた。ドラマの主演になったような気分だった。

私は小鷹に似たものを感じ取り、次の日からは仲良く遊ぶ友達同士に発展した。

昨日の敵は今日の友とはこのことだ。あの言葉は嘘ではなかったのだ。

そして私にとって初めての友達。この日から私の見る世界はガラリと色を変えた。

その時の私には自分が女だと明かすのが恥ずかしかったから男と

偽り、本名は明かさず「ソラ」というあだ名だけを教えた。そして私もあいつのことを「タカ」と呼んでいた。

楽しかった。本当に楽しかった。あの日々が、あいつと共に過ごしたあの日々が。私にとっては宝で、それは夢のようで……

夜空という名前の通り暗闇にとらわれていた私に朝が来て、その太陽がどの光よりも神々しかった。

そんなある日、私は母からよく言われていた大事な言葉を小鷹に送った。

「小鷹、オレの母さんが言ってた。友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切にできるような本当に大切な友達を作りなさい。たった一人だけでもお互いのことを誰よりも大切に思える本当の友達がいれば、きっと人生は輝かしいものになるだろうって」

母が言ってたその言葉こそ、私の生きる上で欠かせない原動力だった。

こんな私にもいつか、本当の親友ができると信じていた。

神様は奇跡を起こすって信じて、私は奇跡への軌跡を描き続けていた。

そして神様は、本当に奇跡を起こしてくれた。

羽瀬川小鷹という奇跡が私にこう言ってくれた。

「だったら俺は、ソラのことを百人分大切にするよ。百人……いや、百万人でも百億万人でも、世界中が敵になっても、俺だけはお前の友達でいる」

……心が震えた。

泣きそうだった。けどそれ以上にそう言ってくれる小鷹への恥ずかしい思いが勝った。

当時子供だった私に、本当の悲しみを感じることはできなかった



んだろう。

願いはかなった。奇跡は起こった。私は最高の親友を……百人分の友達を作ることができた。

こいつがいれば私には怖いものはない。もう何も怖くない、怖くはない。

閉ざされた世界から解き放たれた。小鷹と出会った時に感じた希望という名のクオリアが今ここで私の全てとなった。

だけど、その時は永遠ではなかった。幸せだった時間は突如として途切れた。

それはなんの予兆もなしに、小鷹は私の前から姿を消した。

姿を消す前の前日、小鷹が私に何かを言いたそうにしていたのを思い出した。

「明日、学校が終わったらこの公園に来てくれ！大事な話があるんだ……！」

当時の私にはその言葉の重みを理解できなかったのだろう。

私自身も、いい機会だと思い自分が女であることを明かそうとした。

だけど恥ずかしくて行けなかった。あいつとの約束を果たすことができなかった。

その私の弱さが、どのような結果を引き起こすかも知らず、小鷹は結果として私の前から姿を消した。

私はすぐさま察した。大事な話とはきつとこのことだったんだって。

「どうして……だったらそんなもったいぶらないで……早く言ってくればよかったじゃ……！」

私は悔やんだ。自分の弱さを。

でもその弱さを認めるのが嫌で、全部を小鷹のせいにした。

親友に自分の弱さを全てなすりつけた。小鷹は知らずとも、私の中ではそうすることでしか自分を保つことができなかつたから。

小さかつた私に少し感じていた小鷹への「愛」が、その時初めて「憎しみ」へと変わった。

その経験が私の中でくっついて剥がれなくて、何かある度にその事を思い出して唇を噛み殺した。

忘れてたくても忘れられない、あいつへの友情が、愛があふれ続けているのに。それがすべて憎しみに変わっていく度に自分が壊れていくのがわかつた。

「こんな思い、二度としたくない」

私は何度もそう言った。言うたびに思った。

まずは小鷹のことを忘れよう、そうすることで前に進めるのだと自分の中で念じ続けた。

中学に入って、コスプレやネットラジオのような痛いことに走つたのを今も覚えている。

あの時以上のトラウマを生み出せば忘れられるのだと思ってやったことだ。過去の亡霊を消そうと私は何度も一人で葛藤し続けた。

ろくに友達も作らず、私は容姿がよかつたのか近づく男も多かつたが全部それをにらみ返して遠ざけた。

同姓の子たちとも話さず、私は一匹狼を貫き続けた。

全ては『あの日』があつたから。親友を作つたことで自分の中に生まれた深い傷。それが私に青春という二文字を遠ざけ続けていた。ただどあの日を忘れることができれば、でも忘れることができなかつた。

どうして小鷹が私の中から消えない！どうしてタカは私の中で居座り続ける！！やめろよ！！お前は私を置き去りにしたくせに！！



というのがまた皮肉な話だ。

私は家に帰ればやりたいこともなかったの、勉強だけしていた。結果として今のクラスでは成績トップだ。

どうだ？友達がいなければ賢くなれるんだよ、この野郎。

その他、元々喧嘩も強かったので運動神経もよかった。様々な部活にもスカウトが来たが全部断ってやった。

そいつらは私が目的ではなく、私の能力が目的だったからだ。魂胆がバレバレなんだよくそが！！

私は容姿もよかったので、近づく男が多いのも変わらない。

でも容姿だけで中身は見てない、しかも体目的で狙ってるに違いない。

そう前提で考え続けた結果、性知識が疎くそういう単語を聞くと顔が赤くなる。けど関係ない！！

「一人だけ関係ない！！友達が欲しければトモチちゃんがいる！！勉強もできるし運動だってできる！！不自由なんてなにもないんだ！！」

聖クロニカに入ってすぐの私は、毎日そう心の中で叫んでいたっけか……

すぐそばにいるリア充を睨みながら、自分は一人でもあいつら以上の存在なんだって

そう信じ、そういう食わせ者のリアルを作り出すことこそが私の生きる原動力だ。

.....

「う……うう」

私はゆっくりと目を覚ました。どうやら寝てしまっていたらしい。気がつくと読んでいたラノベの今開かれているページがぐしょぐしょに濡れている。

私は夢を見ながら泣いていたらしい。

まるで走馬灯のような夢だった。私の愚かな人生を物語るような夢だったよ。

そして正面には、羽瀬川小鷹がソファーに座りながら鼾をかいて寝ていた。

「変な夢を見たのはお前のせいだったのか……」

私は寝ている小鷹に文句を言うように呟いた。

隣人部を作って1か月、いろんな事があつたが未だに小鷹は私が「ソラ」であつたことに気づいていなかった。

確かにあの時私は男を偽っていたが、こうも気づかないと、こいつはあっさりと親友のことを忘れてしまったのかもしれない。

私は忘れたくても忘れられなかったというのに、人生の8割以上私を支配し続けたくせにこの男は……

隣人部を作ってお前と一緒にいる時間を大幅に増やしたのに、とんだ気苦労に終わってしまったようだ。

神様の奇跡なんて嘘っぱちだ。一度起こしても二度は起こさない。でも、これedyouやくあの日を忘れることができるのかもしれない。

い。

本人と再会し、その本人が親友を忘れていると知ってしまったえば。

長年呪縛に苦しんでいた私でさえ呆れ返ってしまうわ。

「本当に……ありがとう、そしてさよなら……」

タカ……

と、私がやつのかつてのあだ名を言おうとしたその時だ。奇跡は、

二度起こった。

「……友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切にできるような本当に大切な友達を作りなさい……か」

「!？」

一瞬、私の中の時が止まった。

握っていたライトノベルが地面に落ちる。あまりの衝撃に私は握力を失った。小鷹が突如として、あの日私が送ったあの言葉を口にした。

どうして……？なんでその言葉を……

その瞬間、私の頭の中が真っ白になった。

「う……ううん……」

小鷹がゆっくりと目を覚ます。

だめだ。この衝撃が離れない。驚愕の表情を崩すことができない。私は固まった状態のまま、起きる小鷹をただただ見つめていた。

「……??？」

小鷹がそんな私を見て、さすがに変に感じたのだろう。

今自分はどんな顔をしてるんだろうか、おそらく予想もできないだろう。

小鷹と目が合って数秒、ようやく私の中の硬直が解けた。

「はっ！な……なんだ？」

「いや、お前がどうしたよ？なんか信じられないようなものを見るような目してたぞ？もしかして俺って寝顔も怖いのか？」

小鷹の言うことは正しかった。実際に私は信じられないものを見ていたのだから。

小鷹は覚えていたのだ。あの日を……

この男は、ただ私に気づいていないだけだった。たったそれだけだった。

覚えていてくれたんだ。私がずっと忘れられなかったように、小鷹も私のことを覚えていてくれた。

驚愕の後、私の中で嬉しさと悲しさが暴れだしていた。だけどあの時と同じく、恥ずかしさがそれに勝る。

「ね……寝顔も怖かったらそりゃ、だよなあ……」

「ん？何言ってるんのお前？」

私は動揺を隠し切れていないようだ。言葉もろくに選べない。

だがこれはチャンスだ。この10年間こいつがどう思っていたのか。

欠片一つでもいい、私と小鷹の過去が結びつくこのチャンスを生かす他なかった。

逃げるな三日月夜空！今こそ立ち向かう時なのだ！！

「友達百人なんてできなくてもいいから、百人分大切にできるような本当に大切な友達を作りなさい……って」

「ああ、もしかして寝言言ってたのか俺、恥ずかしいな」

「その言葉は……どうしたのだ？」

私は必死の思いで平常心を保つ。

ゆるむ口元を必死で固くする。いつもの無愛想を貫くため唇をこねでもかというくらい噛みしめた。

「ああ、俺の親友が言っていた言葉なんだ」

「親友!？」

「んだよ？俺にだって親友くらいいたよ、失礼なやつ」

今の「親友!？」は、「お前親友いたのか？」という意味ではない。  
い。

かつての私を未だに親友と呼んでくれることが驚いたからだ。

「すす……すすまない。そうかそうか、そりゃあまた……最高の親友だったんだな」

「そうだ。俺の最初にできた最高の親友だ。その言葉もそいつのことも片時も忘れたことはねえよ、忘れられるわけがねえ」

……やばい、泣きそう。

「そ……そう……か、ははは、お前ってリア……うう」

「夜空、お前本当に大丈夫か？」

「だ……大丈夫だ、問題ない」

「エルシャダイかよ。ネタで返せるなら問題ないな」

問題ないわけないだろ！今にも即倒しそうだわ！！

「だけど心残りが一つあってなあ、俺はそいつとずっと友達でいる  
ことができなかった」

「ど……どうして……だ？」

結末は知っていたが知らないふりを決め込んだ。

今の私は三日月夜空、ソラじゃない！！

「ある日親父の都合で町を離れることになっちまったんだ。それで  
そいつに別れの挨拶をしようと思ってただけど、結局できなかつ



「たんだ」

「そりやお前、薄情なやつだな」

「そうだ。俺は薄情なやつなんだよ。あの日のことがしばらく頭から離れなかった。ぶっちゃけ今でも俺の中で残留思念として残り続けている」

「どうやらこいつ自身も、あの日のことで悩み続けていたらしい。

それを聞いた時、一方的に小鷹にあたった自分を恥じんだ。

タカ自身も、辛かったはずなのに……

私自身にも非があったというのに、私はバカだ。大バカだ。

「ソラっていうやつなんだけど、今はたしてどこでなにやってるんだろうか、今もこの町にいるのだろうか……」

「……………」

「できれば、もし神様ってやつが奇跡を起こしてそいつと再び会うことができるなら、そいつに一言謝りたいんだ。そいつは多分俺のことを許してくれはしないだろうが、それも全部俺のせいだ」

「そんなことは……ないと思うが」

小鷹のその言葉に、私は弱弱しく答えた。

それは明らかに、私の本心から出た一言だった。

小鷹は私のその言葉を聞いて、笑ってこう返した。

「慰めのつもりか？なんつつかお前って、たまにいいやつなんだよな」

「そ……そんなことは……」

「ああ……まるで……」

小鷹は何かを言いたそうにして、でもそこで言葉を区切って止めた。

そして鞆を肩に背負って部室の出口の方へと向かう。  
部室を出る間際、小鷹は私の方を振り返り笑った。

「ありがとよ、俺の自慢の親友を、「最高の親友」って言うてくれ  
て」

「あ……ああ」

とうとう私の中で限界が来たみたいだ。

また明日とも言えず、言葉が出ないまま固まった表情で小鷹を見  
送る。

そして姿が見えなくなった後、私の緊張の糸が切れた。

「……う……うう、なんだよタカ、覚えていてくれたんだ。私のこ  
の苦悩は……無駄じゃ……なか……った。隣人部を作ったことも……  
……お前が転校してきた時に感じたあの想いも……けして……無駄じ  
ゃ……なか……った」

一人部室でさびしく、ひつくひつくと嗚咽を漏らす。我ながら恥  
ずかしい、こんな泣き方をしたのはいつ以来だろうか。

よかった。この1か月小鷹を信じ続けた結果がこれだ。

私はどうやら、神様の奇跡からも逃げ出そうとしていたらしい。  
けど逃げなかったからこそ、神様は奇跡を二度起こした。

「待つてる小鷹……お前と私、二人揃って無くしたものを取り戻す  
時はきた。私とお前の青春はこれからだ。これで私たちはリア充だ  
!!」

私は一人叫んだ。

誰も聞いていなくてもよかった。これは自分に対して言ったのだ  
から。

私の絶望の時間はここで幕を閉じる。ここから始まるのは三日月  
夜空のリア充物語だ！！

そう、私は再起を誓った。私の物語はスムーズにハッピーエンド  
へと向かうはずだったのだ。

そう、柏崎星奈が隣人部にやってこなければ……

女神降臨の序章（前書き）

第1話です。

「柏崎星奈」視点。

## 女神降臨の序章

『この世界は私を中心に回っている。』

私は常にそう思っ生きてきた。

金髪碧眼、巨乳、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能……

まさに神が創り出した究極の人間……否、私こそが神なんだって

……

この私、『柏崎星奈』は全てにおいて完璧だ。

聖クロニカ学園の理事長『柏崎天馬』の娘にして、この学園一の天才少女。それが私よ！！

この学園の男子が全員私を崇拜し、崇め、神のごとく扱っている。その存在が私よ！！

何の欠点もない唯一無二の存在、それが私よ！！

私はスペシャルで！天才で！友達が欲しいのよ——————  
——————！！

……

と、なぜかこの完璧な私には友達がいないのよね……

確かに男子生徒からは毎日話しかけられて、靴を舐めさせて罵って、神としての存在を發揮しているのだけれど……

そんな豚どもは友達とは言わないわ、あいつらは『下僕』よ下僕！！

私が欲しい友達というのは、私とほぼ同等の能力を持ち、私の機嫌を損なわない、この柏崎星奈に匹敵する女友達よ。

けどなによこの学校の女達は、私を見て嫉妬しかしない、裏でコソコソ文句を言うだけで努力すらない平和ボケしたただのカス共。

人を妬むだけなら誰でもできるわよ、人を疎ましく思うだけならアホでもできるわよ、そんな劣化した人間をこの私が認めるわけがないのよ!!

それならまだ私に崇拜している男子どもの方が利口だわ。と私は心の底からそう思うのだった。

あゝあ、つまらない日常ね。もう私目的で近づく男どもで遊ぶのは飽き飽き。

この学校で最もモテると言われている5人の一人である野球部のキャプテンと、サッカー部のキャプテンでさえ私にひれ伏したわ。

毎日たくさん女子どもかキヤーキヤー言われてるあいつらが私に告ったものだから、靴を舐めさせてお帰りいただいたわよ。

ほんつとうに情けない、あの時のあいつらからはモテモテのイケメンオーラなんてなかった。ただの質のいい豚じゃないのよ!!

そんな男がやってきたって、私は全然満たされない。

誰か、私を理解し私を嫉妬するような目で見ない、私ほどではないにしろ能力のある私と対等に話せる女子、来ないかな……

「今日も帰って勉強でもしましょ……」

学校の宿題なんて30分足らずで終わるから、もっと難しい勉強でもしようか……

と、私がつまらなそうな顔で廊下を歩いていると、度々男子から「星奈様また明日!!」そして度々女子から「うっわ柏崎だ、近寄らないようにしよ」とか聞こえてくる。

毎日毎日……同じでつまらないのよあんなたちは!!

心の中で苛立ちを覚えていた時、廊下に貼ってあったヘンテコなポスターが私の目にとまった。そのポスターにはこう書いてあった。「隣人部」と……

隣人部……?なによこのヘンテコな絵、センスのかけらもないわ

ね……

私が見てすぐに一蹴しようと思ったけど、なにやら文章が書いてあったので読んでみた。

『と』にかく臨機応変に隣人と『も』善き関係を築くべくから『だ』と心を健全に鍛えたびだ『ち』のその日まで、共に想い『募』らせ励まし合い皆の信望を『集』める人間になろう

一見、なんの変哲のない文章のように思える。

けど、この天才である柏崎星奈にはこの文章の本来あるべき意味をすぐさま読み取ることができた。

斜め読みにするとこう読める。

「ともだち募集」と……

……ぶっ、なによこれ、小学生並の頭してるんじゃないのこの部の部長。こんな怪しい部活、しかも友達作りとか誰も恥ずかしくて入らないわよ。

この学校も馬鹿が多いなと思ってたけど、飛びぬけた馬鹿もいたものね……

私はそのポスターを剥がして、それを丸めて廊下の窓から捨ててやった。

これですりでも恥ずかしい思いをしなくてすむかもね、この柏崎星奈様に感謝しなさい！！

その日の夜、私の中から「隣人部」という言葉が離れなかった。どうしてよ、あんな頭が足りないやつらの（あくまで推測）集ま

りを、なんでこの神である私が気にしなきゃいけないのよ。  
友達作り、そんな小学生のような発想だったが、私はなぜか心惹かれた。

「べ……別にそんな恥ずかしい思いしてまで、友達なんか作りたく……」

私はそこまでぼそつと呟いて、ぴたりと言葉を止めた。  
友達を作りたくない……と言えば嘘になるからだ。

かといって誰でもいいというわけじゃない、誰でもいいのなら友達100人なんて余裕よ。

けどあいつらは、私に寄ってくる男子どもは私の『外見』だけを見てる。中身を見ずに外見だけを、体だけを求めている。

そんなのは友達とは言わない、友情は見返りを求めないのよ！！

翌日……

私は学校に來ると、すぐさま近寄ってくる男子に隣人部の噂を聞いた。

部活なんて馬鹿どもの集まりだって言うのはわかってる。けど私は無性に……その隣人部について知りたかったのだ。

男子から聞いた話は、ずいぶんとまた変な噂ばかりだった。

「クロニカ最強の不良である『羽瀨川小鷹』と孤狼の美少女『三日月夜空』が同盟を結んだ最凶の秘密組織」だの……

「外部から研究者を呼び込み何かを開発してる」だの……

「幸村ちゃんが隣人部に洗脳された。きっと俺たちも洗脳される」だの……

「左右の目の色が違う女の子が入りしてる。なんかとてつもない



実験をしているに違いない」だの……

なによそれ？友達作りの部活じゃなかったの？

話を聞く限り、完全にやばそうな凶悪集団じゃないのよ！！

というか逆に興味を持ったわよ！そんな大層なものが私のパパの学校に存在するの！？

もし本当にやばい実験やってたり、最強の不良とやばそうな女子が組んで学園を乗っ取るうだなんて考えてるならこの私が許さないわ！

パパの学校で好き勝手やってる隣人部、私の目で是非とも確かめなければ。

と、これは全部大げさに理由を作ってるだけで、私自信がその隣人部にもものすごく興味があるだけだったり……っていいじゃないのよ別に！！

男子に言われたとおり、放課後私は学園の敷地内にある礼拝堂へとやってきた。

その奥にある『談話室4』、そこが噂の隣人部の部室らしい。礼拝堂の景色が目に映る度、「隣人部って本当にここで夜な夜な儀式でもやってるんじゃない……」と本気で思ったりもした。

けどこれもパパのため、この学園の脅威となるものは私の名のもとに消えてもらおうわよ！！

パパのためではなく全部自分のため……って放っておきなさいよ！！

私はその扉をコンコンと鳴らす。数秒間無音の空気が流れ私の緊張感が高まる。

そして、扉がゆっくりと開いた。そこにいたのは長い黒髪の女子。容姿は……私に負けをおとらず中々ね、けど私には敵わないわ。まずは軽く挨拶をしてやろうかしら……

「隣人部ってというのはここね？ちょっと聞きたいんだけど……」  
「違う」

ばたん！  
がちゃん！！

「はあああああああああああああああ！？」

私は思わず（#。。）な顔になった。

なんでいきなり閉めた！？しかも「違う」ってなによ！？

この私がわざわざ来てやったのよ！あの黒髪いつたい何様よ！？

私は怒りを露にし、部室の扉をドンドンと叩きまくってやった。

ここまでやるかというまで叩きまくってやったわ！！

すると扉は再び開いた。もう挨拶なんてなしだわ！！言いたいこと  
と言ってやるわ！！

「ちょっとなんで閉めるのよ！？私は！！」

「リア充は死ね！！」

ばたん！

がちゃん！！

「いったいなんなのよ——————！！」

二度も閉めた！！この私が来たというのに二度も閉めよったあの  
黒髪！！

許さない……こんな屈辱生まれて始めてよ！！

私は怒気を表に出しながら、談話室4を後にする。

「あのくそ部活……この私の手で潰してやるわ……」

潰してやる……

この私の手にかかれば、あんな低能の集まりすぐにも駆逐できるわ……

武力による戦争根絶……とまではいかないけれども、この私の圧倒的な力で必ず痛い目見せてやる。てかあの黒髪泣かす!!

私はそう心の中で誓い、鼻息を荒くして礼拝堂を歩く。すると……

「あ……」

「……………」

そこにいたのは、左右の目の色が違う金髪のゴスロリ衣裳の女の子だった。

私は思わず見惚れる。すると女の子は困惑した顔でその場を去って行った。

あれが噂の一つの、左右の目の色が違う女の子……

「……………天使だ」

私の怒りに満ちた感情を、あの女の子は一瞬で浄化した。

女神降臨の序章の裏、そして桃太郎伝説の序章（前書き）

第12話です。

「三日月夜空」視点。

「羽瀬川小鷹」視点。

## 女神降臨の序章の裏、そして桃太郎伝説の序章

今日はいい天気だ。

まるで私の心そのものを表しているようだ。ああ心が躍る。

つい先日、小鷹が未だに私のことを覚えていることを知り私の中の希望はさらに膨れ上がった。

もし忘れていたのなら……と半場諦めていた私であったが、この出来事で私は改めて再起を誓った。

この隣人部を使い、必ずあの日を取り戻してみせる。なんと少しでも……

正直、遠回りをせずにあの時「私がソラだ」と言ってしまうえば解決していたのかもしれないが……この十年間の苦痛の日々が原因で意外と慎重になってしまっているようだ。

気づいてくれなかったら終わりだし、「慰めてくれてありがとう」とか言われたら私自身のダメージも計り知れないだろう。

奴の中の親友ソラくんは、良き男友達ということを通っている。それがいきなり美少女だったという展開では、かのシャルロットも驚きだ。ちなみに私はラウラ派だが……

それはあの時の私が女の子として接する勇気がなかったせいなのではかたないと言えよう、口惜しさは残るが時間をかけてゆっくりと気付かせるさ……

そんないい天気の日だが、隣人部のメンバーがほとんどそろっている。あとは小鳩だけか……

小鷹は理科とオセロをしている。幸村は突っ立っている。マリアはポテチ食ってる。ケイト先生は理科から借りた変な本を読んでいる。

小鷹小鷹とうるさい私ではあるが、せっかく集めた部員や顧問を

小鷹のために集めたただの雑兵と言っただけの心は腐っていない。  
だがもしも私と小鷹が親友に戻ったとしたら隣人部は用済みになるわけだが……その時はどうするか……  
まあ、その時になったら考えればいい。今のこいつらは……私にとって大事な部員とその顧問だ。

「さてと、めずらしく部活動でもしてみるか……」

と、私が動こうとした時だ。

コンコン……

隣人部の部室のドアからノックの音が聞こえてきた。

その音を聞き、改めて部室を見渡すと隣人部関係者はほとんど揃っている。小鷹だとしても、ノックをする必要などないだろう。部員なんだから。

だとしたら誰だ……？

ひよっとして入部希望者か？おいおい……もうこれ以上部員はいらないぞ……

同級生二人、後輩二人、ゲテモノ中学生とロリの顧問とそれなりの顧問。これだけそろえばバランスは取れている。

小鷹のためにもう一人男子部員をとも思ったが（一応1人いるが男子っぽくない）、悪いがやつ最初の親友になる権利を得ているのはこの私、三日月夜空だけだ。

幸い私以外ノックの音には気づいていない、さりげなく「今使用中」とでも言っただけ出すか……

がちゃ……

私がゆっくりとドアを開けると……

そこには予想の範疇を超えた意外な人物が立っていた。

「隣人部というのはここね？」

なぜ……お前がここにいる？『お前のようなやつ』がなぜ……ここにいる？

そう……そこにいたのは我々隣人部のメンバーとはけして相容れないであろう究極のリア充。

金髪碧眼、巨乳、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能……

まさにリア充の中のリア充、神が創り出した究極のリア充、それが今……隣人部の部室の目の前に立っている。

その憎むべき女の名は、『柏崎星奈』。

私が最も吐き気を催す、この三日月夜空にとっての……隣人部にとっての最強最悪の敵。

『柏崎帝国』……

この学園の男子どもを牛耳る女王柏崎星奈が率いる最強のリア充帝国、そのトップである女王……

なぜここに……そんなやつが……この隣人部の部室の前に……

「ちょっと聞きたいんだけど……」

「違う」

ばたん！

がちゅん！

私は反射的にそう呟き、ドアを強く閉じた。

やつの顔を3秒以上長く見ることができない、今でさえ胃の中の汚物が口から出そうになっているのを必死に抑えている最中だ。

まさかここにきて……ラスボスと相見えようとは……これもまた、運命石の扉の選択か……

今の私には衝撃が強すぎる。やっと対峙するには私の経験値が足りていない……

そして気がつけば、他の部員が全員私の方を見ていた。

「どうした？なんかでかい音が聞こえたけど……」

小鷹が異変を感じ取ったのか私にそう聞いてきた。

幸い、小鷹に過去話をされた時よりは衝撃が薄かったため動揺を隠し通すには十分だった。

私は何食わぬ顔で……

「いや、ちよつと虫が……」

入ってきたただけだ。と言葉を続けようとした時……

どんどん！

思いつきりドアを叩く音が部室内に響き渡る。

あの女……引き下がる気はないのか……

本当に何の用なんだ？お前のようなリア充が来ていい場所じゃないんだぞ……

ここにいるのは貴様のようなリア充の反対に位置する非リア充が集まる聖地だ。

柏崎星奈……貴様は、貴様らリア充はその聖地すら私たちから奪い去ろうというのか……？

私は色々と思い込んだ結果、なんやら怒りが心の底から込み上げてきたではないか。

部員全員が見てる中、私は怒りに身を任せ再度ドアを開ける。

「ちよつとなんで閉めるのよ！？私は！！」



「リア充は死ぬー!!」

ばたん!

がちゅん!!

私はそう言ってドアを思いっきり閉めた。

言っちゃった。あの柏崎星奈に言っちゃったわ……

そうだ。リア充は全員死ぬばいいんだ。そうだ爆発すればいいんだ。

毎日男子生徒を使い捨てのように集め、崇め荒れている現実外れのリア充など死ぬなんて言葉ではかたづけられない。

「なんか今主人公とは思えない発言が聞こえたんだが……」

小鷹が何かを言っている。だが気にすることはない。

今時の主人公は若干飛びぬけた方が売れるって、だから気にすることはない。

とりあえず私は平常心をなんとか保ちつつ、部員達の元へと歩み寄る。

幸い、柏崎星奈はあれ以来ドアを叩いてくることはなかった。貴様のようなリア充はもう二度と私の前に顔を出すな!!

「にしてもなんだったんだ？」

「嫌がらせだ。そろそろあのポスターも撤去した方がいいのかもしれないな」

小鷹の言葉に私はさらりとそう答えた。「嫌がらせ」だと……

確かに嫌がらせだった。最大規模のな……

正直この気分をなんとかしたい、話題を部活動に変えよう。それが私のためだ……

しばらくして小鳩が部室に入ってきた。多分あの金髪リア充とすれ違ったのだろう、表情がゆがんでいる。

私たちのような鼻つまみ者にとっては奴の存在は毒のようなものだ。気持ちは察する……

「そんなことなど放っておいて、たまには部活動をしよう。はい全員注目」

私はそう言って全員を集める。

すでに何をするのは決めてある。楽しくなおかつ友達作りに必要な知識を集めるためのな……

それは私の黒歴史に關与することだが、この際嫌な過去を全て部活動の糧にしよう。それが小鷹との関係修復に向かうと信じれば黒歴史も白く染まることだろう。

私は生き良いよく、部活動の内容を発表した。

「演劇をしようじゃないか」

.....

「演劇って、どうしてまた……？」

俺が夜空に質問する。

いきなり突拍子もない案を出してくるのだ。今度はどんな魂胆があるのやら……

「な〜に、友達作りに必要なのは『演技力』だと思っただけのことだ」

……わりと最低な発言な気がする。

本日改めて夜空が心の底から歪んでいることがわかった。

「演技力？」

「演技力があればどんな嫌な相手でもヘラヘラと上つ面だけの友人関係を築くこともできるし、優秀なやつがいればそいつに取り繕うこともできるからな。ビジネスの世界では必要な能力だ」

本当に心の底から歪んでるんだなこいつ。見つけたぞ世界の歪みを……

しかもどこからビジネスの話が出てきたんだ？お前は会社でも建てたいのか……

そんな夜空の意見に真つ先に反対したのは意外にも幸村だった。

「あねご、しんのおとこはつねにありのままの自分をつらぬくものです。いつわりの心で人に接するなどしんのおとこのやることではありません」

真の男がどうとかは知らないが、とても良いことを言う幸村だった。

その不思議ちゃんキャラがなければお前も真つ当な人生を歩めていただろうに、こんな変な部活に巻き込んでごめんな。

そんな幸村に、夜空は真剣な顔つきでこう言った。

「若いな幸村」

「どういうことでしょう？」

「お前はこういふ格言を知らないのか？……………」

・『とりあえず形から入る』」

「……………それ格言か？」

しかし幸村は何故か絵心がいったような顔をする。

「なるほど。わたくしが未熟でした」

「おい……」

あつさりと説得されてしまった。

ちなみに他の部員はというと……

「演技ですか、理科もそれなりに自信がありますよ」

「くつくつく、演技といえばこの私……って演技ちゃうもん……」

理科はそれなりに興味を持っている。小鳩はなぜか自分で自分にツッコミを入れていた。

「演技か、それなら得意なのだ！マリアの昔かよってたがっこーではなー、『子供のくせにいつもへらへら作り笑顔ばかり浮かべて気持ち悪いね』って言われたこともあるのだ」

「演技ねえ、先生も小学生の頃は自由の女神ヴィーナスの役を熱演したことがあるからねえ」

マリアとケイト先生もそれなりに乗り気だった。若干マリアからは黒い発言が聞こえたような……

とまあなんやかんやで部長の指示で演劇をすることになった。

しかし演劇って、小学生の時にクラス発表会でやったとき以来だな。

小学生の時もこの金髪の呪いのせいで浮いていた小鷹少年のその時の役は、「不良A」だった。

はっはっは、小学生の時さえクラスメートからは「羽瀬川は将来絶対ヤクザ」って言われてたさ、悲しい過去だ。ああマジで……

隣人部劇場、『桃太郎』が今始まるうとしている。

桃太郎伝説増量版（前書き）

第13話です。

「羽瀬川小鷹」視点。

## 桃太郎伝説増量版

というわけで演劇をやることになったんだわ。

「脚本は用意してきた。隣人部の部長たるものこれくらい用意できて当然だ」

隣人部の部長がどうたらは知らんが、用意周到の夜空であった。夜空は鞆から人数分の脚本を取り出し俺たちに配る。

「ありがとうございますあね」

幸村が申し訳なさそうに脚本を受け取る。

「どれどれ、今度のコミケで出せるかもしれませんが綿密に見ておく必要がありますね、夜空先輩の頭の中は若干お花畑ですから」「どつという意味だそれは!？」

理科はいらん一言をつけて受け取る。関心の心よりも侮辱に近いことを言っていた。

夜空もこれは聞き捨てならなかったらしい。

「お姉さんの作った脚本か……」

「仕方ないから受け取ってやるのだ」

「若気の至り、若いJKが作った脚本には夢と希望が詰まってる」と聞く

「どこで聞いたそれ」

小鳩、マリア、ケイト先生、俺が順に脚本を受け取る。

途中ケイト先生が変な事を言い出したので俺はとりあえずツッコむ、若いJKの脚本に夢と希望が詰まってるだなんて聞いたこともねえよ。

全員配り終えたところで配られた脚本を見てみるとタイトルにこう書いてある……『桃太郎』。

「……まあみんな知っている国民的昔話だけでも」

「この年で桃太郎なんて恥ずかしいですよ」

不満を露にする俺と理科に、夜空は憮然とした顔をした。

「条件に合うような話があり見つからなかったのだ。安心しろ……」

…桃太郎には夢と希望が詰まってる」

「だから夢と希望が詰まっている話はどこから聞いたんだよ」

確かに桃太郎は、悪い鬼を桃太郎が仲間と協力して倒すという子供心をくすぐる話ではあるけども……

でもな子供達、倒された鬼たちにだって色々と事情があるんだぞ。俺にはわかる。顔が怖いとかで恐れられている彼らの気持ち……彼らにだって同族を思いやる心とかあるはずだ。確かに村人から宝を巻き上げたのは悪いことだが話し合いでなんとかなっていたかもしれない。

だけど桃太郎は鬼を悪者扱いして倒してしまった。行いうんぬんの前に顔が怖い奴は悪者なのか？もしそうなら俺がそのふざけた幻想をぶっ

「ぶち壊させないけどな」

「なぜわかった……」

夜空が俺の考えていることを読んで当てやがった。お前ってエス



パーだったのか……？

こうして演劇名は『桃太郎』に決定した。

俺たちはさっそく役割を決めることに……

桃太郎の登場人物と言えば、桃太郎、おじいさん、おばあさん、犬、猿、雉、鬼、の7つの役がある。

隣人部のメンバーは、俺、夜空、理科、幸村、小鳩、マリア、ケイト先生の7人なのでびったりと納まる。

後一人いればナレーションもつけることができたが、あと一人はいないので桃太郎がナレーションも兼用しよう。

「ちなみに誰に発表するわけでもないから必要とあればアドリブも入れてもいいぞ、実際に脚本もアレンジが加えられている」

「ほお……変なもん入れてないだろうな？桃太郎なのに浦島太郎登場するとか」

「そんなことはしていない、私としても中々のデキだと自負している。じゃあさっそく始めるぞ」

夜空が宣言し、俺たちは台本をめくった。

登場人物は先ほど俺が例に挙げた4人と2匹と1羽、一寸帽子もいなければ金太郎もいなかった。典型的な桃太郎である。

「配役だが、ここは公平にくじ引きにしよう」

夜空はそう言って7本の紙くじを用意した。

一人一人引いていって紙に書かれた役をやるというわけだ。

結果、配役は以下のとおりとなった。

## 【登場人物】

桃太郎 - - 羽瀬川小鷹

鬼 - - 三日月夜空

おじいさん - - 志熊理科

おばあさん - - 高山ケイト

犬 - - 楠幸村

猿 - - 高山マリア

雉 - - 羽瀬川小鳩

おつと……主人公はおいてけぼりというイメージから一転、まさかの俺が桃太郎。

おいおい、等々この羽瀬川小鷹にも風が吹いてきたんじゃないのかこれ〜？

宿敵の鬼は夜空か、まあ誰が鬼役でもやっぱりやりづらいな、その中で一番やりやすい奴が鬼になったのは運がいいのか悪いのか……おじいさんは理科でおばあさんがケイト先生か、これは個人的に逆の方がよかつたかな？

犬は幸村、猿はマリア、雉は小鳩。まあ合ってるっちゃあ合ってるか……

「まあとりあえずよろしくな夜空」

「おつ」

「おじいさん、つまりエロじじいを演じればいいんですね？」

「おばあさんねえ、まあ悪くないんじゃない？」

「わたくしはいぬです。西郷隆盛がつれていた犬のようにゆうかんでたくましく演じてみましょう」

「なんでマリアが猿なのだ……！！」

「クツクツク……毎回うるさい貴様にはお似合いだ……」

皆それぞれ言いたい事を言っすぐさま役作りに入る。みんな意

外とやる気満々だなおい……

ナレーシヨンは桃太郎がやるので俺がやることに、ちよつど一人称視点も俺だしちよつどいいだろう。それでは隣人部劇場『桃太郎』の始まりだ。

昔々ある所に、おじいさんとおばあさんがおりました。  
おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは……

「ああああああああああん！！」

……いきなりおばあさんの悲鳴が聞こえました。  
そのそばでおじいさんも何か言っています。

「おばあさん、今日もしまってますなあ……」

「ああん！こ……ここは……だ……だめえおじいさんうん！！」

……なにやらおじいさんとおばあさんは何かを発散しているようです。

芝刈りにも行かず洗濯にも行かず、ひたすら夜の仕事に没頭していました。

「おばあさんや、もうすぐ二人目が生まれるなあ」

「そうですねえおじいさん、二人目はなんと名付けましょうか……  
そうねえ桃太郎と名付けましょうか」

「いい名前じゃな。桃太郎か……よし！ならもう一度おばあさんの桃のようなぶりっぷりのケツを！！」

「ああん！！ちよつとおじ……らめえー！！！！」

こうして数日後、桃太郎が生まれ……

「桃を拾いに行けーーーーー」

俺はナレーションを一時中断し、夜空と共に理科とケイト先生にドロップキックをかました。

若干吹き飛ばされた理科とケイト先生であったが、特にダメージを受けたわけでもなくケロリと立ち上がりこう一言。

「いやあ、健全な方法で勇敢な子供を作るといったことだったので……」

「どこが健全だ!!」

理科の主張に対し夜空が声を張り上げる。

すると理科に負けじとケイト先生までこう主張してきた。

「いやしかし夜空ちゃん、桃というおケツに似た形の大きなものから子供が出てくるというダイレクトな表現もやばいと思うよ?」

「あんたはどんな観点で桃太郎を読んできたんだ!？」

先生という立場だというのに桃太郎にとんでもない表現をつけたすケイト先生。

お前ら……桃太郎の対象年齢を何歳上げるつもりだったんだよ……気がつけば夜空の顔が真っ赤になってる。こいつ本当にこういうのダメなんだな……

今後そういう大人の表現でのアドリブは無し、ただしレイプは除く……と夜空が言った。レイプはいいのかよ……

じゃあ俺もナレーションを再開するとするか……

なんやかんやでおばあさんは桃を拾ってきた。

その桃を切ると中から生まれた桃太郎。

桃太郎はあつという間に成長し、勇敢な戦士へと成長しました。

そしてそれと同時に、村に怖い鬼が出現し、村人の宝を奪い取っていくという事件が発生。

困った村人達、そしておじいさんとおばあさん、桃太郎は決意しました。

「おじいさん！おばあさん！俺が鬼退治に行ってきますす！！」

勇敢にもそう宣言する桃太郎。やっべ今の俺超かつこよくない？  
するとおじいさんとおばあさんは、桃太郎のためにとひと肌脱ぎ  
しました。……おい理科、ひと肌脱ぐってそういう意味じゃねえぞ？  
衣装を脱ぎだす理科もとい、おじいさんを桃太郎は全力で止めまし  
た。

おじいさんは元気の旗印を作ってくれました。おばあさんは元  
気の出るきびだんごを作ってくれました。

「このきびだんごを持っていきな、このきびだんごはな……ばばあ  
が昔ヴァルキリー戦役の時に服用した……」

「おばあさん、なんか話が壮大になってきてるぞ？」

「はっはっは違うだろおばあさん、このきびだんごはおじいさんの  
キン マぶくぐふお！！」

おじいさんが何かを言おうとしましたが、後ろの鬼の金棒で殴ら  
れ気絶しました。

この際鬼がフライングで登場しても余計なツッコミは避けておこ  
う。

こうして桃太郎は鬼退治へと出発しました……後編に続く。

一気にならなくてもいいけど、いつの間にかいつに分かるか。

桃太郎伝説増量版の続き（前書き）

第14話です。

「羽瀬川小鷹」視点。

「三日月夜空」視点。

## 桃太郎伝説増量版の続き

あらすじ……

頭が若干アレなおじいさんとおばあさんに送り出されて鬼ヶ島に鬼退治に向かった桃太郎がこの俺である。

背中には勇気の旗を、腰にはおばあさんが作ってくれたきびだんごを付けて桃太郎は森の中を歩く。

「さて、鬼退治には家来が必須だな」

家来が来るのが前提のような言い方だが、実際に巨悪である鬼を倒すには仲間が必要である。

背中を預けられる存在、きつとそういう仲間を見つけることは友達を作ることにつながるのだと桃太郎は考えている。

実際に生きてきたこの17年間、桃太郎はその強さゆえに友達が作れずにいた……ってこの話の中でも俺友達いねえのかよ。

桃太郎が自分にツッコミを入れていると、何やら奥の林がガサガサと揺れている。

「誰だ？」

と桃太郎が言うと、その林から犬が出てきました。

「わんわん、あにき……どうかそのきびだんごを……」

その犬はとてもかわいらしかった。愛嬌の塊とも言つべきその可愛さは狂気そのものであった。桃太郎は思わずその犬を凝視する。

ちゃんちゃんちゃんちゃん  
ちゃんちゃんちゃん  
ちゃんちゃん  
ちゃん  
ちゃん  
ちゃん



まるでそれはチワワのくぅ〜ちゃんの様でした。てかすげえ懐かしいな。

桃太郎はその可愛さに心奪われ、きびだんごを一つあげました。

「ありがとうございますあにき、ああ……あにきのキン マ袋あた  
たかいなりい……」

「……理科？」

犬、もとい幸村がキャラに似つかわしいことを言ったため慌てて  
台本を取り上げると、本来のセリフに縦線が引いてあり上記のセリ  
フが。

俺は理科をジト目で見たが理科は何食わぬ顔をして……何食わぬ  
顔といふかなんかうれしそうな顔をしていた。

その後理科は夜空に折檻されました。

「ありがとうございます。おれいにあにきの家来にしてください」

犬は本来のセリフを言った後、桃太郎の家来になりました。  
こうして犬が仲間になった。犬とともに森の中を歩いていると……

「なあなあ桃太郎さん、マリア今おなかすいているのだ」

マリア、もとい今度は猿が現れた。

おなか为空いているというのできびだんごをあげると……

「おお〜！おいしいのだ！！ありがとな桃太郎！！」

猿はそう言ってその場を立ち去りました。って待て待て待て……！！

「おい猿！きびだんごもらってさっさと退場ってどついつことだ！？」

「うるさいこのうるこー！マリアは食べ物がもらえればそれでいいのだ！ー！」

「この猿……恩知らずもいいとこだー！」

しかし猿が仲間になんないと話にならないな……とここで犬が動いた。

「ここはわたくしめにおまかせを……」

そういつて犬はなんやら箒をとりだして、猿を箒でぶっ叩き始めた。

「な！？何をやるのだ！？」

「うるさいこのふとどきもの、人の恩を仇で返すなど笑止千万」

と言いながら幸村はマリアを箒で叩くのをやめない。マリアが泣くまで箒で叩くのをやめない。

等々マリアは観念し、俺に泣きついてきた。

「うえーん！この女顔怖いー！！！」

「ああ、よしよし」

普段は生意気なマリアだったがなんか可哀そうだったので俺はマリアを撫でて落ち着かせる。おいそこ、ロリコンとか言ってるんじゃないよ。

すると幸村が俺の腰の袋からきびだんごをもう一つ取り出して……

「おなさけです。もうひとつあげましょう。これにこりたら世のた

めあにきのためはたらきなさい」

「ふええ……はい」

マリアは半泣きの状態で幸村からきびだんごをもらう。これってあれか？ 飴と鞭ってやつ……？

幸村の顔をのぞくと、いままでのほんわかとしたほほ笑みとは違った。少しばかり優越感に浸った不気味な笑顔をしていた。

……こいつ、さてはDSだな。

こうして猿も仲間になりました。

犬が怖いのか猿は俺に抱きついてました。だからそこ、ロリコンとか言ってるじゃ……

2匹を連れて森を歩いていると、今度は壮大な音楽（すげえ不気味なやつ）とともに雉が舞い降りてきました。

「クッククク……我は数万年の時を渡り続けてきた雉、『レイシス・ヴィ・フェリシテイ・雉』であるぞ」

今度は雉が現れた。なんかいつもの真名の最後の一字が違う気がするがいつもの小鳩であった。

ちなみに上記のセリフはもちろんアドリブであったが、台本の横に書かれていた文字が夜空の文字であった。

「どうやら小鳩は『煌』という漢字はわかるようだが、『雉』という漢字はわからなかったらしい。

にしてもレイシスのキャラを素直に受け入れてくれてる限り夜空とは知らぬ間にそれなりに仲が良くなっているみたいだ。あんまり影響されんなよ小鳩……」

「クッククク……この我に供物を捧げよ……」

おそらく供物とはきびだんごのことだろう。  
俺は最後のきびだんごを雉に渡す。

「クッククク……げほお!!」  
「????」

きびだんごを食べた雉、もとい小鳩が手を口にやって苦しそうな表情をしていた。

いったい何がおきた？俺は夜空に確認すると……

「4つのきびだんごのうち1つにはずれを入れておいた。その方が面白みがあるだろ？」

夜空は面白そうにそういった。おいおいお前のその変なノリのせいで人様の妹は……

ちなみにそのハズレは大量のわさびが入っているわさび入りきびだんごであった。うっわ容赦ないっすわ夜空さん。

「げええ……えげえ……ふえええんあんちゃん!!」  
「おお、よしよし」

半泣きで抱きついてくる小鳩を俺は撫で撫でする。ああもう口リコンでいいです。

「ぎゃはは! ださいな吸血鬼!!」

そのまま話が終われば平和的だったのに、マリアが小鳩に悪態付く。もちろん小鳩も反論する。

「うっさいわあんた!! だまっとなれ!!」

「お前の方がうるさいぞこのうんこー!!」

「ああちよ……あんちゃんに抱きつくなバカたれ!!」

「うるさいのだ!私はいいつが気に入ったのだ!!」

まるで小学生の喧嘩だ。てかお前ら仲間同士で喧嘩すんなよ、これから鬼が待ち構えているというのに……

俺と幸村がなんとか二人を落ち着かせ(ちなみに幸村の笑顔一つで二人が黙り込んだのは秘密)、改めて俺達は鬼ヶ島へ……

鬼ヶ島は異様な空気が漂っていた。ここに巨悪である鬼が待ち構えている。

できるなら話し合いで解決したい。やつらにだって理由はある。

正義の裏が悪なら、悪の裏が正義だ。

俺たちは意を決して、最深部へと歩み寄る。

「お前が鬼か?なぜこんな悪さを……」

そこにいたのは鬼、夜空扮する黒い鬼であった(黒い全身タイツを着た夜空)。

そして夜空は迫真の演技で長セリフを言う。

「……悪さだと?貴様らが我らにそう言ったのか?我らは大和朝廷に追われし異民族の末裔。貴様らは我らをこのような不毛な地へと追いやっただけでは飽き足らず、命までも奪おうというのか……!血も涙もないこの所業……鬼とは貴様たちのことではないか!!」

鬼のセリフかけえ!やべえデビルかけえ!!

このままじゃ桃太郎の存在感が食われてしまう、なんとか反論しないと……

「お……お前たちだって罪なき人々を殺したではないか!」

「何を言う！兵を差し向けてきたのは貴様らの方ではないか！我らは静かに暮らしていただけだというのに！！」

おいおいなんだよその設定……なんか俺の方が悪者になってきてね？

「くっ……確かに俺たちも悪かったかもしれない……」

あゝあ、言っちゃったよ。自分で言うのもなんだが桃太郎が先に観念しちまったよ。

だが桃太郎にも負があるのなら話し合いで解決できるかもしれない。

「ならば鬼よ、もうこれ以上お互いに兵を消費するのは得策ではない。ここらで停戦協定を結ばないか？」

「そのようなうわ言で貴様らは我らを取り込むつもりか……？やはりこの世に正義などないな」

じゃあどうしろっつうんだよ！！

ああいえばこういうなこの鬼は！！

「はたして正義とはなんだ？この世に正義がないのなら。我は本物の悪鬼羅刹となるう。ゆくぞ朝廷の犬め、和が名は黒天之命、吉備国最後の王にして……この世に破滅をもたらす存在なり！！」

「おい夜空……明らかにお前の方がおいしい役だろこれ……」

ここまでくれば桃太郎が主役どころではなくなった。この桃太郎……まるで俺みたいだな。ははは……

周りを見渡すと、幸村は夜空の迫真の演技に言葉を失い、マリアはよくわからないような顔をしている。

小鳩に至っては、「かつこいい……お姉さんかつこいい……」と尊敬の眼差しで夜空を見ている。

「ここまでアレンジを加えれば昨今の若者も取り入れられるだろう。ああ名前は今考えた」

「ずるいやつだ。脚本家の悪意が見えるようだよ……」

「脚本家の悪意？この話を考えたのは私だ。すなわちゲームマスターは私だ。それにずるくない。この世に絶対の善悪などない。歴史は常に勝者によって書き換えられる。すなわち……」

おい……なんかいやな予感が……

「この戦いで勝ったものが正義を名乗ることを許されるのだ!!」「なんでそうなる……?」

金棒（本来は紙を丸めた棒であるが）を振り下ろす黒天之命、俺は間一髪でそれをよける。

こいつはただものではない、今こそ仲間の力を合わせる時だ。

「犬！猿！雉！！今こそ力を……」

「貴様……ここにきて多人数でこの私を攻め落とすつもりか？やはり貴様らは悪だ。だが私は屈しない！！例えどれほどの兵が相手だろうと!!」

やっべえ！こんな状況で仲間の力なんて借りられねえ！！なんか力借りたら負けな気がするんですけど!!

「てかそれなら犬と猿と雉なんていらなかったじゃねえか!!」

「他人の力を借りようとする貴様の弱さが原因だろう？その2匹と1羽を無視して一人でこの鬼ヶ島に攻め入ることもできたであろう」

「？」

なんといい言草……この鬼は俺との一騎打ちを所望しているらしい。

後ろの仲間にも目を向けると、幸村は旗を振っており、マリアは応援している。小鳩は映画を見るような目で俺達を凝視している。

こうなったらやるしかないのか……

「わかった。果し合いを受けよう」

「全力を持って臨む！いくぞ桃太郎！！」

こうしてお互いに紙を丸めた棒でお互いの頭を叩きあった。

とはいえさすがに相手は女子、手加減しないと……って夜空の方はむっっちゃ本気だ！すっげえ痛いんですけど！！

しかも、後半から紙の棒じゃなくて蠅叩きになってるし！ちよ……  
タンマ！！すっげえ痛い！！

.....

一方、この果し合い中での夜空視点は……

10年前何も言わないで町を去ったとき私がどんな気持ちになったかもたかも知らないで！！

貴様が！貴様が転校して来たとき私がどんな気持ちになったかも知らないで！！

貴様と補修でコンピを組んだとき私がどんな気持ちで貴様を見ていたと思ってる……！！

隣人部を設立して数日後にエア友達のトモちゃんと話していた所



をお前に見られた私がどれだけ恥ずかしかったか（裏設定）！！

いつ私に気づくか、一緒に部屋にいて一緒に部活をやっていたらすぐにでも気付いてくれると期待で胸が膨らんで！！最初の頃はまったく眠ることすらできなかった！！

なのになんでお前は私に気づかない！！

私のことなんか忘れてしまったのかと本気で絶望しかけた時お前はあんなことを……「最高の親友を忘れられるわけがない」とか言いやがって！！

私はそういったここ数か月の小鷹へのうつつぶんをこの果し合いで晴らすことにした。

そういえばお前とこうやって喧嘩をするのは、出会った時以来か

……

あの時は楽しかったな。二人でヒーローごっこをした時の事を思い出すよ……

もう一度あの日に戻れば、あの時の二人に戻れば、私はどれだけ救われるのだろうか……

「ちよ……やめる夜空……！」

やめない！だって楽しいんだ！！まるであの時みたいに楽しいんだ！！

小鷹への恨み辛み、気づいてくれないことへのうつつぶん、そして再会できた喜び、そして同時に抱いた胸の痛み。

今までため込んでいたものがこの時に集約している。これほどうれしいことはない！！

だから！お前が倒れるまで！！私は叩くのをやめない！！

- - - - -

そして……

「ううう……」

なんかすごい剣幕で迫ってくる夜空に、俺は一発のダメージも与えられずひたすら蠅叩きで叩かれ等々地べたに手がついた。

俺、ここまでされるほどなんかお前にしたか……？

そして桃太郎を倒した黒天之命は、最後に迫真の演技で……

「待っている人間ども、桃太郎を血祭りに上げた我が、貴様らの世に終焉をもたらしてくれる……ファファファファ……ファファファファファファファファファファ……ファファファファ……」

素に戻って夜空は言った。

「なんだこのグダグダな劇は……」

俺がそう言つと。

「別にいいだろう、どこかに発表するわけでもないし」

夜空は平然とそう言った。その時の夜空の顔は、何かしらとても嬉しそうな表情をしていた。

まあ……後半はグダってたがみんなそれなりに楽しんでたし、よしとするか……

でも蠅叩きで人を叩きまくるのは友達作りとしてはどうなんだろうか……ふと思う俺であった。

行動（前書き）

第15話です。

「柏崎星奈」視点。

## 行動

『私を見た男は全員跪く』

私は常にそう自分に自信を持って生きてきた。

なぜそこまで自信が持てるのか、それは私が神だから……

そんなスペシャルな私であるが、最近とてつもない屈辱を味わった。

全てはあの謎のヘンテコな部活、『隣人部』のせいだ。

危険な部活だとか噂されているものだから、理事長の娘として一言言っただけだと思っただけだ……

「リア充は死ぬ！」

と、黒い髪をした不機嫌な女に意味不な言葉を投げかけられまさかの門前払い。

本当になんなのよあの狐みたいな女！失礼にもほどがあるじゃないの、この柏崎星奈様が来てあげたというのに！！

この私を拒絶するということは、絶対に危険なことをやっているはずよ。

そんなの私が許さない、この学園の秩序を乱す不逞な輩はこの私が潰してあげるわ！！

というわけで、まずはあの部活がどんなことをしているかを洗い出さないといけないわね。

要は尋問してやつ、あの部活のメンバーの一人に接触して隣人部の秘密を聞き出すのよ。

この私の美貌を最大限に利用してひとつ残らず悪行をしゃべらせ

て、化けの皮を剥がしてやるわ。

え？この私自信が隣人部のことを知りたいだけですって？うっさいわよ！！

とりあえず部活の資料を先生に借りてきたわ。

果して隣人部にはどのような人たちがいるのかしらっと……

ええと、男子が2名で女子が3名。高等部2年が二人、1年が二人。中等部2年が一人……

男が二人いるのね、この二人を捕まえればあつという間に情報が集まるわね。写真は……

「……なにこれ？」

隣人部の部員の写真を見て私はぽかんと口を開けた。

その男子二人というのが、ずいぶんと真逆の属性がそこに並んでいたのだ。

一人は噂の『羽瀬川小鷹』

転校してきて以来この聖クロニカで最も恐れられている不良の不良。その噂どおり、こりゃまた悪い面をしてるわね。髪も金髪だし……

そしてもう一人が、『楠幸村』

美少年……にしてはなんともかわいらしい、女々しいというか9%女の子のような顔の男子。

……男？ねえこれ男なの？どうDNAが間違っってこんなの生まれただの？でも中身は男の子かもしれないし、でもなんか違うなあ……

一応女子の方も見たけど、この『三日月夜空』というのが私に屈辱を与えた天敵。待ってなさいよ……私に屈辱を与えた借りは返し

てやるから!!

あとは『志熊理科』と『羽瀬川小鳩』、羽瀬川つてことはヤンキ  
ーの方の妹か何かなの？やっぱいいこの子めちやくちやかわいいじゃ  
ないの!!よこせや!その子を私によこせや羽瀬川小鷹!!

しっかしこの面子を見る限り、ヤンキーが多数の女子を侍らせて  
いるようにしか見えないわね……ま、それももうすぐわかること  
でしょ。まずは楠くん事情を聴きに行くとしますか。

「あなた、楠幸村くんよね？」

「はい、そうですが……」

休み時間。

私は楠くんの教室に行き声をかける。周りの男子の反応がそわそ  
わしているのは毎度のことだから特に気にはならないわ。

その子は間違いなく男子の制服を着ていた。

なんか男子の制服を着た女子にしか見えない、一瞬「それ校則違  
反よ」って言いそうになっただじゃないの。

しかもたち振る舞いも女の子のよう、こりゃああんまり期待でき  
ないかも……

「ちよつと隣人部についてききたいのだけれどもいい？素直に答え  
てくれるなら靴を舐めさせてあげてもいいわよ」

「はあ……べつにくつなどなめさせてもらえなくてもおしえてさし  
あげますが。くつをなめるという行為は従者が主に慕う証の行為。  
あなたは私の主ではありません」

うぐ……この私の好意に応じない男子がいたなんて。というかこ  
の子を男子として扱うこと自体に抵抗を覚えるわね。

ひょっとしたらこの子、そっちの趣味とかあるのかも……

それはおいといて、隣人部について教えてくれるというならオー  
ルOKね。

「隣人部ってどんなことやってるの？」

「夜空のあねご曰く、友達作りだそうです。だから私たちは友達作  
りをしているのです」

楠くんは淡々とそう言った。

それはあのポスターにも書かれていることだから表向きはそんな  
のだろうけども……

でも私は一瞬の隙すら見逃さないわ、今この子は「夜空のあねご」  
と言った。

あねごと呼んでいる以上、そのような裏があるということ。

「ふうん、でもそんなことで一つの部活が成り立つなんていうのは  
おかしいわよねえ、なんかもっと別の何かがあるんじゃないの？」

私はそう言葉を投げかけながら楠くんに寄っていく。

この私がこんな近くに迫っているのよ、そこで何も感じない男子  
がいないわけが……

「いえ、とくにそのようなことはありません」

きっぱりと答えよったわこの子。

動揺する素振りすら見せない、この私に対して何も感じていない  
とでもいうのこの子……

こりゃだめね、さっさと羽瀬川小鷹のもとへ行った方がよさそう。  
でも最後に、これくらい聞いておきたいわね。

「じゃああなたも友達を作りたくて隣人部に入ったの？」

「いえ、私は「しんのおとこ」を目指すため、兄貴から「おとこはなんぞや」を学ぶために隣人部に入りました」

兄貴つてことは羽瀬川小鷹のことね。

にしても真の男を目指すって……今のままじゃ絶対に無理よ。

「なぜそのようなことを言うのですか？」

楠くんは少し強めな口調でそう言ってきた。

「え？ひょっとして口に出してた？」

「はい」

ああ、これはちょっと失礼だったかもしれないわね。

この子だって男の子なら、それなりに振舞いたいと思うのは当然のことなのに……

この子もそれなりにコンプレックスを抱えているのかもね……

「ごめん、あやまるわ」

私は人にプライドが高く謝ることなどめったにしないけども、この子に謝ることは大した抵抗は抱かなかった。

楠くんは許してくれたけども、少し顔がむくれていた。

まあ、女々しいあなたでもいつかは男の中の男になれるかもね……さてと、残るはもう一人……

たくさんの女を近くに置いているとならば、そうとうの女好きと見たわ。

羽瀬川小鷹、あんたを骨抜きにしてやるわ。



次の日の休み時間。

私は羽瀬川小鷹がいる教室へ行くと、端の席でそいつは空を眺めていた。

そしてその斜め向かいに三日月夜空もいた。私に屈辱を味あわせた女、でも今は関係ないわ。

教室に入ると、ほとんどの男子が私の方を見た。けどあんたらに用はない。

私が三日月を一瞥すると、三日月は少しばかり驚いたような顔をした。

よほど私のことが嫌いみたいね、ならば好都合。あんたの目の前であんたところの部員を手駒にしてあげる。

そして私は羽瀬川小鷹の近くに立ち、声をかけた。

「あんた。羽瀬川小鷹よね？」

「ああ？お前は……」

羽瀬川小鷹、生で見るとちょっと怖いわね……

しかもなんか疲れているのか、不機嫌のように見えるその顔はさらに恐怖が増していた。

でも私は屈したりしないわ、こいつもほかの男子と『同じ』。

「ちょっと話があるんだけど、ここで話すと面倒なやつがいるから教室の外に出てくれない？」

「え？なんだよ……」

羽瀬川小鷹はなにかしらめんどくさそうな顔をしていた。

普通なら私が話したいことがあるといえは笑顔になって飛びつくはずなんだけど……なんかイメージが違うな。

そしてそう言った後、私は三日月をチラリと見ると、三日月の顔が強張っているのが見えた。

あんたらいつたいどういう関係？もしかして付き合っちゃったりしてるわけ？もしそうならかなり悔しそうね……  
とりあえず一矢報いたといったところかしら、とりあえず羽瀬川小鷹を教室の外に連れ込まないと。

「そんなめんどくさがらないでよ、ほら、靴を舐めさせてあげるから私の言う事を聞きなさい」

「なんで俺がお前の靴舐めなきゃいけないんだよ？てか話ならここですればいいだろうが」

「え？まさかあなたそれ以上のことをお望みなのか？さすがはヤンキーね！！」

「人聞きの悪いこと言うんじゃないよ」

私の言葉に羽瀬川小鷹は不快な顔をしていた。

こいつも私に反応しなかった。隣人部……以外に手ごわいかもしれないわね。

気が付くと他の男子どもがざわざわしている。後ろで三日月もめっっちゃこっち睨んでるし……こうなったら強引に……

「いいから来なさいよ！！」

「お……おい！」

私は羽瀬川小鷹の腕を引っ張り、無理やり教室の外に連れ出す。

三日月がついてくるかとも思ったけど、そうしたい気持ちがありながらも必死に抑えている。そんな滑稽な姿が見えた。

そりゃあ羽瀬川小鷹と何かあるってみんなに思われるのはいやかもしれないわね。もし仮にあんたたちが……

……ごめん、ちょっとこいつ借りていくわ。

そう、これは私がただ純粹に『隣人部』に興味があるだけ。

本当は三日月、あんたと話せればよかったんだけど、あんたに話しかけたってあんたは私を拒絶するでしょ？

多分志熊理科っていう子だって私を拒絶するはず、大抵の女子は私を拒絶するのよ。

悔しいけど、それを何度も見てきて強がってきた私はそう理解するしかなかった。

だから隣人部で、私にも女の友達ができればって思った。でも部屋に入っただけいきなり……

「リア充は死ぬ！！」

なんて言われたら、話しかけられるわけがないじゃない。

部活に入りたいだなんて……言えるわけじゃないじゃない。

敵意丸出しなんだもん、本当はちよつと悲しかった。

でも男子なら大丈夫、この羽瀬川小鷹なら話が通じる気がする。

みんなこいつのことを恐怖しているんだろうけど、最初の反応でわかった。

こいつは、みんなが思ってるほど悪い奴じゃないって……

さあ話してもらおうわよ、隣人部の全てを……

ワールド・ロスト・ワールド(前書き)

第15話です。

「柏崎星奈」視点。

## ワールド・ロスト・ワールド

「んで、隣人部ってなに？」

羽瀬川小鷹を廊下に連れ出し、すぐさま私はそう質問した。

多少男子の目線が気になるけど、三日月の視線に比べれば関係ないわ。

さあ教えてもらおうよ、隣人部の全てを……

「なに？って言われても、友達作りの部活としか……」

「本当にそれだけ？」

「ああ」

「……………」

私の質問に、羽瀬川小鷹は顔色一つ変えずに答えた。

その答えに嘘偽りはなく、まっすぐな答えが返ってきたのだ。

本当に……それだけなの？

てかそんなんでいいの？そんなのって認められるの？

「私はてつきりあんたが女子集めてあんなことやそんなことを毎日やってるのかと思っただわよ」

「おい、人を見かけで判断すんじゃないぞ。遠まわしに俺が落ちぶれたヤンキーと言ってるようなもんじゃねえか」

羽瀬川小鷹は憮然とした顔をした。

きつと会う人会う人にそう思われ続けてきたのね、ならせめて……

「そう思われなくなかったら髪の色を黒に染めたらいいじゃないの？そしたら少しはいい男になるかもよ？」

私がそう提案すると、羽瀬川小鷹は悲しそうな顔で答えた。

「それを考えたことは多々あるが、これは俺の死んだ母さんとの絆の証なんだ。俺のこの髪の色を見ると母さんを思い出す。染めたらなんか消えちまいそうなんだよ、母さんが……」

「じゃあ、あなたの母さんはもう……」

「俺がガキの頃に逝っちまったよ、ロクに顔も覚えてねえ」

小鷹は寂しそうに言った。

そっか、あなたも色々辛いことあったのね……

「ごめん……」

私は謝った。こいつに大して謝ることも特に抵抗を抱かなかった。なんだろう、楠くんもそうだけど、隣人部の男子って他の男どもとはなんか違うのよね。

裏がないってどうか、素直ってどうか。まあ隣人部なんて部に入ってるくらいなんだから、不器用って言った方が正しいわね。

下心あるやつって大抵器用なやつが多いから、そこに隙があるもんなのよ……

「あ、いや謝らないでくれよ。もうなれてるし。ああそっいえば、お前確か『柏崎』って言ったよな？」

「ええ、私が噂の柏崎星奈よ」

「噂かどうかは知らないが……じゃあ『羽瀬川隼人』って人知ってる？」

「ええ、確かパパの友達の人よ。私が小さい時もよく遊びに来てたわ」

でもなんであんたがそんな人の話を……？

『羽瀬川』……羽瀬川って……

「もしかしてあんた……」

「俺はその羽瀬川隼人の息子だよ、この学校に編入できたのもその縁のおかげなんだ。だから礼を言っておく。お前の親父さんにもよろしく伝えておいてほしい」

「わかったわ。伝えておくわね」

私がそう言うと、羽瀬川小鷹はニコっとはにかんだ。

ああこいつの笑った顔結構怖いわね、でも嫌な気はしないわ。

そっか、ってことは私が隣人部に入る理由もできたかもしれないわね……

本当に友達を作るだけの部活だっていうのなら、その部活で何かを得られるかもしれない。

あの三日月は放っておいて、きっと私好みの女友達が見つかるはずよ。

羽瀬川小鷹も同じ部にいるし、退屈はしないでしょ。

「ねえ羽瀬川……くん、私その隣人部に興味があるんだけど……」

「へえ、じゃあ入部しちゃうばいいじゃねえか」

羽瀬川は陽気にそう言った。

というかそれができれば苦労はしないのよ……

「そうしたいのは山々なんだけど、あの三日月に嫌われてるみたいで……」

「ああ……そっぴやあいつたまにお前のこと話してるな。あのリア充はいずれ隣人部の最大の敵になるとかなんとか……」

私ってそこまで敵視されてたの!?

ちよつと、私が隣人部に入るところか隣人部にとってのラスボスになつちやつてるじゃない!隣人部にとってのゾーマになつてるじゃないのよ!!

確かに部長一人の権限で入部禁止なんてできないけども、無理やり入って部の空気乱すのもなんか申し訳ないし……

「そこまで嫌われてるんだ私……」

私はついつい本音を口に出してしまった。

てか、あんな女狐に嫌われて何をそこまで落ち込んでるのよ!!  
結局あいつも私を妬むだけの他の女子どもと変わらないじゃないのよ!!

「……なんなら俺から話しておいてやるうか?見た感じお前は夜空が思ってるほど悪い奴じゃなさそうだし」

「え?でも悪いわよ」

「まあ部員は多い方がいいさ、あいつはどう思っているかは知らないが……」

羽瀬川はそう言って少し黙る。

そして数秒後に、羽瀬川はため込んだものを吐き出すように語りだした。

「たまに思うんだよ。三日月夜空が隣人部を作ったのには、何か『別の目的』があるんじゃないかってな」

「え?やつぱりあいつこの学校で何か起こそうと……」

「そんなんじゃないよ、たまになあ……『怖い』んだよ、あいつの眼が」



怖いって、あいつはいつも無愛想だし、とげとげしてるから怖いイメージで固まってるようなものじゃない。

けど羽瀬川が言った『怖い』っていうのは、何か別のものを感じた。

「確かにこの学校で最初にあいつと会った時は、愛想ないし最低なことばかりぺちやくちや言いまくるし、エア友達とかわけわからぬことやってるし。正直関わりたくねえやつだって思ったんだ」

「ああわかるわそれ、あいつ自身人を遠ざけるもんね。いっつも本読んでるけど何読んでるんだか……前なんかフランス語で書かれてる小説読んでいたわよ」

そう、三日月夜空が考えてることはまるでわからない。

なぜあんなに人を拒絶するのか、なぜあんなに一人でいられるのか……

前に他の男子が冗談で『孤狼』なんて言ってたけど、まさにその通りなのよ。

誰とも群れないで、一人で獲物を探して、一人で生きる活路を作って。

近づこうものなら噛み殺そうとする。私たちが抱く三日月夜空のイメージはそんな感じ。

でもいつも他人を見るその眼は……

「でも、あいつ眼はいつつも寂しそうなよね。まるで『何かを追い求めている』みたいに」

「追い求めているみたいに……か、やっぱりそうか……」

「どづいこと？」

私のその意見に、羽瀬川は納得のいったような顔をする。

そして羽瀬川は、こんな過去を語りだした。

「小さい頃、俺には親友がいたんだ。ああそこで笑わないように」  
「え？いや笑わないわよ」

別にあんたに親友がいたって関係ないわよ。  
てか急になんなのよ……

「俺がいじめられていたところに急に介入してきて、正義の味方みたい」「弱い者いじめはやめろ」なんて言うものだから、その時の俺もちよつとむきになつてな……」

「へえ、あんたその外見でいじめられてたんだあ」

「小さい頃の話だ。助けてくれたそいつを殴ってやった」  
「うっわああんた恩知らずね」

とか、色々羽瀬川は語りだした。

その『男の子』と殴りあったこと、殴りあううちにいじめっ子達を返り討ちにしたこと。

そのあとにその男の子と友達になったこと、良く遊ぶ大切な友達だつて羽瀬川は誇らしげに語っていた。

お互いを『タカ』『ソラ』と呼び合っていたことなど、本来私にとつてはどうでもいいであろう話を少しの間羽瀬川は語っていた。

なぜだろう、私らしくないんだけど。不愉快にもならないし、むしろ私自信も心が躍るようなお話だつた。

「素敵じゃない、男同士の友情」

「ああ、俺にとつてそいつは最初にできた大切な親友だ。1000人分大切にできる最高の親友だ。親友『だつた』……」  
「だつた？」

私のその言葉に、羽瀬川は急に表情を暗くする。

「いったい、何があつたつて言うの？」

「俺は、その大切な親友に別れの言葉一つ言わずにこの町を去つたんだ」

「な、なんで！？なんでそんなことすんのよあんた！！」

「正確には『言えなかつた』。この町を去る前日に俺はそいつにこう言つたんだ。「明日大切な話があるからこの公園に来てくれ」つて、ただどあいっは来なかつた。なぜかは知らない、だから結局別れを言えずに俺は町を去つた」

「じゃあ、来なかつたそいつも悪いじゃないのよ」

「そうよ、約束を守らないやつが悪い。」

羽瀬川がなんか落ち込んでいたから、フォローのつもりで私はそう言つた。

「けど、羽瀬川はそれで満足してはいなかつた。」

「ああ、俺もそう思った。でも想像すると怖いんだ。もし昨日まで近くにいた大切な人が明日いなくなつたら……なんて考えるだけで怖いよ。それを実際に味わつたソラは、いったいどんな気持ちになつたんだろうな。もしあの言葉が『最後の言葉』だつて知つていれば、あれが最後だつてわかつていたら、もっとあの瞬間を大切にできたはずなのにな……」

「……ねえ、この町つてことは、そいつこの町にいないの？つうか会つてないの？」

「連絡手段もないからな、それに……どんな顔で会えばいいつていうんだ？確かに会つて一言謝りたいつて何度も思った。でも一方的に謝つたつて解決はしないだろう。多分殴られる。殺されるかもしれないな。ははは……」

「そう語る羽瀬川の顔は、本当に悲しそうだった。」

見ているこっちも胸が苦しくなる。その辛さがヒシヒシと伝わってくる。

でも、そのままでもいいわけがない。本当の親友なら、ちゃんと和訳しなきゃ。

私的には、このまま二人の関係が終わることが気に食わなかった。

「そいつのあだ名、『ソラ』って言ったわよね？本名はわかんないの？」

「本名か、そういやあいつあだ名で呼べって言ったつきり名前明かさないまんまだったな」

「じゃあ探すのに相当骨が折れるわね、可能性の一つとしてこの学校にいるって考えも……」

「一応『空』が苗字か名前につく『男子生徒』には何人かあつたんだが、片方は上の学年の生徒だったし、もう一人は下の学年だったからたぶん違つたろうな」

うーん、つてことはこの学校にはいない。

一応パパを通せば他の学校との繋がりもあるから……

「そいつってどんな感じの男の子だった？将来は美少年になるとかそんな大胆な感じでいいから」

「あー、あいつは間違いなく今頃美少年って感じだろうな。中性的な感じだったかな？黒いショートカットで帽子かぶってたのを覚えてるよ」

「中性的な美少年ねえ……」

うーん、ちょっと会ってみたいかも……

中性的な美少年、私は名探偵じゃないってのに……

私は色々考えて半分あきらめ状態になったのか、この暗い空気を晴らすことも兼ねてこんな突拍子もない一言で羽瀬川をからかった。

「ねえ、その子ってひょっとして男じゃなくて、『女の子』だったなんてオチとかないでしょうね？」

「はっはっは、だとしたらロマンチックだな」

「本当、あんたにはもったいないわよ」

私の一言で、さっきまでの重い空気はどこかへと消えた。

よかった。これで少し元気になったようね。あ、そういえば……

「ねえ、さっきの「やっぱりそうか」ってどういう意味？」

私が質問すると……

羽瀬川はまたニコっとほほえんでこう返してきた。

「ああ、俺が隣人部に入ったのはなりゆきだけじゃなかったってことわ」

「どづいことよ？」

その言葉の意味はわからなかった。

気がつけば昼休みが終わろうとしていた。

「じゃあな柏崎、一応夜空を説得しておくよ。多分怒鳴られる気がするけど……」

「ふふっ、無理しなくてもいいわよ、『小鷹くん』」

去り際、いつのまにか私はあいつを名前で呼んでいた。

羽瀬川小鷹、ずいぶんと話がわかるやつじゃないの……

隣人部、私は諦めないわよ！

きつとあそこにヒントがある。私はあの部活に入るべきなのよ……！

「だから待ってなさい、隣人部！！」

私は一人高らかに叫んだ。

## ワールド・ロスト・ワールド（後書き）

タイトル名はUVERworldの曲「world LOST world」より。

この曲には「もしもこれが最後だとわかっていたら、もっとこの瞬間を大切にできるだろう」というメッセージが込められているそうです。

エア友達をやってみよう(前書き)

番外編です。

「羽瀬川小鷹」視点。



## エア友達をやってみよう

「ちいーっす」

いつもと変わらない日常。

俺は授業が終わればすぐさま部室へと足を運ぶ。

どうせ部室に行っても、みんなそれぞれやりたいことをやるか、部長の夜空が突拍子もないことを言いだすか。隣人部の活動パターンは大抵テンプレ化しつつある。

まあ転校してきた当初のように、ぼっちで家に帰るよりは充実しているか。

はがない読者からすれば、「この金髪ヤンキー、美少女に囲まれて充実どころか夢のような話じゃねえか」という風に思われてるんだろうが……って誰がヤンキーだ誰が。

と、ひとりごととはここまでにしておいて本編へと移ろう。

今日の隣人部はなにやら様子が変わった。何が変かというただな

……

「あ、兄貴お勤め御苦労様です」

「小鷹先輩どうもです」

「あんちゃん来た!」

「わーいお兄ちゃんなのだー!」

と、幸村、理科、小鳩、マリアがすでに部室にいた。

どうやら俺が最後らしい、ってそこであることに気づく。

「あれ?夜空は?」

そう、珍しいことにこの部室の部長であり中心人物の夜空がいな

かったのだ。

あいつがいなかったことなんて今までなかったんじゃないか？

俺が一人だけってことはあったが、夜空『だけ』がないということとは前代未聞だった。

そして、夜空に代わってこんなやつが隣人部にいた。

「まったく遅いわよ小鷹、この私を待たせるなんてどういっつもりよ」

「ああ悪い星奈……って、なんでお前ここにいるの？この小説じゃあお前はまだ隣人部に入部してないはずだろ？」

「細かいことは気にしないの、前回の番外編でも私はフライングで出ていたじゃないのよ」

星奈はそう鼻を鳴らした。

ああそうか、この話は番外編なのか。

前回は確か刑事ものをやっていたような、それで今回はいきなり本編に戻るんすか……

「まあいいや、しっかしあいつがないんじゃないか今日は何をやるんだ？」

俺がそう質問すると。みんながいつせいに悩みだした。

なんやかんや言っても、あいつがないとこの部活は成立しないんだよな。

数分間悩み、理科がこんな提案をした。

「じゃあこんなのはどうですか？名づけて『みんなでエア友達をやってみよう』です」

「エア友達……だと？」

わからない人がいるかもしれないので説明しよう。『エア友達』とは……

僕は友達が少ないのメインヒロインである三日月夜空の代名詞にして、彼女の残念の象徴である。

簡単にいえばエアギターの友達版。『そこに友達がいるかのようにして、友達がいると想像して楽しい話をする』という競技？である。

無論他の人から見れば、何もないところで一人くっちゃべっているだけのちよつとあぶない奴でしかない。

そんなお恥ずかしいことを夜空は何の躊躇いもなしにやっているのだが……

この小説では、その重要設定が『裏設定』として存在しているだけで、彼女がエア友達と話している描写が未だ存在していない。

ちなみに俺、羽瀬川小鷹自身はあいつが隣人部を創部してから2日目か3日目くらいにその光景を目撃してドン引きしております。いや、あれは見た時に衝撃を受けましたよ。でも仕方ねえんだよ。

あれは……『俺のせい』だから、俺があいつを歪めてしまったんだ。その事実是不変ならない……

……おっとすまねえ、番外編くらい明るくいかないとやってられないよな……！

「話を本編に戻すが、要は夜空がやっているエア友達を俺たちがやってみるってことか？」

俺がそう言うと、理科がガッツポーズをする。

おいおいマジですか理科氏、俺たちにもあの未知の領域を体感するというのですか？というか……

「理科、夜空がないからって勝手にそんなことやってもいいのか？確かにエア友達はヘンテコな趣味だが、あいつがない中で俺た

ちがそれをやって楽しむというのは侮辱になるんじゃないのか？」

俺がその意見を見ると、理科はチツチツと指を振る。なんか腹がたつな……

「何を言うのですか小鷹先輩、これは我々隣人部の部員が部長である夜空先輩の気持ちを知りたい機会なんですよ？夜空先輩もそれなりに悲しみを背負っていると聞きます。ですから私たちは部員として少しでもあの人の気持ちを理解する必要があるのでは？それこそが仲間というものですよ」

物は言いようというやつか、そう聞くとなんか納得がいつちまうなあ。

他人を知るためには、他人の『趣味』を知る、他人の『考え』を知る、他人の『気持ち』を知る。と言ったところか。なるほどな、確かに友達作りを学ぶ隣人部としてはいい意見だ。だが……

「いきなりエア友達をやれというのは、恥ずかしいものがあるな……」

「何を弱気になっているのですか小鷹先輩、他の部員を見て下さい。もう瞑想に入ってますよ」

「早いよ！てかみんななぜこんなにノリノリ!？」

理科の言うとおり、なんかみんな目をつむってエア友達を思い描いていた。ゲームで言うならアバター作成といったところか……

本当にやるのか？俺がみんなに質問すると……

「わたくしはかまいません、全国制覇をした兄貴を思い浮かべて私はそれにつくせばいいのですね？」

「なんか違う気がするんだが……」

幸村はなんか斜め上のことを言っていた。大丈夫かな……

「大丈夫じゃあんちゃん、あれじゃろ？妄想の中でカマキリと戦う  
感じに想像すればええんじゃろ？」

「それどこの刃牙だ!？」

小鳩はなんか強くなるうとしていた。つかその知識どこで得たし

……

「妄想の中ではばあをつんこまみれにしてやるのだ!！」

「なんかもうエア友達関係ないような……」

マリアはケイト先生を倒すつもりらしい、リアルエア友達を見た  
ことないからそんな脱線してるんだらうが……

「私にとって都合のいい女友達を妄想すればいいのね!」

「あ、その通りでございます」

星奈はエア友達がなんたるかをわかっているようだ。やっぱりお  
前らって似た者同士？

そして気がつけばうしろで理科もエア友達を思い描いていた。気  
のせいだろうか、5秒ごとに「ああん!」だの「うふん!」だの聞  
こえてくる。

この空気だと俺もやらなきゃいけないのか、こうなったら覚悟を  
決めるしかないか。

ダチ公、お前のその趣味……体感させてもらっぜ。

こうして全員設定が思いつき、エア友達を披露する順番をくじで  
決める。くじの結果は……

- 1 番目……小鷹
  - 2 番目……幸村
  - 3 番目……理科
  - 4 番目……小鳩
  - 5 番目……マリア
- トリ……星奈

となった。先頭バッターは俺か。  
まあエア友達をリアルに見ているのは俺だけだし、お手本として  
は丁度いいか。

それにハズいことは最初に終わらせておくに限る。羽瀬川小鷹、  
ちよつくらエア友達と分かり合ってくるぜ。

「それでは1番目は小鷹先輩です。どうぞ」

理科のアナウンスと同時に、俺のエア友達が始まった。

ただでさえエア友達はやるだけで超恥ずかしいので、設定は特に  
ひねってはいない。

「きよ……今日も楽しい話をしようぜ、『内山君』」

内山君というのが俺のエア友達の名前だ。

なぜ内山君かというのは特に深い理由はありません。

けしてインフィニットなんかとかなんたらユニコーンで主役を  
やっている内山君ではありません。

ランプの仲間に入りたがっている内山君ではありません。銀河  
眼の光子竜も出しません。

とまあエア友達を始めてしまったわけだが、まわりの反応は……

「改めてみるとやっぱり気持ち悪いわね……」

「エア友達、予想以上かもしれませんか。てか小鷹先輩よくやる気になりましたね……」

星奈と理科の声がボソボソと聞こえてくる。てかお前らがやらせただろうが!!

俺は苦笑しつつ、内山君と話を続ける。

「しっかしつまらねえ学校生活だよな、内山君もそう思うだろう？  
え？なんか面白い話しろって？ おういいぜ」

さてと、ここで俺が一発かましてやるぜ。

こう見えても実は俺、一人漫談とか超得意なんだ。  
今日のタイトルは、『まんじゅう怖い』。俺の十八番だ。

「それは、平安時代に……」

俺はまんじゅう怖いを内山君に披露した。

正直オチを知っている俺は、笑いをこらえるのに必死だった。

そう……面白い話をすれば、エア友達なんて関係なくまわりのこいつらも爆笑してウケもいだろう。いやあ俺ってば天才だ。

と思っていると、理科が何やら冷ややかな眼でこう言った。

「つまらん、お前の話はつまらん!!」

「いやキン ヨールかよなつかしいな!!」

つまらん？いやいやそんなわけが……

しかし周りを見ると、爆笑しているのはマリアだけだった。

そしてそれ以外のメンバーからは……

「……兄貴、おもしろいです」

幸村よ、ぜんぜん面白そうじゃなさそうなんだけど？つつかその無駄な優しさが逆に傷つくわ。

「あんちゃん、えーと……どういう意味？」

うん、ごめんな小鷹、お兄ちゃんが悪かったよ。

「誰もいないところで、一人笑いをこらえてそこにいるはずもないやつに笑い話をするって、小鷹……正直引いたわよ」

お前は正直言いすぎだよ、リアルなJKの意見を真に受けたよ。小鷹さん超傷つきましたよ。

結局、エア友達をやって俺が得たものは夜空の気持ちではなく、大きい傷だけだった。

まあそんなもんだろ！エア友達だもん！！

「それでは2番目は幸村くんです。どうぞ」

2番目は幸村か。

心優しい俺からすれば、あの屈辱は俺だけが味わえば充分だ。他の仲間たちが味わうものじゃねえ

幸村、キリのいいところでやめていいからな。

「じほん……『殿』、本日も良い天気ですね……」

幸村のエア友達は『殿』か、なんか急に路線が大きく変わったな。



エア友達って平安時代から存在していたのか、いやあおつたまげた。

「殿、先ほどの戦ではお見事でした。わたくし、殿のあの勇士を見ていたく感激しております。これでわが国も平和ですね」

おい〜？

なんかすつごく大きな設定になってきてね？

小鷹さん、幸村の設定のでかさにその殿が見えてきてるんですけども、気のせいですよね？

「殿も今日はゆっくりとなさってください……殿？殿起きてください……殿？」

ん？

あれ、なんか不穏な空気が……

「殿、その胸の傷は？まさかわたくしどもに心配をかけまいと……殿！殿！！」

「お……おい……幸村？」

なんかすごい感情移入し始めたので、心配して幸村に話しかけようとしたのだが……

「殿――――！！！」

「うお！！！」

幸村がなんか急に叫び出した！！

てかエア友達に入りすぎた！！つつかそれもうエア友達じゃねえじゃん！！

俺と理科はなんとか幸村を現実へと連れ出そうとするが、想像以上に幸村がエア友達空間（勝手に命名）に入り込みすぎていたため多少時間がかかった。

数分後、幸村は落ち着きを取り戻した。

「兄貴、えあともだちとは奥が深いものですね」

「うん、俺も今知ったわ」

幸村のおかげで、俺たちはエア友達の奥深さを知ることができた。今度夜空にも教えてやるか……

「さてと、3番目は理科ですねえ」

3番目は理科。

もうね、始まる前から嫌な予感しかしないわけですわ。

「ごほん……もうちょっときいてよ！昨日先輩が私のピーをピーして、ピーをぶちこんでピーがもうピーーーーーー！！！」

\*しばらくお待ちください……

「ちょっと何をするんですか小鷹先輩！！！」

「それはこっちのセリフだ！お前のせいでの小説にR・18タグがつくわ！」

予想通りの展開だったので、これ以上続かぬよう俺は理科の頭にエロい話はいけナツクル！をくらわした。

まったくお前はこの手の展開になるといつもそっちへと持っていくとする。そこにしびれるあこがれないけどね。

さてと気を取り戻して。



おい小鳩、エア友達出しすぎて誰が誰だかわかんなくなってきたぞ……

「え……っと、グラフィイトが父親だったっけ？」

「いやしらねえよ……」

結局最終的に小鳩はエア友達の名前を忘れてしまったため終了した。

友達の名前はちゃんと覚えておきましょうねみなさん。

5番目はマリアだが、なんか寝ていたのでパスしよう。

「じゃあとりは星奈先輩です。どうぞ」

ト리는星奈だ。

あいつは果たして理想の女エア友達を作れたのだろうか……

「見てなさい、私の最高の友達を紹介してあげるわ」

「その発言には悲しみしか詰まってないな……」

そこにいるはずもない友達を紹介されてもなあ……

こりゃあ最後の最後で正当派が見れるかも……

「はあ……つまらないわね。あんたもそう思うでしょ『夜空』」

「夜空？」

なんと、意外なことに星奈がエア友達にしたのは『夜空』だった。なるほど、リアルでは友達でないやつでも、エア友達空間では友達として扱うことができるってことか……つかなんで夜空？

「私さあ、あんたと友達になる前ももっとつまらない日常を送って

たわ。けどあんたが友達になっけてくれて、なんか景色が変わった。夜空、最初あんたと会った時はいがみ合ってたけどさ、あんたと喧嘩するたびにあんたに親近感感じてた」

「な……なんか妙なりアル感が……」

理科の言うとおり、星奈のエア友達空間は、今まで俺たちがやってきたエア友達とは違う何かを感じた。

そう、俺たちよりも星奈はエア友達に、まるで『本当にそこにいるみたい』に話しかけているのだ。

現実が存在しているやつだとは言え、現時点で夜空が星奈の友達になるとは考えにくい。

故に本来そこには存在するはずのない、『星奈の友達としての夜空』がそこにいるはずだ。エアだけど……

「あんたは最終的に私のことをわかってくれた。ここまで私と対等に話せる女友達はあんただけよ……」

確かに星奈は今一人でしゃべっている。

だけどもあまりにも気持ちが入りすぎているため、俺たちは本当にそこに星奈が望む夜空がいるような錯覚に陥った。

俺たちは言葉を失う、そうか……これがエア友達の境地なのか……確かにエア友達は現実には存在しない、存在するのはエア友達と話しているそいつの心の中だけ。

だけどもまわりの目を気にせず、本当にそこに友達が存在すると思いきむことで。そう本気で願うことで。

その友達は、現実のものとなるんだ！！ まあエアなんだけど。というか……

「なあ、あれって結構本気だよな？」

「本気ですね」

「ほんきです」  
「本気じゃ」

俺たち4人は星奈に聞こえないように小さい声で話す。

星奈、もしかしてお前マジで夜空と友達になろうとしてる？

いや、もしそうなら俺たちはマジで応援するぜ。特に俺としては夜空と親友だった分、夜空に他の友達ができるのならマジで応援する。

「だからさ、夜空……」

あれ？星奈なんか体ぶるぶる震わせて、涙目になってね？

おいおい、割と本気なら強がってないで言えばいいのに……

「夜空！あんたが友達で本当によかった！！」

「誰が……誰の友達だった？」

と、星奈が叫んだ時だった。

部室のドアが開き、そこには我らが部長、三日月夜空が立っていた。

それを見て、星奈が顔を真っ赤にする。

「つて、よよよよ夜空！？」

「図書館で調べ物をしていたから遅くなったんだが、部室に入って早々気味悪い叫びが聞こえたんだが……」

夜空は機嫌悪そうにそう言った。

おっと、でもこれってチャンスじゃね？

星奈、頑張れ。隣人部初の快挙を果たせ。

と、俺は淡い希望を抱いたのだが……

「だだだだ誰があんたなんかと友達になるもんですか!!」

おい。

さっきまでエア夜空に本気で感謝していたやつはどこでいつですか?」

もちろんそれを聞いて、夜空もそれ相応の行動に出る。

「はん!こつちこそ貴様みたいな肉となど……友達になるか!!」  
「い……言つたわね……!」

夜空のその言葉に星奈も反論する。

これじゃあ和解は当分先の話になりそうだな。

しかし、こつちという言葉もある。

「……喧嘩するほど仲がいい」

「「ああ!?!」」

「……なんでもございません」

二人のオーラに、俺は縮こまる。

今の夜空に「俺たちもエア友達やってみた」なんて言ったら殺されそうだな。お前ら今日のことは他言無用だぞ?」

でも改めて思う。友達を作るんなら……『エア』なんかじゃなく、『リアル』な友達の方が何倍もいって。

エア友達は確かに自分の理想の友達が作れる。けどリアルでは時々互いの意見が食い違つ、喧嘩することだってある。

けど、それも友達付き合いの一環だ。そういうことを乗り越えないと本当の親友になんてなれない。

そうたる……『ソラ』、俺たちだって出会つた最初は殴り合いから始まつたんだから。

きつと星奈とだって、いつか友達になれるさ。見守らせてもらうぜ……お前の『最初の親友』として……

「黙れ肉！！死ね死ね死ね死ね！！」

「あんたこそ死ね死ね死ね死ね！！」

……本当になれるのかね。



時は来たれり（前書き）

第17話です。

「三日月夜空」視点。

## 時は来たれり

それは突然の出来事だった。

「あんだ。羽瀬川小鷹よね？」

最も聞きたくない声が、私の耳に入ってくる。

そいつは私の前を通り過ぎる、そして小鷹に近寄る。

そしてそれは小鷹に話しかける。私の目の前で二人は会話している。

「ちよつと話があるんだけど……」

その内容はわからないが、それは小鷹に用があるみたいだった。

なんで貴様はいつも突然なんだ。

『柏崎星奈』という女は、私が最も苦手とするその女はなぜか急に私の前に現れる。

こちらから近寄ろうとする気はこれっぽっちもないというのに……  
小鷹が困ってるだろ？ やめるよ、小鷹はお前のようなリア充じゃないんだぞ。

だけどそれは小鷹と話すのをやめない、なんで？ お前には立派な友達や仲間や男子どもが近くににいるはずじゃないか。

リア充のやつらとの付き合いとも満足がいかず、私たちのような非リア充をも取り込むつもりなのか？

そうやって、私達を蔑むのか？ やめるよ、お前と私たちは住む世界が違うじゃないか……

「いいから来なさいよ……」

柏崎はそう言つて小鷹を教室の外へと連れ出した。  
おい待て、なんで私から離れる必要があるんだ。  
やめろ！そいつは私の仲間だ！私と同じ世界にいる私の大切な……  
大切な……

「くつ、柏崎い……」

私はそう歯を食いしばるだけで、二人を追うことはできなかった。  
小鷹はただでさえクラスで浮いた存在、そして私自信も同じだ。  
そんな小鷹とこの学校一のリア充である柏崎が二人一緒に教室の外へと出て行つただけでざわざわと周りがうるさいんだ。

私がそれを追いかけていけば、確実に私と小鷹に何かあると人  
思われてしまう。

そう思われることが私にはいやだった。無為にはやし立てられる  
のを私は恐れた。

私はもう『表』には戻れない。それだけ人を拒絶してきたんだか  
ら。

人が怖い、そいつらの声が怖い、人との接し方など忘れてしまっ  
た。幼稚園児よりも人と接するのが下手かもしれない。

私には隣人部しか、小鷹しかいないんだ。だから『裏』で、かつ  
ての世界を取り戻す。

その世界を再現するのが私の目的。

「さてと、午後の授業か……」

昼休みが終わり、小鷹が教室に帰ってきた。  
やつが一瞬私の顔を伺つたのがわかった。私が常日頃柏崎のこ  
とを敵視していたせいだろうか。

何食わぬ顔……なんてできるわけもなく、相当不機嫌な顔をして  
いたのだらう。小鷹が私の顔を見ておびえた気がした。

いつたい柏崎となんの話をしていたのだろうか。まさかすでにやつも柏崎に取り込まれてしまったのか……

早くその内容を聞かないと、午後の授業がいつも以上に長く感じた。非常に腹立たしい……

ようやく午後の授業が終わり、小鷹と一緒に部室へと行く。何一言も話さずに……

これもすべて、柏崎のせいだ!!

「小鷹、ちよつと話がある」

部室に来て早々、私はいつも以上に低い声色で小鷹に話しかける。運がいいことに、まだ私と小鷹の二人だけだった。

他の部員が来ないうちに、さつさとケリをつけてしまおう。

「やっぱりそうくるか……」

小鷹はやはりといった顔をした。恐れていたことが起きてしまったといった顔にも見えた。

だが奴が、この部室にとってのラスボスである柏崎が自ら前線に出てきた以上、私も落ち着いてはられない。

「柏崎と何を話していた？」

「……別に」

私の質問に小鷹はそっぽを向く。

「答えたくないのか？」

「素直に言ったらお前多分キレルぞ？」

「……言え、キレないように努力する」

私のその言葉を聞いて、小鷹はため息を一つついた。  
そして一つ二つ間をためて、勘弁したかのように答える。

「柏崎もこの部活入りたいんだとさ」

「いやだ。やつ顔を毎日見なきゃいけないなど考えるだけで吐き気がするわ」

何を言い出すかと思えば、あいつがこの部活に入りたいたって？  
あいつはリア充なんだぞ？ 私たちと違って他の人にチャホヤされて、毎日が充実してるんだぞ？

そんなやつ、この部活に入る資格なんてあるわけがないだろ。

小鷹も私と同じ考えでいてくれるはずだ。なんて期待をしていると小鷹はまた溜息をついてこう言った。

「ひとつ言わせる、あいつはお前が思っているような最強のリア充なんかじゃねえ」

なんでそんなことを……

どうしてそんなことを言っただ？

「小鷹？まさかお前もやつに魅せられたのか？」

私が恐る恐る聞くと、小鷹は若干顔をしかめた。

そして強い口調で……

「前から言おうと思ってはいたんだが。人を見かけで判断するのはやめろ」

「はあ!？」

「お前は人を拒絶しすぎてんだよ。お前だって美人で綺麗なんだから頑張ればそれなりに人と付き合っていくことだってできたはずだ。

過去に何があったかはしらねえけどさ、そのうちマジで大事なもの失うぞ」

私は小鷹に説教された。

人を見かけて判断するな……？拒絶しすぎだ……？大事なものを失う……だあ？

ふざけんな……ふざけんな……

「いったい誰のせいだと……」

「え？」

私はそう言いかけて止めた。

そうだよな、そうなんだよなあ……

私は全ての事情を知っているが、お前は知らないんだよなあ……私が人を拒絶するのも、この容姿を持ちながらいつさい人と付き合わなかったのも、エア友達なんて変な趣味を発現させたのも……全ては『あの日』があったからだ。だけどお前は知らない。何も知らない。

「安心しろ。大事なものなら……もう失ってるよ」

私は皮肉をこめてそう呟いた。

失ったさ、だけど今それを取り戻そうと必死に足掻いているんだ。ああ馬鹿らしい、もう考えるのはやめよう。何をむきになっているんだ私は……

柏崎を入部させる気持ちなどこれっぽっちもない、小鷹には悪いがやつが私たちの仲間になることはないよ。

それでも柏崎が無理にでも入部しようなら、小鷹を誘惑しようものなら……

私は、鬼にでも悪魔にでもなつてやるよ……

翌日……

「さてと、今日は何をしようか……」

次の日の放課後、部員が全員集まったので気分を変えるため何かをやらうと考えていた。

昨日のこともあって小鷹とは険悪な雰囲気になるかとも思ったが、私がいつもどおりに話しかけたらやつもいつもどおり会話に乗ってくれた。

小鷹からすれば私の機嫌を伺っていたのだろう、心配するな私は嫌なことはすぐに忘れる人間だ。

「そうだな、リレー小説でも……」

私がそう言いかけたときであった。

ドンドン……

部室のドアの音が鳴った。

部室には全員そろっている。ケイト先生は今日は仕事があると言っていた。

ということとは……やつか。

私は冷ややかな目でドアを見やり、すぐさま視線をみんなの元へ戻した。

「夜空先輩、誰か部室にきたみたいですよ」

ドアの音に誰も反応しないのを見かねたのか、理科がそう私に聞いてきた。

あのドアの向こうにいるのは間違いなく柏崎だ。ドアを開けたところで意味などない。

「放っておけ、嫌がらせだ」

私はそう言っ、話を本題に戻そうとする。

放っておけば、自然に帰ってくれるはずだ。頼むからさっさと帰ってくれ。

次第にドアの音が強くなる。たのむから帰ってくれ。

ここはお前が来るような場所ではない、頼むから帰ってくれ。と、私がそう願うなかで小鷹が椅子から立ち上がった。

おい、小鷹余計なことは……

がちゅり……

小鷹がドアを開けた。

そこには案の定、柏崎星奈が立っていた。

「ちょっと！どれだけドア叩かせんのよぶざけんじゃないわよ！！」

柏崎は何かとわめいていた。

この距離では、やつを追い出すのは至難の業。ましてやドアの近くには小鷹がいる。

小鷹が私を一瞥し、そして……

「ま、入れや」

「さっすが小鷹くん！話わかるじゃない！！」



そういつて柏崎は部室へと入ってきた。

小鷹くん、とやつは小鷹を名前で呼んだ。何名前で呼んでるんだよふざけんな。

私は柏崎を睨む前に、小鷹をいつも以上に鋭く睨む。なんでそんなやつ部室に入れた？お前もお前でふざけるな。

小鷹は一瞬脅えたが、私から目を背けることはなかった。そしてこう一言。

「じゃねえとこいつ毎日やってくるぞ？そんならこころで話だけ聞いてやれよ」

なんでこいつの話聞きかなくやいけないんだ？

なんでリア充の自慢話を聞かなくやいけないんだ？

とか私が思っていると、柏崎は私など目もくれずにどかんと部室のソファに座った。

部室の全員が、そんな柏崎に釘付けだった。

「さてと、あんたが部長の三日月夜空ね？ずっと言いたいことがあるんだよ」

そういつて柏崎は強気に出てきた。

とうとうここまで来てしまったか……

柏崎星奈。成績優秀スポーツ万能、巨乳でスタイル抜群でおまけに美人。

私以上のスキルを持ち、数々の男子どもに祀りたてられている究極のリア充。

こんなやつがどうして、隣人部に……

何にしろ、対決の時は来たということか……

面白い……柏崎星奈、貴様の入部など絶対に認めやしない。

小鷹にも近づけさせはしない、この部活に貴様の色で染めさせやしない。

貴様のようなリア充などに、私は負けはしない……

この隣人部は、私の部活なのだから……

儂クモ永久のカナシ（前書き）

第18話です。

「三日月夜空」視点。

## 儂クモ永久のカナシ

「さてと、あんたが部長の三日月夜空ね？ずっと言いたいことがあるんだよ」  
「なんだ？」

柏崎の言葉に私は低めの声で答えた。まるでそれは威嚇するよう  
に……

「私ね、この部活に入部したいのよ。入部届けもちゃんと持ってきてるんだから」

「ほお？この学園の男子共に崇められている女王様がこんな負け犬集団の部活にですか？」

私は皮肉をこめてそう答える。

「言っておくけども嫌がらせとかじゃないわよ？ちゃんと友達募集っていうポスター見てきたんだから」  
「……あのポスターの真意を見破ったというのか？」

正直言つと意外だった。

そもそも友達の多いリア充はこのようなヘンテコな部活に興味ない抱かない。

もちろんそれは私の計算のうちだ。そもそもこの部活は『私と小鷹』のものなのだからな。

計画通り2週間小鷹と一緒に部室にいたが、この男がこれまた予想以上に鈍感なもんだからその時点で成果は実らなかったのだが。その後色んな奴らが入部してきた。

創部当初ならどんなやつでも入部を断ろうと思っていたが、2週

間も二人だけの中でやってきた貴重な入部希望者を断るとさすがに小鷹に怪しまれると思つて理科や幸村や小鳩は入部させた。

だけどこれ以上は私にも余裕はない、ましてや柏崎星奈など本気で断りだ。

真意を見破つたとしても、もうあんなポスターなど関係ないんだから。

「入部条件はクリアしていますね」

「どうするんだ夜空？」

理科と小鷹が私の顔を見る。

この状態でこいつの入部を断るのは至難の技だった。

そもそも部長の権限だけで入部を断る自体が傲慢にしなければならない、下手に追いだすとこいつらに見限られる可能性も……

理科や幸村から見捨てられるのなら私自身は別にかまわないが、小鷹にだけは見捨てられたくはない……

「……考えさせてもらつ」

「なによそれ？」

苦肉の策だった。

これは時間稼ぎにしかない、そしてそれも長くは続かない。

そしてこれは私が柏崎に追い込まれているという結果でしかない、屈辱だ。

卑怯だ。私と二人きりなら一方的に言えるがこつも周りに人がいると私も思うように動けない。

だが考える。どうにかしてこいつの入部を拒否する方法を……

こいつだけは、この部活に入れたくないんだ。わかってくれよ小鷹……

だけどそんな小鷹は、私に対して呆れていた。

「ま、じゃあまた後日来るわよ」

柏崎は納得いつていないようだったが、今日は帰ってくれた。

やつ姿が見えなくなると、自然と私の緊張がほぐれた……

他のやつらの反応をうかがうと、疑いの目で私を見ていた。

やはりというべきか、私の評価は多少なりとも下がったらしい。

それもそのはずだ。

小鷹や理科や幸村や小鳩がよくて、柏崎がよくない理由なんてないのだから。

これは、ただの私のわがままなのだから……

「夜空、柏崎が苦手なのはわかるが、かといってこのままずっと」  
まかし続けるつもりか？」

帰り道、小鷹は少し不機嫌な顔でそう私に聞いてきた。

私の行動に多少なりとも不満があるらしい。

「……あいつはリア充だ。リア充は隣人部に入る資格はない」

「つたく、お前はもう少し話がわかるやつだと思っていたが……」

「小鷹？」

いつも以上に、小鷹の態度が冷たかった。

その言葉一つ一つが、私の心に突き刺さる。

哀れみなのか、蔑みなのか。その表情が嫌悪の表情だということ  
はすぐにわかった。

だけど、これは全部お前のためにしてきたことなんだ。

お前のために、羽瀬川小鷹のために私は……

「俺はお前を嫌いにはなりたくないんだ。頼むからこれ以上俺達を

失望させんな」

「え……？」

「お前には俺みたいになつてほしくない。俺は……たった一人の大切な親友にさえ何も言えずに置き去りにしたクソ野郎だ。その親友もお前ほどではないが人嫌いで、俺以外に友達がいなかったそうだし、それって、『ソラ』ってやつのことか？」

その『ソラ』は間違いなく私のことだ。  
だけど私は他人のふりをして、そう小鷹に質問する。

「俺以外に友達がいなくて、そう知っていて俺はそいつに何も言わずにこの町を去った。俺が急にいなくなってそいつはどう思ったんだろうか、他に友達でもいればまだ救われていたはずなのに……」

それをわかっていながら、なぜ……

「今の俺には願うことしかできねえ。俺のことなんてきっぱり忘れて、あいつがいつも言ってた「100人分大切にできる親友」をつくっていることを。俺にはその資格がなかったから。だから俺に変わる最高の親友をつくっていることを……」

小鷹……すまない。

私はお前のその願い一つすら叶えてやることはできない。  
お前に変わる最高の親友などいるものか、私にはお前が全てだった。

お前のその悲しそうな顔に手向けできる顔を、今の私には持ち合わせてはいない。

と、私たちが重い空気で帰り道を歩いていると。

「てめえあんま調子乗んなよ！」

「あんだこそ何私に向ってそんな口聞いているのよ!!」

帰り道の途中、柏崎が男3人組と揉めていた。

全員髪を染めた、チャライやつらだということが遠目で見てもハッキリとわかった。

どうやらナンパされているようだ。さすがは学園一の美少女。

だがやつが何か言うたびに男どもの表情が強張っていく。

柏崎星奈、こうも性格が悪い女だったとは……それでは追い払うどころか返って逆効果だぞ。

「おい夜空、あれやばいんじゃないのか？」

小鷹が心配そうな顔であるの状況を見ている。

だが今は眺めている。そもそもやつを救う義理など持ち合わせてはいない。

男どもが何か言うたびに星奈も罵声を浴びせている。そこらのチャラ男になら口喧嘩で勝てるレベルか。

口喧嘩では男子よりも女子の方が強いというのはやはり本当のことか。

だが柏崎の足元を見ると、ぶるぶると震えているのがわかる。

あいつ……内心は怖いのか？

「おい、この女足震えてんぞ」

一人の男が指摘すると、星奈の表情が強張った。

そして必死に言い返すが、怖がっているとわかれば状況は男どもが有利。

むしろ憎たらしさがかわいらしさへと変わっていく、弱い犬ほどよく吠えるというからな。

言い返すたびに柏崎の目が半泣きになっていく、正直言つといい



気味だった。

だが……気に食わない。

柏崎じゃない、あの男どもが気に食わない。

弱いやつ一人によってたかって、馬鹿なんじゃないのか？低脳さがよくわかる。

……気に入らないな。

「おい、夜空……？」

気が付くと、私は柏崎の元へと向かって行った。小鷹の言葉など耳に入ってはいない。

おいおい、あいつを助けるといふのか。そんな義理はないはずだ。だけどあの男どもが気に食わない、柏崎も気に食わない。

そしてあの光景を黙って見ているだけの私自信が『気に食わない』

くっ……私は我慢弱い。

気が付くと私は柏崎の前に立っていた。そして男どもに一言。

「弱い者いじめはやめろ」

「……………え？」

私は男どもにそう言ってやった。

「なんだてめえ！？」「その女をかばうのか！？」「その女が悪いんだろうが！！」

「ボキャブラリーが貧困だな、幼稚園からやり直せ」

と、喚く男どもを私は睨みつけた。

そいつらが怯んだのがわかった。どうやら悟ったのだろう。

しばらくそいつらは仲間とボソボソと何かを話し、そして……

「ちっ、んだよ馬鹿らしい」「帰ろうぜ」「マック行こうや」

などと言って去ってゆく。

素直な馬鹿はこれだから助かる。にしても結果的に柏崎を助けてしまった

自分の我慢弱さがいやになる。だがこれで結果オーライだ。あとは黙っていれば……

「待ちなさいよこのウジ虫ども!!」

おい……

せつかく素直に引き下がってくれたというのに、なぜこう火に油を注ぐとするかな……

星奈のその挑発に、男どもはカチンときたのか。

「んだとこらあ！ やっちまうぞ!!」

と拳を向ける始末。

だがこうなってしまうては私一人ではどうにもできんぞ。

私とてそれなりに喧嘩は強いが、男三人は無理だ。

男が星奈に掴みかかろうとする。一人くらいなら……と私はその腕を掴み静止した。

「おい放せくそアマア!!」

「暴力はいけないだろ」

「こんなにボロクソ言われて黙ってるって方が無理だろうが!! つかお前もそれなりにかわいいやつだな、ならてめえらまとめて!!」

はやりこう来るか。

私が本当に男ならなんとかできたのだが……  
くそ、小鷹助ける……小鷹！！

パシッ！

と、私を掴みかかろうとする男の腕が止まった。

小鷹がそいつの腕を掴んでいた。そしてそいつを締め上げる。他の男どもが一斉に小鷹を睨むが、ここからが小鷹の強みだ。あいつの恐面に、にらみ合いで勝てるわけがない。

「すまねえな、今の俺は……無性に機嫌が悪いんだ」

その顔は私でさえ怯えてしまいそうだった。

というか、本気で怒っているようだった。

男3人は怯えて逃げ出した。ご愁傷様だ。

「あ、あんたらって本当に強かったのね。さすが学園で恐れられている二人組だわ」

嬉しくも何ともない言葉が星奈から飛び出した。

にしても小鷹、お前結構喧嘩強かったんだな。びっくりしたよ……

お前もこの10年間色々あったのだろうか。近くにいて心強い存在だと改めて認識した。

いざって時は来てくれる。やはり貴様は私の最高の……

「にしてもまったく身の程をわきまえてほしいものね。これだから頭の悪い奴は困るわ」

とかなんとか、柏崎は呑気な事を言っている。

身の程をわかっていないのも、頭の悪いのも全部お前のことだ。

私は冷ややかな顔をしていたが、小鷹は違った。

「あ……頭が悪いのはお前だ馬鹿野郎!!」

意外なことに、小鷹が柏崎に対してキレた。

さっきまで暗い雰囲気だっただけあって、色々ため込んでいたものを吐き出すかのように小鷹は怒り心頭だった。

小鷹が本気で柏崎を睨み上げる。

「な……なによ、この私が褒めてあげてんのよ！なのにあんた、私に向ってお説教!？」

「そつだよ説教だよ!! あいつらはまだ大人しかったからいいけども、世の中にはもつとタチの悪い奴らとかいるんだよ!! 変なのに喧嘩売ったら取り返しのつかないこともあるんだよ! 一人でなんでも解決できると思ってるじゃねえよ!! 助けてもらっておいて何も言わずに女王様キャラ取りやがって、ふざけんじゃねえよ!!」

「うっさいわね! その時はその時よ! 小鷹には関係ないでしょ!!」

柏崎のその発言には、さすがに私もキレそうになった。

この女、助けてもらってその態度はないだろ……

だが私よりも先に小鷹が叫んだ。

「関係ないわけないだろ!! 困ってるやつを助けるのにどんな理由があるってんだよ!!」

「か……関係なくないって……」

小鷹の叫びに、柏崎は観念した。

私自身も、その叫びを聞いて一歩も動けなくなっていた。こんな小鷹は見たことがない。

10年前ですら、こんなに怒った小鷹は見たことがなかった。

こうして柏崎は「ごめん、ありがとね」と呟いてその場を去った。なりゆきとはいえ、私たちは柏崎を助けてしまった。宿敵を助けるとはなんと情けない……

「じゃあ小鷹、また明日な」

柏崎を救った帰り道、私は小鷹に別れを告げる。去り際、小鷹はなにやら真剣な顔で……

「夜空、お前……」

「なんだ？」

「……いや、なんでもないさ」

何かを言いかけてやめた。変なやつだな。

こうして私は家へと向かった。

翌日。

小鷹とともに部室へ行くと、私達よりも先にみんなが揃っていた。そしてその中に柏崎もいた。

昨日のこともあってか、柏崎とは目を合わすのをためらう。

そんな私の元へ、柏崎がやってくる。

「ねえ、私も隣人部に入りたいのよ!」

私は何も言えなかった。

他の部員の視線も気になる。断ることもできないし、昨日みたいに考えるととも言えない。

躊躇する私を見て、柏崎が徐々に涙目になる。

そして、こっぴど叫んだ。

「私も友達が欲しいのよ!!」

心の底からの叫びだった。

この叫びに、私たちは何も言い返せなかった。

その叫びに嘘偽りなどなく、柏崎がリア充ではないことが伝わっていた。

やつも、私たちと同じだった。

これには私もたまらず……

「わかった。わかったから好きにしろ」

私がそう言うと、柏崎の顔がパアッと明るくなった。

他の部員たちも、重い空気から解放されたかのように笑顔を取り戻した。

「ってことでよろしくね!あと、昨日はありがとう」

貴様に感謝などされてもうれしくない。

感謝するくらいならさっさとこの部から出て行ってくれ。

こうして柏崎星奈が隣人部に入部した。

そしてこれから先、この女は私の全てを奪ってゆく。

これまでうまくいっていた私の計画は、この女によって崩れてゆく。

-----

なぜだろう、あの時もあの時も小鷹のそばには柏崎がいた。  
私が小鷹のためになにかをする度に、やつは私の想いを根こそぎ奪い取って行った。

私のやることが全て裏目に出て、どんどん小鷹は私にかまってくれなくなった。

柏崎だけじゃない。理科も。幸村も。小嶋もマリアもケイト先生も。小鷹小鷹とうるさかった。

私はそいつらよりも自分の気持ちを伝えるのが下手だったから、いつもほかのやつらに劣っていた。

姑息な真似が大嫌いな私であるが、姑息な真似に頼るしか方法がなかった。

だけどそれらは私に結果を及ぼさなかった。全部それらは裏目に  
出て……

あいつらばかり小鷹と話して、あいつらばかり小鷹と楽しく、  
あいつらばかり……

私が用意した舞台を乗っ取って、めちゃくちゃにして……

小鷹はあいつらに奪われてゆく、柏崎に……『肉』に奪われてゆく。

憎いなあ……とてつもなく憎い、憎くて憎くてしょうがない。

憎いよ、憎い……憎い憎い肉い肉い肉い。

小鷹を想う度に、小鷹への愛が膨れ上がるたびに憎しみも大きくなる。

強大な『愛』という感情を抱けば抱くほど、強大な『憎しみ』という感情も生まれ出る。

約束したのに、「100人分大事にしてくれる」って言ってくれたのに。小鷹と私は気付かず通り過ぎていく。

肉や理科や幸村を憎んでも小鷹を憎むことはできない。だってお前がいなくなったら私には何が残るといふのだ？何も残らないじゃないか。

小鷹にとつての100人分大切な親友は私だけだといふのに、こんなにも小鷹を想う私の気持ちは空回るばかりだ。

嫌だ。そんなの嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

せつかく再開したのに、この世界に絶望しながらも私は待ち続けただのに……

ようやくお前と、会えたのに……

そんなお前がまた、私の元から去っていく。

そんなお前が、誰かに奪われる。

私という親友に、気づかずま……

「全てが『なかったこと』にされてしまう……」

なんとかしなければ、なんとかしないと。

もうあんな思いはしたくない、だから私は取り戻す。

この『愛』が『憎しみ』に変わる前に……



## 儂クモ永久のカナシ（後書き）

タイトル名はUVERworldのあの曲から取りました。

作者がずっと使いたかったタイトルでもあり、この二次創作を作る上での原点ともなった曲です。

別のアニメの主題歌なのですが、その歌詞の内容が夜空と小鷹の關係性にうまくシンクロしていると作者は思いました。

今は歌詞転載などの規制が厳しいので歌詞などは載せません。

聞いたことがない方は是非とも聞いてみてくださいね。

狩りの始まり（前書き）

第19話です。

「羽瀬川小鷹」視点。

## 狩りの始まり

「お前ら、PSPは持っているか？」

うちの部活の部長はいつも急に物事を言いだす。

今回はいきなりゲーム機を持っているかという質問だった。

「持ってるけども」

「持ってますよ」

「もっています」

「もつとる」

俺、理科、幸村、小鳩はYESと答える。

PSPとは、DSと対をなす携帯ゲーム機で今時の若者にとっては生活必需品ともなってるらしい。

俺と小鳩は「鉄のネクロマンサー」のPSP版が出るって話があった際に小鳩と一緒にやろうというので一緒に購入した。

理科はゲームのプログラムとか依頼されるくらいだから、それくらいのゲーム機器は持っていて当然だろうな。

にしても意外なのは幸村だ。あいつゲームとかやるんだな。男の子っぽいところは少しばかりあるようだ。

「なんだそれ？」

「持っていないけど」

そんな若者の生活必需品を持っていない者がこの部活に二名いた。一人は高山マリア、まああれはシスターだっていうのと姉が厳しいから仕方ないか。

もう一人は先日この部活に入ったばかりの柏崎星奈、前にギャル

ゲームを持って来たときはゲーム好きなのかと思ったが携帯機は持っていないのか。

「やはりゲームだと思うんだ。ゲームが一番友達作りとして手っ取り早いと思う。話の話題に協力プレイに個性の発揮、私たちは遠回りしすぎたんだなあ。なぜもつと簡単なところから入らなかったんだらうか……」

とかなんとか夜空がぶつぶつと言っている。素直にみんなでゲームがしたいならそう言えばいいのに。

PSPは協力プレイが売りだ。CMでもよく「俺と対戦しようぜ」とか言って若者の中に入り込む光景を見る。

演劇だったりリレー小説をやるよりは役に立つことばかりだろう、本当になぜもう少し早く気付かなかったものか……

「んで、なんのゲームするんだ？」

「それはもう決まっている。大人数で楽しめると言えばこれだろう」

そう言っただけで夜空は鞆からゲームを取り出した。そのゲームこそ、

『モンスター狩人3インフィニティG』

今若者の間で最も流行っているハンティングアクションゲームのである。

モンスター狩人 通称『モン狩』。

ファンタジー世界で狩人となり、様々なエリアで巨大なモンスターを狩っていくというゲームだ。

モン狩3IG（モンスター狩人3インフィニティGの略）は上記シリーズの最新作。シリーズ初のネットワーク対応。

モンスターも3Gの時に比べ2〜3体追加されており、武器も前作までの18種類に加え『ハンターユニット』『巨神兵』が追加されている。

「というわけで来週全員PSPとモン狩3IGを持つてくること。持つていないやつは買ってこい。忘れてたりしたらみんなが楽しくゲームしてるところをただ見てるだけになるぞ」

夜空は淡々とそう言った。

簡単に買えというけども、ゲーム機つたつてそんな学生が簡単に買えるもんじゃないだろ。

ちなみに俺はモン狩も持つてる。もちろん小嶋も。

理科と幸村も持つてるらしい、PSP持つてるやつのは大半はモン狩も持つてるといふ話は本当だったんだな。

ところで持つている俺たち5人はいいが、星奈とマリアはどうするつもりなのか。

星奈は金持ちだからなんとかなりそうだが、マリアは……

まあその時考えればいいか、今日は解散した。

そして土日、俺と小嶋はあいつらとゲームをするのに備え暇があればモンスターを狩っていた。やっぱりいいところ見せたいからな。

そして月曜日……

「みんな持つてきたな。忘れたやつはいないだろうな？」

と、夜空は星奈の方を見る。

星奈は予想通りというべきか金に物を言わせて買ってきた。金持ちはいいですなあ。

星奈のPSPを見て夜空は軽く舌打ちをする。やっぱり除け者にする気だったんだなお前……

夜空と星奈は非常に仲が悪い、星奈が隣人部に入ってからというもの二人はしょっちゅう喧嘩をしている。

最近騒がしくなったなと思ったら、この二人の他愛もない喧嘩であつた。まったく……

PSPの件に戻るがあとはマリアだけか、とマリアを見ると浮かぬ顔をしていた。

「ばばあがゲームはだめだと言つたのだ……」

ああやっぱり。

一介のシスターさんがゲームというのはやっぱりだめなのね、でもこのまま除け者にするのは後味が悪いな。

と、そんな時である。

「ほら私のもう一つのPSP貸してあげるわよ、モン狩も入ってるわよ」

星奈が鞆からもう一つのPSPを取りだした。つうか2個買ったんかお前。

マリアはそれを受け取り喜んでるが、なんで2つも買ったんだ？

「え？だってこれ協力プレイとかあるんでしょ？2つあつた方がいいじゃないのよ。それにマリアが仮に持ってこれなかつたらって考えたらちよつとかわいそうだし」

星奈はそう言うが、いくら金持ちとはいえPSP2つをなんのためらいもなく買えるとかすげえな。それに加えゲームソフトも二つだろ……

金に物を言わす、といえは聞こえは悪いが。マリアのことを考えた上でならこいつなかなか仲間思いなやつだな。

夜空はそんな星奈を気に食わない顔で見ているが……

「とりあえず全員が持つてきたということ、さっそく始めるか。お前たち端からハンターレベルを言っていけ、ちなみに私は4だ」

夜空が言うハンターレベルとは……

ハンターレベルは1から6まであり、1が最低で6が最高。

レベルを上げるためにはそれぞれのレベルにあつたクエストのキーとなるクエストをクリアしなければならんだがそれがまた難しいのよ。

1から3のレベルは下級クエストしか受けられず、上級クエストを受けるには4以上にならないといけない。

武器も3までだと『大剣』『片手剣』『ハンマー』『ランス』『双剣』『太刀』『狩猟笛』『ガンランス』『スラッシュアックス』『ボウガン』『弓』しか使えない。

4以上で『拳銃』『鞭』『ステッキ』『グローブ』『爪』『鎖鎌』『鎌』が解禁される。そして今回目玉の『ハンターユニット』と『巨神兵』はレベル6で解禁となる。

というわけでレベルというのはとても大切な要素なのだ。

「俺は6」

「理科も6です」

「わたくしは……ひみつです」

「うちは4じゃ……」

俺はレベル6、小鳩とやっているうちに最高レベルまで上がってしまったのだ。

小鳩はあんまり得意ではないのか4止まり、実のところ土日までは3で止まっていたが上級に参加するため4までなんとか上げた。

理科はゲーマーなのか当り前のように6、幸村は……ひよつとしたらあまり得意ではなく恥ずかしくて言えないのかな。レベル低いなら協力するぜ。

マリアは言わずともさつき渡されたばかりだからレベル1だろう、そして星奈も買ってまだ3日くらいしか経っていない。ソロプレイで頑張ったとしてせいぜい3くらいか……

「私は6よ」

「6……………!?」

得意そうに言う星奈に俺と夜空は驚きの声を上げる。

おいおい6つていえば最高ランクだぞ、俺だって小鳩と協力しても1か月近くはかかったつていうのに……

それがソロプレイで、土日の休日だけで6だと？おいおいそんなわけが……

「ちよつとPSPを貸せこの『肉』」

「あつ、ちよつと返しなさいよ!」

夜空が無理やり星奈からPSPを奪う。つつか肉つてなんだよ……

「プレイ時間53時間……だと……!?」

夜空がギョツとした顔をした。

そしてそれを聞いていた俺と理科もピクリと反応をする。

ちなみに俺、羽瀬川小鷹のプレイ時間はざつと80時間程度。一か月以上でそれくらいである。

それに比べて星奈はたった3日で53時間、3日で俺の半分以上をやりこんでいる。

こいつ、もしか……

「星奈先輩、この土日をモン狩で潰しましたね」

「よくやるよ……」



俺と理科は思わずその行為に感心すら抱いた。

「しかもなんか知らないアイテムむっちゃ持つてるし！装備もかわいいし！生焼け肉のくせに生意気だ！！」

「ちよつと何すんのよ！！」

夜空はよほど悔しいのか、星奈にPSPを投げつける。

にしても夜空は悔しがっているが、俺は内心、少しだけ星奈を見直した。

あれだけ隣人部に入りたいと言っていただけあって、非常に部活に力を入れている。

寝る間も惜しんで何十時間もゲームをするなんて並大抵のことじゃない。まあ体に悪いので良い子のみんなはそういうことをしちゃだめだぞ。

こうしてモン狩が始まった。

最初は俺と夜空と星奈と理科のチームで行くことになった。幸村と小鳩とマリアは3人で別のクエストに行っている。

ホストは200時間やっているという理科が、と言いたいところだが星奈が自ら志願したため星奈がホストをやることに。

ちなみに理科のデータを見せてもらうと、理科の名前（モン狩内では「フェニックス」）の横には銀の王冠マークがついている。

これはゲーム内で色々と記録を残しているという証拠である。銀を取るだけでもかなり難しいらしい。

ちなみに銀の上には『金の王冠マーク』が存在しているわけだが、金の王冠マークがついているプレイヤーは銀よりもはるかに少ないという。

このゲームはネットワーク対応なのだが、金の王冠はそのネットワークでも特定の記録を残さなきゃいけないらしく、真のやり込み

プレイヤーのみが手にできる称号だとか。まあ俺たちには関係のないことさ……

話を戻すが、それぞれ4人が操作するキャラが集会場へと集まる。クエストはそこで受注するのだ。

ちなみにこのゲームでは自分の分身となるキャラの性別、体格、顔、髪型、目の色から髪の色まで細かく設定でき、装備によってグラフィックも変化する。

夜空も星奈はそれなりに見栄えのいい格好をしている。理科の装備は配信クエストで手に入るSMスーツ……おい。

そして俺もそれなりの装備を用意してきた。武器は太刀、頭装備は特殊なピアス（防御は低いがスキルが付く）でそれより下はプラチナリオ一式だけ。

「なんだその姿は？」

夜空が意地悪そうに笑う。

「おいおいなぜ笑う？プラチナリオ装備は作るのにかなり手間かけたんだぜ？このピアスとうまくスキルが合うようにコアも念入りに考えてだな……」

「装備は確かに立派だな、じゃなくてキャラ自体のことだ」  
「……」

俺のキャラは男で、髪はプラチナブロンドの長髪だった。

「ぶつ……なに？小鷹はそんなロン毛の外人になりたいわけ？」

「顔も美少年系ですし、しかも名前も【ホーク】ってありきたりですねえ。鷹だからホークなんですか？」

星奈と理科も便乗して笑う。

「ほっとけ！ゲームのキャラなんだからちょっとくらいかっこよくしたっていいだろ」

駄目だししてくる3人に俺は憮然とした態度で言う。

ちなみに星奈の大剣使いでキャラは顔も髪型も体格も本人そっくり、おまけにキャラ名も【星奈】。どっだけ自分こと好きなんだこいつ。

夜空は弓使いで顔以外は本人とそっくりだった。キャラ名は【NIGHT】。

「【NIGHT】か……」

「ん？どうかしたのか？」

「……いや」

俺は何かを言おうとしたがやめた。今はやめておくさ。

理科のキャラは特殊装備なので外見そのものが変わる。てかSM装備で武器も鞭っておま……

「それじゃ狩りに行くぞ」

こうして【ホーク】【NIGHT】【星奈】【フェニックス】の4人が火山へと足を運ぶ。

火山では冷やしドリンクを飲まないと一定のダメージを受けてしまう。たまに忘れる奴がいるんだよねドリンク……

先行したのは【NIGHT】、続けて俺たちが走り出した。

次の瞬間。

ズバシュッ！！

【星奈】が装備した大剣『カラミティブレード』が【NIGHT】の背中を切り裂いた！

カラミティブレードの威力は半端なく、【NIGHT】は一撃で死んでしまった。

「何をするんだ肉!？」

「あは、ごめんごめん操作ミスっちゃった。てへっ」

ものすごい形相で星奈を睨む夜空。それにしれっと答える星奈。その光景を見て、理科が星奈にこう質問する。

「星奈先輩、まさか味方攻撃をONにしてクエスト受注したんですか？」

「ごめんごめんそこらへんも間違えちゃって……」

このゲームは1回死ぬと死んだプレイヤーは最初の地点に戻る。全てのプレイヤーが合計で3回死ぬとクエストは失敗となる。そしてプレイヤーの攻撃はモンスターだけでなく味方にもヒットする。ちなみにこれはクエストを受注する前に味方攻撃をOFFにすることで解決できる。

なぜこんなとんでもないシステムがあるかというと、時と場合によつては味方を殺すことが必要となるクエストもあるかららしい。今やっているクエストはそんな必要がないため、ぶっちゃけていうとこのシステムはトラブルの種にしかない。

そして星奈もレベル6ということは、そんなミスなんて絶対にしないしこのシステムもわかっていたはず。

はいはい、お前が53時間頑張った理由が今わかりましたよ。

「そうか……操作ミスなら仕方がないな、じゃあ……行くか」

感情を押し殺した声で夜空が言った。

【星奈】が走り出し、【ホーク】と【フェニックス】もそれに続く。

しかし【NIGHT】だけ逆方向に走り出し、ある程度距離が離れたところで……

「あーボタン間違えたー」

と、間違えた割に強撃ビンで【星奈】めがけて弓をぶつ放した。しかもたたみかけるようにいるんなビンで撃ちまくるものだから、さすがの【星奈】も耐えきれず頭から血を噴き出し倒れた。

「すまんすまん、最近モン狩やってなくてな。ちょっと試し打ちを試し打ちというレベルではなかったんだが……」

「あんた絶対わざとでしょ!?!」

そして【星奈】が死んだため、再び俺たちはスタート地点に戻った。

まだモンスターの姿すら見えてないってのに。

「「うおーーーーーー!!」」

「ストップストップ!!」

始まるや否や二人がそれぞれを攻撃し始めた。

こうなるとなんとなくなわかっていた俺は、激運付きのプラチナリ才装備で二人の攻撃を受け止める。

「お前ら少しは落ち着け!なんのためのモン狩だ!」

俺は思いつきり言ってやった。

味方殺しっつっても協力の一環でやる高等テクニクだ。それを

思念でやられては困る。

まったくハンターのマナーくらい守ってくれ……

バシン！！

とその時、後ろにいた【フェニックス】が【ホーク】を鞭で叩いた。

「なん……だと……？」

「小鷹先輩、隙だらけですよぉ」

理科はデスクートの主人公張りの笑顔でそう言った。

先ほどのダメージもあり【ホーク】は死亡。これで3回死んでクエストは失敗である。

「なにしやがる……」

クエストが終わり俺は理科に問いただと……

「最近先輩が私を雑に扱うので、少々根に持っていたうっぶんを晴らそうかと。あとどうせなら私がとどめをさそうかなって……」

思わぬ伏兵だった。

先ほど仲間を殺し合う二人を説教したばかりだったが、その二人の気持ちができるとは。今無性に【フェニックス】を殺してえ！こりゃあ今の4人で組んでも結果にならない、夜空と星奈、俺と理科のコンビは極力避けた方がいいだろう。

ところで幸村達はどうなっているのか、あっちは平和そうではないなあ……

「あはは幸村すごいのだー」

「クッククク……まさかこのような者がおるとは……」

3人をよく見ると、やっているのは幸村だけで後の二人は幸村のやっているのを見ていただけだった。

いったいどういうことだ。とそこでマリアが何気なくこう言った。

「にしても幸村うらやましいなー、名前の横に『金の王冠』がついててかっこいいぞー」

「……………え？」

そう、このモン狩の本当の真の覇者は、意外なところに存在していたのであった……

狩りの王、幸村（前書き）

第20話です。

「羽瀬川小鷹」視点。



## 狩りの王、幸村

それは、信じられない光景だった。

楠幸村。

男子の制服を着ていながら少女のような顔をしている。性格はともおっとりで、天然なところもあってそれがまたかわいいい。

男らしいが、男が引きつけられそうなその笑顔。ナイスです。とてもゲームなんてするイメージなどありません、メイド服でも着てお茶を注いでくれているような……そんなイメージです。

「にしても幸村うらやましいなー、名前の横に『金の王冠』がついててかっこいいぞー」

「え？」

「はあ!?!」

「なんですと!?!」

マリアの何気ない一言にとっさに反応したのは俺と夜空と理科だった。

星奈はレベル6であるがやり始めのため金の王冠の価値をわかっていない。

俺たちはすぐさま幸村のプレイを見に行く、すると……

「あ、あにき。もうすぐクリアおわりますのでおわったらいっしょにくえすとにいきましよう」

しゃべりかたはいつもの幸村であったが、注目すべきPSPを動かすその指はそのしゃべりの3倍は早かった。

まずはPSPの持ち方だが、モン狩上級者御用達の『モン狩持ち』であった。

そして幸村が今ソロで挑んでいるモンスターは、このモン狩3IGの隠しモンスター『バルバトリオン』である。

出現条件は村クエを含めバルバ以外の全てのクエストをクリアすることで、出すこと自体結構めんどくさい。一応協力プレイで頑張ればいずれは出せるであろう。

だが今幸村が倒しているのはただのバルバトリオンではなく、『金色』のバルバトリオンである。

出現条件は金バルバ以外の全てのクエストをソロプレイでクリアするという、めちゃくちゃ難しい条件で出現するモンスターなのだ。もちろん難易度も全モンスター中最強であり、どんな武装でも行っても攻撃を食らえばほとんどが即死。

しかもこのモン狩の古竜戦はすべてのクエスト共通で『モンスターの攻撃で一度でも死ねばクエスト終了』である。

「すすすげえな、金バルバソロ討伐なんて動画サイトで見ただことねえぞ」

「すごい……と、あにきいまわたくしをほめてくださったのですか？」

褒めるつつか、単純にすげえなど心の底から思っただけなのだが……

調子付いたのか幸村のプレイングがさらに加速した。うっわあんな広範囲の攻撃をぎりぎりのところでかわしてるし。

うっわあぶね！てかよくかわせるなあおい、もしかして攻撃パターン全部頭に叩き込んでるとか……？

そして気が付くと、あと10分くらいのところで金バルバを討伐に成功。ま……マジで倒しやがったこいつ。

「いつしよに行きますかあにき？」

「いやいや俺なんかが行っても足手まといだし。つうかちょっとデ  
ータ見せてくれよ」

俺はいつのまにか幸村の虜になっていた。ああ悪い意味でじゃな  
くてね。

幸村のキャラ名は【S A N A D A】真田幸村からとったのかな。

そしてもちろん名前の横には噂の金の王冠が。初めて生で見たか  
っけえ！

そして装備は『マサムネ一式』、なんか聞いたことない装備だな。

「あ、これって全国ネットランキング上位150人しか受けれない  
先行クエストのチケットでしか作れない特殊装備ですよ」

横から理科が言った。

ってことは幸村、おめえって全国レベルのプレイヤーなのか？

おいおいそんなすごいもん持ってんだったら友達くらいすぐに作  
れんだろ、すっげえ武器だよそれ。

人は見かけによらないって言うけど、まさにこのことを言うんだ  
ろうな。

「あにき、わたくしでよければぜひともおてつだいをいたしますが」

「おいおい全国レベルのプレイヤー様からお声がかかったよ  
おい」

持つべきものは仲間というべきか、しかしこんなチャンスめった  
にないしな。

「じゃあ頼むわ」

「理科も一緒に行きたいですー！」

「わ、私も！なんかすごいプレイヤーらしいし！」

理科と星奈の参加も決まり、この部のレベル6四人のチームが結成された。

これだよこれ！モン狩って言うのはこうでなくっちゃなあ。

強いプレイヤーがそこにいて、「俺も入っていい？」的な？「私もいいかな……？」的な！？

まさに友達作りに必要な環境、幸村お前今回はナイスだわ。抱きしめていい？きゃー抱いて！

それに比べてさっきまでお互いがお互いを攻撃しまくるとかこの格ゲーよ、これはみんなで力を合わせるゲームだったの。

「じゃあてはじめにバルバトリオンいきましょう」

俺たちが狩に行くモンスターは隠しボスのバルバトリオン。

金色じゃない分少しは楽だが、それでもめっちゃ難しいことには変わらない。

何せ誰かが一度でも死ぬとクエスト終了だ。みんなの足を引っ張らないようにしなきゃな……

「なかまこうげきはONですのでくれぐれもちゅういしてください」

「え？さっきトラブルの種になった機能をなんでわざわざONにするのよ？夜空以外でぶちのめしたいやつなんていないわよ？」

夜空がいたらまたやるつもりかお前は……

学習しない星奈ない呆れつつ、俺と理科はここで仲間攻撃をONにする理由になんとなく察しがついていた。

じゃあない説明してやるか。

「説明すると、モン狩の古竜戦はモンスターの攻撃で死んだ場合は

1回でクエストが失敗になる。だけでも仲間の攻撃で死んだ場合ならいつもどおり3回まで死んでもいいんだ」

「さすがですあにき。つまりもんすたーのこう撃で死にそうになった相手をわざと仲間が殺してあげることクエスト失敗を回避できるのです。必要あらば味方を殺すこともいとわないのです」

幸村の言うとおり、それがこのモン狩の高等テクである『仲間殺し』の本当の意味である。

あれは嫌なやつを殺して満足するようなシステムじゃないんだよ。わかったら次からはああいうことやめるよ星奈。

……………ん？

「おい幸村、今ちよつと気になったんだが……………」

「なんでしようあにき？」

「今お前、少しだけしゃべり方が達者になってなかった？」

「……………いきましようかあにき」

「え？ちよつと！？」

幸村は何食わぬ顔でクエストを受注する。

ひよつとして俺は触れてはいけないうところにふれてしまったのだろうか。

おっかしいな、確かになんかいつもの幸村と違う気がしたんだが……………

俺の今回の装備は、防御力が高い防具で行ってもバルバ相手では即死なので攻撃重視の装備である銀ソル一式で挑むことに。武器は俺が一番得意とするハンマーだ。

理科も今回はまじめなのか、SMスーツではなくそれなりに強い装備で来た。武器は相変わらず鞭だが……………

星奈はさつきと同じ装備一式で、そして期待の幸村はマサムネ一

式と大剣であった。

こうしてクエストが始まる。特別決戦場なので最初はムービーが流れた。

ムービーが終わるといきなりバルバトリオンが目の前に現れ、【SANDA】が先行した。

理科はバルバをやったことがあるらしいのでまだ大丈夫だが、俺と星奈はバルバ未経験だ。

俺は動画などで攻撃パターンなどを見ており少しだけ知識があるが、星奈はバルバ自体見たことがない。

いち早く死にそうなのは星奈だな。うまくフォローしないと。

「あ、星奈のあねごちよつとこちらに……」

「え？なによ？なんかアイテムくれんの？」

開始早々【星奈】が【SANDA】に呼び出された。

そしてある程度距離が近くなったところで。

バシユン！！

【SANDA】の大剣が【星奈】を真正面からぶった切った。

【星奈】は一撃で死に、早くも1死である。

「ちよつとおおおおおお！！」

これにはさすがの星奈も驚きを隠せなかった。

あの幸村が、いつも温厚なあの幸村が開始早々星奈を呼び出しがつ殺したのだから。

星奈を殺した時のあの幸村の顔、先ほどの夜空や星奈とは違い達成感もない。かといって罪悪感もない。

人を殺してなお無表情の幸村、あれお前そんなキャラだっけ？

「何すんのよあんたあああああ!?!」

「いえいえ、あねごにはあることをやってもらおうと思ひまして。開始地点の右から三つ目のテントに入ってください」

「え?なによいったい?」

幸村に言われるがまま【星奈】がテントの中に入ると。

そこにはスイッチが3つ4つ並んでいた。

「なにこれ?」

「一定の場所で機能する罠のスイッチです。私が「そこじゃー!!」って言ったら押してください。かなりタイミングがシビアなので注意してくださいね」

「わ……わかつたわ!」

すげえ、あの幸村が星奈に指示してる。

かわいい顔してるくせに、やる時はやるんだな幸村……

というか……

「幸村、お前またしゃべり方が……」

「そこじゃー!!」

「おわ!」

俺の言葉が幸村の叫び声にかき消され、そしてそれと同時に【星奈】がスイッチを押す。

するともの見事にバルバトリオンが鎖につながれ身動きが取れない状態に、これはチャンスだ!!

【ホーク】【フェニックス】【SANDA】は一斉に攻撃をする。かなりダメージを与えたはずだぞこれは……

だが相手は古竜、罠の効果は1分くらいで切れすぐさま暴れだす。

うっわブレスあぶね!!

「畏はまだ3つあります。特定の場所にきたら合図をしますのでス  
イッチを押してください」

「わかったわ!」

「理科殿、鞭のリーチ配分を生かして連続でダメージを与えてくだ  
さい。小鷹先輩はハンマーでなるべく頭を狙うように」

「あ……あわかった」

やっべえめっちゃ頼もしいよ。幸村さんめっちゃ男前だよ。そこ  
らの男より男前だよ……

もはや達者になったしゃべり方を治すつもりもないのか、特徴で  
あった文字のひらがな表記が無い。

いい感じでしゃべっている……ということだろうか。

「うお!やべえバルバに捕まった!!」

と、油断していると【ホーク】がバルバに捕まった。

これはバルバ最強の攻撃である『0距離ブレス』、やべえ死ぬ!!

「ちっ……」

死を覚悟したその時、【SANDA】がナイスなタイミングで  
音ボムを投げた。そのおかげでバルバの攻撃はキャンセル。てか今  
舌打ちしたよね?ねえ幸村さん?

そしてそれと同時に星奈に指示を出す幸村。フォローも半端ねえ  
な。この幸村は化け物か……

こうして4人で力を合わせた結果、20分〜30分程度であるバ  
ルバトリオンを倒してしまった。

これが全国レベルのプレイヤーの実力か、いやはや実にお見事……



「おつかれさまですみなさん」

「おつー」

「お疲れ様です！」

「もう楽しかったわ！ありがと幸村！」

レア素材も手に入ったし、金もがっばがっばな俺たち。

やっぱりモン狩はこうじゃなくちゃん、仲間と協力して強大な敵に立ち向かう。友達を作るという目標など小さく見えてくるわ。

このままもう1個クエストいけるんじゃないかねえかな、と俺たちがワイワイやっていた時星奈が流れを断ち切った。

「ねえそういえば夜空たちはどうなってんのよ？」

……………あ。

俺たちはバルバトリオン討伐に集中しすぎて、残された3人のことをすっかりと忘れていた。

慌てて俺たちが夜空達の方に目を向けると。

「私たちは所詮ハンターレベル4、中途半端なハンターだからなあ。ははは……………」

「ねえお姉さん、うちらはうちらで楽しむしかないんじゃない。バルバトリオンなんて夢のまた夢じゃ……………」

「あははなにをそんなにおちこんでるのさー？」

夜空と小鳩は負のオーラにつつまれ、マリアはそんな負のオーラに負けないくらいの能天気オーラを醸し出していた。

うつわあ、あれはぶっちゃんけ近づけね。無言でクエストモリモリ消化してらあ……………」

「あれは……なにかしら？」  
「モン狩無言勢……ですよ」

星奈も理科もあれは見るに堪えないものだったらしい。

俺と幸村もさつきまでテンションボルテージがMAXだったのだが、あれを見ることで再び現実へと引き戻された。

友達作りの部活でうまくいっても、誰かの負のオーラがそれをかき消す。ちよつと大丈夫かこの部活……

沈黙が続く、いやな沈黙である。胃がキリキリ痛むぜ……

「……帰るか！」

「そうしましょ！今日は解散よ！！」

「理科も今日はおさらばしま〜す」

「わたくしもかえります」

こうしてモン狩は成果を残した？

少しだけだが友達作りに一歩前進した気がした。この調子でうまくいけばいいのだが。

.....

俺はまだ気付いていなかった。

何気なく見ていた一人の少女が、この日常でつねに自分と戦っていたということ。

そして俺自身にも、後に大きな試練が訪れることを……

わかっていたさ、ああ……わかっていたとも。

この隣人部には、俺の『過去』が付きまとっていたということくらい。

だけど俺には覚悟がなかったから。過去に向き合う覚悟も、未来に進む覚悟も……

その俺の心の弱さが、最も大事なものから目をそらしていた自分の愚かしさが……

後に俺の目に、『最も怖れていた光景』を映し出すことになる。

星奈と幸村とギャルゲーと……（前書き）

第21話です。

「柏崎星奈」視点。

星奈と幸村とギャルゲーと……

7月の中旬。

私が隣人部に入って2週間近く立とうとしていた。

小鷹いわく私が隣人部に入ってからやたらと部室が騒がしくなっていたらしい。

原因は私と夜空にあるのだろうけど、あの女ギツネが何かあるたびに私に因縁つけてくるのが悪いのよ。

私を嫌悪するっていう点では他の女子どもと変わらないんだけど、あれはそこらの女子以上に強敵だわ。

陰口叩くだけで群れるだけの女子どもと違ってあの女は私と対等に張り合ってくる。ああもう毎日毎日腹が立つわ！

……でも、正直言つとああいう風に他の女子と喧嘩するのって初めてなのよね。だからちょっとだけ　　ってやっぱり気に食わないわ……！！

そんな時はギャルゲーよ！ゲームの中の女子はみんな私に優しくしてくれるのよ。

現実の女どももゲームの中の彼女達を見習いなさいよまったく……え？私が今ものすごく残念な発言をしたですって？うるさいわよ……！！

と、意気揚々と隣人部の部室に入ると。そこにはいつものメンバーが……

そろっておらず、幸村がソファーにちょこんと座ってお茶を飲んでた。

部室を見渡しても、幸村以外の人物の姿は見当たらず。

「みんなは？」

私がそう質問すると……

「おりません、わたくしひとりです。そうじはしておきましたのでいつもどおりのテンションで答える幸村。

ということは今部屋には幸村しかいないってわけね。はいはいわかりました。」

沈黙がね、30秒くらい続いたわけですよはい。

「……ねえ？」

「なんででしょうか？」

いやいや「なんででしょうか？」じゃなくてね。

もしそこにいたのが幸村じゃなくて夜空だったら、開始1秒でキングが鳴ってるところよ。

いや夜空じゃなくても小鷹なら他愛もない話、理科なら何かしら動きが。

小嶋ちゃんなら私のテンションがスパーーーキング！！マリアでもそれなりに話し相手になるはず。

でも、この子が一人だけでは……

「時が動かないのよ！！」

私は思わず思っていたことの最後の一片を口に出してしまった。

楠幸村。男子の制服を着ているが顔は美少女そのもの。

性別は本人いわく『にっぽんだんじ』 本人が言うのだからそういうことにおきましよう。

そしてこの隣人部で一番大人しい、常におっとりおしとやか。メイド服着て立ってるのが様になってそんな少年？である。

こんな幸村と二人でいつたいなにをすればいいというのよ、モン狩……はなんか気分が乗らないし。

「やっぱり一人でギャルゲーやってましょ」

幸村には悪いけど、ここは個別プレイで行かせてもらっわ。

幸村は座っているのが一番落ち着くというのなら私はギャルゲーやってる時が一番楽しいわ。

さあて今日は新しいゲームを買ってきたし……

「ギャルゲー……か」

今思いついたのだけれども、ギャルゲーって本来は『男子』がやるゲームよね。

そりゃあ私のような女性向けのギャルゲーもあるっちゃあるけれど、今私がやるうとしてるのは間違いなく男の子向けのやつよね……そして幸村の性別は、いやそりゃ本人が言ってるんだから『男』よね……？

「ねえ？幸村って『男』よね？」

「はい。わたくしはだんしですが」

私の質問に幸村はテンプレよろしくいつも通りにそう答えた。

ってことはもちろんそれなりに女の子の好みとかあるってことよね……

でも小鷹との関係性を見る限りこの子が『そっち』方面の趣味とも考えられはないし……

いやいや、それでも幸村の中に少しでも『男』の本質があるのだとしたら。

……知りたいわね。

「幸村。暇なら私とギャルゲーやらない？」  
「『ぎやるげー』ですか？さそってくださるのならばいっしょにお相手しますが……」

幸村はそれなりに乗り気ではなさそうだったけれども、断られはしなかった。

これで幸村にギャルゲーをやらせることはできるみたいね。これはひよっとしたら私しか目にできないレア映像かも……

はたして幸村はどんな女の子が好きなのか、そして男の子らしくギャルゲーにハマってくれるのか。

私は内心とても楽しくなっていた。ついさっきまで時が止まっていたというのに……

「さてと主人公の名前ね、あんたが適当に決めていいわよ」

「じゃあ、織田信長で……」

「ストOPPやっぱ私にも一部決めさせて頂戴!!」

私は強引に幸村からコントローラーを奪った。

おいおいここにきて歴史上の人物はやめてよ、雰囲気丸つぶれだよ!!

かわいい女の子が「織田信長ってかっこいい名前だね」とか言いだすシーンとかあつたらシユールすぎてテンション下がるわよ!!

「信長バスケやるうぜ!」とかいう男子のセリフがあつたらそれこそ恐れ多いわよ!!

そういえば幸村はモン狩でも【SANADA】だったし、ひよつとしたらポケンもドラエも主人公の名前つけるとしたら全部歴史上の人物の名前にするのかしら……

「苗字は『柏崎』で、名前は適当に決めて」



それなら歴史上の人物の名前にはならないし、最近では子供に武将の名前をつけたがる親も多いらしいから名前がそうでも違和感はない。

そしてこれは私なりに幸村への試でもある。もしここで名前を『幸村』にするのだったら私はノリよくツッコミを入れてやるわ。私の婿養子にでもなりたいんかーってね。

まあそこらの男子ならこのシチュエーションになったら100%自分の名前を入れるでしょうね。さてと幸村はどんな名前を。

### 【柏崎織田信長】

「どんな名前じゃあああああああ！..」

キャラ名を見て私はノリよくどこるか全力でつつこんだ。

こやつ強引に織田信長ぶちこんできよったわ！柏崎の制約完全に無視しよったわ！

前に夜空によってしてやられた【柏崎せもぼぬめ】よりもビシッと決まってるけども理不尽さはアップしてるわよ！！

「このような名前でいかがでしょうか？」

「いやいかがでしょうかと言われても……」

どうにも言えないわよ、でも正直言つと変えたいわね。

でも……なあ……

この幸村の『すがりつくような甘い顔』を見ると変えたくても変えれないわよ。

些細なことでも泣きそうなんだもん、この子の涙の貯水量ハンパなさそうなんだもん。

「……いいわよこれで」

こうして【柏崎織田信長】の青春は始まった。

今回私が買ってきたのはギャルゲーは今までに比べて少しシリアスな展開が目立つやつ。

舞台は学校と商店街で、主人公が良く通う商店街が別のグループに乗っ取られそうというのが主なストーリー。

主人公と彼女達はそれに立ち向かい、無事平和に卒業を迎え告白にいくというのがハッピーエンドである。

彼女候補は6人ほどで、結構充実しているらしいから楽しみなのよ。

物語が始まり、相変わらず親友の男子が出てきたら幼馴染属性と出会ったりとここまではありがちなシーンが目立つ。

しかし始まってほどなくして例の商店街問題のシーンになり、幼馴染属性の母が倒れたとかなんとかでシリアスな雰囲気。

『この商店街は私たちの居場所だもん！絶対に手放すわけにはいかないわ！』

と、幼馴染の広泉ひろいずみさとみが的グループに対抗心を抱く。

「この『殿』につくせばよいのですかあねこ？」

幸村がいつもの表情で私に聞いてきた。

彼女候補を『殿』で……

どっちかというと殿は主人公な気もするけども……

「一応あんたがメインでやるんだからあんたがきめなさいよ。わか

「んないとこあつたら私が教えてあげるから」  
「はい」

幸村はこくと頷き、ゲームの会話を進める。  
それからもどんどんと彼女候補が登場してきた。

クラスの委員長である山上京子。

演劇部の清水ちなみ。

謎の多い少女園崎詩織。

喫茶店のカフェのウェイトレス桐生南

どれも全部個性的な女の子ばかりね、ああ私も帰って早くやりた  
いわ!!

ここまで5人ほど女の子が出てきたけども、幸村はどの女の子が  
好みなのかしら……

しかし、仮に現実で幸村に告白された女子はどう思うのかしら  
ね……

美少年とはまた違うんだけども、うん……

そして気がついたら6人目の彼女候補が出てきた。

『ああ”織田信長”くんいつもきてくれてありがとね』

商店街の古びたお食事処の店主である神谷なつみさん。

三十路手前の女性で子持ち、実のところ最後の彼女候補である。

普通に考えると上級者向けてところね、最初に攻略するような  
相手では……

「この人にしましょう」

「なんでよ!!」

幸村が選んだのはなつみさんだった。  
まつさか！ええうそでしょ！？

「幸村って年上好きななの？」

「いえ、人のぬくもりをせいっぱいうけるといっげーむでしたの  
で……」

「あんたいちいち捉えかたが大きすぎるのよ！！」

幸村とギャルゲーをやると全てが斜め上の展開に行くわね。

もう性別とか関係ないわ、幸村自身のキャラが全体的にギャルゲ  
ーに向いてないのよ。

いったいどうなっていくのよこの先……

しかし窯を開けてみると、元々人に尽くすのがうまいのかなつみ  
さんの評価はグングンと上がって行った。

彼女候補を「殿」と呼び、何かあるたびに「戦果をあげました」  
など遠くから見ると歴史ゲーでもやってんのかと思える言動が目立  
つのだが。

実際にもし幸村に彼女ができたとしたら、話題性に困るかもしれ  
ないけど尽くすだけ尽くしそうねこの子……

それが悪い方向へ行かなきゃいいけれども、でも自分勝手の男子  
共に比べるのなら……

「あんたいい男になりそうね」

「え？いまなんと？」

幸村が目丸くしてこちらを見た。

ああおもいつきり口に出してしまったわね。

「りっぱなんだし」を指摘しているという幸村からすれば素直にう  
れしい一言だった？

「いや、なんでもないわよ」

って、私もなに照れてんのよ。ばっかじゃないの……  
ゲームは順調に進んでいき、シリアスな場面も私の助言ありでスイスイと進んでいった。

幸村からすれば好きな彼女候補を落とすというよりも、『戦果をあげる』という意味でゲームをやっているのかもしれない。

これじゃあ幸村の感性はわからずじまいね、もう強引に聞いてしまおうかしら。

「ねえ幸村、あんたってどんな女の子が好きなの？」

私のその言葉に幸村は気の抜けた返事をし、気難しそうな顔をした。

「このゲーム内で考えなくてもいいわ、例えばこの隣人部の中でもいいし。隣人部って結構美少女揃い（あんたもカウントしてね）でしょ？夜空みたいな気の強いのが好き？小鳩ちゃんみたいな小さい子が好きとか言わないでしょうね？」

そう付け足すと、幸村は悩んでるのかすつとぼけてるのかよくわからない顔になった。

そこで『小鷹』とか答えたら私はノリよく「お〜い」ってツッコミを入れるつもりである。

って、幸村にそんな冗談が言えるわけが……

「……………星奈のあねごみみたいな人がいいです」

……へっ？

一瞬私の表情が固まった。  
そして私の素っ頓狂な顔を見て、幸村がうつすらと笑みを浮かべる。

「……御冗談です」

冗談？今この今ひよっとして……

私を『からかった』の？

それにしても私も私で、こんなにびっくりするなんて。

普段の男どもなら私への行為なんて隠し切れていないから軽くスルーしたり靴を舐めさせてあげたりするんだけども。

でもこれは、あまりにも不意打ちすぎた。

「あ……あ……」

「????」

幸村の頭に疑問符が浮かぶ。

そんな幸村のきょとんとした顔を見て、私は感情を抑えきれなくなり……

「あんたかわいいわね!!」

言ってしまった。

はい言ってしまったよ、もうぶっちやけてしまいましたよ。  
だってかわいかったんだもん！小鳩ちゃんに負けなくらいかわいかったんだもん！！

しかし私のこの気持ちとは裏腹に、幸村は少し頬を膨らます。

「かわいいと言われてもうれしくありません。わたくしはだんしです」

その顔も言葉もまたかわいかった。けど言うとさらに怒るだろうなあ……

でもそんな幸村も見たいわあ、つうか思いつきり抱きしめたいわあ。

この子が『女の子』だと確定していたなら100%抱きしめていただろうなあ……

「……くるしいんですけど」

「ふえ？」

と、気がついてみると私は幸村を抱きしめていた。

うっそ！？私的にはこの気持ちを抑えていたはずだったのに……

「あの？」

「へ？ああごめん！」

幸村の言葉で我に返り、私は強く締めていた腕を緩めた。

そして私はある疑問を抱く。今、幸村を抱きしめた時……

「じくはくのシーンですよあね」

「あっ！いつのまに!?!」

いつのまにかなつみさんの告白シーンに差し掛かっていた。

もちろんハッピーエンドで主人公となつみさんは無事結ばれた。

気がついたら2時間ほど立っており時計を見ると7時、なんか終盤から我を失っていたのか大事な展開を覚えていない。

帰ったら自分もクリアしよ、前半部分飛ばしまくればいいわけだし。

「んで？どうだったこのゲーム？」

「とてもおもしろかったですよ、なつみさんがてきぐるーぷの……」  
「ああそれ以上言わないで！覚えてないから！」

危つくネタバレされるところだったわ、というか見てなかった私も悪いのだけれど……

こうして幸村の秘密が少しだけわかった。いや訂正なにもわからなかったかもしれない。

でも幸村が冗談を言うことや、かわいいところがあるということがわかったからよしとしておこう。それに……

「ではあねご、また明日……」

「……ねえ幸村」

「なんでしよう？」と幸村は振り向く。

私はあることを聞こうと思ったが、その幸村の顔を見て口から出そうになった言葉を止めた。

その時、私は一っだけ恐怖したのよ。

『この質問』をしてしまったら、幸村が壊れてしまつかもって……

「……いや、なんでもないわ。また明日ね」

「はい」

そう言っただけ幸村が部屋から去って行った。

ゆっくりと去り、その足音が聞こえなくなったところで。

私は抑えきれなくなり、ソファーに座り込みボソリとこう呟いた。

呟くことすら、『許されない』であろう一言を……



「『女の子』の……匂いだった」

私は、知ってはいけない事実を知ってしまったかもしれない……

夏休み前（前書き）

第22話です。

「三日月夜空」視点。

## 夏休み前

7月の中旬

気がつけばもうすぐ夏休みか、時の流れは早いものだ。

我々学生にとって夏休みといえば普通に考えればとても楽しみなものだ。

勉強、遊び、思い出づくりと多くの友達と過ごすその時間は人生でとても大切なものになるだろう。

まあ……私には関係のないことだが。ああまったくもって関係のないことだ。

なんだ夏休みって、学校がないだけのただの暇な毎日ではないか。一人で家で勉強とか本とか読むだけのただの無駄な時間ではないか。

夏休みも冬休みもゴールデンウィークも、私にとっては苦痛の間でしかないのだ。

リア充のみんなも、夏休みという牢獄を一度でも味わってみるといいよ。てか味わえ。

「そつえばもうすぐ夏休みね」

私がかついうことを考えているところに空気の読めない肉が夏休みの話題を振ってきた。

「ああそうですね、夏休みに入ってしまうと小鷹先輩と長い間イチヤイチャできなくなってしまうですね……」

「あにきのぱしりができなくなってしまうのですか……」

理科と幸村が寂しそうに言った。

「おい理科！その言い方だと俺がお前と今までイチャイチャしてきたみたいじゃねえか！」

「楽しい解剖も投薬実験も改造実験もお預けなんですね……」

「そんなイベントあってたまるか！お預けどころか最初っからないわ！」

「そんなあ〜」

小鷹のツツコミに対し理科は本気で残念そうにしていた。というか……

肉が入部してから、何かがおかしくなっていた。

あいつが入部する以前から小鷹とこいつらは仲が良かったが、肉が入部してからはさらにこいつらが小鷹と絡むようになった。

肉自身もよく小鷹と話している。マリアも最近になって小鷹のことを「お兄ちゃん」と呼ぶようになった。

そしてそんなモテモテ小鷹の幼馴染というアドバンテージを持つ私かというと、最近小鷹と絡むことが少なくなった。

正直クラスにいる時くらいしかまともに話していない気がする。こいつらがいると調子が狂う。

例えるなら、楽しく会話をしているグループの中にぼっちの私が入っていくような感覚。こいつらは私と同類のはずなのに……

仲間外れにはなっていないはずだ。ただどなにか……遠くに感じてしまう。

肉たちと楽しく話している小鷹が、どんどん遠くに行ってしまう。こんなはずじゃ……なかったのに。

もう夏休みが入ると、私と小鷹は毎日楽しく遊ぶような関係に戻っているはずなのに。

ただどうして……こころも遠いのか。

そしてなぜ私は、肉や幸村や理科に勝てないのか……

悔しいな……悔しくて仕方がない。非常に不愉快な気分だ。

そしてこの気持ちを最初は肉一人に抱いていたはずが、徐々に理科や幸村にも抱くようになっていた。

それどころか小鷹の妹である小鳩や、幼女であるマリアにすら抱くようにもなった。情けなくて仕方がない。

私はあらゆるものに劣っているとでも言うのか、どうしても私だけが……

小鷹と『最も近い存在』である私が、小鷹と最も離れているのだから……

「夜空？なんか顔色が悪いぞ」

小鷹にそう指摘され、私は我に戻った。

「あ……ああすまない。夏休みという地獄をどうしようか悩んでいただけだ」

「やっぱりか、そうだと思っただぜ」

私の言葉に小鷹は納得いったような顔をした。

だけどな小鷹、私にとって夏休みなんてぬるい地獄でしかない。

本当の地獄は、君と離れていってしまうこの疎外感なんだよ……しかしこのまま夏休みに入ってしまうえばもっと小鷹と離れていってしまうかもしれない。

かといって夏休み中に小鷹を遊びに誘うほどの度胸を私は持ち合わせてはいない。

夏休み……部活か……

「……夏休みも部活やるか」

「え？部活やるの？夏休みも……？」

「当り前だ」

きよとんとするこいつらに私は淡々と言った。

運動部とか吹奏楽部とかそういうのだって大会とかに向けて夏休みに活動するのだ。

我々が夏休み中に活動しちゃいけないなんて、そんなもの無理を通して道理を蹴っ飛ばしてやる。

それにそれなら夏休み中も小鷹と一緒にいられる。その他障害のことは活動中にどうするか考えればいい。

「でもこの部活じゃ大会とかないし、てっきり活動休止だと思っていたんだが……」

「甘いぞ小鷹、こんなので”目的”が果たせると思ってるのか」

「目的ってなんだよ？」

「うっ……」

目的……と、私はつい本音を言いそうになった。

ジト目で見てくる小鷹、どうしてそんな目で私を見るのだ？

とりあえずそれらしいことを言っておこう。

「……友達づくりに決まってるだろう、我々は夏休みまでに友達を作れなかった。その原因を考える必要もある」

「原因って……この部活ってただみんなでダラダラ過ごしてただけじゃない。先生だって全然役に立たないし。こんなんで友達が作れるわけがないわよ」

肉が新参者らしい意見を出してきた。

貴様に言われるのがまた腹が立つ、思えば肉が入ってきて以来こいつがみんなを仕切ることが多くなった。

これは私の部活だ。勝手は許さん。なのに……

「隣人部が貴様の想像と違っていたのなら別に出て行ってくなくても

かまわないぞ、これも部長である私のだらしなさが原因だ」

「い……いや別にそういう意味で言ったんじゃないわよ！てかその……ごめん」

なぜそこで謝る……？

少し優しめに促したのがまずかったか、こいつを部から消すのは骨が折れそうだな。

その後我々はいつも通りにそれぞれが好き勝手に部室で時間を潰していた。

確かに肉の言うことも一理ある。これじゃあ部活動として成り立っていない。

だが真の目的を成し遂げるためには表上の隣人部部長としても演じていかねばならない。

変に拗れば、小鷹は私を見捨ててしまう。まだあいつは私のことを気付いてないのだから。

そして、かつての親友はこんなにも最低なやつだったという事実を小鷹に与えてしまうことにもなる。それだけは避けたい。

今思えば、私はこんなにも落ちぶれてしまっていたのか……

つらい現実から目をそむけ続けた10年間、そしてその原因を作ったのがかつての親友の裏切りであることを私は認めたくはなかった。

その結果小鷹は私の元へ戻ってきてくれた。完全な状態ではなかったが奴は私の前に姿を現した。

これは私がつつを見捨てなかった結果だと思っている。信じ続けることで神様は奇跡を二度起こしたのだ。

小鷹がこの学校にやってきたことが隣人部の創部に繋がり、色々あれどこの数ヶ月はとても濃い時間を過ごしたと思っている。

小鷹以外の連中は隣人部に必要ない……といえは実は嘘になる。あいつらが離れることはこの日常の崩壊につながる。

そして私の親友はこの日常に満足している。私はそれを壊したくはない。

隣人部の崩壊、それだけはなんとしても避けたかった。隣人部は今の私と小鷹を、ソラとタカ繋ぐただ一つの架け橋。その居心地を、私は失いたくはなかった。

「小鷹」

目の前で座っている小鷹にふと声をかける。

「どうした？」

こちらの目を見据える小鷹。

なんだか恥ずかしかつたが、私は勇気を出して言った。

「ありがとう、私にこの日常を作るきっかけを与えてくれて……」

……遠まわしに真実を言ってしまったかもしれない。

だけど小鷹の返事はなかった。恥ずかしいのか頭をボリボリ書いている。

そんな小鷹を見て、私は思わず小さく笑ってしまった。

果して今ので真実が伝わってしまったのか、いや……気づくはずがないな。

あの時の私は、男気のある少年だったのだから。

「あ、そういえば小鷹に伝え忘れていたことがあったわ」

空気を読めない肉が割って入ってきた。

訂正だ。こいつは隣人部にはいらぬ。割とマジで。



「俺に？」

「前にあんた。私のパパに挨拶しに行くとか言ってたじゃない？」  
「あー」

「……………はあ？」

おい、なんだそれは…………

挨拶？小鷹が肉の父親に挨拶？

それはいつたい……………どういうことだ？

私にはさっぱり意味がわからなかった。

「このあいだパパに話したら、夏休み中なら時間作れるから一度家に来なさいだつて。なんかパパも会いたがっているみたいだったわ」

「そうなのか？」

「だから来る時は私に言つてね」

「おう」

待て待て待て待て。

なんだこの流れは、おかしいだろ。

そんな、これではますます小鷹が私と離れて行ってしまうだろ。

「な、なんで小鷹が肉の家に行つて、ち、父親に挨拶に挨拶などするのだ！？」

この感情を抑えきれなかったのか、私は身を乗り出しつい口に出してしまった。

「別に夜空には関係のない話よ」

素っ気なく肉は答えた。

さりげなく笑みを浮かべているのがまた腹が立つ。



私の意地や矜持……

全てを投げ出し今すぐに小鷹をこの手に、ただ抱き寄せたいよと願う声も……

離れてく距離に届かない、どうしてお前はこつも先にいるのか……  
そしてただ消えていく、私のこの想いを代償に……肉が私の先に  
行く。

私が想えば想うほど、その想いは遠ざかるばかり。この夏休み……  
私には今まで以上の地獄が待っているのだろうか。  
しかし私は動くしかない、他のやつらに負けたくはない。

「だから……」

止まることのない時間の中、私は走り続ける。

三日月夜空の焦り（前書き）

第23話です。

「三日月夜空」視点。

### 三日月夜空の焦り

夏休みが始まった。

「夏休みも部活に勤しむ、と気合を入れて部室に来たものの誰もいなかった。」

「なんで誰もいないんだ」と数分後に幸村が来て、その数分後に肉と理科が来てさらに数分遅れること羽瀬川兄妹がやってきた。

「初日だというのにたるんでいるな、と説教一つしたいところだったがそこで小鷹が言った。」

「何時くらいから部活やるのか打ち合わせしていなかったな。」

「うん、確かに……」

「そういえば我々はそれぞれ連絡手段を持ち合わせてはいなかったな。」

「このままではこれから先もこんなグダグダが続いてしまう。最悪一人だけ来て誰も来ないとか1日を無駄にしてしまうパターンも出てしまうだろう。」

「どうやって部活のやる日や時間を伝えればよいか、みんな悩んだ末に理科が言った。」

「携帯電話でメールをするというのはどうでしょうか。」

「志熊理科、どうやらお前は本当の天才のようだな……」

「エンジンが電球を開発したとき庶民はきっとこういう思いを抱いたのだろう。世紀の大発明ならぬ世紀の大提案だな。」

「というわけで連絡手段も整った。肉が携帯電話を持っていない？はっはっは持っているじゃないやつなことなど知るか。」

「みんなメールアドレスを交換しているところを羨ましがる肉の」

顔は私にとってとても愉快なものだった。ああ心が躍るなあ。

私はハブられた肉の反応がおもしろく、わざと小鷹と電話で話したりした。

そして耐えられなくなったのか、肉が最後に小鷹の携帯に向かって大声で叫び私に一矢報いて部屋から出て行った。耳がキーンとするなうるさい肉マジで死ぬ肉。

- - -  
- - -  
- - -

翌日……

私は昼前に小鷹にメールで『二時』とだけ送った。ちよつとシンブルすぎたかなあ……

そして部屋につくなり小鷹からも『二時くらいに部屋に行く』とメールが返ってきた。

部屋には理科と幸村だけ、やはりお前がないとおもしろくないな。

「小鷹先輩からメールがきました。二時くらいにつくそうです」

「知ってる。私にも来た」

メールは一斉送信だったのか、わざわざ理科が私に内容を伝えてきた。

来るまで本でも読んでいるか、と本を取り出した時。

「『小鷹先輩が来るまで全裸で待っています。ああちなみに夜空先輩は脱ぐ気満々ですよ』つと……」

「なんとという内容で送信しようとしてるんだ貴様は！！」

油断も隙もありやしな、理科がとんでもないメールを小鷹に送信しようとした。

私は必死に止めようとしたが理科は私を餌で釣るように左右に携帯を揺らし、私が椅子に突っかったのを見てメールを送信しやがった。

「ふざけるなこの　っ！」

「あ、小鷹先輩からメールが来ましたよ。『うわぁい超楽しみ！』だそうです」

「そんなわけないだろ！」

私は小鷹に訂正のメールを送信する。後で気がついたことだがタイトルに本文を書いてしまっていた。よほど焦っていたようだ。

小鷹からは「わかってるから」と返ってきた。と思ったら今度は理科がこちらにやってきて私の制服を脱がそうとしてくる。

おい貴様本当に全裸にするつもりなのか！？

「やめるこの変態天才少女め！」

「良いではないか良いではないか」

数分の格闘の末、理科をなんとか引きはがすことに成功した。

まだ部屋に来て数分だというのに、もう疲れた帰りた。

私がぐったりしていると小鷹が部屋に入ってきた。私は小鷹の顔を見るなりすぐさま。

「小鷹気をつけろ、こいつは変態……だ」

小鷹は「わかってる」と一言……

そして私をここまで追い詰めた変態はという……

「小鷹先輩！理科さつき百合も結構イケることに気づきました！たぶん理科、エロければなんでもいいんだと思います！」

キーボードをタンタンと叩いて呑気な事を言う始末。ふざけるなこの野郎。

その後小鷹は幸村にお茶をもらいそれを飲んでいた。私も一杯もらったがこれがいきなり熱いお茶だったのでちよつとキレそうになった。

疲れてるやつに熱々のお茶とかこのドSが……って人のこと言えないか。

文句ひとつ言いたい気持ちを抑えお茶を飲んでいると、突如部屋のドアが乱暴に開かれた。

「揃ってるわね愚民ども！女神が降臨したわよ！！」

ドアを開けたのは肉だった。誰が女神だ……。

今の私にはこいつに嫌がらせをする体力もなかったので、私はどうでもよさそうに一瞥をした。

こいつが部屋に入ってきたところで、本当に『どうでもいい』。ただこいつがいることによって、私のペースが乱されていく。

と、そんな私の態度が気に食わなかったのか肉が私の前にやってきて、そして自慢そうにあるものを突き出した。

それは携帯電話であった。こいつまた金に物言わせたな……

「どう？昨日パパに頼んだら買ってくれることになったの！」

子供のように嬉しそうな顔で肉が言った。

パパに頼めばなんでも叶う、なんでも手に入る。全てが柏崎星奈の物が……

大事なものを失い全てを諦めざるを得なかったわ私とは正反対の



存在。非常に気に食わない……

「ふうん……」

私はどうでもいよいよに携帯をチラリと見る。

柏崎星奈の携帯など、私にとってはどうだって……

ん？この携帯どこかで……

「あれ？その携帯俺のと同じだな」

「へ……へえそうなんだ？奇遇ね！」

その携帯は小鷹と同じものだった。

小鷹のと同じ……？なんでお前が小鷹と同じものを持っているんだ？

おかしいな、あれおかしいな……

肉と小鷹なんてそんな深い接点は持っていないはずだ。なのになんでこいつらこんなに近づいているんだ？

私なんて接点を持ちながらまるで近づけさせないのに、なんでお前は小鷹に近づいて行っているのだ？

「どうしたのよ夜空？不機嫌そうに……」

呑気に肉が私にそう聞いてきた。

人の気も知らないでこの女は、これだからブルジョアは……

「まあいいわ、とりあえず小鷹！私とメールアドレス交換するわよ」

「おう」

む……。

なんだこの気持ちは？とても濁ったようなグチャグチャになるよ

うな……

私の中から生まれるこのモヤはなんだ？私から生まれるこの汚れはなんだ？

私以外のやつが小鷹と近しくなっていくたびに抱くこの感情、そしてそれを抱くたびに遠くなっていく焦りは。

そしてその度に抱く自分への嫌悪感、気持ち悪い……気持ち悪い。キモイ超キモイ。

うるさい……うざったい……うっさい！！

小鷹は決して悪くない、あいつはただあそこにいるだけだ。奴を憎んだところで何も変わりはない。

だが私のペースを乱す奴らは憎くて仕方がない、だがそれ以上に憎いやつがいる。

そう、『私自身』だ。ああなんでこうなってしまうのかな……

肉がこの部活に入ってからだ。こうも毎日毎日胸が苦しい。吐き気がする。たまに吐く。

「夜空にもアドレス教えてあげるわよ」

「お前のはいらん」

かけよってくる肉に対し私は素直にそう返した。

お前のをもらったところでメールなんてしないし……

というか、肉のその分け隔てない優しさに私は苛立ちを覚える。

それは勝者だけが手にできる余裕だ。その余裕が私をさらに追い詰める。

「……なんてことを考えてるんだ私は」

くだらないな、被害妄想が激しすぎる。

もう私には時間がないのかもしれない、一刻も早く小鷹に気づかせなければならぬ。それは非常に簡単なことである。

小鷹に私が『ソラ』であったことを打ち明ければ解決なのだから、  
だけどそれが『できない』。

いや、『できない』のではなく、『しない』のだ。やつに打ち明けるほどの『勇気』がない。

この部活で、この学園生活で……私は小鷹に堕ちた姿を見せすぎた。私の残念ぶりをこれ以上になく見せつけてしまった。

打ち明けてしまえばやつがかつての親友の負の部分を知ってしまうことになる上、やつにこれ以上の罪を被せてしまうことになってしまう。

小鷹の中の『ソラ』は『勇気のある少年で最高の親友』。その姿を小鷹には保ち続けてほしい。

だがもし私がソラだと気づいてしまえば、その姿は崩れ去ってしまう。

彼にとって『勇気のある少年』だった存在は、『ずる賢くとても残念な少女』という存在へと変わる。

そしてその事実を作ってしまったのが自分のせいであると、彼に思っただけではない。

それは私が彼の親友としての、素直な感情であった。

.....

あれ以来、たまに私は変な夢を見る。

いつもの部室で、私は一人ソファに座っている。

どれだけ待っていても、小鷹はおるか誰も部室に来ない。

いつも一人だ。

だがたまにそいつは姿を現す。そして語りかけてくるんだ。

『このままでいいのか？』

『せっかく親友と再会したのに、見て見ぬふりはないだろう？』

『お前は悪くない、羽瀬川小鷹にかまってほしいという気持ちを抱くのは当然のこと。彼はお前の親友なのだから』

『お前が小鷹のそばにいるのが当然だろう？それは誰よりもお前自身が思っているはずだ』

変な夢を見るくらいだ。私はよほどに疲れているらしい。  
疲れているんだ。ただ疲れているだけ……

でも、本当にこのままでいいのだろうか。

そういえば、この事実を小鷹はおるか誰にも打ちあげたことはなかったな。

この事実は本当に私一人で抱えていてどうにかなるものなのか、これで何かが変わるのか？

10年間いろんな事をしようとして最終的に諦めた人間に、問題が解決できるのだろうか。

「肉はだめだ。私のプライドが許さん。理科か……幸村か……小鳩かマリア先生か……」

どれも私のペースを乱す奴らばかり、変に相談するとかえって気を使わせてしまうし。何かしらで小鷹にバラさられてしまったてはかなわない。

その事実をやつ本人に伝えるのは私の役目なんだ。この問題の解決は私と小鷹がやるべきものだ。

だが解決するための鍵が欲しい、口惜しさは残るがもう私には時間がない。

「……一人、相談できる人がいるかもしれない」

この部活に直接関与していない、というか最近部活にも来ていないしなあの人……

動くしかあるまい、たまには……私から行動してみることにしよう。

そう私は決心し、再び眠りにつく。

万福丸もきつとあのよじに……（前書き）

第24話です。

「楠幸村」視点。

万福丸もきつとあのようじに……

みなさんお久しぶりです。楠幸村です。

本日わたくしは使命を持って隣人部へと参りました。

「夏休み中俺がいない間にマリアになんか食わせてやってくれ、栄養つくやつ」

これは先日兄貴から申し遣わされた命令です。

まりあ殿がごはんを食べて喜ぶ顔を、兄貴は御所望しているので

す。  
なのでわたくしなりにまりあ殿に栄養が付くような、なおかつ満足いただける代物を用意してまいりました。

ちなみに……

わたくしといえばひらがな表記という変な印象を持たれているようですが、本日は語りの部分だけ普通の表記で書かれています。

これは「ひらがな表記ではキャラは出るが読みにくい」ということでのわたくしなりの配慮です。

少々慣れるまで時間がかかりますが、がんばります。

さてと、まずわたくしは他の部員よりも早く部室に来て掃除をしなければなりません。

後輩は先輩よりも先に来て準備を整えておく、これは従者が主君に従う以前のこと。先輩後輩付き合いにおいての決まりなのです。  
ではではさっそく掃除から……

「ぐうぐうぐう」

と、まりあ殿がソファで寝ていました。

今はまだ午前10時、お昼までには時間があります。

ここで起こすといきなり「おなか減ったごはんくれ」と言われる  
かもしれません。

お菓子を食べさせると栄養も偏ります。なのでできることならお  
昼まで寝ていてほしいものです。

しかしこう部室にいられると掃除の邪魔です。物音で起きるやも  
しれません。

困りました。じゃあこうしましょう……

「んで、なぜに私がこんな時間にあんたに呼ばれなきゃいかなのじ  
ゃ。あんな内容送られたからそりゃ来るしかなかったが……」

私はまず兄貴の妹君、小鳩殿にメールを送りました。

理由は簡単、まりあ殿は小鳩殿と常に遊んでいらつしやいます。

なので私の掃除が終わるまで二人でどこかで遊んでいてもらおう  
という魂胆なのです。

ですが小鳩殿は非常に機嫌が悪い、兄貴の大切な妹君の機嫌を損  
なう時点でわたくしの恥です。

しかしこの状況下では小鳩殿しか頼める相手がいなかったのも事  
実、兄貴にも許可は取っているので問題はないでしょう。

ちなみに、どうやって接点のない小鳩殿をここへ連れてこれたか  
という……

『もしわたくしのよっきゅうがとおらなければ、あなたがまえにこ  
の部室に隠したテストのかいとうようしを兄貴に提示いたします』

と送つたらすぐさま『今すぐ行くからまっとなれ!!』と返信がき  
ました。平和的解決です。



「今からわたくしは部室の掃除をしますので、まりあ殿といつものように遊んでいてもらえますか？」

「よくあれで遊んでいるように見えるな？遊びじゃないやろあれ、明らかに仲悪いやろ」

「じゃあいいかたをかえましよう、まりあ殿といつものどおり戯れていてもらえますか？」

「あんたたまにすごいこと言うな……」

小鳩殿は呆れたように言いました。

テストの件は不問という条件でとりあえず小鳩殿と話をつけることはできました。

だがそこで新たな問題が発生するのです。

「だが、こいつばどうやって動かすんじゃ？起こしたら起こしたでうるさいやろこいつ」

小鳩殿の言うとおり、一度寝たまりあ殿は中々動こうとしません。そして起きるともつと動こうとしません、起こさずして廊下の外へ連れていくのも至難の業です。

悩んだ末にわたくしがとつた行動はと言いますと……

「えい！！」

とりあえずまりあ殿を箆でぶっ叩きます。

「ええーーーーー！？」

小鳩殿の仰天した声など気にはいけません。

そこでまりあ殿が目覚めます。ゆっくりとはなく飛び起き

るのです。

「ふぎゃー！ いったいなんなのだ!？」

そして状況を把握していない、戸惑っている時に動くのです。

「おめざめの時間ですまりあ殿、しつれいですがそうじをするので少しの間だけここから離れていてもらえますか？」

「ふえ？ な……なんだ急に……」

人は戸惑っている時こそ、思考をつまく働かせることができないものです。

「なにもいわないでください。そしてそのままぶ室からゆっくりと小鳩殿と出て行ってください。じゃないと5秒ごとにあなたの脳天を箒で……」

「わあああああわかったわかった！ わかったのだ!！」

こうしてまりあ殿を動かすことができました。

あとは小鳩殿に任せるとしましょう。さてとお掃除お掃除……

「……なんで無理やり起こされた上にマリアの部屋から追い出されなければならんだ？」

「今頃気づいたんか……」

「って吸血鬼!?? ちょうどいいこのつつぶんをお前で晴らしてやるのだ!！」

「ふぎゃあ何するんじゃ!！ 十字架痛いちゅうとるやる!！」

そつやら仲良く遊んでいらっしやるようですね、やはり小鳩殿を呼んでよかった。

あまり長時間締め出すのはよくありませんね、怪我とかしたら兄貴に合わせる顔がありません。

午前11時、掃除が終わったので二人を中に入れましょう。

「はあ……はあ……」

「ぜえ……ぜえ……げほ！」

お二人ともずいぶんとお疲れのようで……

とりあえずお茶を用意しましょうか、のどを潤せば疲れも取れます。

「はい、粗茶ですが……」

「はあ……はあ……もらうのだ」

「いただくのじゃ……」

これで二人とも疲れが取れますねえ。

「「あつっ！！」」

あら、予想とは違った反応が返ってきました。

「あんだこれ熱いお茶やないか!？」

「はい、疲れたときこそあついおちゃのほうが……」

「疲れてるやつに熱いお茶とかあんだ悪魔か!？」

小鳩殿は納得がいていない模様。なんということでしょう、これでは兄貴に合わせる顔がありません。

せっかく呼んだのですから、充実した部活を送ってもらわないと。

思えば小鳩殿はいつも兄貴につきつきりです。こんな身なりとは言え中学二年生。そろそろ自立をしてもいいころでしょう。

せつかくこの場に兄貴がおらず小鳩殿だけがいるのです。少しは自立の力になれば……

「用はすんだらうし、あんちゃんは今日来ないらしいから私も帰るぞ」

なんとということでしょう。

わたくしの思いとは裏腹に帰る気満々な小鳩殿。

このままじゃいけない、わたくしの兄貴への忠誠を示すこの好機を見過ごしてはいけない。

「せつかくぶかつにきたのですから、ごごいっばいまでいてはどうです？」

「ふえ？いや私いそがしいし、毎朝入るコン撮ってあるから見たいし……」

「小鳩殿……」

「うっ！？」

言っても無駄とわかれば、表情で伝えるしかないでしょう。

わたくしは小鳩殿をじつと見据え、気持ちを伝えようと努力しました。

赤と青の瞳をわたくしはじつと見つめます。怯えてはなりません。目の色が違えど相手は魔物ではありません。

私はおだやかな表情でその念を小鳩殿に伝えました。必死で伝えました。その結果……

「……居ればええんやろ」

「わかってくださいましたか、私の優しさがつたわりました。これ

も兄貴へのちゅうせいのあかしです」

「優しさよりもはるかに『恐怖』が伝わってきたんじゃないか……」

「え？」

「……なんでもないです」

小鳩殿は顔をしかめて足をガクガクと震わせていました。

わたくしはそこまで怖い顔などした覚えはないのですが、恐面ならば兄貴の50分の1にも満たしていないというのに……

まあわたくしも小鳩殿から見れば年上の漢、怖いところはあるのかもしれないね。

「なあなあ、そんなことよりマリアお腹がすいたのだ」

マリア殿がそう言い、時計を見ると11時半。

お昼時には少し早いですが、お二人は体を動かしてお疲れムード。お腹がすくのもわかります。

ちょっと早いですが、お昼にしましょうか。

わたくしは鞆から今日まりあ殿に食べさせる『アレ』を取り出しました。

「そういえば小鳩殿のぶんが……」

「私はおにぎりあるからええ」

そうですか、それなら安心ですね。

「それで幸村、わたしに何を食べさせてくれるのだ？」

「これです。えいようかが高くちからになるそうですよ」

私は風呂敷を解く。

そう、わたくしが持ってきたそれはビンの中に大量に入っている。

栄養価の高く力のつくもの、確か……

「 なんなのだこれ？」

「 『ぶろていん』 というものらしいです」

ぶろていんを見て、まりあ殿が目を細める。そして……

「 吸血鬼、おにぎり分けてほしいのだ」

「 いやじゃ、その瓶の中の薬でも食っとけ」

ぶろていんを無視し、小鳩殿のおにぎりに走るまりあ殿。

なんとということでしょう、まりあ殿がぶろていんに興味を示しません。

これでは兄貴に申し遣わされたご命令が、あわわ……

「 まりあ殿、さあめし上がってください」

「 はあ？ そんなもの食えるわけないのだ」

促しても食べないまりあ殿。

なんとということでしょう、これでは兄貴に合わす顔が……

しかたありません、わたくしもそれなりに清らかな心を持ってはいます。

その清らかな心を捨てて、『鬼』になるしかありませんね。

「 まりあ殿、ちょっと……」

「 ふえ？」

わたくしはまりあ殿を手招きし。

そしてぶろていんを瓶ごとまりあ殿の口へと押しやりました。

「ふー!!」

「無理やり食わせた——————!!」

小鳩殿の驚く表情など気にはいけません。

一気に二割近くなつたぷろていん、この調子です。

「うええまずい、まずいし固いのだ!!」

「がまんですまりあ殿、これも立派なりんじんぶこもんになるためです」

「いや、だとしてもそれは無謀だと思ふんじゃが……」

ぷろていんを口にしてもがくまりあ殿、そしてそれを心配そうに見つめる小鳩殿。

不安もあるでしょう、苦しみもあるでしょう。しかし仕方のないことなのです。

非道と言われようが鬼と言われようが全てはまりあ殿のため、今日わたたくしは阿修羅すら凌駕いたしましょう。

「さあまだのこっていますよまりあ殿」

「いやだ!もう食べたくないのだ!!」

駄々をこねるまりあ殿。

これでは立派な隣人部の顧問になんてなれない……

「まりあ殿　　マリア殿。覚悟を決めてください」

「ひい!?!」

「マリア殿、これは兄貴があなたのことを思つてわたたくしに申しつけた大切な使命。そしてこのプロテインはわたたくしがあなた様のために考え用意したものだ。それを否定されるのは流石のわたたくしも腸が煮えくりかえりそうです。どうか泰然自若たいぜんじやくの御心でこのプロテイン

ンを飲み乾してはくださりませんか？」

「な、なんかお前急にしゃべり方が達者になつてないか!？」

マリア殿の言っている意味がわたくしにはさっぱりとわかりません。

「さて、まだまだ瓶の中には大量に残っているのですよ。少しずつでもいいので食べてください」

「それ、瓶を丸ごと一つ食べるものじゃない気がするんじゃないか……」

「小鳩殿、今何かおっしゃいましたか？」

「……いえ、何も」

続けてわたくしはマリア殿の口をこじ開けプロテインを流し込む。気がつけば午後の2時、あと半分も残っているではありませんか。

「うう……うええ……」

苦しそうな表情のマリア殿、しかしこれも立派なシスターになるためです。

わたくしは暗示をかけることにしました。

「とてもおいしそうですねマリア殿」

「どこがじゃ……」

「せっかくですし、小鳩殿も食べてみますか？」

「いらんわ!!」

必死に抵抗する小鳩殿。

痛みを分かち合つてほしいとは思いましたが、兄貴の妹君に下手な真似はできません。



「は……吐きそう……」

と、何やらマリア殿の表情が曇っていく。

吐くつて、ここで吐かれては掃除が大変になってしまつう。

「う……うえ」

「吐くなー!」

「ふえへえ!？」

吐こうとするマリア殿を、私は必死の思いでせき止めました。

「吐くならトイレで、ここで吐いたらわたくしは鬼を超えた存在に変わりますよ」

ついつい大声で怒鳴ってしまいました。

なんとというか、いや実になんといいますが……

困り焦り果てるマリア殿を見ると、なんか『楽しく』なつてきましたねえ。

「部室のトイレ使ってください」

「……はい」

マリア殿がトイレに入つてしばらく、「おええええええええええええ!」という苦痛の叫びが聞こえてきました。

その叫びが私の心を揺らします。なんなのでしょうこの感覚は……

「ふふふ……」

「……ドSや」

小鳩殿がないやら核心を秘めた一言を呟いた気がしましたが、わ



楠幸村はまた一つ、真の男に近づきました。

翌日……

「プロテインって、これ全部マリアに食べさせたのか？」

「はい、兄貴のためわたくしも鬼になりました。わたくしは万福丸を処刑した羽柴秀吉の気持ちがありました」

兄貴はその報告を聞いて、とても神秘的な顔つきをしていました。

ちなみに万福丸とは織田信長に滅ぼされた浅井長政の嫡男で、信長の命により秀吉によって処刑されたわずか10歳の子供です。

お市は助命を嘆願しましたが、生かしておいては後の災いになることを恐れた信長がそれを良しとしなかったのです。

ちなみにまりあ殿も10歳です。

「きつと万福丸も」あのように”泣き叫んだことでしょう”

「あのように!？」

頬に冷や汗が伝う兄貴のその表情は驚きで青くなっていました。

その後兄貴からは、明日からは特に健康に気を使わなくてもいいから普通の物を食べさせてくれと言われました。万福丸の悲劇を繰り返してはいけないと言われました。

それを聞いて、わたくしは元気よく答える。

「はい、おまかせくださいっ」

行き先なくした子羊（前書き）

第25話です。

「高山ケイト」視点。

## 行き先なくした子羊

「やあ、若者よロックしてるかい？」

私も一応若者だが、15歳というナリで教師をしている。

みんなからは『マザー・ケイト』と呼ばれ慕われているよ、私に相談しにくる子羊は数多くいる。

小さなことから大きなことまで。勉強から恋愛、家庭の事情と今まで様々な相談に乗ってきた。

相談をするということは悩むこと、悩むことはすなわちロックするに繋がる。

悩まずクールでいるよりも、悩みまくってロックしてるやつの方が今時の若者らしいと私は思う。まあシスターが言っていていいことではないが……

「マザー・ケイト、あなたにまた相談したいって人が来ていますよ」

と、同じ学園のシスターから今朝そんな事を言われた。

今は夏休み中だ。相談事など毎日のようにある。

ぶっちゃん疲れただけども、若者の悩みを聞きそれに答えるというのは私としては楽しい。

神に仕える身として、あらゆる人を知るといえるのは大事なことだ。人は神の元に生まれたというしねえ。

「さて、いつものようにちゃっちゃんか救って差し上げますかね」

そう私は意気揚々と渡された資料に目を通す。

リストには今まで相談を受け付けた者や私と信仰の深い生徒ばかりであった。

まったく困った子羊だ　と目を通していくと中間くらいで、ず

いぶんとまあ珍しい生徒の名前が記載されていた。

『三日月夜空』

部活のことで相談事。

と書かれていた。

ずいぶんとまあ珍しいことで、あの『三日月夜空』がねえ。

今まで生徒はおるか教師一人にさえ相談事などしたことがない彼女が、こうも突然私に相談事とは……

しかもこの夏休み中に……ねえ。

そついえば彼女、隣人部を設立してから少しばかりだが様子が変わった気がする。

というかそもそも、どうして今まで誰とも群れることのなかった彼女が部活なんて作ったのか……

少しばかり疑問に思っていたがその時は気持ちの変化といった感じで特に考えることもなかったわけだ。

だが今この時、私の中でその疑問が再び浮き上がった。どうして彼女が部活を設立したのか……

そして私に相談なんて持ちかけようと思ったのか……

「……おっもしろいねえ」

私は他の生徒の相談事など後回しにし、すぐさま夜空を呼ぶことにした。

これは久しぶりに面白いことがおきるよん。おもしろすぎて涙がでてくるよん。

いったい彼女に何が起こったのか、私はそれを解明することにしたのだった。

数時間後。

私は隣人部の部室を開けておくようにと夜空に伝え、部室で一人待つことに。

コンコン……

「用があるなら入りたまえ」

ガチャリ……

ドアがゆっくりと開く。

そしてそこには緊張した面持ちの三日月夜空がいた。

人に相談するなど慣れてはいないだろう、彼女の動き一つでそれがわかった。

きっと、相談することに対してでもそうとう悩んだのだろう。これは結構一大事的な？緊急事態的な？

彼女からすれば相当の覚悟をしてきたのだろうが、私にはそれが楽しみで仕方がなかった。

これは人への冒涇ではない、人に対する観察だよ。

「色々考えたのだが、あなたに相談することにした」

「ほう、部員ではなくかといって顧問でもなく……まああれは使い物にならんか。それで私に相談してきたと」

「一応あなたも隣人部の副顧問だ。部員の相談は受けてもらう。いや……話を聞いてください」

ずいぶんとかしまる夜空。

いったい何があったんだろうねえ、私はとりあえずこう質問してみた。

「まさかとは思うが、他の生徒や部員ともめ事を起こして部活継続の危機……とかじゃないだろうねえ？」

「いや、隣人部自体に問題は起こっていない」

夜空は淡々と答えた。

ふくむ、そうかそうかそれはよかった。私はとりあえず安堵する。じゃあいったい、何をそんなに悩んでいるのだろうねえ。

「じゃあ今日質問に来たのはどういった御用件で？」

「この相談をする前に、先生には”ある事実”を打ち明けておく必要がある。これは……私が夏休み中毎晩悩み苦しんだ上で出した結論だ」

「ある事実……？」

「あまり驚かないでほしい……恥ずかしいから」

結論とは言うが、夜空の顔には未だに悩みが見られる。悩みだけではない、なにかしらの”焦り”も見られた。

驚くなというからにはそれほどのスキャンダルなだろう、だが……

「心配するな、マザー・ケイトは今まで何千もの生徒から相談事を受けている。中には身内殺しや薬物依存の相談もあったよ。ちよつとやそつとのことでは驚かないさ」

「私と小鷹は”かつての親友同士で幼馴染”だ」

「ええ……！……！……！……！……！……！……！……？」

「驚いていてはいないか……！」

私にそうツッコミをする夜空。

いやいや私もそれなりのことには適応力があるけども、でもそれはええ……！……？



「……ちょっと一回シンキングタイム」

そう言って私はしばらく自分の中で考えをまとめる。  
まさかあのプリン君と夜空が……ねえ。これはまた面白い事実だよまったく。

そしてそのスキャンダルのおかげか、私の中で再び浮き上がった謎が徐々に解明されていった。

そして、彼女の裏の部分も見え始めてきた。

「……OK、これである程度の謎が解明された」

「どこぞの名探偵じゃないんだから……」

「まあまあそう焦りなさんな、君の相談を受ける上で私は君を理解しようとしているのだぞ」

そう言う私に対し、夜空は何も言わずぶすつとした顔で返した。

どうやらまだ私は完全に信用されていないみたいだ。

そちらがこっちに来ないのなら、私が君を徐々にこじ開けて行けばいいわけだ。

この私に相談してきたのだ。それなりの成果は持って帰ってもらうよ。

「とりあえずまあ、よく打ち明ける気になったね」

「悩みに悩んだがな、正直今は後悔してる」

「まあまあ、ためらいの後悔何もしないよりは充実の後悔をした方がいいよお」

私はそう言って夜空を宥める。

安心しなさいな、君のその覚悟は無駄にはしない。最も私が無駄にしないだけで君自身がどうするかにもよるが……

正直今、君は結構『先に進んだ』ことになる。他の隣人部部員よりも先の段階にねえ。

だが進んだだけだ。君はこれから『認めて』いかなければならぬい。

君自身の行いと弱さを、そして隣人部が生み出した結果をさ……

「正直今の事実を打ち明けただけで、君の悩み事は全部手に取るようにわかったよ」

「……」

黙り込む夜空。やっぱりそうくるか……

じゃあない、じゃあちよっとだけ厳しめにいきますか。

「まず君がどうして隣人部を作ったか、それはけして『友達作り』のためなんかじゃない」

「……」

「君は羽瀬川小鷹が転校してきた時、君はどうにかして彼に近づこうと思った。だが思ったただけであって君はそれをしなかった。というより……『できなかつた』」

「ぐっ……」

「何があつた？かつての幼馴染と言つたね？それが今ではまったく違う関係になつていてということ……」  
「……」  
「というかプリンくんが君のことを『覚えていない』となると相当昔の話だろう」

私何か言うたびに夜空の顔が歪むのがわかつた。

多分今の言葉の中にいくつか確信に近づくことが入っていたのは確定的に明らか。

これでも推理力には自信があつてねえ、それも人の心境が絡むとなおさらね……

そして観念したのか、夜空はその事実の続きの部分を話した。

「なるほどねえ、10年前プリンくんは君に何も言わずして君の元から去ってしまったわけだ。しかも君も君で恥ずかしさの余り男の子のふりなんてよくやるよ」

「あの時は……恥ずかしいというのもあった。だがそれ以上に小鷹の……『タカ』の願いを叶えてあげたかった」

「『男の子同士の友情』……ねえ」

「やつも最初に私を見て私のことを『男』だって勘違いしてたし、ばらしたらその……シヨックを受けてしまつかもしれなかった」

夜空は恥ずかしそうにそう打ち明ける。

気持ちは察する。大切な人が一瞬にして目の前から姿を消してしまった。それはものすごく辛いことだと思う。

私だって明日マリアが急に姿を消してしまつたら、精神が崩壊してしまうかもしれない。

夜空の気持ちは理解するが、そこで同情をってしまったてはいけない。

この子を助けるのではなく、この子が今後道を切り開けるように助言をしてやらなければ意味がないのだから。

「裏切ったプリンくんも悪いが、君だって彼に『嘘』をついていた。それは認めているね」

「ああ、だから私は奴を幾度なく恨もうと思つたことはあつたが彼を嫌うことはなかった。恨んでしまえば……それは一方的になつてしまふ。彼にだって事情はあつた」

「優しい嘘だつて、ばれてしまった時は厳しい結果を生むことがある。君はそれを恐れた結果プリンくんを失つてしまった。最も大切な親友を……」

私はあえて厳しい口調で接する。

彼女は意外にも物分かりがいい、いや……良すぎる。

それは彼女は全てにおいて『諦めすぎた』からだろう。彼女は間違いなく全てを捨ててしまっている。

だけど羽瀬川小鷹がこの学園に姿を現し、彼が未だに三日月夜空のことを親友だと思っていることを知ることができた。

そして彼女は再起を誓った。だがこうまで時間をかけてしまった。彼と再会してもう3か月近くも立ってしまっている。

間違いなくそれは、彼女自身の『弱さ』にある。

彼女のシナリオを次の段階に進めて振り返ってみようかねえ。

「話を戻そう。そしてどうにかして彼に近づこうと思ったが10年前のトラウマが原因で中々接することができずにいたわけだ。そんな時に君にとつて転機が訪れた」

「ああ、あの”補修”だ」

そう、それはあのレポートの補修。

多人数で組むというレポートを、一人でやってきたバカな子羊が2匹。

それがたまたま、かつての親友同士を結び付けることになってしまったわけだ。

まさに奇跡というべきか、奇跡への軌跡というべきか……

「そして君は小鷹くんと色々話し合いながら、どうにか彼に真実を告げる機会を伺っていた。いや自分では真実を告げることができなかったから遠まわしに気付かせようとしたはずだ」

「……ああ」

「だが彼が予想以上に反応を示さないので、また君の諦め癖が出てしまった。だけどそれでも諦めきれなかった夜空学生はこう考えた。「こいつともう少し長い時間一緒にいられないか、時間をかければあるいわ」とねえ……」

「……………ああ」

「そして話し合いの末、『部活』という答えに結び付いた。部活を作れば小鷹と一緒にいられる。いや……………『羽瀬川小鷹と二人っきりの部活』を作ってしまう方がいい。そして彼を引き込んでしまえば…

…」

「……………やめてくれ」

私が何かを言うたびに、夜空の体が小刻みに震えているのはわかっていた。

それは恐らく『恐怖』だ。心を見透かされている恐怖と自分の愚かさを他人に知られる恐怖。

そして自分がそれを思い知る恐怖だ。確かに怖いだろっね自分の負の感情なんて思い返したくもないだろうね。

ましてや君みたいにプライドの高いやつは余計に……………ねえ。

「その続きもなんとなく……………というか私には君の今の心境すら読めてしまったわけだが、そこで引き返すのなら引き返したまえ」

「え……………？」

「自ら相談に来ておいて、都合の悪いことだけ目を逸らそうとするやつになんて話すことなんて何も無いよ」

私はさらに厳しく夜空に接する。

今の私は外道だろう、この過去は君の人生にとって最も重みとなっている。深く突き刺さっている傷だろうに……………

それを決めるような真似をする私は神に断罪されてもおかしくはないはずだ。けどどうでもしないと君はまた『逃げて』しまう。

それでは解決にならない、何も変わりはないんだ。

せめて変わるきっかけくらいは掴んでほしい。それが私の願いだっただ。

「んで、どつするんだい？」

「……話を続ける。いや……続けてください」

夜空の目つきが強くなった。若干怯えはあるが覚悟は決まったようだ。

なら、私ももう容赦はしないよお。

「そして隣人部を作って数週間は思惑通り小鷹を縛り付けることができたわけだが結果は実ることはなかった。そしてとうとう恐れた事態が起きた」

「ああ、部活という性質上もちろん『入部希望者』というものはいる」

「君たちが何気なく助けてしまった少女、志熊理科の入部だ。これですまず隣人部は夜空と小鷹の部活ではなくなつた」

「……………」

「そして彼女だけならいいものを、今度は楠幸村の入部。人がさらに増えてしまうことになるが小鷹のためを思つた優しい君は、小鷹に男子生徒の後輩を作ってやろうという粋な計らいで、『男子なら敵になりえないだろう』という理由で幸村の入部を認めてしまった」

「ああ……その通りだ」

「そして今度は小鷹の妹である羽瀬川小鳩がやってきた。ここでも心優しい君は小鷹とその妹のことを思い。そして『妹ならば敵にならないだろう』という意味も兼ね小鳩を入部させた」

そう、誤算こそあれこの時点では夜空にとってはどうにもなつていただろう。

『変な天才少女の後輩』はまあ多少小鷹と仲がいいのが気に食わないだけで、その他二人は自分にとって『障害』にすらならない。

それ以前に、『幼馴染』という最大のアドバンテージを手にしてる夜空からすればそんな連中だのただのオプシオンに過ぎなかつ

ただろう。

小鷹が学園生活を楽しめる部活を用意し、仲間を増やした。全ては『羽瀬川小鷹のためだけ』に親友である自分が用意した産物。それに優越感すら抱いていただろう。

ここまでならなんとかなった。だけど……

「問題は…… 『柏崎星奈』 かい？」

「ぐっ……!?!?」

『柏崎星奈』という名前を出した瞬間、夜空の表情が急激に強張った。

そうだ。彼女が入部するまでは全てが三日月夜空の領土であり陣地であり、ペースを保っていた。

だけどそれを全てごちゃ混ぜにする。それをかき乱す存在が現れてしまった。

そして彼女の出現が夜空を焦らせ、他の部員の小鷹への執着度を高まらせた。

「隣人が部として整ってからではなく、せめて彼女が『初期に入部していたら』話は変わっていたかもしれないね。んで彼女が急に現れたことにより最も小鷹に近かった君が、いつのまにかおいてけぼりに……」

「あ…… ああ……」

「それもそのはず、君は10年前の傷が原因で人への接し方を『失っている』。星奈や理科や幸村が君と同じ残念な部分を持ち合わせていたとしても、君はそれらよりも『劣っていたのだから』」

「ぐっ!?!?」

「そして近づくことができない苛立ちは『嫉妬』に変わる。小鷹に近づく人たちを遠くで見ることしかできない。最も彼に近いのは自分だというのに。君にとって星奈はおるか他の部員、小鷹の妹や1

0歳のマリアすら『敵』に見えてしまつたようになってしまった」  
「違つ……違つ違つ違つ！私はその薄汚い感情なんて！！」  
「『金髪巨乳の完璧美少女』に『超天才少女』に『男の娘』に『金髪ロリのアホの子』に『シスターの幼女』……そんなライトノベルのキャラみたいなやつらに比べて君はただの『人間の欲望にまみれた地味なやつ』でしかないのだから」

少々言いすぎたかねえ。あれだけ否定していた夜空がびたりと固まつた。

そしてボソボソと、「やめてくれ……」と呟きながら涙を浮かべていた。

これくらいにしておこうかね、あとは自分で気づいてくれ。

まあそのうち、君にとつて最も『身近な奴』がそれを教えてくれるだろう。その時君がどうなつてしまふかは……少々不安だがねえ。ここまですぐはつたご褒美、短所ばかり言いまくつてたから少しだけ褒めてやるかねえ。

「ごめんごめん、言いすぎちゃつたよ」

「……私はどうすればいい？」

「それは自分で考えるべきだ。君はもう色々なことに『気づいてい』はずだよ。助言をするとするならば気づかぬふりはするなということだ」

「なんの……ことだ？」

夜空は疑問の表情を浮かべる。

まあいいさ、今は触れないでおこう。今触れてしまえば隣人が『潰れてしまふ』かもしれないからねえ。

「なんでもないさ、にしても君はなんとというか……非常に『人間臭い』ね。そこらのやつらよりも人間してるよ」



「意味がわからん。それは褒めているのか？」  
「褒め言葉だよ。それが『三日月夜空の本質』なのかもしれないねえ。人間らしいということはいいことさ。『毎日が楽しいなんて、毎日楽しくないのと同じ』……ってね」

人を純粹に想い、人のために純粹に人を憎んだり羨んだりできる。それは自らに欠点があるからこそできることで、独自の色に染まっ  
っていないからこそ得られる感情だ。

人間はアニメのキャラとは違う、キャラクターは生み出されたものであつて長所も短所の全てが特徴となつて人にウケるものとなる。だけど人間の場合は長所しかみられない、短所もひっくりかえされて愛されるといふことはほとんどないのさ。だつて自分自身が長所しか自慢しないうえ、短所は嫌うし認めようとしなないだろう？

それを補いたいから人と人と協力をする。人はお互いを信じあえる仲間を欲しがる。自分を認めてくれる『友達』を作ろうとするのさ。

その純粹さが人間らしさだと私は思うよ。そして夜空は誰よりも純粹に、人間なのさ。

「……今日は相談に乗ってくれてありがとうございました。多分もう二度と相談なんてしません」

「はっはっは、そう言っていてられるのも『今のうち』だけだと思つよん。まあせいぜい若者らしくトウ・ザ・ロックしてくれ」

私の言葉など聞く耳持たず、夜空はしかめっ面で帰って行った。私個人としては、二人がせっかく再会したんだし和解してくれたほうがスッキリしてくれていいと思うんだけどねえ。敵は多いしねえ。

しかし彼女のプリンくんに対する想いはすさまじいものがあるな。あそこまで想われているのに気付かないプリンくんを私は殴り



本当はもう気づいていたこと（前書き）

第26話です。

「三日月夜空」視点。

本当はもう気づいていたこと

『君はすでに気づいている』

果してこの言葉は何を意味しているのだろう。

そしてこの言葉の意味を知ってしまった時、私に何が起こってしまっただろう。

ケイト先生に相談したことで、私は自分の弱さを先生に指摘されてしまった。

わかっていた。あれでもまだ断片でしかない。厳しいようであれでも先生は優しくかったほうだろう。

だがそんな先生からもやはり私は逃げてしまった。最近の私は逃げればかりだ。

そんな私に先生が告げたたった一つの助言、『気づかぬふりをするな』。

気づかぬふりをせず立ち向かう、その先に待つ結果が何を意味するかなど今の私にはわからない。

だけどこのままでは何も変わらない、変わらないのだ。

小鷹と再会したことで私が起こした行動には意味があっただろう。だが結果にはなっていない。

私自身も何も変わってはいない、エア友達と話すことも他人を拒絶することも以前のままだ。

柏崎星奈、志熊理科、楠幸村 あいつらに対して私は普通に振舞っているように見えるが内心はあいつらに恐怖を抱いていた。

あいつらも結局は私から何かを奪っていくのではないかと。そして私はまた全てを無くしてしまうのではないかと……

私が人間の欲望にまみれているから、私が最低な人間だからか。残念な人間だからか……

「本当に……このままでいいのか」

私は自分自身に言い聞かす。

もう結果を待つのはやめだ。夏休みもあと少しだ。

そういえば肉が隣人部の合宿をやりたいとかほざいていたな。

合宿　という名を借りたただの遊びだろう。部活動と題して我々はいつも遊んでばかりだからな。

友達作りの部活　そんなものはまやかしに過ぎない。あんなところにおいても友達なんてできない。みんな自分勝手に動いているからな。

無論、私もだが。

合宿か、ひよっとすればそれが最後のチャンスになるかもしれない。

夏休み後も隣人部は存在し続けるが、正直二学期が始まって現状維持なら私自身ももうお手上げだと思っている。

小鷹が私に気づいてくれないのならもう隣人部なんて存在していても仕方ないだろう。

なにも結果を生まない、傀儡の部活など……

- - -  
- - -  
- - -

### 合宿の日。

肉の別荘は他県にあるというので我々は電車で向かうこととなった。

電車の中は人でいっぱいだった。ああもう死にたい。死んで楽になりたい。

電車の中であいつらはという呑気にトランプをやっていたり話をしていたり。いつもの部活となんら変わりなかった。

私はというといつも通り本を読んでいる。

誰と話すわけでもなくひたすら本を読む。その方が落ち着くから。小鷹と一番近い存在でありながらそんな彼に話しかけるのが一番苦手な自分。いや、彼の周りに余計なやつらがいることでその輪に入れないでいる自分。

そこで私はそんな自分を恥じるのではなく彼の周りにいる奴らを拒絶する。私はやはり墮落しているな。

人間は墮落する。けして私が人間不信の残念だからではなく人間だから墮落する。

どんなやつでも必ず人は墮ちる。そうして人は救われるんだ。

だが人は墮ち抜くほど強い存在ではない。って坂口安吾が墮落論に書いてた。

それを読んで私が願うのは、あいつらが一日でも早く墮ちてくれることかな。ああ最低だ私。

「人間臭い……か」

急にケイト先生が私に言った言葉を思い出した。

先生は言った。私は誰よりも人間なんだって。それが私の本質なんだって……

こんな私を見てなぜ先生はそんなことを言ったんだろう。それが未だによくわからなかった。

こうして本を読んでいるうちに電車は目的地に到着。

あたりを見渡す限りバスやタクシーが通っている感じはしない。

これはあれか、歩けってことか？人ごみの中気持ち悪いのを必死に我慢し続けもう死にそうなのにそこから歩けと……

肉め、合宿で必ずや地獄を見せてやる。

炎天下の中歩き続けること約一時間。

「ご立派な柏崎の別荘へとたどり着いた。

近くには海があり、別荘もそれまた立派だった。金持ちめ……  
ついて早々お子様達は海を前にはしゃぐ、理科は小鷹をおちよく  
る。幸村は黙っている。

そして肉が色々と仕切っている。なんか私の立場無いな。

とりあえず一度集まり、最初にやったことといえば海を前にして  
みんなで「海だー！」って叫ぶやつ。

あれだろ？海を前にしてやる儀式かなんかだろ？私にはあれの意  
味がさっぱりとわからん。

だが定番ということをやったはいいが全員がバラバラだった。あ  
れこんなだっけ海の儀式……。

いよいよ海に入るところで、小鷹が日焼け止めを取り出し  
た。

「……私は日焼け止めなど持ってきていないのだが。……まあ大丈  
夫か」

全身シマシマのフルボデイ水着だし、大丈夫だろう。

しかしそれでも顔に紫外線が当たるな。とそこで理科が私に近づ  
いてきた。

「顔にもきちん塗った方がいいですよ夜空先輩、紫外線をなめて  
はいけません」

と言って理科は特性日焼け止めクリームだかを私に貸してくれる  
といった。

理科が使ってる日焼け止めクリームか、怪しい……。

「なんか変な物質入ってはいないだろうな？」

いかがわしそうな顔で私がそう疑うと。

「大丈夫ですよ、多少いつもよりキモチよくなっちゃうくらいで……」

「小鷹、後でそのクリーム貸してくれ」

やっぱり不安なので小鷹のを借りることにした。  
しばらくして私が借りたクリームを塗っていると。

「よ、夜空っ！」

うざったい肉が私に話しかけてきた。

なんだいきなり顔を真っ赤にして気持ち悪い、生焼けの肉か……

「……なんだ肉」

私の不機嫌そうに返すと……

「あ、あたしに日焼け止めを塗りなさい！」

なんか知らないが肉に命令された。

「なんで私が肉の加工を手伝わなければならないんだ」  
「べ、べつにいいでしょ手が空いてるんだし!!！」

そういつて肉は私に日焼け止めクリームを投げつけてきた。  
こんのお肉、ふざけるのもいい加減にしろ。なぜ私なんだ。

小鷹にでもやってもらえばいいだろ、ってそれは私的にはいやだな。



仕方ない塗ってやるう、ただし……

「そうそう。素直に私の言うことをきいとけばいいのよ」

とか調子のいいことを言って肉はシートの上に寝そべり、ビキニのトップスの紐をはずした。

そして私はクリームをつける。足の裏にな。

誰も手で塗ってやるなんて言っていない、貴様みたいな肉の塊は足で十分だ。

「冷たっ」

「我慢しろ」

足の裏で肉に日焼け止めを塗っていく私。

やばい、自然と笑みが浮かんでくる。この感覚気持ちいいな。

だがこうも私が親切心丸出して塗ってやっているのに肉は文句しか言わない。

私は『慣れてない』とだけ言って不器用さをアピールする。ああ慣れていないのは本当。

「ふふん、今日のアんたやたら素直じゃない。やっと私の偉大さがわかった？」

「そんなところだ」

偉大さとかなにそれ？人に踏んづけられて喜んでる駄肉のどこに偉大さがあるというのだ。

「ふふ、いつもそんなふうには素直なら可愛げがあるのにな」

「そうか、では今後は気をつけよう。私は度量のある人間だからな」

まあ実際は度量などない最低な人間だが……

「はいはい、まあそういうことにおいてあげるわ」

肉は機嫌よさそうに笑い、

「……ねえ、大きいと言えはあんたの手、けっこう大きくない？」  
「気のせいだろう」

おっと、そろそろ気づくころか。

言いながら肉は頭を動かして横を見た。

「ってぎゃあああああああああああああ！」

あ、バレた。

嗚呼……肉を踏みつけるゲームはもう終わりか……

だが断る。私は肉の重心を押さえつけ肉を踏み続ける。

私の前に背中をさらけ出す間抜けなお前が悪い、大人しく私が日焼け止めを塗り終わるのを待っているがいい。

ついでに肉が「人を踏みつけていいのは私だけなんだから」とか残念な発言をするもんだから私はそんな肉をとことん言葉攻めしてやった。

「お前自身踏まれて喜んでいいるのではないか？認めてしまえ肉。普段は女王を気取っていても、貴様の本質は根本的に虐げられることに悦びを見出す雌犬だ。貴様は動く変態だな。動く猥褻物……とでも言っただほうがいいか？」

おお、肉が苦痛に歪んでいくのがわかる。これこそが私にとっての楽しみ。ああ楽しいな。楽しいな。

「ぐぐぐぐぐぐぐ……調子に乗るなああああああああああああ  
あああああああああ！」

肉が絶叫し腕に思いつきり力をこめた。

肉の手がずぶずぶと地面へと沈み、重心がズレる。

こ、これではバランスが……

「くっ！！！」

踏んでいた足が跳ね除けられ、私はバランスを崩し尻餅をついた。  
涙目の肉はそんな私を見て笑みを浮かべた。

「はぁ……はぁ……あたしは変態なんかじゃない！あたしこそが女  
王で女神なのよ！わかった！！！」

胸を張って高らかに宣言する肉、小学生かお前は……

……ちなみに。

肉は日焼け止めを塗ってもらった際にトップスの紐をはずしている。  
そんな状態で勢いよく立ち上がったらどうなるか、言うまでもな  
いな。

しばらくして肉は自分が今どんな状態になっているかに気づいた。

「夜空のド畜生外道スライム……………！！女王様は私なん  
だから……………」

なんだそりゃ？スライムはお前のその無駄な胸だろうか。

肉は水着を引っつかみ、走り去ってしまった。

「……………おい夜空」

「ああ、反省してるよ」

小鷹に催促をかけられ、渋々そう答える私。

私はいつも肉に『負けている』。というかあらゆる人間に負けてきた。

あれくらいやらなきゃ、気がすまないのだ私は……

こうして夕方までは個人個人で遊び、料理は小鷹以外作れないので小鷹が作ることに。まあ私は餃子しか作れないしな。

カレーを作る最中私たちは調理実習のいやな思い出を語り明かした。所詮私たちは無理やり押し付けられたいらぬ子達だ。みんなの顔もそれを物語っていた。

そういえば肉はどこへいったのだろうか、鮫にでも食われて死んでくれればいいのだが……

「おい夜空、星奈が戻ってこないから呼んできてくれ」

「何で私が……」

行かなきゃいけないんだ　と続けようとしたが小鷹の目が語っていた。「お前のせいだろ」と。

仕方ない、連れてくればいいんだろ。

にしても小鷹もなんやかんやで楽しそうにしていた。小鷹だけではない、他の部員全員もだ。

ぼっち達が集まりこうして海で遊ぶ。オフ会のような考え方でいいのかこれは……

そしてその原点、隣人部を作ったのはこの私。だが私自身はできた人間ではない。

これが最後のチャンスと言っておきながら、結局今日小鷹とはあまり話してはいない。

もう彼は、私をかつての親友と気づくことはないのかもしれない。とか思っていると、外を出たあたりの玄関先で体育座りをしている肉を発見。

話しかけづらいな、だが連れてこないと色々うるさいだろうし……

「おい肉……」

私がそう声をかけると、びっくりしたように私を見て。

「な、なによあんた！今更謝ったって許さないからね！！」

「別に謝るつもりはないし許してくれと言った覚えも無い。調子に乗るな肉が」

そう言っつて私は肉をにらみつける。

そんな私を見て、肉は少しひるんでいたような気がした。

「まああれだ。ご飯ができたから戻って来い。言いたいことはそれだけだ」

「……あたし、今日の合宿実は結構楽しみにしてたのよ。それなのにあんたときたらいつも通りに。こんなときくらい素直になりなさいよ馬鹿」

悲しそうに、半分怒ったように私にそう言う肉。

楽しみにしていた……か。確かにみんな楽しそうにしている。

私自身、この合宿になんの興味もないわけじゃない。ただ今の私には素直に楽しむ余裕が無いだけ。

私はただ探しているだけ、お前とは違って私は綺麗な人間じゃないから……

「何が素直になれだ。私はいつだって私だ」

とりあえず私はいつもの不機嫌な表情でそう答える。  
すると、肉はなぜか小さく笑った。

「ふふっ、あんたらしいねそういうの。自分らしいっていうか……  
でもさ」

そして少し黙った後、肉がこう言葉を続けた。

「あんた少し自分に正直になったら？あんたは自分が思っているほど弱い人間じゃない。だから……」

なにが……言いたいんだこの肉は……。

まるで私の心を見透かすように。見透かしているように何かを言おうとしていた。

そしてそれを言われたくないから、また私はこの言葉を呟いた。

「……やめてくれ」

だけど私の言葉など無視して、肉は言葉を続けた。

「気づかない振りしないで、あんたの大事なものを信じつつげなさい。別に皮肉じゃないわよ？私たちはもう『みんなで一緒に海に行くほどの仲』なんだから。ただのアドバイスよ」

そして肉は別荘の中に戻っていく。

私は始めて、星奈に対して何も言い返せなかった。

あれは勝者の余裕だったのか、ただの気まぐれだったのか……

そしてあの言葉に対して『そういう解釈』しかとれない自分がまた醜くて、嫌になった。



が達成されるハッピーエンド。

「羽瀬川小鷹と『友達』関係になる」

結局終着点はそこじゃないか、そんなもの隣人部を作った時にはすでに……

一緒にゲームをするなんて、一緒にどこかへ行くなんて……  
そんなものは、私たちはもうすでに……

「認めたくない……気づきたくない！だって”タカ”は言ってくれたんだ！！約束してくれたんだから！！」

私はやはり最低だ。最低な人間だ。

人間と言うものを、自分自身というものすら認めようとしない。そばには頼りになる人たちがたくさんいるのに、すがりつく先は自分。自分と言う名の何か……

けどみんなはそれを『知れ』という。弱さを知って強くなれと言う。その先に待つのは私にとってハッピーエンドとは限らないと言うのに。

他人事だと思って、それを正しいことのように言うんだ。結局私を理解してくれてはいないんだ。だってみんなは、癒えない痛み悲しみに傷ついたことなどないのだから。

立ち止まっても偽り、進んでもそれが偽り。

そして最後に私に告げた真実、私自身が私の全てをこじ開ける。

トモちゃん  
もう一人の自分と向き合い、私は壊れた。



デー・テクノライフ(前書き)

第27話です。

「三日月夜空」視点。

## デー・テクノライフ

楽しい日常なんて嘘ばかりだ。

実際に私がそうだ。あの楽しい日々の中で私の頭の中は常に黒く濁っている。

小鷹が楽しんでいるのを見て嬉しく思い、小鷹に近づくどうでもいいやつらを妬ましく思っている。

私が作った部活で満喫してるやつらを見て、私は神にでもなったつもりでいるのかもしれない。

神ならば嫌なやつを消せるはず、もしそんな力があるのだとしたら。肉よりも私自身を消し去りたいな。

私は誰よりも私が嫌いだった。過去の親友に縋り現在を見ようとしないうるものだ。

ひょっとしたら私は小鷹を見ていなかったのかもしれない。小鷹を通し過去の親友を追い求めていただけだ。

こんな最低な私にも友達はある。それは『空想の中』だけ……私におきた『あの事件』がきっかけで生み出された友達、『トモちゃん』。

それがどういったものでも構わない、自分が作り出したものならばけして自分を裏切ることはないだろう。

トモちゃんは私を理解してくれている。私以上に……

「久しぶりに、お話しようか」

今日は誰も部活にいない。

これなら誰にも見られることはないだろう。さて、何を話そうかな……

- - -  
- - -  
- - -  
- - -

目を覚ますと、そこも部活だった。

あれ、空想なんだからもっと楽しい場所でもいい気がするんだが

.....

「なあ、トモちゃん」

と私は語りかける。まあ返ってくることはないだろう。

ならばと私はその返答も自分の中で考えるんだが、なんか今日は考えることができなかった。

この感覚は、何かがおかしい……？  
と、その時だった。

『楽しい場所じゃないか、お前にとってここがより所だろ』

何かの声でした。いやそんなバカな……

私は決して厨二病継続中ではない、「何者かの声が」とかはけして言わない。

じゃあいったい、誰だ？

『心配するな、ここは夢の中。お前は本を読んでいるうちに寝てしまったからな』

また声でした。ここが夢の中だと？

そういえば夏休みに入ってから、私は時々悪夢を見る。

誰かが私に語りかけてくる夢だ。ほぼ毎日見るんだがそれが誰なのかかわからなかった。

まさか今聞こえてくる声もそれなのか？

「お前は……誰だ？」

私はそいつに語りかける。

『おいおい、今さっきお前が名前を呼んでくれただろ？お前は馬鹿か？』  
「なに？」

夢の中で馬鹿って言われた。夢の中なのになんかムカつく。って、私はそいつの名前を呼んだ？と……いうことは。

『人間って追い詰められるとヘンテコな夢を見ることくらいはある。だから私が現れてもけして驚かないように』

そう言っただけは姿を現した。  
腰まで伸びる長い黒髪、整った顔立ちの少女。  
そこにいたのは……『私』だった。

「お前は……？」  
『……トモちゃん』

私の質問にそいつはすぐさま答えた。  
嘘だろ？おいおいこんなのってファンタジー物の代名詞だろ？ブーチとか。

それに、全てにおいて完璧な存在であるトモちゃんの姿がなんで私なんだ？

「嘘だ。トモちゃんは頭もよくて運動もできて人付き合いも得意で私をけして裏切らない最高の親友だぞ？それがどうして『私』になるんだ」

私は思った事を素直に口にした。

それを聞いてトモちゃんは呆れたような顔をして、ここう返した。

『はあ？何を言ってるんだお前は？それが『お前がそうありたいと願ったお前自身』だからだろ？』

「なっ！？」

『ま、少し話をしようじゃないか。いつものように』

そういつてトモちゃんは部屋のソファーにどかっと座る。

その豪快さもなんとというか私に似ていた。嫌がらせなのか？

「で、さっきの言葉はどういう意味だ？」

私がそう質問すると、またもトモちゃんは呆れ顔で……

『だからそのままの意味だって、というか誤魔化すな。本当は『気付いてる』くせに。全部認めているくせに……』

「……………」

『あー、また黙った。嫌なことは黙って誤魔化す。流石私だな』

「……………」

『まあいいや、じゃあ黙って聞いている。もう逃げるのはやめにするぞ』

こいつ、いったい何を……

気がつけば私は震えていた。ケイト先生と話した時と同じ感覚だった。

だが今は、あの時以上に怖い。なにせ相手は『私』だ。  
いったい何を始める気なんだこいつは……

『そうだな、一つ悲しい物語でも聞かせてやろう』

「はあ？」

『その少女は一般的な家庭に生まれ。非常に男らしく……っという  
と聞こえが悪いから。とても強かで男気溢れる頼りがいのある女性  
に育ちました』

「……………」

『また、彼女は頭もよく身体能力も優れていた。いじめられている  
弱い奴を見つけると放っておけない性格で。見て見ぬふりをする人  
間の弱さを誰よりも認め、嫌っていた』

こいつ……。

『だけど彼女は人見知りなのがたまに傷、友達という友達はいなか  
った。そういった恥ずかしがり屋なところはご愛嬌。ね、三日月夜  
空？』

「んな！？」

『強さと弱さを兼ね備えた非常に人間らしいというか、容姿には恵  
まれているからどちらかといえば人生の勝ち組。本来ならば今の貴  
様は不器用ながらも人と向き合い良い人生を歩んでいただろう』

「何が……何が言いたんだ貴様は！？」

私は震えたような声で怒鳴る。

だがトモちゃんは全く動じずに、そして冷たい声色で返した。

『じゃあ、なぜだ？』

「何が！？」

『じゃあなんで今の貴様は墮落し続けている？どうして貴様はこう

も辛い日々を送っているんだ?」

「そ……それは。私がただ、最低な人間だからだ」

私は頭の中に浮かんだいくつもの選択肢の中から必死にその答えを選び、答えた。

そうだ。私が悪い。私がただ人間不信なだけ。

あいつが私を置き去りにしたからなんかじゃ……。とトモちゃんは私の考えを見抜くかのように語りだす。

『なるほどな、全ては自分が悪いと?』

「そうだ。私が全て……」

『嘘つくな!!』

「ひい!」

突如トモちゃんは私に怒鳴り散らした。

思わず私は驚きの声を上げる。

『本当は思っているくせに。私にできたたった一人の親友がいなくなったことが現在に繋がっているって』

「違う!あいつは悪くないんだ!!だってあいつは……私の前に戻ってきてくれたから!!」

『戻ってきてくれた……か。じゃあなぜだ?おかしいとは思わないのか?思ったことはないか?』

「何が、おかしいと……」

そしてトモちゃんは言った。

私が普段から思わないように、口に出さないようにずっと我慢し続けてきたことを。『私』の姿で。

『「なんで私が、小鷹の傍らにいないんだ」って』

「!?! やめる!?!」

『本来貴様がいるべき場所には、ある人物がのうのうと居座っている……』

「何を……」

トモちゃんがこれから先言おうとしていることはすぐにわかった。ただ私には誤魔化すことしかできない、だってそれを口に出してしまったら。

そんなの、私はただの弱者だ。逃げてるってわかっていながら、耐えて耐えて……でも。

『そういえば貴様の近くにはこんなやつがいたな。父親は学園の理事長。文武両道容姿端麗。男子の誰もが心を奪われた美少女。性格は悪いが……それでも他人のことはきちんと理解しており人当たりもいい。さて誰だろうねえ?』

「ぐっ……」

『あれ? わかつてるのに答えられないのか? それじゃあ貴様は駄目な肉以下じゃないか』

答えなど……わかつている。

私にとって最も天敵の、私の次に消え去ってほしい存在。

あいつさえいなければと、何度思ったことが。

『答えは……』柏崎星奈『だ』

「……やめてくれ」

『やめてくれ……か。やめてくれやめてくれやめてくれ。そうやって何回逃げれば気がすむんだ貴様は?』

トモちゃんの一言一言が私の心を、影をこじ開けてくるのがわかる。



これ以上こいつの言葉を聞いていると、おかしくなってしまう  
うだった。

聞きたくない、いやだ認めたくない。そんな思いだけが私の頭を  
支配していた。

『三日月夜空は羽瀬川小鷹の親友だった。だけど柏崎星奈は全くの  
他人だ。なのになぜ星奈が小鷹の傍らにいるのだろうか？おかしい  
とは思わないか？』

「お、おかしく……ないだろ？あいつは性格こそあれだが私よりも  
社交性がある。それに小鷹は私のことを気付いていないのだから」  
『いやあすごいな。この後に及んで一番嫌いなやつまで庇うなんて  
お前実は誰よりも優しいやつなんじゃないのか？って他人をかばっ  
ていい自分を演じてるだけか』

「違う！ちが……」

『だって思ってるんだろ？口に出さないだけで、羽瀬川小鷹の傍ら  
に相應しいのは自分だって。私以上にあいつに近づくなんて』

「そんなことは……ない」

そんなことはない。ない。あるはずが……。

ある……はずが……。

あ……ああ……。

『本当は思ってくるくせに。それをお前ときたら自分がただ悪いと、  
大切な親友に押しつけたくないと、自分が最低だからと耐えて耐え  
て』

「違う……」

『それを自分のいいところだと美化して。自分はけして卑しくない  
と。醜くないと』

「違う……」

『大嫌いな肉に劣っていないと。自分と同じ残念な後輩に劣ってい

ないと。年下にも劣っていないと自分に暗示し続けひたすら小鷹に近づきたい欲求を我慢して我慢してここまで追い詰められて。あの時もあの時もあの時も、なぜ自分ではなくあいつらなんだろうって、そう思っていたんだろ!？」

「やめろ……やめろ!！」

『うらやましく思う心、妬ましく思う心、あの子さえいなければという疎ましく思う心……。それらは人間として当然の感情だ。貴様は何も悪くないだろ?』

「あ……あ……」

『なぜなら』

やめろ、これ以上言わないでくれ。

これ以上先に進めば、私は……私は……。

やめろやめろやめろやめろ。言うな言うな言うな言うな。

『なぜなら、お前を弱さを引きずり出したのは『あの日』で、そんなお前の事情も知らずに追い詰めたのは……小鷹を含めたあいつらなんだから!！』

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおお!！」

トモちゃんは言った。『私』の姿で。

私が今まで必死に抑えつけてきたものを全てさらけ出した。口にだけは出したくなかった。例え夢の中だったとしても。

そしてそれを認めたくはなかった。全てを憎みきつてもその憎しみを表には出さくなかった。

最低な人間だっていつて自分に嘘ついてた。そう思うことで自分が強いと錯覚していた。

『人間つてさ、孤独になると自分を『特別』だつて思いたくなるものだろ？「なんで自分なんだろう」つて。「なんで自分がこんな目にあわなきゃいけない」つて』

「……うん」

『トモちゃん　お前が作り出した『お前自身』。私にはこんな素晴らしい友達がいる、お前らが見てる三日月夜空は孤独だが内面はこんなにも素晴らしいって自分を作り出してさ』

「……うん。そうだ。その通りだ。私は救われたかった。本当に信じられる友達を作りたかった」

気がつけば、私は全てをさらけ出していた。

そういえばここは夢の中じゃないか、なら誰にも聞こえていないよな。

でも、これは私が全ての事実を受け止めたということだ。  
もういいや。全てを受け止めよう。

「タカが　羽瀬川小鷹があの日私の親友になってくれたのがうれしかった。あいつは小さい頃一人だった私を救ってくれた唯一の人だった。運命だと思った。けどあいつは何も言わずに私の元を去った。それ以降の私は墮落してばかりだ」

『必死に、やつを忘れようとしたんだろ？』

「全てをやつに押しつけることはできなかった。自分の弱さを認めたくなかった。願ひ続ければいつかこの想いは色づくって信じていたから。そしてあいつは……」

『お前の元に、帰ってきた』

「けどなんであいつは私に気づかない！なんで私ではなく他のやつがあいつに近づく！なんで私が一人取り残される！？私と小鷹は……親友だったんだぞ……！」

『だったらいつそのこと、真実を打ち明けたらどうだ？』

「もう……遅いよ。あいつの親友は最低なやつで、あいつには大切なものが出来すぎたんだ。私が打ち明けることでそれらが全て壊れてしまったらどうするつもりだ!？」

私は泣き顔で思ってる事を全て口に出した。どうせ夢の中だ。

私は確かにあいつらを妬ましく疎ましく思った。何度も何度もいなくなれって思った。

けども自暴自棄になって全てを壊そうと思ったことなんてなかった。それは絶対にやっちゃいけない。

『でも、このままじゃダメだろ。』本当にそれでいいの? お前はなかったことにはしたくないはずだ』

「……よくない、いいはずがない」

『だったら、貴様自身が動くしかないだろ? 全てを壊さずにすむ方法……一つだけあるだろ?』

「え……?」

私が啞然とした顔を見ると、トモちゃんは私のおでこを指で小突いた。

「いたっ!」

『まゝた誤魔化したな貴様。もう気づいてるくせに』

「……」

『さらけ出せ、もう我慢するなよ。過去とかトラウマとかそんなものは関係ない、かつて彼の親友であった貴様がかつての親友のことをどう思っているかだろ?』

「それは……」

『もう『過去』なんてない、あるのは『現在』だ。今まで自分が作り出していた自分をぶっ壊してでも小鷹を手に入れる』

「いいの……かな?」

『願い続ける想いはいつか色付くんたる？嫌いだっただ自分の弱さも強さに変えていけ。お前はあいつらには持つていないものを持つてゐる。羽瀬川小鷹の親友だったという”過去”ではなく”事実”を』

親友だったという……”事実”。

私は今までそれを過去のものだと思つていたが、事実という表現をしたことがなかった。

トモちゃん、お前はやっぱり……

『じゃあ、行つてくるがいい』

トモちゃんのその言葉と共に、私は目を覚ました。

.....  
.....  
.....  
.....

「う……う……」

目を覚ましすぐさま時計を見ると、すでに昼は過ぎていた。午後2時。

結局今日は誰も来ないってことか。

そして顔に手をやるとびっしょりと汗をかき、眼元は涙で濡れていた。

あれは悪夢だったのか、それとも私にとつてとても大切な……

「お告げだったのか……」

全てをさらけ出せ、とトモちゃんは言った。  
そうしたことだ。私はそういう人間だった。

もう気づかぬふりも、逃げることもできない。  
退路もない、賽は投げられたら戻りはしないことを私は気付いて  
いた。

今小鷹に会ってしまったえば、私はどうなってしまっただろうか。  
この胸の高鳴りを抑えることができない、だって抑えていたもの  
が解放されたのだから。

あの時抱いたあの感覚、小鷹と再会した時のあの高鳴り。

「もう……限界だよ」

そんな時だった。

部室のドアがゆっくりと開く。

その時、私はトモちゃんの言葉を思い出した。

『願いつける想いはいつか色付くんたる？』

そこにいたのは、小鷹だった。

私のかつての親友、タカだった。

「あ、お前一人か……って、お前……」

小鷹が私を見て、何かしら表情を曇らせた。

そして握っていた鞆を落とした。

「小鷹……小鷹」

私は小鷹を見るなり、私はまた涙を浮かべた。

誰よりもお前に近づきたかった。誰よりもお前と話していたかっ  
た。

だけど私は怖かったからそれができなかった。でも今ならできる。

もう怖くないんだ。なんか知らないんだけどさ。もうなんか全部認めちゃったからさ。

「は……ははは、なんだその顔は？おかしな小鷹だ。あは……あはははは」

「お前……どうして、どうして……」

私はふらつと立ち上がり、小鷹の方へと近づく。

こんな形でいいのかなあ、なんか違う気もするけど。

邪魔なやつらはここにはいないし、ここには私と小鷹の二人しかない。

小鷹が何かしら怯えているようにも見えるが、そんなのはどうだっていいよ。

お前は羽瀬川小鷹で、タカじゃないか。お前はタカで、羽瀬川小鷹で……

クク……クククク……私のたった一人の親友。

「小鷹……小鷹……」

「うおー！夜空お前、壊れ……」

「……ごめんな、小鷹」

私は小鷹に抱きついた。そして一言謝る。

お前が去って数年、私はここまで墮落し続けた。

感動の再会を求め濁り続けた。お前とのシナリオを描き続けた。

お前と私の過去を美化し続けたんだ。だけど結局思ったようにはいかないものだな。

だから、このまま全てが無くなるんだっただら。私はそれらを全部壊しても今はお前の傍らにいたいと願ってしまったんだ。

「ごめんな……こんな最低なやつで。ごめんね……こんなバカなや

つで。ごめん……こんな残念な人間で」  
「……ああ、お前は悪くないよ」

小鷹が優しくしてくれた。

本当の親友、誰よりも私を理解してくれる親友が私のそばにいる。いや、親友だったものがそこにいる。嬉しい、本当に嬉しい……。だから私は……。

「う……う……ぐすう……ひっくう……うえええ……うえええええええん！」

思いつきり、自分の弱さをさらけ出した。

抱えていたものが全て爆発し、それが全部小鷹に行った。

壊れてでも、壊してでも私にはそうする必要があった。

先へ進むために仕方なくやったことだって、小鷹を想い続けた故の崩壊だった。

ありがとう、私の親友だった人。



## デー・テクノライフ（後書き）

タイトルは本編と関係ないですが、色々と思いが込められていますよ。

**動き出す過去（前書き）**

第28話です。

「三日月夜空」視点。

## 動き出す過去

夏休みも残りわずか。

あの出来事から10日ほど、最近集まることが少なくなった気がする。まあ私が顔を出していないだけだが。

小鷹とも全く会わなくなり話すことも少なくなった。目に映るのは大抵肉、最近夜ご飯は魚ばかり食ってる気がする。

無理もないか、あんな醜態をさらしてしまった拳句全てを小鷹になすりつけてしまったのだから。

私は全てを『認めた』。そして全てを『知った』。

その結果私は『諦めた』。ここにあるのは過去ではなく現在であり、私とあいつの関係は事実でしかない。

無理にやつに気づかせることもないだろう。隣人部は奇跡的にも結果を築きあげている。それを私の都合で壊すということはしたくないからな。

- - - - -

もう少して学校が始まる。

今日は珍しく部員が全員集まっていた。皆それぞれ自由に過ごしていた。

もちろん小鷹もいる。だが私は恥ずかしくて顔も合わせていなかった。

こんな調子で残された夏休みをのほほんと過ごすのも一興か、だがそんな時期に大きなイベントが一つある。『夏祭り』という。

しかも明日だ。まあ私のような者には全く関係のないイベントである。

人は多いし騒がしいし、歩くたびにダメージを負うなどポケ

で言うのもうごく状態ではないか。

このまま知らなかったことにしてもいいのだが、隣人部の部長として一応皆に知らせておくか。

「そういえば、明日は遠夜駅前商店街の神社で夏祭りがある」

さて、みんなの反応だが……。

特に……無いね。無反応に近いね。

うん、これなら行く必要無いね。と、私が黙って読んでいる本のページをめくると。

「えっ、続きは？」

肉が驚いた顔で言った。

「別に」

「いやいやそんな沢尻 リカの会見みたいに返されても……」

「夏祭りがあるよって言ったただけだ。そしたらあまりにも無反応だったからどうでもいいかと思ってだな」

「なによそれ、せっかくだからみんなで行ってみようとかじゃないのね……」

肉は少しだけ残念そうに言った。

なんでわざわざ人の多そうな所にいかなければいけないんだ。行きたければ勝手に行くがいい。

……と思ったが、せっかくだし肉を持ち上げてやろう。私自身の贖罪のついでだ。

「ほう、私の考えを読みとってくれたか」

私らしくないことを言うと、肉を含めみんなが何かしら驚いたよ  
うな顔をして私を見た。

「……なんだ？」

私がそう聞くと……。

「いや、あんたならてっきり「人の多いところなんて行きたくない  
(ぶすっ)」「って言うと思ったんだけど」

「なんだその”(ぶすっ)”って」

「夜空先輩、少しソファで横になったほうがいいと思いますよ」

「どういう意味だそれは？」

肉と理科が失礼な事を言ってきた。

確かに自分でもらしくないとは思うが、色々あったんだよ私にも。  
どうしよう、やっぱりやめようかな……と思ったその時。

「いいじゃねえか、行こうぜお祭り」

奥にいた小鷹が一言。

私をフォローしてくれたのか、は知らないが。その一言で他のみ  
んなも行く気満々になった。

その後部室内で祭りではたこ焼きが食えるだの色々な話で盛り上  
がった。

おいしくないとこ焼きを食わせるやつはゆるせないだの、たこ焼  
きの屋台はあるかだのたこ焼きにマヨネーズをかけるかかけないか  
だの。あれ、私たちがたこ焼きの話しかしてなくね？

とまあなんやかんやで明日祭りに行くことに、私も私なりに楽し  
むでしょう。

この先私たちはどうなるかわからないし、平和ボケしているうち

に楽しむだけ楽しんでおけばいい。

そして翌日、午後七時ちよつと前。

私は待ち合わせ場所である遠夜駅前商店街の近くのとある書店にやってきた。

書店前にはすでに幸村が立っていた。お前いつつもみんなより先にいるな、真面目な後輩だ。

幸村の服装は浴衣、これは私が指定したものだ。結構前に「女物の着物を着たら少しは女の気持ちがかかるかもしれないぞ、立派なおとこへの修行だぜ」とからかった結果プールでも女物の水着だった。

まあ日常でメイド服とか着させたりはしていないから私を外道だなんて目で見ないでくれ。

少しして理科がやってきた。服装は珍しく 本当に珍しく浴衣だった。

お前は年がら年中凶器のマッドサイエンティストではなかったのか？まあどうでもいいか。

その後小鷹と小鳩がやってきた。二人は普通の服装だった。

相変わらず私は小鷹の目を見ることができなかつた。嗚呼あんな黒歴史早く忘れてしまいたい。

だが人間は恥を知って強くなるという。人間は完璧ではないからな。

人を妬んだりする私、人を羨んだりする私、それを否定したがる私。

それらは全てが『私』だ。けして逃げられるものではない。

ちなみにそんな私の格好だが、シャツにジーンズといういつものどおりだ。浴衣など恥ずかしくて着ていられるか。

それに、私の浴衣姿などで喜んでくれる奴もいないだろう。小鷹……。

「さてと、来ていないのは肉だけか……」

ここにいないのは肉だけだった。

丁度いい、ならやつを残して出発するか。

と、私が動こうとした時後ろから肉がやってきた。

嗚呼、お前なんか花火の火力で消し炭になってしまえばいいんだ。しかも肉の浴衣姿、なかなか似合っていて気色悪いなあ。爆発しろマジで。

小鷹も見惚れているではないか、爆発じゃないな消滅しろだな。

「さて、行くか」

私が動くともみんなが私についてきた。

神社は当然のごとく人でごった返していた。嗚呼……地球爆発しないかなー。

あたりを見渡してみるとたこ焼きの屋台があった。すまない話がさっそくたこ焼きにいつてしまった。

もちろんだこ焼きだけではない、射的や金魚すくいなど色々な屋台があった。祭りというのは大抵こういうものがデフォルトだ。

私たちは歩いていると、途中で浴衣貸出の看板が見えた。そこで私は……

「小鳩、お前とお兄ちゃんは浴衣着ないのか？あそこで貸出してるらしいぞ」

「ふえ？わ……私はええ、恥ずかしい」

小鳩は戸惑いながら答える。

まあ恥ずかしいなら仕方ないだろう、祭り〓浴衣を着るという決まりはないからな。

と、そこで空気の読まない馬鹿肉が「小鳩ちゃんの浴衣見たいのー！」とか喚いていた。これだから肉は……

色々討論になった結果、羽瀬川兄妹は浴衣を借りて着ることに。私も勧められたが丁重に断った。意味がないからな。

羽瀬川兄妹と二人について行った肉の姿が見えなくなった後、マリアのお腹がくうつと鳴った。

「なあなあ、ワタシは早くたこ焼きが食べたいのだ」

「ああ、確かにお腹が空いてきたな。幸村すまないがマリアと一緒にたこ焼き四つ買ってきてくれ。金は後で払う」

「わかりました。みなさんのためよろこんで買ってきます。行きましようまりあ殿」

本当に真面目な後輩だ。真面目すぎて少々心配になってきたぞ幸村よ。

と、幸村がたこ焼きを買いに行った数分後……

「うぎゃあああああああああああー！！」

マリアの雄たけびが聞こえた。おい何があった……。

雄たけびから数分後、マリアが涙目でこちらに走ってくる。後ろからはこやかな幸村が。

「夜空ー！ たこの怪物がぎくじどいしほげえりじぱいほげそsdgf！！」

「マリア殿は本当に面白いですね」

マリアは余程驚いていたのか後半何を言っているかさっぱり。お



いいたいたこ焼き屋で何があつたんだ？  
そして幸村はしゃべり方が軽快に、そしてその笑顔……ドSである。

また始まったのか幸村のマリアいじめが……。

「幸村とマリアはあまりくつつけさせない方がいいんだろうか……」  
「理科に言われてもわからないです」

マリアの悲劇が起きた数分後。羽瀬川兄妹と肉が帰ってきた。

見ると小鷹はあきれ顔、それもそのはずその隣で恍惚な表情を浮かべる妖怪肉魔人とそれに囚われた小さな姫君が。

小鳩は本気で嫌そうだった。お前が本当の吸血鬼だったらあんな肉八つ裂きにできるのにな。

そして小鳩は私の元に来て、一言。

「あの……似合ってる？」

「うん」

聞かれたので素直に答えてやつただけだ。別にそっけない態度とかとつてないぞ。

小鷹の方を見ると、その浴衣は似合っていた。

なんかこう、『ヤクザ』的な『非行少年』的な。そういう意味なんだけどね。

口に出してやろうとも思ったが、やつぱり恥ずかしくてやめた。

その後はみんなで食べ物をもさばり食べた。

マリアにはここが天国に見えるのか、蔓延の笑みでたくさんのおい物を頬張っていた。食いすぎると太るぞ。

理科はチヨコバナナをぐちよぐちよ言わせながら変な食べ方をしていた。やめる意地汚い。てか汚い。

そしてそれを見て私は顔を少し赤らめる。何を連想してるのだ私

は。

ちなみに食いものの味はというと、正直言うと微妙だった。

たこは小さいし焼き加減もイマイチ、ふにゃつとしていて本来あるべきカリカリ感が抜け落ちている。そしてマヨネーズがかかっていない。ってまたたこ焼きの話か。

「とりあえず食べるものは食べたし、次はどうする？それとも帰るか？」

「そうですね、帰りましょう」

「いやいや早すぎるでしょ、せつかくだし遊んでいきましょうよ」

私と理科の言葉に、肉が焦ったようにそう返した。

お前はこんなちっぽけな祭りで金魚すくいとか射的とかしたいのか？

「じゃあ好きに遊んでろ」

「え、どうせなら一緒に行こうよ夜空。それともなに？私に負けるのが怖い？」

私が冷たく引き離すと、肉が私を挑発してきた。

負けるのが怖い……か、よく言うよ。

「お前は常に勝者のくせに……」

「……え？なんか言った？」

私がボソリというと、肉が若干表情を曇らせてそう聞いてきた。

このままだと色々と怪しまれるかもしれない、ただでさえ今日の私は私らしくない。

「わかったわかった。貴様のような肉に私が負けるはずがないしな。

貴様が二度と支配者だの神だの言えないようコテンパンにしてやる」  
「言ったわね、じゃあ最初はあそこの金魚すくいよ!」

そういつて肉は走って行ってしまった。

続けて理科や幸村も肉についていく。まったくこんな祭りではしやぐなんて。

「どうかしてるな、さてと私も……」

と、私が行こうとしたその時だった。

がしっ!と誰かに腕を掴まれた。

振り向くと、掴んだのは小鷹だった。

「え?」

「小鷹、先に行つてくれ」

「……わかった。あんちゃん」

小鷹に言われ、小鷹は肉達が向かった方向へと行く。

残ったのは、私と小鷹だけ。

「小鷹?何を……」

「……行くぞ」

小鷹はそういつて私の腕を引っ張り、肉達が向かった方向と逆の方向に走り出した。

走りだしてすぐにあいつらの姿が見えなくなり、私と小鷹は人気の少ない神社の隅へ。

そしてつくなり私は息を切らす。いったいなんだっていうんだ。

「ぜえぜえ……おい小鷹、どういづつもりだ?」

私は全てを諦めた。

気づかないふりをするなって、色んな人に言われた。過去には戻れないって、知っていて私は抗い続けた。

「夜空、俺にも色々あったんだ。謝るのは俺の方だ」

彼は、私のことを覚えていた。でも気付くことはなかった。覚えていてくれただけでもうれしかった。私を最高の親友だと言ってくれたことがうれしかった。

だけどあの時の関係には戻れなかった。何度も願ったけどその度に私は頭を抱えた。

「寂しかったんだよな、エア友達……だっけ？最初見た時は本気で驚いたよ」

彼を想う度に人を憎んだ。自分を憎んだ。他人を羨む自分が嫌いだった。

でもそれが人間だからしょうがないんだって、認めるまで時間がかかった。

ようやくいろんな事に気づいた。奇跡を捨ててまで欲した。

「でもそれ以上に一番驚いたのは、お前が……『女の子』だったってことだ」

「小鷹、何を……」

私は内面恐れていたんだ。止まった時が動いた時、私たちはどう

なってしまうんだって……

過去の二人が再現され現在を失うのか。過去を背負い新たな二人になるのか。

きつと気づける時が来るだろう、なんて思いながら。気づいた先が怖くて……

でも今の私ならきつと大丈夫。きつとお前と解り合えるから。

「 久しぶりだな、ソラ」

ようやく……気づいてくれたんだね。

SORA(前書き)

第29話です。

「羽瀬川小鷹」視点。

消せない過去は誰にだってある。

もちろん俺にも  ある。

寂しい別れの過去は俺が小学1年生の時だった。

「二週間後に遠くの街に引っ越す」と父さんに告げられたあの時。その後何度か引っ越しを繰り返すことになる俺の人生での、初めての引っ越し。

引っ越しをするということは、今住んでいる街を離れるということ。住み慣れた場所から新しい場所に移ることだ。

当時の小さな俺には、それがどれだけ寂しいことかだなんて理解しきれなかっただろう。

俺自身、街を離れること自体は特に嫌だと思っことはなかった。

「転校＝学校が変わる」ということは本当にどうでもよかった。だけど、友達と離れるのだけは嫌だった。

友達だなんて言葉ではかたづけられない、その少年は俺の『親友』だった。

クラスの連中にいじめられていた俺を助けようとして飛び出してきた、その後なぜか俺と取っ組み合いの喧嘩になって、そして仲良くなった。

授業が終わったらずいさま学校を出て、そいつと一緒に毎日遊んだ。

俺にとってあいつと過ごすその時間は、何よりもかけがえのないものだった。

だからこそ  俺は言い出せなかった。

この街を離れることを告げられて一日、三日、一週間経ってもあいつに別れを告げることができなかった。

その間にあいつと遊んでいた時間、あいつの笑顔を見るたびに俺の中で罪悪感が湧いた。

その笑顔を、俺は一瞬にしてぶち壊せるんだって。だからこそ俺はギリギリまであいつとの時間を楽しんだ。

そして引越しまであと二日というところで。

「明日大事な話があるんだ。絶対に来てほしい」

あいつは俺の頼みに頷き、そしてあいつも真剣な表情で言った。

「オレも、明日夕カにとっても大事な話をする」

お互い、明日『大事な話をする』と約束してその日は家に帰った。今だからこそ思う。もしあの言葉が『最後の言葉』だって知っていれば、あれが最後だってわかっていたら、もっとあの瞬間を大切にできたはずだったと。

そう、残り二日となるまで別れの話を黙っていたのは俺の優しさだった。だが時として優しさは思わぬ悲劇を生む。

あいつは……結局来なかった。約束の明日は永遠に来ることはなかったんだ。

何分経っても、何時間経っても、あいつは現れなかった。

時間が経つ度に自分が震えていくのがわかった。罪悪感と恐怖で涙がどんどん出てきてそれが止まらないと知った時は遅かった。

どうしよう、どうしよう、なんて自分の中で言い聞かせた時にはすでに夕日は沈んでいた。

家に帰らない俺を心配して父さんが公園に迎えに来てくれた。でも俺はそこから離れたくなかった。

きつとあいつは来てくれるって　来ないという現実を受け入れたくなくて俺は意地を張った。



「小鷹、もう諦める。きつとお前の友達はお前を許してくれるはずだ」

つて父さんが俺を慰めてくれた。

その言葉を聞いて、俺は諦めた。

たった一人の親友に別れを告げることを諦めた。親友 ソラは俺がいなくなつたと知ってどう思い、どんな思いをしたのかなんて知る由もなかった。

たくさん悲しんだはずだ。たくさん俺を恨んだはずだ。そして…  
…壊れたはずだ。俺はその姿を想像することができなかった。

「時が経てば忘れる」なんて父さんは言った。中学に入るくらいまで俺はその記憶に縛られていた。

中学に入るころには徐々に薄れていったが、時よりあいつの言葉を思い出した。

「百人分大切な友達を作れ、そうすればきっと輝かしい未来が待っている」

ソラ……それはどこにある？

その未来は……どこにある？

何度もそう尋ねたが、その答えは返ってくることはなかった。あいつはもう……いないんだから。

もう会うこともないって、中学3年生くらいのころ俺は踏ん切りをつけた。

日本の人口は数億単位、その中からたった一人見つけるなんて奇跡に近い。

奇跡なんて存在しない、あんなものはまやかしなんだって。俺もいい歳になつたからよくわかる。

気がつけば俺はあいつとの過去が、『どうでもいい事』になっていた。

高校二年生の4月、俺はこの街に戻ってきた。

あいつと初めて出会い、あいつと親友になったこの街に。

この街に戻ってきて、俺はそいつのことを思い出した。

今あいつは何をしているのだろうか、俺以上の親友を作れているだろうか。

だなんて他人事のように思いながら、悲しい別れがあって俺は親友を裏切ったんだなんて自分に言い聞かせて格好つけて。

そこで俺は、まだあいつのことを親友と呼んでいることに気がついた。

「……もし、奇跡っていうのがあって会えるんなら」

なんて願ってみたりして、馬鹿だな俺だなんて言いながら俺は聖クロニカ学園に転入した。

この学校にいるかもだなんて淡い期待を抱いてみたりして、『ソラ』が付く苗字か名前を持つ男子生徒を探したが同い年にはいなかった。

まあそんなもんだよな。と俺は聖クロニカでも結局第一印象に失敗して友達も作れずぼっちでスタート。3年間ぼっちで過ごせば伝説達成だなんて黄金 説かよ馬鹿らしい。

それなりに友達作りも頑張ったが近づくだけで他のやつらは逃げていく。まあそんなもんだろ。

そして1ヶ月立ち、とあるレポートで俺は先生に呼び出された。人と一緒にやるレポートを一人でやればそりゃあ呼び出しもくらうだろう。とそこで先生は同じ条件で呼び出されたもう一人とコンビを組めと言ってきたので俺はコンビを組むことに。

そこで出会ったのが、『三日月夜空』だった。

第一印象は、美人でけっこうかわいい女の子。ただし無愛想。

そんな感じだった。そいつの言動を聞くたびに不快感を抱いたのを今でも覚えている。

どうすればここまで捻くれるのか、だなんて他人事のように思っていたさ。

実のところ、俺はその時でもあることに気がついていた。

そこにいる無愛想な女の名前に、『空』って字があったことを。

まあその時は特に気にもしていなかった。何せ俺の親友は少年だったし、目の前のそいつは美少女。それに日本人口は（以下略）。

それに、こんな無愛想で人嫌いなやつが俺の親友なわけがないしな。正義感の強い男気のある少年となんて全然印象が違っじゃないか。

その後、俺はそいつと一緒に部活を作り、ここまで一緒に活動をするようになった。

時々俺は、なぜこいつと一緒にいるのだろうかと思って思うことがある。最初の二週間は正直夜空が嫌いだったし、サボろうとしたこともあった（まあ無理やり参加させられたが）。

でも、気がつけば俺はこいつと一緒にいることで安心感を抱いていた。言動も性格も最低だがこいつといるととても毎日が充実しているような気がした。

そして時が経つごとに、一つ一つ俺の中で疑問が生まれていた。なぜ、『三日月夜空は俺を誘ったのか』？

一度夜空の噂を先生に聞いた時、俺は先生に「夜空は極度の対人恐怖症で他人と部活を作るなど奇跡に近い」って言われた。

そこで俺はまた思う。なぜ『俺だったのか』って。

俺の逸話（所望ヤンキー話）を聞いて同情したのか、類は友を呼ぶなのかと最初は思った。

だけどそれにしては出来すぎている。中学高校あらゆる人と関わらずあらゆる誘いも断ってきた美少女は、なぜ突如として動き出し

たのだろうか。

そして、あの日……

俺が何年振りか、『あの時』の夢を見た時。

目が覚めると、そこにいたのは驚愕の表情を浮かべる夜空だった。今にも泣きそうな、そんな表情だった。

その後俺は初めて、今まで誰にも打ち明けたことのない『ソラ』との思い出を夜空に語った。

どうしてあの時あいつに語ろうとしたのか俺は覚えていない、けど夜空になら語ってもいいって思ったんだ。

そして、最後にもう一つ思ってしまった。

「ああ、まるで……」

俺はそこで言葉を止めたが、その先に言おうとしていた言葉がある。

「夜空がソラみたいだ」って……。

でも、なぜか俺はそれを言えなかった。多分……言わなかったんだと思う。

本当は、あの時に気づいていたのかもしれない。俺は知らず知らずのうちに願う……そして同時に恐れていたんだ。

そして月日が経ち、星奈が変な男たちに絡まれていた時だった。

その時俺は夜空と少し言い争いをしていて、少々機嫌が悪かった。そしてあの時の話も交えていたため、ますます苦いものを感じていた。

帰り道で悪い男共に絡まれている星奈を見て、俺はあの時の俺を思い出した。

「10年前にいじめられていた俺……か」

そして俺は、あの時のソラみたいに星奈を助けてやろうかなんて思った。

あいつも悪い奴じゃないし、助ける義理はある。あとで夜空に色々言われたら適当に誤魔化そうだななんて思いながら。

だけど俺より先に動いたのは夜空だった。そして夜空は言ったんだ。

『あの時』と……同じことを。

「弱い者いじめはやめろ」

俺は、その時夜空を通して見えてしまったんだ。

かつての親友を……かつて俺が裏切り悲しませてしまった少年の後ろ姿を。

「ソ……ラ……？」

俺は小さく呟いた。三日月夜空は無愛想な美少女、誰がどう見てもそうだ。

俺の親友は少年だった。いや……少年に『見えていただけ』。

「ねえ、その子ってひょっとして男じゃなくて、『女の子』だったなんてオチとかないでしょうね？」

突如俺は星奈の言葉を思い出した。あれは冗談だったはずだった。だけど、今の俺にはそれが冗談とは思えなかった。

まさか…… だけどそんなバカなはず　だなんて俺は心の中で動揺を隠しきれなかった。

そして夜空が男共に殴られようとした時、俺はとっさにそいつらの拳を止めた。

俺はこいつを傷つけない、傷つけてはいけなと思った。

俺は親友をかばうように、珍しく本気で男共を撃退した。

そして帰り道、俺は尋ねようとした。けど……言葉が出なかった。交差点で夜空と別れて俺は家へと帰宅する。頭の中で様々な事を整理しながら。

トボトボと、気がついたら家についていた。そして俺は浮かぬ顔で家に入る。

誰もいなかった。小鳩もまだ帰ってきていない。俺はすぐさま自分の部屋に向かう。

そしてベッドに横になる。疲れきったかのように、どこかに戦争に行ってきた帰りみたいに。

三日月夜空が…… ソラ。

俺は何度も頭の中でそう思い、10年前のあの出来事やこれまで夜空と過ごした部活の日々を思い返した。

少年だったやつが美少女で、エア友達で対人恐怖症で、誰とも関わらず一人ぼっちの日々を過ごして。

ああも壊れて捻くれて、ねじ曲がって……そして悲しそうに寂しそうに。

そんな風にしたのは誰のせいだ？なんて自分に問いかけてさ。

「はは……ははは……なんだそれ？バカみたいじゃねえか！ぶっはははははははははは！」

何が一言謝りたいだ。何が親友を裏切ったクソ野郎だ。

そう思って、救われたかっただけじゃないか。

格好つけるだけ格好つけて、いざ変化を目の前にしたら逃げてるだけじゃないか!!

ようやく会えたかもしれないのに、見つけたかもしれないのに……俺は……俺は。

その奇跡の前に俺は、笑うことしかできなかった。

後輩との何気ない会話（前書き）

第30話です。

「羽瀬川小鷹」視点。



## 後輩との何気ない会話

夏休みが始まった。

まあ始まったといっても特に心が躍るわけでもない。

そりゃあ俺に友達がいてくれたら、「お前んちで宿題やるわ」とか「ゲームやりに行つていい?」とかいうノリで少しは心も躍ったはずさ。

あいにく、羽瀬川小鷹さんはこの強面のせいで友達なんていません。転校初日でみんなから恐怖のヤンキー扱いだ。

だが、別に毎日が楽しくないわけじゃない。明日に希望がないわけじゃない。

俺には一緒に遊んだり他愛もない話をできる人たちがいる。それは部活のメンバーだ。

隣人部という部活が今の俺の居場所、そしてその居場所を作ったのが三日月夜空という女。

その女は、夏休みに入る前に俺にこう言った。

「ありがとう、私にこの日常を作るきっかけを与えてくれて……」

俺は、あいつに感謝なんかされるようなことをしただろうか……。

本当は俺だって言いたかった。「お前のおかげでこの数か月、わりと楽しかった。ありがとな」って。

でも先を越されてしまった。俺は奴に感謝の言葉を言えずじまいで終わった。

そう、この部活は夜空と俺が出会ったことで生まれた部活だ。

けして人と関わるものがなかった孤高の美少女と、消せない過去を背負ったヤンキー面の俺。

いったい何が彼女を動かし、俺を巻き込んだのだろうか。

三日月夜空にとっての俺って、いったいどんな存在なんだろう?

そして、俺にとっての三日月夜空は……どのような存在なんだろうか……。

.....

「おはユニヴァース！小鷹先輩」

「なんだその挨拶？」

部室にて、俺が黙って考え事をしていると理科が部室に入ってきて奇妙な挨拶をしてきた。

理科との掛け合いのおかげか、俺は少しだけ現実に戻ってきた気がした。だけど俺はまたすぐに考え事をする。

あの日以来、三日月夜空を通して『あの少年』が見えたあの日以来……俺は妙な苦しさを感じていた。

それ以前までは、この部活にいたことがいたって普通で、それなりに楽しい日々って感じだった。

けどあの日以来、この部活が俺にとってとてつもなく大切な居場所。手放したくない場所と思うようになった。

ここにいれば、ひよっとしたら無くしたもの戻ってくるかもしれない。なんてファンタジー物のライトノベルのような考え事をしている。

そして同時に、ここにいることに息苦しさを覚えている。常に誰かを傷つけているような気がしていた。

俺の何気ない行動、言動の一つ一つが『誰か』を苦しめているんじゃないか……なんて。

その『誰か』というのは気付いていたけど、それを認めるのが怖かった。

俺には二つの願いがある。とてくだらなく矛盾した二つの願い。『一人の少女がかつての少年であってほしいという願い』と『そう

であってほしくないという願い』。

俺の中では希望と恐怖が混じり合っていた。この気持ちの答えはどこにあるのか……。

「ちよつと小鷹先輩？まゝた理科置いてけぼりで考え事ですか？」

「え？ああ悪い悪い」

理科の言葉に、再度現実に戻ってくる。

だめだな……なんかすぐに考え事をしてしまう。

このままじゃ変に怪しまれてしまう。少し考え事をやめよう。

「理科は、この夏休みどうするつもりなんだ？」

「とくに用事はないです。部活がない日は基本的に研究に没頭する予定です。ぼーっとしている先輩をいかにしてハジけさせるかどうかの……」

「怖いことを言うなやめてくれ、確かに最近ぼーっとしていること多いよな俺。なんとかするよ」

「……なんかあつたんですか？」

悩みふけっている俺を見かねたのか理科がそう聞いてきた。

なんかあつたというか、なんとというか……。

「まあその……隣人部ってあらためてなんなんだろうな、みたいな」

俺はとりあえずそう答えた。

それは誤魔化しも兼ねているが、俺なりの疑問でもあった。

この部活は、俺たちに何をもちたしてくれるのかって……

「今頃かよって感じですね、確かにこの部活の需要は理科にも理解しかねます（理科だけにね）」

「うまくねえぞ」

「ごほん！まあそれはさておき、ただみんなが好きにぐうたらしているだけで、いざ何かをやるといったらくだらないこと。ラグビー部がいつのまにか雀荘になってしまっていたみたいな意味のない部活ですよね」

例えばどうかと思うが、理科の言う通りだった。

部活というより、放課後に生徒がだれにも見つからないように隠れ場所に集まるって感じに近い。

こんな部活じゃ学校に貢献できるはずもないし、生徒のためにもならない。

結局この数か月、俺たちは何も変わっていないということなのか。友達作りというのもただの名目。

だが……俺はこの部活に入って変わったと確かに言えるんだ。そんな気がする。気がするだけだ。

「そういえば前から聞こうと思っていたんですけども」

「どうした？」

「小鷹先輩と夜空先輩ってどういった関係なんですか？」

「ぶっ！！」

理科のその質問は予想以上に直球だった。

おいおい理科後輩、それは射を抜いているようで何かを勘違いしている気がするぞ。

だがなんというか、答えにくい質問だった。だから俺は質問を質問で返すことにした。

「なんでそんなことを聞く？」

「質問を質問で返すとは感心しませんね小鷹先輩」

痛いところをついてくる理科後輩、なんというかお前はやりづらい相手だな。

それが顔に出ていたのか、理科は俺に呆れつつ先に俺の質問に答えてくれた。

「お忘れかもしれませんが、私は隣人部にとっての初めての入部希望者だったんですよ？」

「あゝそういえばそうだったな、お前が入ってくれなかったら今頃部活もなかったかもしれないな」

「感謝してくださいよお、もちろん私もただで入ろうと思ったわけではありません。怪しい部活だったのできちんと事前に情報は集めました」

淡々と言う理科。情報集めて俺たちは敵国じゃないんだから……。

まあ確かにこの学校で悪名高い二人が一緒にやってる部活なんか普通気味悪くて寄ってこないもんな。

「そこで色々とわかりましてね、夜空先輩について……」

「夜空に……ついて……」

俺にとって理科のその言葉は、非常に興味深いものだった。

高級な餌に釣れた魚のような俺、三日月夜空の……過去。

「中学時代の成績はぶっちぎりのトップ、運動神経も抜群とこれだけ見ればまさに学校の花そのものです。事実夜空先輩はかなりの美人ですからねえ」

「じゃあ、どうして夜空はああも歪んでるんだ？」

「それがですねえ、中学時代は色んな部活からのスカウトや彼女に告白した男も数多くいたそうですが。彼女はそれを全て断っただけ

でなく近づいてきた女子生徒も突き放し孤独の3年間を送っていた  
そうなんですよ。色々事件もあったとかなかったとか」

理科が語った夜空の過去の断片。ちなみに調べた結果わかったの  
はそれくらいとのこと。

家庭事情やそれ以前の過去については一切わからなかったとの  
と、だけどわかったことは一つ。

三日月夜空は、心の底から人間が大嫌いだということ。

それがわかったところで俺はまた恐怖をする。その原因を作った  
やつが身近にいるかもしれないということ。

ひよつとしたらひよつとして、とある少年が引き起こした『何気  
ない裏切り』にあるのではないかと……

「小鷹先輩？ 顔色が悪いですよ？」

「え？ あ、ああ……」

俺はすぐさま浮かない表情を立て直す。

そうだ。そんなわけがないんだ。それもまた俺自身がそう思うこ  
とで満足しようとしているだけだ。

自分が悪いと、あの事件は全て俺が悪かったと思いこみ、それで  
全てを終わらそうとしているだけなんだ。

三日月夜空が『ソラ』だって？ そんなバカなことがあるはずがな  
いんだから。

「まあ話を戻すとですね、そんな大の人間嫌いの夜空先輩が ど  
うして『あなたに目をつけたのか』……ですよ」

「……え？ なんだって？」

理科の言葉の最後の方が聞こえなかった。

俺がそう返すと、理科は数秒黙って……そしてこの話題をきっぱ

りと終わらせた。

「……さてと、夏休みは思う存分楽しみましょうね小鷹先輩」  
「なんだよ急に……」

さつきは特にしたいこともないって言ってたくせに……。  
そして理科は、長く語るような口調で話した。

「理科、この部活に入って本当によかったって思っています」

「ほう、そりゃあ夜空に聞かせてやりたい話だぜ」

「小鷹先輩と夜空先輩に助けてもらったことは今でも覚えています。  
この学校に入って初めてまともに話した生徒でした」

そう、志熊理科は『理科室登校』という超VIP待遇を与えられている。

超天才少女の彼女はそれゆえに普通の生徒との関わりが薄かった。  
そんな彼女に最初に関わったのが俺と夜空だった。その奇妙な出で立ちを俺たちは最初は不思議に思っていたが今ではいたって普通の美少女に見える。

そしてこいつは、誰よりも純粋に隣人部の日々を楽しんでいるようにも思える。

俺達が出会った一番最初の入部希望者、隣人部に入った最初の光だ。下ネタキャラという要素が残念さを物語っているのは人間故の欠点としよう。

「入部してやったことといえばストーカー探しとか演劇とかリレー小説とかロマ佐賀とか、友達作りとかか本当にただ遊んだだけ」  
「そうだな、いっぱい遊んだよな俺達。いっぱいいろんな事やったよなあ」

「でも、理科はそれが全て無駄だったかと思いません。だってこの

部室で過ごした日々は、私にとってとても楽しい毎日でしたから」

理科はほぼ笑みながらそう言った。それは聞いていた俺も嬉しくなってしまうそうだった。

ただ遊んでいるだけに見えて、それでも一人の人間を変える何かがある。

人間は変わる。いずれ変化する。隣人も変化する。

人はいずれ変わる。俺も……変わる。

だけど、変わる事によって今の日々が無くなるのだとしたら、俺は……。

「それに私は……」

「なんだ？」

理科は何かを言おうとしたようだったが、すぐさま口を閉じた。そして寂しそうな顔で、俺にこう問う。

「ねえ小鷹先輩、人に思いを告げるのって難しいと思いませんか？」

「また急に話が変わったな」

「まあそんな重苦しく捉えなくてもいいです。ただ、私のさっきの言葉に嘘はありませんが、みんなは隣人部においてどう思っているのかなって……」

その問いは、俺にも十分突き刺さっていた。

みんなこの部活に入り、みんなとの日々を過ごす中で何を考え、何を思っているのか。

それはわかるはずがない、人の頭の中なんて覗けやしない。

けど、わかりはしないけど伝わってくるものはある。三日月夜空のあの『眼』。

普通に見れば星奈と喧嘩ばかりして最低な事を次から次へと言い



まくる。けどそれが終わった後のあいつの眼は。

本を読んでいる時のあいつの眼、隣人部で何かをやっている時のあいつの眼、何かを追い求めているあいつの眼。

一言で表すのなら、寂しく今にも泣き出しそうな眼。

人に何かを告げるのは難しい、その通りだと思う。

ましてや俺達は普通に友達もできない、人より基本的なものが欠けている連中だ。だからこそそんな単純なことも難しいといえる。

そして、難しいのはそれだけじゃない。

「確かに、思いを告げるのも難しいが。その思いを受け取るのも難しいと思う」

「小鷹先輩……」

俺は言った。単純な俺の意見だ。

人間は時として個人の意見を言う。そしてそれは必ずしも全員を思いやつてのことではないだろう。

それを人は受け取る時、どう受け取れば平和に収まるのかを考える。

人から人へと告げられる気持ちや思いが、人を傷つけることもある。れば周りを大きく変化することもある。

だから人は変化を求めると同時に恐れる。だから人は一番楽しいと思った現在を手放さないようもがく。

今思えば、あの時の俺は幼かったからあんなにも大切な時を軽々と手放してしまったんだと思う。

だからこそ今の俺は、その経験が……最も楽しいと思う現在を求め続けている。

気づいていたことすら気づかぬふりをし、起こるかもしれない奇跡を目の前にして投げ出す。

変化は必ずしもプラスになるのか、マイナスになるのか……それは起こしてみないとわからない。

けど俺が起こしたかつての変化は、大きなマイナスを生んでしまった。だから俺は……変化から逃げることにした。

こいつらといる現在の関係が、俺にとって心地いいから。だから

……

「でも、いずれ私たちはそれぞれ思いを告げ、受け取る日が来るのかもしれない。その時小鷹先輩は逃げ出しますか？」

「……わからねえ、そんなことを俺に聞かないでくれよ！だって夜空は……！」

「え？」

理科の驚いた顔で気づいた。なんで今俺……夜空の名前を出した？  
夜空は、この部活の部長。それ以上でも以下でもない。  
はずなんだ……だけど。俺にとってあいつは……

「……なんか、夜空先輩が羨ましいです」

「え？」

「……なんでもありません。少しは悩みも晴れましたか？ほんの少しですけど引つかかったものが取れたんじゃないでしょうか？」

理科は俺にそう言って、にっこりとほほ笑んだ。

色々という意味不明な話が多かったが、これでも理科は悩んでいた俺をほぐそうとしていたのかもしれない。

まあ実質、理科の話は俺が抱えている悩みや考えに近いものがあったし。

いずれ気づく時が来るのかもしれない、いや……『気づける時』  
かもしれない。

変化が怖い、俺は少しだけ真実を知りたいと思った。

「ありがとな理科」

「いえいえ、感謝なら体で支払ってください」

「何言つてんだ馬鹿。その発言がなかったら、俺ちよつとだけお前  
のこと好きになつてたのになあ」

「ふ……ふええ!?!」

俺の何気ない一言に、理科は驚きで変な声を上げる。

そして直後に理科はニヤケ顔になり……。

「な……なにいつてんだよばつきやるー! うへへえ〜もし本気な  
ら〜わしゃあ今日お前さんに体貸すぜえ〜」

「……さっきの言葉撤回していいかな?」

「げ!?!? う……嘘です嘘です!! 理科は常に健全です!!」

理科はすぐさまそう訂正し、慌てて部室から出て行った。

なんだったんだいったい……相変わらず不思議なやつ。

でも……いい奴だね、志熊理科。

「ひよつとしたら俺はまだ、あいつとの思い出を捨てきれずにいる  
のかもしれないな」

この先、俺に何が起こるかわからない。

驚愕の真実があつて、俺と夜空を歪めるかもしれない。

真実から目をそらした結果、取り返しのつかない悲劇を招くかも  
しれない。

けど、俺はまだ答えを出すことはできない。だが何かが見えて気  
がする。

俺は考えてみた。俺と夜空はどんな関係なのか。

今出せる中で最も近い答えは、『似た者同士』。

そして俺たち二人には、それ以上の何か秘めているかもしれない。  
い。



ロマンスिंग佐賀リベンジ(前書き)

第31話です。

「志熊理科」視点。

## ロマンスング佐賀リベンジ

みなさんどうも志熊理科です。隣人部が誇る変態天才少女です。自分で言ってもはずかしくないのが私です。

現在私たちの学園は夏休みという長いお休みの期間に入っています。ぶつちやけ私には関係のないものです。感動のかけらもありません。

なぜ他の生徒達はガッツポーズを決めこんだり長い予定を立てたりするのでしょうか？理科には理解しがたいです（理科だけにね）。

ただ、生徒の中にも例外はありますよ。理科を含めた隣人部の皆さんです。

ほらごらんなさい、現在部室には私のほかに三人。無愛想な面本を読んでいる夜空先輩と、のほほんと立っている女の子面の幸村君。それと顧問の小さいマリア先生です。

私を含めた計四人はこの作品の通り『友達が少ない』。な〜にはががないだよ、齒無くしてやろうかこの野郎。

とまあそんなこんなで、今日もそれぞれやりたいことをやっているという日常です。部活とはいえさすがに自由すぎますね。

「午後12時を回ったところですか……みなさんちょっといいですか？」

この状況を見かね、私はみんなに声をかける。

「どうした？」

「どうしました？」

「どうしたのだ？」

と、それぞれ言い方は違えど返答が来る。

小鷹先輩もいないからからかう相手もいませんし、星奈先輩もいないので騒がしくもならない。

こんな静まり返った部屋の空気をなんとかするため、私はとある機械を持ち出し提案する。

「どうせみなさん暇なら、ロマ佐賀のリベンジでもしませんか？あの時はラスボス倒せなかったじゃないですか」

ロマ佐賀、正式名称は『ロマンシング佐賀』。

佐賀県を題材としたRPGで、直接ゲーム内に入ったような感覚を楽しめる最新の技術をかけて作られた次世代ゲームのプロトテスト版。

前回小鷹先輩達とやった時は、小鷹先輩は足手まといだわマリア先生は寝るわ星奈先輩と夜空先輩は喧嘩するわで結局ボスを倒すことができませんでした。

そんなこともあったので、私は悔しい思いをバネに再度この場に  
いるメンバーでやりたいなと思ったのです。

その提案に、3人は一瞬考えたように。それまためんどくさそうな顔をした。

ゲームをやるといふ気分ではないような、でもこんな静まり返っているのも嫌みたいな感じです。

そして数分の沈黙の末……。

「まあ、悪くはないな。今回は足手まといの魔法使いヤンキーとウザったい肉もないし。途中で寝るやつに目をつむれば今度こそクリアできるかもしれん」

どうやら夜空先輩はやる気があるようです。

先輩の言葉に続き、幸村君とマリア先生もゲームをする気になりました。

こうして理科達隣人部の、ロマンシング佐賀リベンジが始まるう  
としていた。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

「今回のロマ佐賀は前回やったver1.03よりも少しだけパワーアップしたver1.10です。難易度は下がっていますしジョブの性能もパワーアップしています」

「ほお、ということは薔薇少女も当然パワーアップしているということだな」

「サムライも前回よりもれっつぱーりいしてるのですね」

「シスターも前回以上にイン……」

「マリア先生これ以上は言わないでください」

と、それぞれが前回選んだジョブに思い入れがあるようです。

しかし前回と一緒にでは味気がありません、それでは向こうの人たちには新鮮さが無いでしょう。

「僕は友達が少ない？爆ぜろ！！」とか言ってる向こうの住人もいますからね、そこはきちんとしていかなば。ということ……。

「前回選んだジョブは使用禁止で、いろんなジョブを選んで遊んでくれないとデータが取れません」

「え〜？じゃあ薔薇少女選べないのか？」

「わたくしはサムライになれないのですか？おやかたさばあー！が  
できないのですか？」

私がそれなりの理由でそう提案すると、夜空先輩と幸村君は不満  
そうな顔をする。マリア殿はどうでもよさそうな顔をしていた。



なんとか二人を説得し、仕方なくですが付き合ってくれらることによかったよかった。

そして私たちはディスプレイを装着し、いざゲームの世界へ。前回と同じく、渋い男の声でモノローグが聞こえてくる。

佐賀           それは最後のフロンティア。

「なんでだ!!」

お休みの小鷹先輩に代わってツツコミを入れてくれたのは夜空先輩でした。

この下りでツツコミを入れるのは定番になってきてますね。

その後も東京の人に佐賀はどこだと聞いても答えられないだの佐賀を滋賀と間違えるだのくだらないモノローグが流れる。

琵琶湖があるから有利とかへんな理屈を言われ、私たちはまたも冷やかな目でそれをただただ見ていた。そして……。

### ヴァルハラ城

「あ、ストップだ理科。気になるからちよつとこの部分飛ばさないでくれ」

私がオープニングを飛ばそうとするより早く夜空先輩が静止した。そういえば前回飛ばした時はみなさん佐賀のヴァルハラ城が気になってましたもんね。

少し長いですが我慢しましょう。

ヴァルハラ城と名を打たれ登場したのは、明らかに佐賀城なんですよねえ。

「佐賀城でいいだろこれ？てかなんで中で魔王がサザエの壺焼きを食べてるんだ！？おかしいだろこれ！てか魔王の側近がまんまお笑い芸人のは わじゃないか！おいそれはナ ツのほうだ！！ヤホーのほうだろ！！」

「夜空先輩うるさいので飛ばしますね」

「ああ待って！キューピー鳥栖工場で何が生産されてるんだこれ！！」

夜空先輩は私がオープニングを飛ばす最後の瞬間までツッコミをしていました。

そしてキャラメイクに入る。前回と同じく外見はみなさんそっくりに作ってある状態です。

あとはジョブを選ぶだけ、但し前回選んだジョブはNG。

理科は前回『ガンナー』を選んだので、今回は『科学者』を選びましょう。

モンスターの素材でアイテムを開発したり武器を作ったりできるジョブなのですが、扱いが難しいというので前回はあえて選びませんでした。

今回は若干練習をしたので大丈夫だと思います。

職業を選ぶと前回と同じく画面一帯に草原が広がる。理科としてはもう見飽きてますね。

「理科殿」

後ろから（立体音響でちゃんと後ろから聞こえます）声が聞こえる。

コントローラーを操作して振り向くと、そこには幸村君がいます。

た。

。 サムライを選べなくなった幸村くんが選んだジョブは『憑依剣士』。過去の英霊達を自身に憑依させて戦うという破壊力抜群のジョブです。格好はサムライほどごつくはありませんが武者のようなフォルムなので幸村君に合ったのでしょう。

「似合ってますよ幸村君」

幸村君はまんざらでもない様子でした。

そしてしばらくすると、今度はマリア先生が現れました。

前回の彼女のジョブはイン……ではなくシスター。はたして今回はというと。

「『バトラー』というのを選んだのだ！」

シスターを選べなくなったマリア先生が選んだジョブは『バトラー』。

戦える執事という設定で、特殊スキルで味方の能力をアップさせたり回復もできる魔法使いの亜種とも言えるジョブです。

しかしそのちんまい姿に執事服って、ぶっちゃけ合いませんね……。

本人に言うともまたふてくされて寝るかもしれないので、黙っておきましょう。

そして最後は夜空先輩、前回選んだジョブは『薔薇少女』。はたして今回は……。

「に……似合うか？」

以外……というべきか。夜空先輩が選んだジョブは『シスター』。

格好は前回マリア先生がきていたものを夜空先輩サイズにしたもの。修道服で杖を持っている。

「以外ですねシスターなんて」

「まあきちんとした回復役はいないとだめだろ」

確かに前回は貴重な回復役が寝て落ちましたからね。

しかし、夜空先輩がシスターですか……。

「しかし選んだのはいいが、やっぱり変えたくなってきたぞ」

「早いですね、じゃあシスターの夜空先輩が全力でやる気になるよ  
うなことを言っただけましようか？」

「私がやる気になるようなこと？小さいよいしょじゃ私は靡かないぞ」

シスターの夜空先輩が全力でやる気になるような一言。

理科は少し間を置き、そしてためらいもなく先輩にこう言い放った。

「なんか先輩って、インデックスみたいなヒロインだよな（笑）」

……………。  
しばしの沈黙の後。

「なんつ…でそこまで！的確に人を傷つける台詞が言えるんだよお前はあああああっ！！」

全力でキレル夜空先輩。

いままで決め込んでいた無愛想な面も崩れる怒り様。

「私が地味で目立たないヒロインとでも言いたいのか！？キャスト欄上から二番目のメインヒロインなのに別のヒロインに株を奪われてるとかそう皮肉りたいのか！？こんな屈辱は初めてだ！！」

どうやら相当キツイ一言だったようです。

夜空先輩がやる気を出したところでゲームスタートです。

草原を進むと、前日も登場したワラスボ兵士が3体ほど姿を現しました。

そういえばワラスボといえば小鷹先輩が全力で倒すのを拒んでいましたね、なんでも自分に似てるとかなんとかで……。

まあ今回は小鷹先輩もいませんし、何を気にすることもなく倒せそうです。つてさっそく怒り狂った夜空先輩が（回復役にも関わらず）ワラスボ兵士を駆逐しまくっていました。

進む度に出てくるワラスボ兵士、たまに夜空先輩が「お前が私に気づかないから悪い！！」とか意味不明なことを口にしていましたが、何なのでしょうね。

そして魔王の城につくすんでのところで、こんなことがありました。

「あ、”猫”のモンスターが現れました」

「こんなの前回いたか？」

「はじめてみるばかりものです」

マリア先生や幸村君も身に覚えのないこのモンスターは、バージョンがアップするにあたって追加されたモンスター。

佐賀県といえは化け猫騒動の話が有名ということと、かわいいモンスターがいらないということだったので追加されたものです。

確かにワラスボ兵士に比べればかわいい外見をしています。こう

いったマスコットの的なのは流行りますからね。

「猫……」

「さてと、じゃあさっさと倒していきますか」

「ま、待って!!」

私が猫に切りかかろうとすると、意外なことに先ほどまで散々暴れまわっていた夜空先輩が私たちの前に立ちはだかった。

あれ？この展開前回もあったような……。

「……一応お聞きしますが、どうしました夜空先輩？」

私がそう言うと、夜空先輩はなぜか知りませんが悲しそうな顔になりました。

「お前たち、こんなか……かわいい猫……じゃなかった。かわいいモンスターを倒そうというのか？」

「いや先輩、それモンスターですし……」

「モンスターって、こいつは猫じゃないか!!ね〜こ〜じゃないか!かわいいねこ!!」

必死に止めようとする夜空先輩を私は冷たく返しますが、引き下がる様子がありません。

無愛想で鬼畜の所業が日々目立つドSで真っ暗で人間臭い夜空先輩のこの変わり様、まさか……。

「夜空先輩、猫好きなんですか？」

「うっ……別に好きじゃ……」

と、途中まで言った後すぐさま訂正するように。

「悪いか！猫が嫌いな人間などいるわけがない！！」

と、あっさり認めてしまった。

あの夜空先輩が……まさかの猫好き……だと？

「以外……ですね。というか猫好きって益々インデックスみたいなの  
ヒロイン」

「インデックスって言うなよ！！ただの猫が好きなだけなの！！た  
だのにゃ〜お〜なの！！」

「よぞらのあねご、あなたがネコが好きなのはわかりましたが覚悟  
をお決めください。じゃないとさきにはすすめません」

「幸村よ！なんのためにRPGには『逃げる』というコマンドがあ  
ると思ってるのだ！？倒したくないモンスターを倒さないために  
存在しているのではないのか！？」

「いい加減覚悟を決めるのだこのうんこインデックス」

「お前にインデックスって言われたくないわ！！」

後輩と幼女に散々な事を言われ今まで以上にへこたれる夜空先輩。  
前から思っていました。この人は星奈先輩くらいにしか強く出  
れないみたいですね。

しかし猫を前にするところも人が変わると、かわいく見えてく  
るといふより気持ち悪く見えてきますね。

と、言うことで……。

「虐殺です」

「いっとうりょうだんです」

「ぶったおすのだ」

私と幸村君とマリア先生はなんのためらいもなく猫をぶっ倒す。

不様に散りゆく猫たち、それを見て夜空先輩はただただ絶叫していた。

「あああああああああ！猫があああああああああ！！！」

よほど猫を倒したくなかったようですね。

ちなみにこの猫はレアモンスター、倒した方が得をするに決まっているのです。

夜空先輩が回復役のシスターを選んだことも相まって我々を制止することもできず、猫を守れなかったことに対して頂垂れていた。

「まあまあ夜空先輩、猫なんてそこらにいくらでもいますって。なんなら今度一緒に猫カフェにでも行きましょう」

「お前はその猫カフェでも猫をいじめるんだろ」

「んなわけねえだろ、流星の理科も現実で猫はいじめないわ」

頂垂れる夜空先輩を説得すること数分、ようやく私たちは魔王の元にたどり着きました。

前回私たちの連携が崩れたせいで（まあそれ以前に魔王が強すぎたんですけどね）倒せなかった強敵。

今回こそは倒して、我ら隣人部の絆を強化するのです。

「マリア先生、まさか寝てないですよね？」

「……ふにゃ？」

こんな時でも寝そうなマリア先生。

これじゃ前回と同じじゃないですか……と、そこで幸村君が動いた。

「わたくしめにおまかせください、5秒で帰ってきますので」



と、幸村君はディスプレイを外しマリア先生の傍へ。そして……。

「わかりましたわかりましたわかりましたー！ー！ー！」

「わかればよろしいのです」

マリア先生に何かを吹き込んだ幸村君、これでマリア先生が寝ることはありませんね。

「今回は4人、前回より2人減った状態だが（というか一人は役立たずで一人寝ていたのでプライム0）問題はないな？」

夜空先輩が私たちに問いかける。

無論問題はありません、今度こそ私たちはいけますよ。

「まずはわたくしがいきます。スサノオを憑依させてあいてにだいでめーじをあたえますー！」

先行したのは憑依剣士の幸村君。

スサノオという化身を憑依させ、魔王に一太刀浴びせる。

盾でガードされたものの、憑依剣士の一撃は重く魔王がよろついた。

「続けて理科がいきます。マリア先生攻撃力の強化をお願いしますー！ー！」

「わかったのだー！」

私が攻撃する前に、マリア先生に攻撃力を強化してもらう。

そして開発した超巨大爆弾を魔王に投げつけ、魔王に大ダメージを与える。

その後魔王の反撃で私と幸村君はHPを半分近く減らされるが、そこで回復役の出番です。

「私のヒールとマリアの回復の持て成しで全回復だ！」

二つの回復技で私と幸村君のHPは全回復。

これならいけるかもしれませんが、ところが新たな問題が発生。

HPがつかえることはありませんが、TPが尽き始めてきました。これでは魔王にダメージを与えることができません！

「あと半分近くもあるというのに、やっぱり強すぎるんですよこの魔王！」

「理科殿、TPのはんのうがありません！TPが切れたら……わたしはなにもできないのですか」

「おい幸村、こんな時に鳥人間コンテストのネタはやめろ」

私と幸村君は魔王の攻撃でHPに多大なダメージを受けますが、夜空先輩とマリア先生のTPが切れていて回復が追い付きません。

幸村君はなぜか鳥人間コンテストの名言を口走る。それにツッコミを入れる夜空先輩。

「悪いね……へボプレイヤーで……テクニクだけは……一流のところを見せてやるぜ」

「わたくしの人生は……晴れ時々大荒れ……いい人生ですよ」

「風を、風を拾うのだ!!」

「なんで貴様ら余裕無いくせに鳥人間コンテストのネタをやってるんだ!？」

幸村君に影響されたのか、私とマリア先生も鳥人間コンテストのネタを連発していました。

終始鳥人間コンテストネタで盛り上がる中、結局次々と魔王に倒される私たち。

「やっぱり駄目でしたね、次はもう少し魔王を弱体化させた奴を持つてきます」

「てかお前から後半やる気なかっただろ？完全に鳥人間コンテストのネタで持ちきりだっただろ」

夜空先輩の言うとおり、確かに後半は諦めモードでネタに走ってましたね。

でもこんなノリがあってもいい気がします。理科はとても楽しめました。

やっぱりなんやかんやで、この部活にいるのは楽しいですね。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「ではあねご、理科殿、おつかれさまです」

「おつかれ幸村君」

「おつかれ、さてと私も帰るか」

幸村君が部室に出た直後に身支度をする夜空先輩。

帰る前に、私は少し先輩に話をしたいことがありました。

二人きりになるのは珍しいので、この際です。

「夜空先輩、ちょっとお話付き合ってもらってもいいですか？」

「ああ？くだらない下ネタ話ならすぐに帰るぞ」

「いやいや、って理科にどんな印象を抱いてるんですかあなたは」

さすがに私をなんでも下ネタに結び付けるのは心外というものです。

「その……理科、隣人部に入って本当に良かったと思っています」  
「……どうしたいきなり？」

夜空先輩は少し驚いたような顔でそう返しました。

私がこんな話をするのには理由があります。以前隣人部に入つてよかったという話を小鷹先輩にした時に、その話を夜空先輩に聞かせてあげたいと言つてたからです。

確かにこの想いは、部長である先輩にも告げるべきです。

「理科は理科室登校という待遇を与えられていました。確かにそれにより無駄な授業を受けずに好きに実験できるという毎日には充実していましたが、それでも日々足りない何かを感じていました」

そう、私はこの学園にとつても特別な存在。

超天才少女と世間で呼ばれ、その頭脳を買われあらゆることから声がかかった。

結果この学園に入ったわけですが、私はそれでも物足りなさを感じていた。

要は私の能力に対する見返りが一番よかつただけ、たつたそれだけだった。

出会いもなければ、見られているのは私の『頭脳』だけ。結局はそこなのです。

でも、そんな私は隣人部のみなさんと出会うことができた。私の中身ではなく全てを見てくれる人たちと出会った。

待遇が良くて入った学校で、奇跡的にも素晴らしい人たちと出会うことができた。だから私は……。

「感謝しても感謝し足りないんです。今までの理科になかったものを隣人は与えてくれた。夜空先輩と小鷹先輩に出会ったことで私に新たな居場所ができたんです！心の底から理科が全てを尽くせる人達に出会えたんです」

「……お前にとつての隣人はそんな大層なものなのか？」

「はい、私にとってのかけがえのない居場所です」

「そうか、だとしたらすまなかつたな。こんな部長で……」

悲しそうな顔でそう呟く夜空先輩。

どうしてこんなことを言うのか、私にはわからなかった。

けどこれが夜空先輩の弱さだとしたら、それは違うと思います。

だから私は言いました。

「いえ夜空先輩、隣人の部長はあなたでなくてはならない。誰よりも人の弱さを知るあなたでなくては……」

「やめてくれ、私は愚かで汚くて猥雑で……友達を作るという理念を掲げながらそれを体現などできるわけなんて」

「だからこそなんですよ、あなたがどれだけ人を蔑もうとリア充爆発しろと言っけても私はあなたを軽蔑したりはしませんよ。それがあなたの本質だとしても、それが人であることに変わりはありません」

私の言葉に、夜空先輩は困り果てたような顔で頭をかいていました。

まるで、変な期待を背負わさななくてくれと言っているかのように。

「ねえ夜空先輩、友達が少ないってことは負なんでしょうか……」

「そりゃあ多い方がいいに決まってるだろ。でも……私はそれよりも、たった一人でも心の底から信用できる本当の親友がいればいいと思っっている」

「そうですか、友達100人よりもたった一人の親友ですか。でも先輩、その一人に固執するより前に、あなたを思ってくれる少なからずの身近な人たちを忘れないでくださいね」

私のその一言に、夜空先輩は一瞬表情を歪めた。何かを言おうとしたのでしようがすぐに口を押さえていた。

その表情には、悲しみと怒りが混じっていたのがわかった。「お前に何がわかる」そう言いたい気持ちがあったのかもしれない。

夜空先輩、あなたにどんな過去があったとしても私はあなたを見捨てたりはしない。小鷹先輩を……隣人部を見捨てたりはしない。

人にとつての悪い部分があるのなら、それは直していく必要があります。人は誰も完璧ではない、超天才と言われ祭り上げられていた私でさえ欠陥ばかりです。

リア充が勝ち組で非リア充が負け組なんて理屈は存在しない、どんな立場にいようと人間が人間であることに変わりはないのですから。

友達が少ない多いの境界線なんてありはしない、ただ身近に想ってくれる人がいて、認めてくれる人がいて、楽しくも辛い毎日が待っているのなら多い少ないを気にする必要はないでしょう。

その日々を私に手に入れたのだから、夜空先輩と小鷹先輩が与えてくれたこの日々を。

私は、宝にしていきたい。

「これからもよろしくお願いします。夜空部長……」

「ふ……ふん！仕方のない後輩だな！！この部活にいればきつと素敵な友達もできるはずだ！その……私でよければいつでも力を貸してやるっ……」

腕を組みそう言葉にする夜空先輩の顔は、少し赤かった気がしま  
す。

そんな先輩を見て、私は少し笑みを浮かべた。

心の叫び(前書き)

第32話です。

「羽瀬川小鷹」視点。





「小鷹……ねえ小鷹！」

星奈に呼ばれ、俺は我に帰る。

周りを見渡すと、俺を含めみんなが星奈の別荘でカレーを食べていた。

そういえば、今日はみんなで海に遊びに来ていたんだっけか。

そんで海につくなり、いきなり夜空と星奈がバトルをして夜空が星奈を泣かせたんだっけか。

まあ、いつもどおりの光景だ。呆れかえるほどの平和なのかバカなのか……。

そんな二人はというと、どちらも昼のことなんて忘れているようで拗れてはいなかった。仲が悪いのは相変わらずだが。

だが元気な星奈とは対照的に、夜空はうつむいていた。

あいつはこの場にいても、何か思うものがあるのか……。

二日目。

二日目も俺達は海へと行って泳いだ。

海に来て泳がないやつはいないだろう、と浜辺で椅子に寝ながら本を読んでいる夜空と理科を見ながら思う。

それぞれ自由に、それぞれが楽しむ。

合宿ということと海に来たのはいいが、合宿みたいなことをまったくやっていないじゃないか。

このことを夜空に言つと。

「みんなで「海だー！」って叫んだじゃないか」

それをやったことで俺達が何を得たんだ。100文字以上で説明

して見やがれ。

立派に活動をしました面の夜空を見て俺は苦い顔をする。

仕方がなく俺はまた海へと戻り、遊んだあと昼飯は焼きそばを作  
って食べた。

昼飯が終わった後はしゃぎまくっていたマリアと小鳩、それに星  
奈は倒れるように別荘で眠った。

俺はその間に小さな港町に自転車に乗って夜飯の具材を買いに行  
った。

夜飯は7人分ということで、買ってきた具材をふんだんに使って  
パエリアを作った。

まとめて大勢の食事を作るというのも中々楽しいもんだな。

こんな風に俺には俺の役割がある。俺はこいつらに頼られている  
部分もある。

こんな俺はみんなからどういう風に思われているのだろう、理科  
達からは頼りになる先輩とも思われちゃったりしているのだろう  
か。

本当にそう思っているのなら、正直やめてほしい。変な期待をし  
て俺に何かを背負わさないでほしい。

期待される人間は、その期待を裏切ってしまった時誰かを傷つけ  
てしまう。俺はそれを知っている。

もう俺は……誰も傷つけたくない。もちろん俺自身もだ。  
自分も誰も傷をつけたくないなんて、傲慢かもしれないが……。

その夜……。

明日帰るにもかかわらず相も変わらずそれぞれ別のことをする始  
末。

このままじゃあいつもと一緒だ。俺はそれが腑に落ちなかった。  
誰が何を提案するわけでもない、だから俺が思ったことを言った。

「なあ、せつかくだしみんなで肝試しでもしないか？」

俺がそういうと、みんなが口をそろえて「肝試し？」と言った。少しばかり考えた後、この状況を改めて見渡しこのままぐうたら何かをやっているよりはマシかと思っただのか。

「そうだな、夏の合宿っぽいし肝試しでもやってみるか」

「小鷹もたまにはいいことを言うわね」

夜空も星奈、その他の部員メンバーもやる気のようにだ。たまにはって星奈は一言多いな。

こうして俺達は肝試しをやることになった。

別荘の近くのこと星奈が一番よく知っているということで、星奈がルールを決めることになった。

星奈いわく別荘の近くに森があって、その奥に祭壇があるらしい。

その祭壇にろうそくを置いて、そこに火を付けて帰ってくるというルールに決まった。

ろうそくを誰が置きに行くか？当然俺が行かされました。超怖かったがこれで道筋はわかったため次は楽勝だ。

そしてチーム分けだが、俺達は7人いるため2人組が2チーム、3人組が1チームということになった。

グーチヨキパーで合った人、をやった結果。幸村とマリアが1番手、夜空と理科と小鳩が2番手、俺と星奈がラストとなった。

幸村や理科、小鳩やマリアは俺と組みたそうにしていたが決まった結果だから仕方がない。

夜空は、どうでもいいような顔をしていた。

夜空、なんか……寂しそうだな。

「ではあにき、マリア殿と一緒に行ってまいります」

「おう、特になにか出そうな雰囲気もなかったから気楽にいけ。あとマリアが怪我しないよう頼むぞ。お前は男なんだから小さい女の子は守ってやれ」

「男……承知しましたあにきっ!」

と、意気揚々とマリアと一緒に森の奥へと進む幸村。

数分後だったかな、静まり返るこの空気の中で。

「うぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ!」

と、声がしたんだ。それは間違いなくマリアの声だった。

その後も続けて「怖いのだー!」。「帰るマリアおうち帰るー!」。「幸村のうんこー!」。「だの聞こえてきた。」

「ああそうだった。幸村とマリアと一緒にすれば……」

「どうなるかなんてわかっていたのに……」

「クツクツ教会の天使め……ご愁傷様じゃ」

「マリア先生多分今日は寝れませんねえ」

「……………」

夜空、星奈、小鳩、理科、俺はあらためてあの二人をセットにしたことを後悔した。

そして30分後、てかおせえよ、ここから祭壇まで10分もしねえよどれだけ時間かけたんだよ。

泣きわめきながら俺の方へと走ってくるマリア、後ろからは爆笑する幸村が……。

「怖かったのだお兄ちゃあああああああああああああああああああああ

「ああああん!!」

「ごめんな、大丈夫だから幽霊とかいないから」

俺はなんとかマリアを慰める。

色々と騒がしいことになってしまったが、気を取り直して2組目に。

2組目は3人、幽霊とかマジで追い払えそうな夜空を筆頭に幽霊もレプできそうな理科に闇の王レイシスまでいる。

これは楽勝だろう、さっきの6分の1もかからずして終わるだろう。

「さてと、この茶番をさっさと終わらせてくるか」

「クッククク、幽霊などこの偉大なる闇の王レイシス・ヴィ・フェリシテイ・煌が吹き飛ばしてくれる。いざって時は横に魔王アシクタロスまでいるから大丈夫ばい」

「誰が魔王アシクタロスだ……」

小鳩の無茶ぶりに少し困ったように返す夜空。

「ちょっとお二人とも、理科を忘れないてくださいよ」

と、置いてけぼりにされると思ったのか理科が二人を追いかける。こうして2組目の肝試しが始まったのだが……。

数分後だったかな、静まり返るこの空気の中で。

「変なところ触るな……」

と、声がしたんだ。それは間違いなく夜空と小鳩の声だった。

その後も続けて「真面目にやれ理科……!!」「アホー!そこやないアホー!!」「どこ触ってるんだ(じゃ)……」

「……!!」だの聞こえてきた。

「理科、お前というやつは……」

「いったいどこ触ってるのよ！私も小鳩ちゃんの色んなところさわりたずくつ!!」

「お前は黙れ」

変態発言をする星奈の頭を小突く俺。

本当に知り合いじゃなかったら通報するレベルだぞ……。

そして40分後、だからおせえよ！さっきより時間かかってんだらどういうこと!？

疲れ果てた夜空と小鳩、後ろには昇天しそうな笑顔を浮かべる理科が……。

「小鷹、志熊理科は……変態だ」

「あんちゃん、こいつは闇の王よりもはるかに凶悪じゃ。混沌の霸王じゃ……」

「混沌の霸王よりも銀河の変態王な気がする」

俺がそう皮肉っているところ、銀河の変態王もとい理科は昇天しながら変なダンスを踊っていた。

この3人は色んな意味で駄目だ。夜も遅い、こうなったらちやっちやと俺らは終わらせよう。

「早く行つてろうそく付けて帰ってこよう」

「そうね……」

星奈もさすがに肝試しで時間をかけすぎたと思ったのか、さっさと終わらせたがっていた。

いよいよ俺と星奈の番、いやぁ長かった。

俺は一度ろっそくを配置するため森に入っているのである程度把握していた。

だが星奈は初めて入るためびくびくと震えていた。  
ガサガサと周りの草が揺れて。

「ひ！」

とおびえる星奈。なんかこうお化け屋敷とか楽勝なやつって怯えてるやつを見て楽しんでる節があるな。

ところどころで怖がる星奈、なんかちよっぴりかわいく見えてきたな。

「そんな怖がなくてもいいだろ、幽霊なんて出やしねえよ」

「そ、そうよね幽霊なんかいないわよ！でででも本当に出たら、小鷹私を守りなさいよ！」

そういう星奈に、俺はへいへいと返事をする。

そして8分くらいで祭壇につく、俺はろっそくを付けて祭壇にお祈りをする。

さてこれで終わり、あとは帰るだけだ。

「はあ、これで終わりね。この私を怖がらせようなんて100年早いのよ幽霊！！」

「だから幽霊なんていないって」

星奈はどちらかという幽霊は信じる方らしい。

怖がる星奈はあんまり見ないな、夜空とは喧嘩こそするが怖がっている様子はない。

早く帰って寝たい、ところが後ろを見ると星奈が立ち止まっていた。



「どうした？早く帰るぞ」

「……ねえ、久しぶりに二人っきりだしちょっと話さない？」

そう俺を呼びとめる星奈。

いや、話すつてもこんなところで話すのもあれだろう……。

だけど星奈は一度言いだすと中々動かない、しゃあないか。

「んで、なんか話があるのか？」

「いやそんな重大つてわけじゃないんだけども、そのさ……隣人部に入つてこんな風にみんな楽しんでむことができてるよ、よかった、なんて」

「なんか前に理科にも言われたなそんなこと」

そう、理科もこんなことを言っていた。隣人部に入つて本当に良かったつて。

特に活動らしき活動もしていない部活だが、やっぱりみんな思うところがあるのかな……。

隣人部は、俺達の知らないところで何かしらの成果を残しているのだろう。

この部活で何かを得て、何かに気づいているはずなんだ。夜空も……俺も。

だがその得たものに気づこうとしない俺は、許されるのだろうか……。

……。

みんなで分かち合える何かを、分かち合おうとしない俺は……。

「ちよつと、急に考え込まないでよ怖いわね」

「ああ、悪い」

「ねえ、あんた最近やたらと無口になること多いわね」

星奈は俺を問いただすようにそう言った。

「どうやら俺の異変はそれなりに隠れてはいないらしい、確かに最近の俺は悩んでばかりだ。」

かつての親友らしきやつが身近にいるかもしれない話から、俺自身がこの部活にいる理由まで。

俺はいつたい何がしたい、奇跡一つでも起こしたいのか、救われたいのか……。

何から救われたい、親友を裏切った呪縛からか。だとしたら俺はあいつを見捨てることに繋がるはずだ。

「……別に、なんでもねえよ」

「……ふ〜ん、ねえ知ってる？」

「何が？」

俺がそう聞き返すと、星奈突如として表情を変えた。

明るくて常にみんなを引っ張る彼女とは思えない、全てを見透かすその眼で俺にこう言った。

「「なんか困ってることとかあるの？」って聞かれない人間ってね、自分から悩みを打ち明けられないのよ」

「……どうして、いきなりこんなことを言い出すんだ。」

「……え？何？」

その意味がよくわからなかったから、よくわかりなくなかったから俺はすつとぼけた。

このまま話をずらして欲しかったが、星奈それを良しとしなかった。

「小鷹、今あんた誰かに「どうしたの？」って言われたいんどしょ？自分で自分を理解できてないから誰かに自分を理解してほしいんでしょ？」

「何が……言いたい？」

「ケチくさいのよ、あんたも夜空も。何かを悩んでそれを他人に言わずして、気づいてもらうまで自分の中で考えて他人に迷惑をかけたくないだなんて。まあ他人にそれなりに自分をさらけ出せる夜空はまだマシね」

淡々と言う星奈。まるで全てを知っているように……。

俺はなぜか知らないが、それが気に食わなかった。

「なんだか、俺や夜空を知っていますって言い方だな。俺達は部員っただけで実際は”赤の他人”だろ」

「!？」

俺がそう皮肉をこめて言うと、星奈は驚愕の表情を浮かべた。

そして星奈は俺の元へと向かってきて、俺の頬に強烈なピンタを一発入れた。

痛々しくその音が、無音の森に響き渡る。

「なに……しやる？」

「あんたこそ、なんてこと言いだすのよ？」

俺は全力で星奈を睨みつけて言う、その時の星奈の顔はというと俺に恐怖するわけでもない、ただ俺に対して怒りを向けていた。眼に涙をためながら、ただただ俺に負けずと睨みをきかす星奈。

「ただの部員？赤の他人？いつまでそう自分言い聞かせるのよ、いつまで自分でもない自分を演じ続けるのよ？」

「だから……何が言いたんだよ!!」

「いつまでも気づかぬふりするなって言ってるのよ!! あんたも夜空もなに自分だけの世界に閉じこもってるのよ馬鹿じゃないの!!」

俺と星奈互いに叫ぶ。これはもう喧嘩だ。

あんまり女の子と喧嘩なんてしたくないが、このまま言われっぱなしなのは俺としても嫌だった。

お前に何がわかる。お前なんてすぐにでも友達の人くらい作れるだろうが。

俺は顔が怖かったり、いやそれ以前に俺は……。

一度親友を失っている。その過去があるんだよ俺には。

というか、なんで夜空の名前まで出てくるんだ。

「夜空は……関係ないだろ」

関係ない、今のこの話の中であいつは関係ない。

関係……ない……はずだ。いや、もしあいつが本当にソラなら……

…。

もしそうなら、もし事実がそうだったとしたら……。

「関係ない関係ないって、そんな風にばかり言ってたらあんた、

また大切な物を傷つけてしまうかもしれないわよ」

「お前に、俺の何がわかるんだよ」

「わからないわよ、だってあんたが何も言わないからわかるはずがないでしょ。あんた達が誰にも伝えようとしなから!言ってくれなきゃ何もわからないでしょ!!」

星奈は一步も引きさがらず、俺の心にぐいぐいと迫るように叫んでくる。

言ってくれなきゃ、何もわからない……。

俺が何も伝えようとせず、自分の中で抱え込んでいるから……。柏崎星奈、おまえはいつたいなんなんだよ。同じ部活の部員で、ただ一緒に遊んだりしてるだけだろ。

一緒に海に行つて、一緒にこんなこと話して……。

「お前はいつたい、俺のなんなんだよ……」

.....

そして、俺はこの質問をした後に後悔した。

この質問の答えが、すぐさまわかってしまったからだ。

そしてこれが、俺にとつて最も聞きたくない一言だったからだ。

これを聞いてしまうことで、俺は変化を強いられてしまうからだ。一瞬の時の中で、俺が後悔した時には遅かった。そしてこの”答え”を聞いてしまった時にはすでにあいつが壊れていたんだ。

「 ..... に決まってるでしょ!!」

もうとつくに気づいていた。俺はそれを聞き逃したくてもその叫びが聞こえてしまった。

星奈の叫び、それが俺の変化を促すことになってしまった。

そしてそれが誘発して、あいつの叫びを、悲しみを受け入れることになってしまった。

そして俺は改めて気づくことになる。全てを知りながら知ろつとしなかった結果が、あの時の過ちを再現することになることを。

「ごめんな……こんな最低なやつで。ごめんね……こんなバカなや

つで。ごめん……こんな残念な人間で」

「……ああ、お前は悪くないよ。夜空は悪くない」

「うっ……うっ……ぐすっ……ひっくっ……うえええ……うえええええええん!!」

誰も悲しませたくない、そう思っていたのにあいつは泣き叫んだ。  
最も俺が見たくなかった涙を流して……。

能ある鷹は全てを隠す（前書き）

第33話です。

「羽瀬川小鷹」視点。

## 能ある鷹は全てを隠す

どうしてあいつは泣いたんだろう。

いったいどうして泣いたのか、誰のために泣いたのか……。

どうしてこんなにも苦しんでいるのだろうか、俺達はこんなにも充実しているはずなのに。

どうして俺に向けて、あんな顔をしたのだろうか。

俺は認めたくなかった。

俺のその鈍感さが……鈍感を偽り目を逸らし続けていた自分が、他人の思いを踏みにじっていたことを。

そんなつもりはなかったんだ。ただ俺は、不都合なことから目を逸らしていただけなんだ。全ては自分のために。

そうすることで他人に迷惑をかけずに、この充実した毎日を平和に過ごせると思っていた。トラブルに繋がるかもしれないことは全てごまかせばいいと思っていた。

だけどそれは、自分を思ってくれている他人の気持ち全てシャットアウトすることにもなりえる。俺はそれをわかっていたつもりだった。

だから俺は自分の中でこう思い続けた。

「俺みたいなやつは他人にそこまで思われる資格なんてない」

無理に他人と距離を縮めてしまえば、またあいつた悲劇がおこる。

日常に目を向け他人と程よい関係を気付くことが、一番いいものだと思っていた。

これは最低な考えなのか、程よい生き方をしたいと思う。それは誰もが思っているはずだ。



100人分大切にできる友達を作れ、あいつが言った言葉は俺の中で深く根付いていた。

だから俺の中で、それを大切だと思ふことと絶対に不可能であると思ふことの二つの意見が生まれた。

俺はその言葉に彷徨っていた。だけど彷徨っていたのは俺だけじゃなかった。

この日常の中あいつは苦しみもがいていた。この日常に対して充実を感じてはいなかった。

あいつは誰のために苦しんだ？自分のためのはずだ。けして俺のためなんかじゃない。俺を思い続けた上での苦しみなんかじゃない。そうであってほしかった。全てはあいつのため、自分のために。けど……。

.....

「おいプリン頭、ずいぶん元気がないんじゃないかい？」

誰かに不快な呼び方をされ、俺は我に帰る。

そこにいたのはケイト先生だった。そういえば久しぶりに話をしたいから部室にいてくれて言われていたっけか。

なんの話をするればいいのだから、俺のテンションはマイナスにMAXだというのに。

正直今、俺はこの部室にいたくないとさえ思っていた。

だってこの部室で、あいつの涙を……叫びを聞いてしまったのだから。

「元気なんかないっすよ。正直言うと非常に気分が悪いです」

俺は思うがままのことをうなだれながらケイト先生に言った。

今の俺にはこの気分の悪さを隠し通せるほどの気力もないらしい。かといって、俺から悩みを打ち明けるわけでもない。

それは星奈の「なんか困ってることかあるの?」って聞かれない人間は、自分から悩みを打ち明けられない」という言葉通り俺はそちら側の人間だかららしい。

他人に迷惑をかけたくないと言っておきながら、情けない話だ。

「……なんかあったのかい?」

と、そのまんまケイト先生に心配されてしまった。

下手なことを言えば、面倒なことにもなりかねない。

だが、本当にこのままでいいのだろうか。あんな叫びを聞いてしまった今これ以上放置してしまえば完全に手遅れになってしまうかもしれない。

いや、もう手遅れなのだろう。俺はこの日常を破壊する寸前まで来てしまっているのかもしれない。

そしてそれを恐れた結果、一人の人間を壊してしまった可能性さえありうる。

先生……になら話せるかもしれない。話してみてもいいかもしれない。

「……ひよっとしたら、俺はとんでもないことをしてしまったかもしれない」

「万引き?」

「違うわ、いくらヤンキー面でもそんなちっぽけなことしねえって」

今ものすごく心外な事をケイト先生に言われたかもしれない。

おいおい俺はそんな非行には走ったことありませんよ、過去一度も事件を起こしたことはありませんよ。

「ひよつとしたらですよ、今から俺馬鹿なこと言いだすかもしれないんだけど」

「君の下手くそな落語じゃない限りは聞くに値する話だから大丈夫だ。気楽に話さない」

「軽いシヨックを受けました。気楽には言えないかもしれないです」

まったくこの人は、こんな時でも俺をいじるのか。

どうせ「夜空がかつての親友かもしれない」なんて話したら、「君、いいラノベ作家になれるかもね」なんて返してくるに違いない。解りきった結果だが……ん〜だけど冷ややかな目でそんなこと言われたら俺もう立ち直れないだろうな。

多少遠回りに言うことにしよう。

「多分思い違いかもしれないんですが、俺の身近にかつて俺の親友だったかもしれないやつがいるかもしれないですよ」

「……………」  
「（黙っちゃったよ…………）それですね、ひよつとしたら俺そいつにめちやくちゃひどいことをしてしまったかもしれない…………ですけど」

俺がそう話すと、ケイト先生は黙り込んでしまった。

そしてその顔はというと、俺に対して呆れ返ってしまったような…………とはまた違った顔だった。

なんかこう、啞然とした感じだった。正直俺の話が単なる作り話だとかは思っていないようだ。

ひよつとして変に信じちゃったりしてる…………のか？

「あの…………というかなんすか？その反応」

「…………なあ、その親友は今どうしてる？てか…………その親友は”どうなった”？」

「言いたく……ないんですけどね。まるで、抱え込んでいたものを全て吐き出すように……涙を流して、その……」

俺がしどろもどろに言うと、先生は突如掴んでいたコーラ缶を床に落とした。

その時の先生の表情は、先ほどよりもさらに驚いたような。軽いシヨックを受けたような感じになっていた。

そして数秒後、まるで全てを悟ったかのように呟いた。

「……そうか、”遅かったか”」

「え？」

「まあ確かにあの様子じゃあ時間の問題だったが、ただここはなつてほしくなかったねえ」

先生は妙に納得していた。

俺はその先生の様子を見ても、何がどうなっているのかがよくわからなかった。

俺の話を聞いて馬鹿にするのかと思ったが、素直に信じた拳句納得をしている。

「あの、どういうことですか？」

「小鷹君、私はねえ君とその親友に関する事実を知ってるんだよ。

てつきり君がまだ彼女に”気づいていない”もんだと思っていただけだねえ」

「……え？」

俺が呆気にとられたような顔をしていると、先生は俺の心の準備を待たずして事実を話し始めた。

「三日月夜空は間違いなく、君のかつての”親友”だよ。確か当時は互いのことを『タカ』『ソラ』と呼び合っていたんだっけかい？」

意外な人物から告げられた事実。

俺はその事実を聞き逃す隙すら与えてくれなかった。

改めてその事実を聞き、俺の心の中のあらゆるものが乱れた。

そう、今この時初めて俺は罪の意識と後悔でいっぱいになった。

今まではそれがあくまで推測でしかなかったからだ。だが今その推測は事実となったのだから。

「あ……あ……」

「小鷹くん？おい！ちよつと！！」

俺の中で色んなものがむせかえしてくる。嬉しさだったり悲しさだったり様々な感情がわき出てくる。

けして気持ちのいいものなんかじゃない、ものすごく気持ちの悪い。後味の悪さが俺を支配する。

涙の一つでも流したいところだが、それ以上にショックが大きすぎて出せるはずの涙も枯れ果てている。

「どうして……どうして！俺は！なんで！！」

「落ち着け！今部室には君と私の二人しかいないから安心しろ！」

ケイト先生に言われながら、俺はゆっくりと深呼吸をし状況を把握する。

今はパニックっている暇なんてない、改めて落ち着かないと。

落ち着かないといけない、じゃないとあいつはまた離れていってしまう。

このままじゃ俺は、前を向けなくなってしまうかもしれない。だ

から……。

「……落ち着いたかい？」

「ああ……全て把握した」

「そうか、じゃあ話を聞こう。君は一体彼女に対して……この数か月どう思っていたんだい？」

落ち着きを取り戻した俺に、ケイト先生は質問をする。

シヨックが大きすぎるのか、あいつみたいに俺も全てをさらけ出してしまいそうだった。

いや、この場合もう逃げられはしないだろう。だから俺は全てを話すことにした。

「いつだったか。俺はあいつが……夜空がソラなんじゃないかって疑うようになった」

「すごいね、昔は男の子を名乗っていたから気付くのは困難だっただろう。でもそれなら、どうしてこんなことになったんだい？」

「それは、それは……俺の中でその疑心を否定していたからだ。夜空がソラだったらいいなんて心の隙で思っていた嘘の欲望だ！本当は、あいつがソラじゃなければいいってずっと思ってたんだ！」

そうだ、俺はずっと否定していた。

もしそれが俺の勘違いなら、夜空が日ごろ見せるあの目の対象が自分ではなくなるかもしれないからだ。

俺はあの眼が怖かった。悲しそうに俺を見る目が怖かった。

もしあいつがソラだったとしたら、間違いなくあいつは俺を求めていた。俺に縋っていたに違いない。

俺はそれがやめてほしかった。自分が原因であそこまで落ちぶれたというその罪を感じるのがいやだった。

「怖かった！あいつがああなったのは間違はなく俺のせいだ。それを……それを思い知るのがいやだったんだ！！どう声をかければいんだよ！」

「……………」

「裏切ったのは俺なのに、裏切った俺に何も押し付けないあいつの優しさをどう受け取ればいいんだよ！」

「小鷹くん、もういい……………」

「些細な裏切りだ。俺にとってはそうだ。けどあいつは……………エア友達ってなんだよ！？他人を信じることもできず、俺という過去の亡霊に縋りついて。でも……………それを表にも出さずすと心の中でためこんで、俺は俺で、それを気付いていたにもかかわらずただ誤魔化し続けて」

「もういいって……………」

「結局はそうだ。俺はあいつの想いを踏みにじっていたんだ。あいつにとっては奇跡の中の奇跡に違いなかった。俺が過去の話をした時のあいつの顔はふるふる震えてたんだ。多分俺が夜空のことを覚えていたことがうれしくて仕方なかったはずなんだ」

「やめる……………」

「でもあいつの涙も嬉しさも俺はなかったことにしようとした。こんなことになるくらいなら……………あんな過去なんかなければよかったんだ！！！」

「！？」

俺がそう叫び終わると同時に、ケイト先生は俺の頬を思いっきりぶん殴った。

けして人を殴ることなんかないであろう華奢な拳で……………。

俺が茫然としていると、ケイト先生は怒りに震え俺を睨みつけながらこちらにきた。

そして俺の胸倉を掴み、叫んだ。

「てめえはそうやって……自分が悪かったって自分に言い聞かして救われただけだろうが!!」

「っ!?!」

「てめえが親友にできたことなんてたくさんあったはずだ。逃げたくなる気持ちはわかる。罪の意識を感じるのもわかる。けど……それは全部かつての親友のためなんかじゃない。全部自分を正当化したいがための感情だろ!ええ!?!」

俺に怒鳴り散らすケイト先生、俺はただその怒りを感じ取ることしかできなかった。

他人のはずなのに涙する先生の顔を、直視することができなかった。

俺のために泣いてくれているなんて、思いたくなかったからだ。

「さびしがり屋のくせに、他人に率直な行為を向けられるのは怖い」

「気づかないフリをする。聞こえないフリをする」

「逃げる。茶化す。誤魔化す。拒絶する」

「自分は好かれてなどいないのだと、自分にさえ嘘をつく」

ケイト先生はたたみかけるように言った。

俺を見透かすその瞳を、怒りに満ちた表情を向けて。

今までの俺なら聞き逃していただろうが、先生に圧倒され俺は気付かぬふりもできない。

抵抗できぬまま、自分というものがさらけ出されていく。

「いい先輩面して、いい兄貴面して。迷惑をかけまいとしているそ



の軽率な行動が他人に最も迷惑をかけていることにも気づかず。てめえはそうやってどんだけの人間を悲しませてきた!？」

「……うるせえよ」

「大切な物を失った過去がそんなにトラウマなのかい？それを繰り返さないように手に入るものも全て捨て、取り戻せるかもしれないものまで見捨てて。本当にそれでいいのかい!？」

「それは……答えられない」

「答えるよ！本当にそれでいいのかい!？君は今変わる時がきたんだよ、もう変化を恐れ今の日常に縋りつくことなんかできやしない!！」

俺に迫る先生の言葉、俺はもう全てを隠すことはできない。

だけど俺にはまだ恐怖がある。その恐怖も隠すことはできない。

「俺にどうしろっていうんだよ!？変化を恐れるなど簡単に言うかもしれないが、変化するということはとても怖いことなんだ！それは、俺と夜空が一番よく知ってる!！」

「ああそうだろうねえ、それは夜空も同じことを思ってるはずだ。

けどね……」本当にそれでいいのかい?」だから彼女は間違った変化をしてしまった。彼女は彼女なりに覚悟をしたはずなんだ」

「だが……それでも俺は」

「いいかい？人は出会いもあれば別れもある。だけど別れがあれば再会もあるんだよ。君たちは間違った別れ方をしたかもしれないがこの再会まで間違ったことにする道理なんてあるはずないだろ！そうは思わないのかい!？」

再会まで間違ったことにする道理はない。

それは正直先生の言う通りだった。悲しい別れの後にある奇跡の再会は喜ばしいことに他ない。

だけど、それを味わう俺達というのには他者には理解できないギ

スギスした感情がある。

俺は親友のためいろんな事を願ってきた。俺はあいつを見捨てる気なんて本当はない。

だけど、方法が見当たらないんだ。ただ答えが用意されているだけ。

逃げ続けた結果俺はその答え以外の方法を考えることができなくなってしまうた。

「俺は……どうすればいいんだ？」

俺は弱弱しく再び聞いた。

答えなんてわかりきっているのに、聞くしかなかったんだ。

「変われ、君の手で奇跡を起こすんだ。今ならまだ間に合う。というか……これから次第だよ」

「俺に……できるのか？あいつに全てを打ち明けて、丸く収めることなんて……」

「別に全てを丸く収めるとは言ってない、ただ……互いに思っていたことを打ち明ければいいんじゃないかな？」

そういうと先生は、落したコーラ缶を開けてコーラを飲む。

開けた瞬間炭酸が抜けてコーラが噴き出したが、そんなことはお構いなしにコーラを口へと運ぶ。

普通だったなら、笑うシーンなんだろうなあ。

「なあ小鷹くんよお、君は美少女に囲まれて楽しい日々を送っているようだが、けして現実にはギャルゲーの世界とは違うものだよ」

「……またずいぶんと、話がずれたな」

「相手のアクションを待つなってことだ。君は夜空との幼馴染の關係にあたってこんなことを思っていたりもするだろう？」「俺と夜空

がかつての関係に戻れば、俺達は隣人部にいる意味を失ってしまう」と

ケイト先生のその推測は、微かにだが当たっていた。  
本当にこの人は、エスパーなのか？

「……そうだな。この部活は友達を作る部活だ。作れないやつが集まる部活に友達がいるやつがいては」

「うーんなんかずれてる気もするがね。というか……はあ〜」  
「ん？」

「いやなんでもないよ。まあ要はあれだよ、君は君でいるってことさ。君が成すべきことを成せばいい、まわりの人間を置き去りにしたとしても君はソラと仲直りをしななければならないんだよ」

「それは……他の部員を見捨てても夜空と仲直りしろってことっすか？」

「まあ……今の君にはその選択肢を取る義務があるね」

無茶苦茶なことをいう先生だった。

要は俺と夜空が仲直りをすれば、隣人部は潰れてもいらしい。  
そんな結果、俺は望んではいない。もちろん……あいつも。

「これは君にとっての罰だよ。かわいい美少女に囲まれながら友達が少ないなんてほざくのが許されるのはライトノベルの世界だけの話よ」

「ずいぶんとまあ、ぶっちゃけたことを……」

「親友の気持ちも他人の気持ちも全てを理解し手に入れるなんて、二次元世界の女の子にモテモテの主人公だけができる芸当さ。けど現実ではそううまくはいかないもんでね、何かを手に入れる際に何かを一時でも見捨てなければならぬ。みんな平等になんて言うのは優しさでも何でもない、それは傲慢と云うんだよ。平和ボケと

言ってもいい」

得意げにそうぶつちやける先生。

俺とあいつの和解は他から見れば軽いものかもしれないが、俺たちからすれば重い問題だ。その問題に気付いた以上いずれは解決しなければならぬ。

俺は夜空のことを考えながら、隣人部の奴らのこともきちんと考えている。

だけど先生が言うにはそれが必ずしも正義とは限らない、他者からすれば正義かもしれないが俺自身からすればそれは単なる傲慢。

夜空と和解することが、俺と彼女だけが次のステージに進むことは正義である。だけどあいつらを置き去りにすることは悪になるかもしれない。

反対に、隣人部全員に分け隔てなく接することも正義である。だがそれで夜空との和解を遠まわしにすることは悪になるかもしれない。

俺はよくラノベとかで描かれる女の子に囲まれ充実の学園ライフを送る主人公ではないのだろう。俺は俺であり、羽瀬川小鷹という一人の人間だ。

すべての正義を選べる万能の主人公ではなく、どちらか一つしか選ぶことのできないただの人間。

俺が一人の人間としてできること、今俺が最も取り戻したい物を取り戻し……変化する時なのだろう。

「そんな平和ボケした日常から脱却すること、失った人間関係を取り戻すことが君たち二人が変化する上での第一歩さ」

「……仮に俺と夜空がかつての親友同士に戻ったとして、新たな何かを失ってしまうかもしれない」

「だから言ったじゃないか、”これから次第”だと。失うも何かを得るも与えるも、君たち二人が和解した時にどうするか次第なんだ

よ。まあこれだけは言わせておくれよ、隣人部はけして潰れやしな  
い」

そう自信たっぷりと言い切る先生。

確かにその結果になるのなら、俺は夜空との和解を選ぶうえで迷  
いがなくなる。だけどそううまくいくものなのだろうか……。

そしてその言葉に続けるようにこう付け足す。

「それに、過去が君達を縛り付けているのだとしたらそれは自らの  
手で払拭する必要がある。その払拭をよく思わない人が隣人部にい  
ると思わないんだけどなあ」

「……どういうこと？」

「仮にだよ、夜空に内緒で他の部員全員に君たち二人の話をしてみ  
ようかい？そしたら絶対にみんなが口をそろえて君達を応援してく  
れるはずだよ」

「……どうして、そう言いきれるんだよ？」

俺がそう質問をすると、ケイト先生はニコリと笑ってこう言った。

それは、合宿の日に星奈が叫んだあの一言だった。

そしてそれは、俺が思う不安をかき消す一言でもあった。

気づいていたのに、触れることをしなかった事実。

「だって君たちは隣人部のみんなは、もう全員”友達”じゃないか」

その言葉が、再び俺の胸に突き刺さる。

それが俺達隣人部に大きな変化をもたらす一言だ。

けして聞き逃してはならない、誰かがいずれば口に出さなければ  
ならないこと。

誰もがいずれは知らなければならぬことだった。

「友達が頑張ろうとしていることをよく思わない友達がいるものか、だから私は言いきれぬのさ。君たち二人が仲直りすることが君たちにとっての第一歩で、隣人部にとっての第一歩だって」

「だから……部活は潰れないし他の奴らが俺達をおいてどこかへ行ったりもしない……ってこと？」

「……小鷹くん、話は終わりだ。私と君はこうして話し合い解り合っただけだ。それでも君は、変化を恐れるかい？」

- - - - -

ケイト先生は言った。 ” 変われ ” と。

そしてそれが、全てを変化させる第一歩と。

それは決して何かを失う変化じゃない、怖いものなんかじゃない。俺達が失ったもの以上に、より大切なものが手に入るのだと。

これが俺に与えられた壁であり、罰でもある。

もう逃げるのは終わり、俺に残された道は進むことだけ。

「夜空……俺はお前に謝っても許されないことをしたのかもしれない」

俺は一度親友を裏切り、そして再び裏切ろうとした。

俺のために悩み泣いたあいつの涙を無駄にし、叫びすら聞き逃そうとした。

それはもう手遅れなのかもしれない、全て俺が悪い。

それでも俺は……。

「それでも俺は、夜空……ソラ……俺はお前との」

お前との出会いを、この奇跡の再会を……。

最後まで俺は欲しがるだろう。だってお前は、俺にとって大切な親友なのだから。

父さんとの電話（前書き）

第34話です。

「羽瀬川小鷹」視点。



## 父さんとの電話

夏休みも残りわずか。

今日は部活もなく、小鳩はリビングでアニメを見ている。

そして俺はというと、家の電話の向かいに立っていた。

時計を見て、午後の1時くらいになったのを確認してある人に電話をかける。

『おう小鷹、改めてだが元気にしてたか？』

「ああ、一応元気にやってるよ」

相手は俺の父親である”羽瀬川隼人”。

小さい頃母親を亡くして以来、男手一つで俺と小鳩をここまで育ててくれた。俺の最も尊敬している人の一人だ。

考古学者をしており、昔から仕事の都合で転勤が多かった。ソラと別れたのもその転勤があったからだ。

そんな父さんは今アメリカにいる。俺たちも本来はアメリカに行く予定だったが俺達がそれを嫌がったため俺達は実家のマイホームに残ることになった。

そして父さんが親友であり星奈の父親でもある聖クロニカ学園の理事長の柏崎天馬さんに便宜を図って、聖クロニカ学園に転入することになった。

仕事で忙しい中俺たちにそれほどの苦労もさせない、子供達のことをきちんと考えておりその上人当たりもいい。

父さんは俺や小鳩と違って友達が多い、『僕は友達が多い』という作品があつたらきつと主人公だろうな。

『しかしいきなりのことだからびっくりしたぞ、急に「ゆっくり話がしたい」なんて電話があつたからな』

「ああごめん、忙しいのに迷惑かけて」

『いや、たまには息子と娘の状況も聞きたいと思ってたからな。それで……なんだ?』

「……色々あつたんだ。色々」

俺は少し間をためた後、この学校であった全てのことを話した。前に理事長が父さんに話をしておくといっていたから、多少のこととは理事長から聞いているのだろうけど。

だから俺が話したのは、主に夜空の話だった。

隣人部という部活に入ったこと、かつての親友に再会したこと。

俺の何気ない裏切りで、そいつが傷を負っていたこと。

俺はそいつにとんでもないことをしてしまったこと。気づくことを遅れた上気づいた上で逃げてしまったこと。

それを先生に言っただけでつぷりと怒られたこと。そして今、俺が成すべきことを……。

『……そうか、あの子に会えたのか』

「ああ、もう会って3ヶ月は経つんだらうけど。まだお互いに再会を認識していない。互いに「久しぶり」なんて言っていないからな」

『そうやって距離を開けていたら、気づいた時にはその子はもう耐えられなくなっていたってわけか……』

父さんは俺の話の聞いて、怒るわけでも叱るわけでもなくただ納得していた。

父さんはたくさんの人と関わってきただけあって、人間関係の難しさを良く知っている。

ケイト先生は先生だが俺より一つ下だし、思えば人生の先輩といった人に相談するのは初めてだった。

「あいつの気持ちを避けていた俺が、今こうしてたくさんのことを

伝えたいっていうのは我儘な話なんだろうけど……」

『ははは、そんな遠慮ばかりしてたら何も変わらないのも事実だ。だって俺達は言わなきゃなにも伝わらないし、言ってくれなきゃなにもわからないんだからな』

父さんのその言葉を聞いて、俺は合宿のことを思い出す。

今父さんが笑って返した言葉はあの日、星奈が言った言葉そのものだった。

言ってくれなきゃなにもわからない、まさに俺とあいつはそういう関係だった。

ため込むだけため込み、それを出そうとしない。

それを、出そうとしないことを正しいことだと思いこみ悩む。自滅でしかなかった。

『まあお前はそういう友達とか少ないやつだから遠慮してしまうんだろうけどな、本来友達というのは遠慮をしない仲だ。逆に遠慮をすることは迷惑になるんだぞ』

「腹を割って話す……ってやつ？」

確かに父さんは理事長に俺達がこの学校に入るように便宜を図った。

正直言ってそれは、かなり迷惑をかけたと思う。

けどそういったことをためらいもなしにできるってことは、きっと父さんは理事長のことを心の底から信頼していたんだと思う。

『その通りだな、俺とザキもよく喧嘩をしたものだ。そんな時はいつも互いの意見を爆発させていた。くだらないことばかりだったけどな』

ちなみに『ザキ』というのは、理事長のあだ名である。

一度だけ『星矢』と言ったことがあるらしいが理事長がキレたとか何とか。

「俺も、あいつとそんな仲になれるだろうか。一度は違った俺たちだけど……」

『そんな弱気でどうするよ……なあ小鷹、お前は自分が救われたいと思うことをどう思っているんだ？』

父さんは突如真剣な口調で俺にそう聞いてきた。

「それは……傲慢だから悪いこと……かな」

『自分勝手と言えば悪く聞こえるな、だけどな……もし他人がお前に『救われてほしい』と思っていれば、お前が救われることは正義に繋がるだろう』

「俺が救われることを、望んでいるやつら……」

『それはお前の親友、そしてお前がいる部活の連中だ。きっと夏休みの間悩みふけるお前とその親友を見てなんとかしてあげたいと思っただけだ。だけどお前ら、自分のことばかり気にして他の奴らの気持ちなんて気づくこともなかっただろ』

思えば……そうだ。

俺はこの夏休みの間、ずっと自分の悩みと戦ってばかりだった。

夏休み色々なことをやったが、俺はほとんど覚えていない。

印象深いのは理事長に挨拶に行った時のことと合宿のことくらいだ。

そして、俺を気にしてくれていたであろう人たちもいた。

理科と話した時も、あいつは俺を心配してくれていた。

星奈と喧嘩をしたときも、あいつは俺のことを怒っていた。

そしてケイト先生は、俺に対して泣いていた。

きつと、夜空に対してもあいつらは心配をしていたのだろう。

俺は気付かないように配慮する以前に、本気であいつらのことを気付くことができていなかった。

「俺、あいつらに悪いこととしてしまったな」

『思い返してもしかたないだろ。そんなお前と親友が今、部活の奴らのためにできることはなんだ?』

「……俺達が和解すること。俺達が救われることだ」

『それが、隣人部……だっけ? 友達を作る部活としての最初の成果になる。それがやがて部活の未来にも繋がる気がする。って、父さんは思っただけだな』

「……ということは、俺と夜空の関係は……」

『もうお前ら二人だけの問題じゃねえ、お前ら二人の問題は部活全体の問題だ。だからそれを正しいことと信じて進め』

父さんは力強く、俺を後押ししてくれた。

先生に言われたことと合わさって、次々と俺の弱気な心を消していった。

そしてそのたびに俺は、成すべきことを成そうとする決心を高めた。

もう俺は、怖いと思う必要はないのかもしれない。俺はただ、あいつに全てを伝えるだけだ。

抱え込んでいた俺の全てを伝え、あいつの全てを受け取ればいい。それがどういふ結果になろうと、もう俺は怖くない。

最悪の結果が待っているかもしれない。だけど俺は、俺のためあいつらのため……そして夜空のために最高の結末を描いてみせる。

それが俺の……みんなが信じてくれる正義だと思っから。

「……父さん」

『なんだ?』

「父さんにとって、友達ってなに?」

俺はこの会話を通して思ったことを純粹に聞いた。  
その答えを、聞いてみたいと思ったから。

『 そうだな、簡単にいえば心から信じてくれる人、心から信じられる者かな 』

『 人間、何か行動を起こそうとする時にそれを正しいことだと信じようとする。自分のことだから正しいと思うことは当たり前だろ 』  
『 う 』

『 だけどそれは自己満足でしかない。その時友達は、自分が行おうとしていることを正しいと信じてくれる。反対に間違っているであろうことは間違っていると指摘してくれるだろう 』

『 友達が正しいと信じてくれるから俺達はそれを信じて正義を行える。間違っていると指摘をしてくれるから間違いを起こさないようにできる 』

『 そして間違っただとしても、本気で対話して解決することと違ってできるだろう。だって友達なんだから。遠慮をするな迷惑をかける。自分の全てを伝えそいつの全てを受け入れてやれ。そしてそいつを……友達である”そいつら”を1000人分大切にしてくれ。そしてたらお前は、そいつらに1000人分大切にされるはずだ 』

父さんは俺の質問に対する、最高の答えを用意してくれたと思う。ありがとう父さん。ありがとう先生。大げさかもしれないが俺にとってこの問題は大きなことだ。

友達も少ない俺が、最初に経験した大きな出会いと別れ。そしてこれから俺は最高の再会が待っている。

夜空……ソラ。俺はお前との出会いも別れも全て大切にす。お前の悩みも思いも気づいてやれずに逃げ出したけど、俺は今改めてそれらを欲しがろうとしている。

傲慢だと笑うがいい、都合がいいと馬鹿にするがいい。だけど俺は覚悟を決めた。その覚悟は誰にも否定させやしない。

過去があるから現在があり、それが未来へとつながる。俺はそう信じている。

俺はあの時、お前との楽しかった日々がほしかったんじゃない。

「俺はただ……」

- - - - -

そして……再会の日が来る。

「久しぶりだな、ソラ」

俺は、やっと気づくことができた。

再会のクオリア（前書き）

第35話です。

「三日月夜空」視点。



## 再会のクオリア

神様って、本当にいるだろうか……。

仮にいたとして、それは奇跡を起こすのだろうか……。

いや、奇跡とは神様が起こすものなのだろうか……。

どんな人間にも、幸せや希望なんてものが平等に振り分けられるものだろうか……。

勝つやつがれば当然負ける奴もいる。私はずっと負けた側の人間だと思っていた。

そう思うことで、全部納得してしまえば楽だと思っていたから。

人は一人では何もできない、孤独というものに勝つことはできない。

だから人は他人を信じる。そして関係を築き上げる。その中でも特に強固で、身近に築き上げられる関係。

”友達”

けして多くなくていい、かといって少なくともいいというわけでもないけれど……。

人は己の弱さを認め、恐れず人を信じることでその関係を築き上げることが出来るだろう。

だけど、人はすぐに裏切る。裏切られた人間は人を信じることを恐れる。

信じることを恐れるうちに、人は本当の愛を失う。

愛とは人間の起源にして基底だ。全ての感情はこの愛から派生している。

愛ゆえに人は喜び、悲しみ、苦しみ、悩み　そして憎む。

だから人は愛を抱くと同時に憎しみを抱く。この善と負の感情が入り乱れるから人と付き合っていくのは難しい。だから私はその難しさゆえに友達が作れない。

友達という関係は人間関係の中で最も身近な関係だが、それでも互いに考えがすれ違ったり大人数でグループを形成していくうちに一部の人に対して負の感情を抱くだろう。

だって、全ての人間はそれぞれ心の中に言葉にできないものを抱えている。人は個であるがゆえに歯車がかみ合わないことさえある。私はそういった負の存在が怖くて仕方がなかった。

私は、あいつに裏切られようが置き去りにされようが信じ続けた。だがそれは恐れを克服したうえで信じたのではない、信じるしか選択肢がなかったからである。

また裏切られるかもと、見捨てられるかもと恐怖を抱けど私には過去しかなかった。

あの過去こそが、私にとって最も大切な時間で……最大のトラウマだ。

あの過去があったから今私は墮落している。私はあの過去を乗り越えることができなかった。

だから……あの過去が私にとっての終着点で、羽瀬川小鷹が私にとつての全てなのだ。

小鷹は私を置き去りにしたが、10年後こうして戻ってきてくれた。だから私にはあいつ以外いらなかった。

だがあいつへの執着が、依存心が後に私の中の憎しみを増大させていった。小鷹を想うたびに膨れ上がる憎しみに私はいつしか耐えられなくなっていた。

そして私は壊れ、全てを諦めてしまうことで自分を形成することにした。もう小鷹が私のことを気づかなくてもいい、あいつという過去が存在してくれるだけで満足だった。

あいつと親友だったという過去、その事実があればもうなにもいらないと私は全てを認めた。

私は覚悟した

なのに。

.....

「 久しぶりだな、ソラ」

突然のことだった。あまりにも急すぎる小鷹のその一言。

それが、私にとってどれだけ価値のある一言なのか。私が最も待ちわびた一言だ。

それを、何の前触れもなく今この男は……かつての親友は言い放ったのだ。

「.....」

その言葉から抱く感情、大きな喜びと悲しみの数々が私を支配しそうだった。

今の私の顔は、今までに出したことのないくらいの驚きが詰まっていることだろう。

その驚きが、私の10年間の悲願を相殺し私の全身を麻痺させているのだから驚きだ。

「 突然すぎて頭回ってないのか？」

あたりまえである。

お前は告げる側だからいいが告げられたこっちとしてはもう言葉にならない想いでいっぱいだ。

喜ぶことも悲しむことも怒ることもできず。ただただ呆然と立ち

尽くすしかできない。

「……そうか、じゃあ一方的に言いたいこと言いまくるから」

と、小鷹は固まる私をいいことに小鷹は一息つき……。

「とりあえず最初に一言謝らせてくれ、あの日……別れを言えないままお前の元から去ってすまなかつた。そしてそれが原因でお前がどれだけ悩み苦しんだかもある程度理解してるつもりだ」

「正直償いきれるものじゃないだろうが、俺には謝ることしかできない。あの過去がなければお前は今でもそれなりに人と向き合うことができただろう。でも俺の何気ない裏切りがお前に恐怖を植え付けてしまった」

「許せとは言わない、一方的に俺に全部擦り付けても構わない。俺はそれだけのことをしたんだろう……そしてそれをわかっていながら現在ののお前から俺は逃げ出そうとした」

「あの大切な時間を、どうでもいいことにしようとしたんだよ俺は……。こんな俺が言える立場じゃないが、一つ我儘を言わせてほしい」

「許されるのなら許されたい。救われるのなら救われたい。そして……お前ともう一度親友という関係になりたい」

小鷹は言いたいことを全て言いきったようで、言い終わった後は私の返事を待っていた。

私が言葉を返すまで離れない気だろう。その眼は答えを待っている眼だ。



で……ああああもう泣きそう。でも我慢しろ私！！

だが、再会はしたものの私自身が変わったわけではない。今こうして再び小鷹への執着心がむせかえしてきている。

ないとは思いますが、今部活のやつらがかけつけなければまた私は憎しみに支配されてしまう。今この瞬間は私たち以外の誰にも邪魔されたくないし干渉されたくない。

結局、再会をしたところで変わりはないだろう。返って逆効果かもしれない。

「まあその……俺が今日この祭りでお前に全てを打ち明けた理由なんだが……」

「なんだ？」

「俺は、今日お前とわかり合うために来たんだよ。お前の親友であるタカとして、隣人部の羽瀬川小鷹として……」

「わかり合う？私とお前が？」

「ああ、もう隠し事もなしにしようぜ。お前が部活のメンバーに向けてたあの眼も、俺がごまかし続けていた嫌な感情も全て……俺たちはわかり合わなければならぬ」

「なんのためにだ？私たちがこうして再会したということはまたあの過去に戻るはずだ。もう私たちはリア充になれる！それにわかり合うというなら私たちはもうわかり合ってる！！」

そうだ。再会した以上余計な部分に干渉などしなくていい。

私とタカの再会は私の全てとなる。これでまたあの過去に戻る。過去に戻るわけではないが、あの素晴らしい時間を再現できる。それはタカだって望んでいるはずだ。だけどタカの表情はそれを望んではないようだった。

「過去……か、それではだめなんだよソラ。いつまでも過去に囚われてたらお前はまた人を憎むし俺は誰かを裏切る。俺をそこまで想

つてくれているというのはうれしいけどもお前は俺以外のあらゆるものも見ていかなければならない」

「なんで……なんでそういうことを言うんだ？あの時言ったじゃないか、友達100人作れなくても100人分大切にできる友達がいればいいって。私はお前さえいてくれれば……」

「確かにお前のあの言葉は俺の生きる原動力にもなってる。大切な言葉だ。俺たち二人の全てを表してる友情の言葉だ」

「じゃあなぜ!？」

「今、お前の目の前に立っているのは誰だ？いや、この場合”どっち”だつて聞くべきか？」

小鷹のその問いの意味を、私はよく理解できなかった。それらのこともあつてか、次第に私は怒りに身を任せていく。

「……意味がわからないぞ」

「ソラの親友であるタカなのか、夜空と同じ部活の部員である羽瀬川小鷹なのか……だ」

小鷹のその言葉に、私は少しばかりの焦りを見せた。改めてその言葉の意味を理解したからだ。それは私の悩みの一つでもあつたから。

その言葉に、私はとりあえずごまかして見せた。

「ははは、何をわけのわからないことを……」

「お前は過去の俺と今の俺、どっちを見てるんだよ？」

「ははは……はは……」

「ソラ……もう俺たちは過去には戻れない。俺たちには現在があるんだ。隣人部と部活のやつらが」

……うるさいな。

どうして現在にこだわるんだよ、こうして私とお前は再会しただろ。

確かに過去が消えてしまうのならお前の現在を大切にしようと思っただけでも、こうして再会できたんだ。

私は小鷹と一緒に遊びたかった。こういう仲のいい関係を取り戻したかった。

そうさ、タカとあの日々を……あの日のタカを……。

「だから俺たちは、過去だけを見るんじゃないやなくてきちんと現在と向き合わなければ……」

「……少し黙れタカ」

「だからわかり合う必要がある。過去の綺麗な俺たちだけを振り返るんじゃないやなくて、今の弱い俺たちも見えていかなきゃいけない。だから俺は……」

「黙れって言ってるだろタカ!!」

「俺はお前から逃げてた!!それは事実なんだよ!!」

私が叫ぶと同時に小鷹も叫んだ。

互いの想いが飛び散り、今にも互いの想いがぶつかろうとしている。

あの時みたいに、私たちが出会ったときみたいに……。

「タカ……だからいいよ。逃げてたことくらい許してあげる。置き去りにしたことも特になんとも思っただけだから。だってお前はこうして私の前に戻ってきてくれただろ?」

「お前に許されることで全てが過去に戻るといふなら俺は許されなくていい。ソラ、俺はな……俺は」

小鷹はそう何かを言いたそうにしたが、こぼれそうな言葉を飲み込んだ。



そして沈黙が流れる。再会したのにどうしてこんなギスギスなきゃいけないんだ。

「……私は寂しかった。あの楽しい日常が一瞬で消えたあの日以降、私の周りの人間が全て恐怖の対象だった」

自然と私は、この10年間の想いを語りだした。

それを伝えることで彼に重みを与えてしまうことはわかっていた。けどそれを伝えなければならぬとも思った。

それが、わかり合うということならば。

「 中学に入っても、家庭科の授業では余った班に入れてもらい隅のほうで小さい盛りつけの料理を食べていた。なにかあるたびにグループを作れと言われれば余り班、その連中は私に話しかけてこなかった」

「 そりゃあ最初のころは私の容姿目当てで話しかけてきたやつは多かったが。私はそいつらをとことん突き放した。わけのわからない本を読む毎日。まともを演じ孤独を愛すことを見せつけ全てを拒絶した」

「 人と触れ合わなければいけないことはわかっていた。けど怖かった。いつ裏切られる？私の何が目的？外見だけ中身の能力だけ？仮面をかぶってるやつら、都合が悪い時自分も仮面をかぶらなければいけないのか……」

「 そしてそうなった理由をたった一人の親友に擦り付けてしまった時、心の底から泣いた。なにかあるたびに裏切った親友の優しい言葉が……私を……わたしを……」

次第に感情が高ぶる私の目からは、流しなくなかった涙があふれ出ている。

ずっと我慢し続けてきたものがあふれ出て、私の奥底に眠る叫び苦しみが暴かれていくようで。

プライドの高い私は、それが悔しくて仕方なくて。タカのせいにしたくないのに全部擦り付けるように吐きまくって。

でも、今の自分にはそれしかできなくて。もう何が何だかわからなくなっていた。

「記憶の中のお前の言葉が何度も私をばげまし、恨みたくても恨み切れずに……お前という存在によって歪められたんだとしてもお前しか……いなかった」

「俺も、何度もお前を忘れようとして……けど完全にお前を消し去ることが出来なかった。だから俺は他人に想われる価値のない人間だと、そうやって他人の気持ちを反らしてきたんだ。また誰かを裏切ってしまうんじゃないかって……」

「そして……お前と一緒に部活やって。でもお前の周りにたくさんの方が集まって……お前がそいつらと一緒に戯れてるのを見て悔しくて悔しくて、人と触れ合うことを恐れた結果他人の行為を受け入れることもできずに……本当は、星奈も理科も幸村も悪くないのに、あいつらは何も関係ないのに……私はただあいつらを悪として憎むことしかできなかった」

そう、あいつらは悪くなかった。星奈も理科も幸村、小嶋もマリアもただ私が一方的に嫉妬していただけ。

特に星奈にはたくさんいやがらせをしてきた。負けを認めるのが怖くて、同じ残念なのに人と真っ向から向き合えるあいつにただ嫉妬をして。

でもあいつらは、そんな私を心の底から見捨てようともしない。この優しさを素直に受け入れることのできない私。

そんな時私は、心の底から自分が弱者だと認めざるをえなかったんだ。だから悔しくて、憎み嫉妬し羨み疎ましく思うことしかできない。

「最低だろ私、これがお前の親友であるソラの正体さ。失望したか？しかもあの時からお前に嘘をついていたというおまけつきだ。お前にとっては最も作りたかったのは”男友達”だもんなあ。私はお前を騙していたんだ。私の墮落はその代償なんだよ」

「ソラ……」

「過去に戻れないんだったら、過去が消えてしまっただったら残るのは最低な人間である三日月夜空だけだ。そうなってしまっただけ……もうお前とかつての親友同士になんてなれないんだよ……」

私は涙を流しながら、苦しみながらも必死に心の叫びを吐きだした。

私の本質を全てさらけ出し、少しばかり軽くなったようにも思えた。

これで小鷹にどう思われても構わない、失望しただろうし相当なシヨックも受けたはずだ。

「ごめんなタカ……私はこんなにも落ちた人間なんだ。」

「……お前、俺のこと全然理解してないな。何がわかり合ってるだよ……ふざけんじゃねえよ」

「タカ……？」

そして小鷹は叫んだ。

心から、私に向かって。

「人を憎むだけしかできない最低な人間？それがどうした！？男だ

と偽ってた？それがどうした！？それくらいで俺が……最も大切な親友であるお前を見捨てるんでも思っただのかよ！？」

その叫びに、私はただ何も言い返すことが出来ず。

ただ立ち尽くし、圧倒されていた。

かつての親友であり、私の理解者でもある彼が心の底から叫んだそれは……偽りのない想い。

そう信じるしかできない、信じたいと心の底から願った叫びだった。

「履き違えてんじゃねえよこの野郎、お前こそ俺がその程度のやつとしか見ていないんだとしたらそれが一番傷ついたわ！」

「で……でも私は！」

「それだったら俺だって失望されたって仕方のない最低なクソ野郎だよ！！そこにある事実にも目を向けない、人の行為を受け入れられないのではなく受け入れようとしない俺のほうが弱いよ！」

そして小鷹は、私にさっきの質問をし返す。

「逆に聞くぞ、お前はこんな俺を本性を知って失望したか？」

「……し、してない。お前はお前だ。タカはタカで……羽瀬川小鷹は羽瀬川小鷹だ」

私はすぐさまその問いに答える。

お前が私の心を踏みにじっていたとしても逃げていたとしても、こうして最終的には私の前に立っている。

なら、やっぱりお前は変わっていなかったってことだ。あの時と同じ、不器用だけど仲間想いの少年のままだ。

「……ソラ、俺は別に過去を捨てるだなんて一言も言っただけよ。過去は大切だ。あの過去は俺たちにとってとってても」

「……うん」

「だけどな、あの”過去”があつたからこそ”現在”がある。今のこの再会がある。一度は違つたがこうして今お前とあの時以上にわかり合うことができてる」

小鷹のその強く、全てを込めたその言葉。それは私たちが目を反らしてきたこと。

過去があるから現在がある。あの過去を大切にしてきたからこそ今という時間がある。

今こうして、弱い自分たちと向き合えるのだと。

「そして、その今は明日という未来に繋がる。お前言ったよな？ 一人でも大切にできる友達がいれば輝かしい未来が待っている」と

「ああ、言った」

「その未来は……今ここにある。俺はあの過去が……お前と過ごした最高の時間が欲しいわけじゃない。きつとあの時もそれを欲してはいなかつたんだと思う」

「じゃあお前は……タカは何が欲しがつたんだ？」

私は聞いた、タカの本心に欲しがつたものを。

それを私は、知らなければいけないと思つたから。

「俺はただ、”明日”が欲しがつたんだ。またなつて別れて、輝かしいであろう次の日を待ちわびる。何が起こるか分からないけどきつと楽しいことがおきるであろう明日を……」

「明日……それがお前の本当に欲しがつたものなのか？」

「そうだ。楽しいことだけでなく悲しいこともあるかもしれない。けど充実した後悔が出来る明日を。あんな突然消えさる悲しいもの

じゃなくて、親友とならどんなことでも乗り越えられる明日を……」

「俺は……ソラとの明日が欲しかったんだ!!」

それが、タカ……羽瀬川小鷹の全てを物語った。

この10年間、私は数々を苦しみ信じることを恐れ本当の愛を失った。

けど彼も、本当は全てが怖かったんだと思う。けどあらゆる恐怖の中で求め続けたのは楽しかった過去ではなく、何が起こるか分からない明日だった。

本当に信じあえる友達とならどんなことだって乗り越えられる明日、それを思い出とできる大切にできる日々を。

毎日が楽しいなんて、毎日が楽しくないのと同じ。前にケイト先生に言われた言葉の意味が今わかった気がする。

そして私は確信した。この男は弱くあろうとも大切な何かを知り必死に手に入れようとしていたことを。

どれだけ人から逃げ、拒絶をしようとも大切なものを見失っていなかったことを。

確かに小鷹は間違っただんだと思う。汚いことをしたかもしれない。けど小鷹は、私の親友は決して全てを諦めたわけではなかった。

私のように投げだすことをしなかった。

だから今、私と彼は決してこじれず。違っただ上で全てをわかり合えたのだと思う。

私はやっと出会えたのだろう、かつての親友に……。

最高の友に、最も信じられるやつに。そして私を変えてくれるかもしれない、変えるきっかけを与えてくれるかもしれないやつに。

「タカ……信じて……いいんだよね?」

「……ああ、俺はお前の親友だ。だから俺もお前を信じさせてくれ、お前も変わる。俺たちは変えられるから」

「あ……あああああ……」

小鷹は、そう優しく言った。

心地の良いその言葉が、私を縛っていたものを壊していくような気がした。

長年の苦しみから、解放されたかのように私は彼に抱きつく。

大粒の涙を流し、叫びながら。

「うわあああああああああああああああああああん！！」

この時の、彼を想うこの感じを私は心に刻む。

彼を想う、この本当の愛を……。

再会のクオリア（後書き）

UVERworldのあの曲を聴きながら読んでくれると私はうれ  
しいです。



やっと出会えたんだね（前書き）

第36話です。

「羽瀬川小鷹」視点。

やっと出会えたんだね

俺は明日が欲しかった。

この一言が言えて、俺は今とても満足している。

俺が悩み悩んで、色んな人に励まされた上で出した答え。そして全ての真実だ。

この思いが過去と現在と未来を全てを欲している証拠と言えば傲慢に聞こえるかもしれない。

だが俺は傲慢ではない、ずるいかもしれないが俺はそれら全ての時間を大切にしているだけだ。

ソラと過ごした楽しい日々も、悲しい別れも感動の再会も、俺たち二人の間にしか感じることでできない宝物だ。

俺たちはすれ違いながらも、悩み苦しみながらも今この瞬間を手に入れたのだ。信じ続ける強さというものを俺たちは改めて知った。

「う……う……ひっく」

「いい加減泣き止んでくれよ、お前そのまんまあいつらんと戻ったら俺がお前を泣かせたみたいになるだろ。また悪評広まるだろ」

「実際に泣かせたのは、タカだろ？」  
「……否定はしないが」

ソラ……夜空のその言葉に俺は頬をポリポリ書いて少し困る。

どうやら俺の親友は、俺以上にこの10年間を苦しみがき、起こりえないであろう再会を願っていたのだろう。

まあ苦しんだこいつに比べ俺は、ごまかし続けていただけというのだから罪悪感が完全には消えていない。

苦しんでいると思いきみ、出した答えを全て正当化し続け自分すら偽り……改めて思うと俺はとても屑な人間だったのかもしれない。

こりゃ、巷でよくある女の子に囲まれるような物語の主人公になんかなれそうにないな。まあ……なりたいたいと思わないが。

「んで、これからどうするよ?」

「どうするって……」

「俺たちは隣人部としての目的、”友達作り”という目標を見事達成してしまっただけだ」

そう、俺としてはこいつとの再会はともうれしい出来事だ。仲直りできたのだからまさに最高の結末だろう。

だが、これを結末としてしまうことは俺には出来ない。これは結末などではなく最初の一步に過ぎない。

目標とは人が生きる上で成し遂げたいと思うこと、だからそれを成し遂げれば生きるのが終了……というのはおかしい話。

俺だけでなく他の奴らも見えていけとこいつには言ったが……探りを入れてみるか。

「目標を失ってしまったのだからもう部活にいる意味もない、いつそのこと全てを告げた上でおさらばするか?後は頑張ってくれ応援してるぜ……なんてな」

「……私は、お前さえいればいい。って……昨日までの私ならそう言っていただろうな」

「……………」

「下手くそだな”小鷹”、そんな探りで私の本性を引き出せると思っていたのか?目標を失ったのなら……次の目標を見つけなければいい。それに……私達だけ目的を成し遂げても意味がない、部長としては部員全員が目的を成し遂げてほしい」

その言葉を聞いて、俺は心の底から安心した。

俺は、ほんの少しだけこいつを変えることができたらしい。

夜空の痛みを少しだけ和らげることができたのかもしれない。

だが俺もこいつも少し変化したに過ぎない、俺は未だに人を怖いと思うこともあるし夜空は人を憎むことだってある。

俺としては、夜空が人をどれだけ憎もうが関係ない。むしろ人を憎まない奴なんていない。

俺だって人を憎む、疎ましく思うし羨ましく思うことだってある。人は完璧になれても完全にはなれない。

人の善だけを見て関係を築くのではそれは友達とは呼べない、だから俺は……もう親友の負には目をそらさない。

だから……俺も信じさせてもらう。今お前が言ったその言葉は……それだけはけして偽りではないことを……。

「それでこそ……俺たちの三日月部長だな」

「ちっ……タカの意地悪め」

俺がそう茶化すと、夜空は頬を赤らめて恥ずかしそうに答えた。

それを見て俺は、ちよっぴりほほ笑んだ。

なんていうか、あの時が戻ってきたみたいで…………だけどいつもの隣人部の日常が失われていないようで。

俺が手に入れたものは、俺には手に余るほどのものだったのかもしれないな。

「にしても……小鷹」

「なんだ？」

先ほどの会話が終わって一間空いたくらいで、今度は夜空の方から話しかけてきた。

「お前は……私との再会はうれしいのか？」

「うれしいに決まってるだろ、変なこと聞くな」

「ふうん、私は自分に似合わずこんなにも泣いたのにお前は一粒も涙を流さないんだな」

「……泣きそうにはなつたよ。だけど……泣いちゃいけないなつて思つたから」

そう、俺はこの再会で涙というものを流していない。

俺が鉄仮面のような愛想のない男だからじゃない、この再会をうれしく思うことはできても泣く資格はないと思つたからだ。

あの別れに対しての罪悪感捨てる切れていないらしく、泣いてしまつのは自分的に許せないと思つたからだ。

この再会に感動をするなんて、夜空が許してくれたとしても……。

「まあ、そういうわけだ」

「かつこつけちゃつて、しかしそれだと私が悔しくて仕方ないんだが……」

「お前、相変わらず変なところでプライド高い奴だな。変わつてないのはいいいことだ」

「私だけ一方的に泣くのだと小鷹に完全敗北させられたようなものだ」

夜空は不機嫌そうに言った。

おいおい、そりゃあ考えすぎじゃないのかお前……。

「……決めた。近々絶対に夕力を泣かす」

「素で怖いよ、頼むから暴力反対」

「10年間私を置き去りにしたんだからな、絶対に泣かしてやる」

そう言つて、夜空は俺に向かってニコッと笑つた。

こんなに笑う夜空を見るのは初めてだ。いつもはあんなにも無愛想なのに。

やっぱりこいつ、笑うとかわいいやつだな。そんなやつ笑顔奪ったのも俺だとしたら……罪深いな俺。非常に惜しいことをしてしまったんだな。

「さて、そろそろあいつらんと戻らないとあいつら勝手に帰ってしまうかもしれない」

「そう……だな、出来れば二人で少し祭り会場を回りたかったんだがな」

「え？なんだ……」

夜空の言葉にいつもの調子で返そうと思った途中で、俺は言葉を止めた。

そこで誤魔化したら、いけないと思ったから……。

「ん？」

「……俺も、お前とお祭り回りたかったよ。10年前にな」

「タカ……」

「でも今は、みんなで楽しもうぜ」

二人である時のように遊びたいとも思ったけど、再会の時間をいつまでも分かち合ってはられない。

待っている。部活のやつらがどこかで待っているはずだから。

待っていると、信じていたやつらがいるから。だから俺たちはあいつらの元へ向かう。

あいつらの……部活の連中の元へ。そして俺たちの大切な……。

「行こう……」 夜空

「ああ……」 小鷹

しばらくは、互いのあだ名も封印だな。

俺たちの再会が、何かしらの結果を出すまで。  
あいつらに全てを打ち明けるその日まで……。  
タカとソラは、羽瀬川小鷹と三日月夜空だ。

.....

「あ、もうどこ行ってたんですか先輩方〜!!」

「あ、お兄ちゃんと夜空なのだ〜!」

「うえ〜ん! あんちゃー!」

「お待ちしております。兄貴、夜空の姉御……」

「んもう夜空! 私と勝負しようって言ったのに!!」

祭りの中心部に向かうと、みんながそれぞれの言葉で俺たちを出迎えてくれた。

理科は相変わらずチョコバナナを食べていた。マリアはまだ何かをたくさん頬張っていた。

小鳩は星奈に抱きしめられながらもがいていた。幸村はいつもの調子だった。

そして星奈は、小鳩を抱きしめながら蔓延の笑顔をしていたが夜空を見た瞬間に若干怒りの表情になった。

とりあえず最初に思った事、妹が無事でよかった。俺が親友と再会してる間に今度は妹が謎の行方不明では笑えない。

「ああすまねえ、会場広すぎて迷ってたんだわ」

「肉、貴様との決着はまた今度だ」

夜空をちらつと見ると、先ほどまでの再会なんてなかったかのようになつた。切替の早い奴だ。だが泣いたままよりはマシか……。

だが良く見ると、無愛想ないつもの面だが柔らかさも感じ取れた。全てを拒絶するあの眼ではなく、希望に満ちた眼だ。

俺は改めて安心する。

「ん？ねえ二人とも……」

「どうした星奈？」

「なんだ肉？」

星奈が俺たち二人でやってきたことに不信感を覚えたのか近づいてきた。

まあ確かに二人だけでどっか行ってたんだから、怪しむのも当然か。

星奈や他の奴らには悪いが、ここは誤魔化させてもらおう。今はまだ……俺たちの再会は話さない。

と、そんな心配もなかったようで星奈が俺たちにかけてた言葉はと  
いうと……。

「……あは、なんかふっ切れたようね二人共」

「え？」

思いがけない言葉、そうか……そういえばこいつ俺と夜空のことをそれなりに心配してくれてたっけか。

俺は合宿の時星奈と喧嘩したことを思い出した。あれからもずっと……心配してくれてたのかな。

心配かけてごめん、今は話せないけどいつかは明かすから。

隣人部全員が、それぞれの真実に気付いたその時に。

「さてと仕切りなおすわよ！会場で花火売ってたから買ってきちゃった！あそこの公園で花火やりましようよ……！」

「なんで貴様が仕切るのだ肉、部長は私だ」



「いいじゃないのよ！根暗なあんたより私の方がリーダーシップあるわよ！！」

「なんだとこの駄肉が……」

と、この二人は会えば即喧嘩になるようだ。この二人が仲良くなるのは俺たちの再会以上に難しいかもしれないな。

だが前と違っていているのは、言い争っている夜空も満更でもないこと。

夜空、きつと変われるよ……お前も。

こうして俺達は公園で花火をした。

7人もいるのだから買ってきた花火はあっという間に減っていき、時間が過ぎるのも早かった。

この瞬間を、俺はとても大切にしていきたいと思った。

あの時、親友と過ごした日々と同じくらい楽しい現在、いやそれ以上に充実している今この時を……。

ひよつとしたら、俺たちは今リア充って呼ばれている奴らの仲間入りを果たしたのかもしれないな。

リアルが充実している。楽しい日常をみんなで過ごす。とても最高で素晴らしいことだ。

だけど俺は知ってる。毎日が楽しいなんて……毎日が楽しくないのと同じだったことを。

楽しいだけが全てじゃない、辛いこともあるし背けていた現実というのも襲ってくる。だからリアルは充実だけではないんだ。

本当の充実は、辛いことを乗り越えた後にある明日。何が起こるか分からない明日。明日への希望を抱ける毎日、それらを待ち望む生きとし生ける者たちの人生だ。

だから現在が面白いし、楽しい過去を振り返りたくなることもある。

夜空がよくリア充爆発しろとか言ってるけども、明日というのがある限りは俺たちだってリア充なんだと思う。

夜空は……どう思ってるのかわからないけど。

「小鷹、また考え事してるの？」

花火を持つてばーっとしてる俺を見兼ね星奈が話しかけてきた。それ言われると、まだ俺が悩んでるって思われてるみたいだな。

「ああ……こんな日々が毎日続けばな……っつて」

「へえ、あんたにしてはいいこと言っじゃない」

俺は心から思うことを述べた。これは偽りでも何でもない。

「星奈……ありがとな。お前にあの日あんなこと言われてなかったら俺まだ悩んでたかもしれない」

「ふふん、感謝しなさいよ。私は友達少ないけど他人のことはきちんと考えられる心やさしい美少女なのよ」

「はいはい、本当にありがとな」

相変わらず高飛車な星奈、こんなところもこいつのいいところなのかもしれないな。

柏崎星奈、こいつはひよっとしたらずっと前から俺たちが到達するであろう場所に立っていたのかもかもしれない。

なんやかんやでいい奴だし、なんでもできるしその上容姿もいいし。

認めるのは悔しいが、お前は完璧なのかもな。

「まあその、私にありがとっつて感謝するくらいなら……」

「なんだよ？」

「……もう、大切な親友を置き去りにしたらだめよ」

「……え？なんだって？」

- - -  
- - -  
- - -

9月1日、朝。

夏休みが終わって最初の一日、うちは二学期制なので新学期ではないのだが心機一転。とりあえず転校して最初の山場は越えたといったところか。

夏休みが終わるまでに俺が成し遂げたことは、親友との再会と仲直りだ。

そしてそれを通して、自分というものを見つめなおすこともできた。自分のことだが100点満点中100点を付けてやりたい。

今、俺と夜空が所属する2年5組の教室では、担任の先生が生徒の名前を呼びあげて出欠を取っていた。

窓側から三列目の後ろから二番目の席　三日月夜空の席には、誰も座っていない。

あいつに限って遅刻とは……珍しいことだ。

次々とクラスの生徒の名前が呼ばれていく、俺も呼ばれ返事はし

たものの眠かったのか声のトーンは低め。

隣の席の女の子が怯えたのがわかった。ごめんね、なんかしらないけどとりあえずごめんね。

そして続けて名前が呼ばれ続け、とうとう夜空の名前が呼ばれた。

「三日月」

「はい」

ちょうどいいタイミングで教室の扉を開けて堂々と入ってきて返事をする夜空。

三日月という苗字は夜空しかないのだから、もちろん返事をすればそいつが必然的に三日月夜空ということになる。

教室がざわつく。

なぜかというと、つい先日まで長い黒髪の美少女だった三日月夜空の髪の毛が 短くなっていったからだ。

クラスのみんなからすれば、もちろん俺からしても今の夜空は『長い黒髪の美少女』という印象を抱いていた。

その特徴的な長髪をバツサリと、後ろ髪が首にちよっとかかる程度のセミショートにまで短くなっていた。

俺はその夜空の姿を見て、10年前のあの少年の姿がふっと頭の中に浮かんだ。

夜空がソラだと言うことは、あの祭りの日でハッキリとしている。だけど10年前の面影はまるで残ってはいなかった。

少年が実は少女だったのだから、髪を伸ばせば気づくのは無理に近い。俺があそこまでたどり着いたのは奇跡の中の奇跡、思い込みだったと言ってもいい。

だが今、そんな彼女は かつての親友は面影を残して俺の目の前に現れたのだ。

この時、俺は改めて感じ取ったんだ。感動の再会ってやつを。

本当はあの祭りの日が夢だったんじゃないかって思う自分がいたのかもしれない。

けど、かつての親友は。ソラは間違いなくそこに現れた。

俺はその姿に見入ってしまい、表情が固まり何も考えられなくなつた。

多分、俺があ祭りでソラと気づいていることを打ち明けた時のあいつと同じ感情を抱いているのかもしれない。

してやられた、俺は夜空にやり返されたんだ。

そして少年は……少年だった少女は俺の目の前に来てこう言った。

「久しぶり。タカ」

俺はその瞬間、ため込んでいた感情がはちきれそうになった。

流したくても我慢し続けてきた涙を、抑えきれなくなった。

その言葉を聞いたら最後、気がつけば俺の目からは大粒の涙が流れていた。

「あ……ああ……」

泣かないって決めたはずだった。

泣いてはいけないうって思っていたのに、だからため込んで流さないように……。

でも、夜空のこれにはしてやられた。そっか……こういう意味だったのか。

「だから……言っただろ。タカを泣かすって」

「……くそ……くつそ」

その時夜空は、勝ち誇った顔で俺に言った。

もう俺の涙は止まらない、抑えていた分すべて出し切るまで止ま

らないだろう。

担任の先生からも、他の生徒からも変な目で見られていただろう。けどもうこれは止まりそうにない。

ホームルームが終わるまで、終わった後も俺は声を押して殺し泣いた。ずっと手で目を押さえ泣き続けた。

そして泣きながら、小さく誰にも聞こえないように呟いた。

「ああ　久しぶり。ソラ」

僕たちは友達が少ない(前書き)

37話、そして第一部の最終話です。

「三日月夜空」視点。

僕たちは友達が少ない

「 久しぶり。タカ」

ようやく私は、堕ち続ける苦しみから解放された気がする。

失ったものを取り戻し、そして先へ進むという恐怖を少しだけ克服できた気がする。

過去を取り戻すことだけに執着を抱いていたが、親友はそんな私に先に進む勇気を与えてくれた。

取り戻すしたことでこれから先私が 私たちが何を成せるか。 堕ちただけ大きなものを得た私たちがどれだけの変化を起こせるか。 不安はあるが、とりあえず今は喜ぼう。 素直に今という状況を楽しもう。

- - - - -

「小鷹、ちよつと来い」

朝のホームルームが終わるや否や、私はうつむいている小鷹に声をかける。

どうやら泣くだけ泣いたようだ。私はとても満足だ。私的には小鷹にも泣いて欲しかったから。

泣いて、この再会の嬉しさをより一層に感じ取ってほしかったから。 一方的では寂しいからな。

小鷹はというと、泣いた顔を手でぬぐった後に少し頬笑みこう返した。

「ああ、行くか」



そして私と小鷹は教室の外へ出る。

クラスの連中の目が気になったが、あの時ほどの恐怖はなかった。むしろ見てくれという気分だった。これが私の親友なんだと、もう私たちは怖くないのだと。

遠回りをしたがこれでお前たちと肩を並べられると……そう思いながら私たちは歩いた。

そして誰もいない階段の付近で、あの時話せなかったことや聞けなかったことを小鷹と語ることにした。

「そういえば……あの時間くの忘れてたんだけど」

「なんだ？」

「私が女だって知った時……どう思った？」

「え？どどういう意味だよ？」

私のその質問に、小鷹は茶化すように笑って聞き返した。

私は思わず頬を赤らめる。この男はまったく……。

間が広がるたびに顔が赤くなっていく、自分らしくはないが私は駄々っ子のように聞いた。

「だーかーらー！私がソラなのでした！感想は!？」

「ははは……びっくりした。それが一番の感想かな」

小鷹は多少困りながら、私の機嫌をうかがいながら答えた。

そして間を置き、続けてこう言った。

「でも、とても嬉しいよ。お前にまた会えて……そして仲直りできたことが」

「ば……馬鹿お前」

私はまた顔を赤らめる。この男と話し続けているとそのうち爆発してしまうんじゃないだろうか。

そして今度は、小鷹の方から私に聞いてきた。

「俺も二つほど聞いていいか？あの日、なんでお前公園に来なかったんだ？てかお前の大事な話ってなんだったんだ？」

小鷹のその質問に、私は答えるのを少し戸惑った。

「あの日、私は自分が女だってことを明かそうとしてスカートを履いて行っただ。けどその……恥ずかしくて」

「恥ずかしくて、俺の前に姿を現わせなかったってこと？」

「ああ……そうだ」

あの時同じように、非常に言うのは恥ずかしかったが勇気を振り絞った。

そう、あの時私に勇気があればまた違う結果を引き起こしていたかもしれない。

私が小鷹を完全に責められなかった理由の一つでもある。私の戸惑いが彼に人を裏切らせてしまい私は大きな傷を負った。

もしあの日、私が女だと告げ彼が町を離れると知っていれば……もしかしたら。

「ふっ……なんだよその理由？あははははは！」

「な……なんだとはなんだ!？」

「でも……お前らしいや」

と、小鷹は私のこの告白に大笑いで返しやがった。

私がどれだけ言うのを躊躇いながらも勇気を振り絞ったか知らないで。近々武力で泣かせるぞこの野郎。

と思いつつも、間を置きたびに馬鹿らしくなってきた。こんな他愛もない話が出るのも再会して軽くなったからなのかな。

「それで、もう一つは？」

「もう一つは……その髪の毛、どうしたんだ？」

「勇気を振り絞って美容院に行ったのだ。10年ぶりにな」

「10年ぶり……それまで髪の手入れはどうしてたんだ？」

「自分でやっていた。美容院に行くのは怖かったからな」

と、自信満々に私は言う。自信満々に言うことではないことだが。

「お前と対話してもう何も怖くない、という精神の元美容院に行つたがやっぱり地獄だったよ」

お前を泣かせるため、私はただそれだけのために泣きそうになるほどの思いをしたのだ。

美容院の店員はなんでも人の私情に干渉しようとするのか、好きな音楽だの部活はやってるかだの拳句の果てにか……彼氏はいるか？だの……。

小鷹と再会した後だったからまだ正気は保っていたものの、今も小鷹とすれ違っていたらきつと美容院で気絶していたかもしれない。よく寝る人はいるんだけど気絶する人はいないだろうね。

やっぱり私は劇的な変化をしたわけではないらしい、私はあの時に戻っただけなのかもしれない。他人はまだ怖いし……。

けど小鷹は言った、きつと変われると。だからこそ私は変わろうとしている。信じてくれている者がいるのだから……。

「そっか、俺のためにわざわざ御苦労さま」

「べ……別に俺の為じゃないぞ！」

私の地獄体験を聞いて気楽にねぎらう小鷹に私はツンデレみたい  
に答える。

典型的なツンデレだった。乙だね、非常に……。  
でも10年間も一人の男のことを想いその男関係で他人を憎み羨  
むところを見ると、世間一般では私のような者をヤンデレと呼ぶの  
かもしれないな。

まあ、私はあそこまでの度胸はない。弱いからね……。

「おゝいその熱いお二人さん、校内での過剰な恋愛行為は禁止だ  
よ〜」

「だ……誰だ！？てか私と小鷹はそんなのではない！！」

と、私たちの思いでトークに何の前触れもなく武力介入してきた  
のはコーラ缶を片手に持ったケイト先生であった。

焦る私と少し顔を赤らめる小鷹を見て、観客のようにきゃははと  
笑っている。

「いやあ茶化して悪かったね、でも今の君たちは誰がどう見ても…

…」

「違うから！絶対に！！」

「まあそういうことにしておこう、にしても君たち……」

ケイト先生はそういうと、コーラ缶を一口飲んで……そして真顔  
で、

「……『強い眼』になったね。とても強く、希望に満ちた眼だ」

ケイト先生のその言葉を聞いて、私たちは意識する。

夏休み中、その前に私たちの目は怯えきっていた。先を見ることのない閉じこもった眼。

隣人部のみんなといっても、けしてみんなを信じようとしなかった。

一人の人間に執着し、周りを見ようとしなかった弱い眼。けど今は……改めて見れる。見ようとすることができる。

「ありがとうございます」

私と小鷹は口をそろえて言った。

この強さを得ることが出来た裏には、ケイト先生　彼女がいた。彼女は私に言った、気づかぬふりをするなど。この言葉の意味を最初は理解できなかった。

だが今だからこそわかる。私を見てくれている他人を、そして自分の弱さをしっかりと見ろという意味だったのだと。

彼女は私たちよりも年下だが、色々と苦勞をしていると聞く。なにせ彼女は……。

「おかげで私たちは一つ先に進むことが出来た。こんな私を見てくれていたことに改めて感謝をしたい」

「俺も、あんたに説教をされてなかったら今はないと思ってる。本当にありがとう」

「礼はいい、先へ進めたのは君たち二人がきちんと向き合い話が出来たからだ。私はただ力を貸しただけだ」

先生は満更でもないように言った。

「そうだね、君たちは私に己の弱さを打ち明けてくれた。今度は私が色々打ち明けようかね。君たちにだけだよ」

「……先生は確か」

私がそう聞くと、先生は真顔でそれを話した。

「私とマリアは孤児院出身、それは前にちよびつとだけ話をしたことがあるね」

「ああ」

「神に仕えるシスターである私が言うのはアレなんだけどね、私は神というものを信じていない。神は……世界は私たちから親というものを奪ったのだからね」

先生は重苦しくも話した。

先生は孤児院出身で、マリアへのシスコンぶりもそこから来ている。

自分が守らなければいけない、マリアは自分がいないといけないという使命のようなものを持っているのだろう。

マリアはまだ10歳で天才であるがまだ世間というものを良く見れていない。だがこの先生は……15歳という若さであらゆるものを見てきたはずだ。

マリアの分まで、目を背けたかったであろう全てを……。

「夜空、君はたくさんの人を憎んできたというが。私が抱き続けた憎しみに比べれば……甘いものだよ」

その言葉に、そして先生が一瞬見せた鋭い眼光に私は一步下がる。

「マリアはまだ幼い、いずれは知ることになるだろうが今はなるべくそういう考えから離れて充実した毎日を送ってほしいと思っている。今の私たちはようやく幸せというものを見つけたのだからね」

「妹か……小鷹、お前もその……妹に対してはそういう愛情を持っているのか？」

ケイト先生の妹への愛情を感じ取り、同じく妹を持つ小鷹にそう質問をする。

先生とマリアは孤児、小鷹は確か母親を亡くしていると聞いたことがある。

肉親を亡くす、それがどれだけ悲しく人の心の穴を作るものか。

肉親……家族がらみの問題か。私も……

「あたりまえだ。俺も先生ほどではないが小さいころからずっと小鷹の面倒を見てきた。父さんは良く家を空けていたからな」

「そうか、だが甘やかしすぎだ。あいつはマリアと違って……そろそろ気づける時が来る。私はそう思うのだが」

羽瀬川小鷹、あいつとは頻繁にはないが時々話をする。

小鷹の妹だからと特別視をしているわけではないが、あいつに対して私は似たようなものを感じとっていたりもする。

痛いことに走る。自分を特別だと思いつみ強いものだと思いつむ。それは人のロマンであり孤独者がたどり着く一つの墮落。

私らしくないかもしれないが、小鷹には私と同じ思いをしてほしくない。自分を忘れようと思った経験は……黒歴史だから。

「甘やかしすぎか、よく言われるよ。そうだな……じゃあもしこれから先小鷹が何かを悩んでいたらお前が助けてやってくれないか？」

「なぜ私に言う？」

「お前たち、仲良さそうだからな。小鷹に自分を重ねていたりもするんだろ？孤独な中学生生活、痛いことに走る弱さを……」

看破されていたか、私のことを良く見ている。

まああいつが困りごとをしたら常にお前の所へ飛んで行くから、私が関与する場面はないと思うが……。

まあ、覚えておこう。

「甘やかせすぎ……か。小鷹くんも私も甘ちゃんなのかね……」

「あんたは十分厳しいさ。俺なんかと違ってな」

「さらに甘さを慮出することになるが、これからマリアをよろしくできるかい？君たちと関わるようになってからあいつ、ちょっと笑うようになってね」

ケイト先生はそういつて私たちに頭を下げる。

そういえばマリア、普段はああも生意気だが色々あったらしいからな。

マリアも私たち隣人部の仲間、そして……。

「頭を下げないでくれケイト先生、もうすでに私は……私たちはマリアの仲間であり、友達だから」

「夜空……その言葉、信じていいんだね？」

「俺も夜空と同じことを言わせてもらう。そしてケイト先生……先生相手におこがましいかもしれないが、あんたも俺たちの友達だ」  
「ああそうだったな、心から信じられる最高の相談相手だ」

私と小鷹がそういうと、先生は思わず感激してしまった。

教え子の成長を見た先生とはよくそういう反応をする。相手が年下なのが惜しいところだな。

だが、私たちと年が近いからこそ私たちの弱さを間近で見ることが出来ていたかもしれない。

「あはは……ありがとね。最後に君たちに聞いていいかな？」

先生は一問おいて、私たちにこう質問をする。

それは、一歩進んだ私たちにとってとても大事なことだった。



「君たちはこれから……どうしていききたいんだい？」

その質問に対して、最初に答えたのは小鷹だった。

「俺は……まずは身近な奴と向き合っていきたいかな。今までは他人、自分からさえも目を反らしていたから」

「ああそうだったね、それを正当化しようとしたのが君の悪いところだった。「え？なんだって？」ってやつ、あれやめた方がいいよ」

「ゆっくり直していくよ」

「今度からその言葉を聞くたびにお前を睨みつけるからな小鷹」  
「ははは、素で怖いよ」

小鷹がこれからの目標を語った。正直私と丸かぶりだった。

良く似ているから、私達は似た者同士だからな。

そして次は私が答える番だ。

「私も小鷹とほぼ同じなんだが、それ以上に私は……自分を好きになりたいと思っている」

「私は好きになりたい、もっと色んな人を好きになりたい。今まで拒絶していた分もっと他人と向き合っていきたい」

「そして私は……あ、愛を知りたい。憎しみとかそういうものじゃない本当の愛を……私は愛という言葉が大嫌いだったから」

「難しいかもしれないが、それが今の私の目標だ。こうして少しずつ向き合い、もうあの時のようなことにならないよう、本当の友達を作りたい」

私は答えた。今まで否定してきたこと全てに向き合う覚悟を語った。

愛が愛を重すぎるって理解を拒み、それがあらゆる苦しみに変わり弱さとなる。

だから私は愛という言葉が大嫌いになった。ドラマとかでよく見るキスシーンやそういう表現をするラノベなどもまともに見れなくなっていた。

理科が持つてくる同人誌など論外だった。まああそこまで過激な奴をいきなり好きになりたいとも思わないが……。

だから私は願う、弱さを知る強さ……お互いがわかり合っている友達を作りたいと。

少し前の私なら、理想論だと笑っていただろうけど。今は……それを現実のものにしたいから。

「……君たちのこれからの目標、確かに聞かせてもらったよ」

私たちの想いを聞き、先生は答えそして目をつぶった。

そして手を合わせる。それはシスターがよくやる祈りのポーズだった。

「祈らせてくれ、君たちの中の神に……」  
「神……」

私はボツリと答える。

神、それは本当に存在するものなのか。

人が弱さを知った時、その弱さを打ち明けることのできなかったときに祈る。神とは人の弱さが生み出した存在なのか。

聖クロニカ学園はミッションスクールだ。キリスト教の教えを元に教育を学ぶ。

神との関係だの私たちが普段関わることのない者に深く関わるシスター達。いるはずのない神という存在について必死に学ぶ。

「神とは……なんなのだろうか」

「ん？」

続けて私がボツリつ呟く。

思わず呟いてしまったその言葉に対して、先生は祈りをやめて自分なりに答えて見せた。

「……そうだね、神は奇跡を起こすというけれども奇跡って結局人が起こすものだ。あえて言わせてもらうと、神は人の奇跡そのものなのかもね」

「人の奇跡……」

「人の可能性と書いてもいい。さて祈りは終わった。最後に先生から言葉を送らせてほしい」

そういつとケイト先生は、改めて私と小鷹を見やる。

私たちの目を凝視する。見透かすとかではなく……信じるような眼差しで。

「人は、他人に踏み込むことを好むが踏み込まれることは嫌う。人は心の中に言葉にならないものを隠して生きている。他人と向き合うということは必ずプラスになるとは限らない、時には討論になることもあるだろう。拒絶されることもあるだろう。それでも君たちは……それに立ち向かえるかい？」

先生は言った。友達を作るだけにしては少々重すぎる内容だとは

思うが一般的に何かが欠けている私たちにとってはそこまで言われないとわからないのかもしれない。

私たちは互いによく”残念”と言い合い馬鹿にしているが、今思えば残念とは……個性なのかもしれない。

この世の人間全員が残念とは程遠い完全と呼ばれる存在ならば、友達という概念も存在しなかったかもしれない。

人は残念だからこそ人なのだ。それを克服しようとする目標を持つて欲心できるし、人と比較するための対象にもできる。

だから人は、この時まであらゆる困難を乗り越え助け合い、現在を作ってきた。

私たちは人間だ。神などではなくましてや良くできた架空のキャラクターなどではない。

汚らしくも堕ち行く、残念な存在なのだ。残念だからこそ……人を理解できる。できると信じて行ける。

「ああ、頑張る」

大げさな質問に対してずいぶんと簡略化した答えだったが、それで十分だろう。

頑張る。それが私たちの今できる最大限の努力だ。

.....

「じゃあ夜空、部室に行くか」

「先に行ってくれ小鷹、少しやる必要がある」

私がそういうと、小鷹はわかったといって先に部室へ向かった。

誰もいない教室に、私一人になった。

そう……私は決別しなければならぬ。今まで自分を支えてくれ

た空想の産物に。

「……トモちゃん、私は全てを取り戻し先に進むことが出来た」

そこには誰もいない、いない相手に私は語りかける。

トモちゃん、エア友達のトモちゃん。

それはある事件によって生まれた私の空想の友達。私が今まで築きあげてきたものだ。

ある日トモちゃんは言った。今まで自分が作り出していた自分をぶっ壊してでも小鷹を手に入れろと……。

今がその時なのかもしれない。

「もう、お前には頼らない。頼らないで行けるようになったから、だから……今までありがとう」

そうやって私は、教室を離れた。

私には行くところがあるから、小鷹が……みんなが待ってる。

僕は……僕たちは友達が少ない。

けど、僕は知ってる。僕は人の弱さを知ってる。

例えたった一人でも友達が出来れば、互いの全てをさらけ出しわかり合えることを知ってる。

多ければ多いほどいいのだけれど、たった一人でも信じられる友達がいれば人は変わることが出来る。

100人分大切にできる友達を作ることが出来れば、輝かしい未来が僕たちを待ってる。

人を信じること、信じられること。愛すること、愛されること。

それらを同時に恐れること。あらゆる感情を抱きながら先へ進んで

いくこと。

これから次第だ。僕たちが変わっていけるかどうか……。

.....

「人の成長というのは、いつ見ても美しいものだね」

「あつたりまえじゃない、いつまでも過去を引きずってられたら見ているこっちも面白くないのよ」

「しかし驚いたよ、いきなり君が「あの二人は幼馴染かもしれない」なんて言い出すんだからね」

「……小鷹が前に話してくれたソラって少年のことを私なりに色々考えてみたのよ。空という感じが苗字名前のどれかに当てはまっいて小鷹を常に欲しそうな目で見てるといったらもう一人しか当てはまらなかったわよ」

「最初は出来すぎた推理だと馬鹿にしてたら、その数日後に夜空自身が小鷹さんと幼馴染だと告白してきたんだ。びっくりしたね……」

その事実と『君その人を見抜く洞察力』に「  
「……勘違いしないで、私完璧であつて完全じゃない。完全はそれ以上の向上がないけど完璧ならばまだ先に進むことが出来る」

「出来ない人間は評価されない。けど出来すぎる人間は他人から疎まれ続ける。結果その能力だけを人は欲する」

「だから難しいのよ、友達作り……」

「君は……何を欲するんだい？」

「……決まってるでしょ」

小鳩編プロローグくしくだいく（前書き）

プロローグです。

「羽瀬川小鳩」視点。

## 小鳩編プロローグ(しくだい)

夏休み、長きに渡るこの時もうとう終わってしまった。

クツクツク……思えば様々なことがあった。あれは8月の初め、魔界でやつらは私を生け捕りにしようとしてきた。

数日に渡るやつらとの因縁、私をしつこく追う吸血鬼狩りとの戦いも今ではいい思い出だ。クツクツク……。

というか、あの時もあの時もあの金髪の胸がでかい化け物。何度も何度もいやだと言っても何度も何度も……。

私は地獄の最果てを見たかのような叫びをあげながらも猛追をかわし、ようやくここまでやってきた。

このことも今ではいい思い出……なわけないやろアホ。

こうして夏休みが終わりました学校が始まる。悠久の旅路もここで終焉か……。

と、こんなことを言っている余裕は正直言つと私にはないわけだなあ……。

夏休みが終わりました。そしたら学校が始まります。まあ普通のことっちゃあ普通のことじゃ。

でも、学校はこんな休みを遊ぶために用意しているわけがなく。学校は私達学生にとある課題を与えてくる。

それが……夏休みの宿題である。

もちろん私にも出された。宿題は暇があればいい話じゃ。要はやってしまったもの勝ちばい。

特に私の場合友達が少ない。一緒に遊ぶ友達がいないのだから、宿題ははかどるのが普通ばい。

宿題をやる時間はたくさんあったはずじゃ。ないとおかしい話である。けど私の宿題をいくから見直しても。



「……白紙じゃ」

そう、お恥ずかしい話私は宿題に手をつけていなかった。

私が所属してる部活、頭のいい連中が集まっているやる？超天才小学生までいる始末やる？

ここまでそろったら私も頭がいいと思うでしょ？実は私は非常に頭が悪いのです。

天は二物を与えず。自覚は無いが私は非常に容姿に恵まれているらしい（情報：金髪の化け物）。

容姿が恵まれているってことはその中身は空っぽということ。さてよ？じゃああんちゃんはどうなるんじゃ？

あんちゃんはあんなにもかっこいいのに頭もいい、部長のお姉さんもあんなに美人なのに頭がいい。金髪の化け物はどうでもいいが

……。話を戻すが、要は宿題をやりたくても頭が悪いので問題を解くことができない。できないのです。

しかしできないで通じてしまえばみんな宿題なんてやらない。そう、このままではいけない。

こうなった私が頼る先はというと……。

「ということなんじゃ、あんちゃん……」

「……まあなんとなく察してたよ、ちよつと前に「宿題とか大丈夫か？」ってお前に聞いた時、お前の反応曖昧だったからな」

私のあんちゃん、羽瀬川小鷹は私の情けない白状を聞いて頭を抱えていた。

いつも優しく時には厳しいあんちゃんであるが、今日のおんちゃんは若干厳しめな雰囲気醸し出していた。

思えばこうやって勉強関連の頼みごとをするのはこれで何度目だ

ろうか……。

いつものように手伝ってくれるだろう。そう思う私自身もたまに情けなく感じるのだがもうあんちゃんに期待を抱くしかない。

ところが、今回のあんちゃんは今までとは打って変わってこんなことを言いだした。

「……そうだな、たまには俺以外の人に頼んでみれば？」

その言葉を聞いて、私は一瞬言葉を失った。

あんちゃん以外の人に物を頼む？それって宿題やるより難しいんじゃないかな？

最初は冗談かと思ったが、あんちゃんの目は思いのほか本気だった。

そう、今回頼りのあんちゃんは……いっさい手を貸してくれないことが確定したのであった。

「そ……そんな、あんちゃん」

私は弱り切ったハムスターのような目であんちゃんを見たが、あんちゃんは考えを変えるつもりはないらしい。

いい加減自分でやれということなのだろうか、たまに見せる厳しさなのだろうか……。

「そんな目するな小鳩、確かに今までお前の宿題は見てやってきたけども……それは見てやれるのが”俺しかいなかった”からだろ？」  
「ふえ？」

「お前……なんのために部活に入ってるんだ？隣人部には俺より頭のいい奴なんていくらでもいるだろ、頼める相手だって多いしな」

と、あんちゃんは言った。

確かに今私は隣人部に所属している。部員との関係も特にこじれているわけではない。

一人……仲の悪い神の使いがいるけども……。まああいつと金髪の化け物は放っておいて、頼める相手はいくらだっている。

けども、私は特にあれらと親しいわけではない。私はあんちゃん以外の人と話すのを非常に苦手としている。

だから私は……”クラスメートの人達の好意”も素直に受け入れることが出来ない。

『あ、小鳩ちゃんだあ！』

『小鳩姫……！』

『小鳩ちゃん！一緒にご飯食べようよ！！』

……………。

正直、頼む相手は部活の人たちじゃなくてもいい。

味方は……多いはずじゃ。多い……はずなんじゃ。

けど、私がそれらを味方と認識しないだけ。

だから私は……友達が少ない。

「たまには、俺以外の人に物を頼んでみるのもいいんじゃないか？」

「……あんちゃん」

「なんだ？」

「……なんか、変わったね」

私は思うがままのことを口にした。

あの日以来、みんなでお祭りに行ったあの日以来……あんちゃん

が遠く感じるようになった。

あの日、部長のお姉さんとどこかへ行ったのを私は覚えている。いや、あれはあんちゃんとお姉さん以外で私しか知らないことだ。

あんちゃんとお姉さん、この二人の間の中に何かが生まれたような気がした。

いや、まるで最初から何かがあったかのようにも私は思える。そしてどっか行って戻ってきて、しばらくして気がついたら。

あんちゃんは……何が変わっていた。

「……ああ、変わったよ。確かに変わったのかもかもしれない」

「……うちのこと、どうでもよくなったん？」

「そんなわけあるか、どれだけ変わっても俺はお前のお兄ちゃんだよ」

そう言っであんちゃんは、私の頭をなでて寝室へと向かった。

私も寝なければ、どうせ徹夜で宿題をやってもできないのは目に見えている。

選択肢は一つ、誰かに宿題を手伝ってもらえるように頼むしかない。

あんちゃん以外の誰かに……。

希望は隣人部の中に？（前書き）

第38話です。

「羽瀬川小鳩」視点。

希望は隣人部の中に？

学校が始まって1日目。宿題の期限は明後日。

朝のホームルームが終わった後体育館で終業式、校長先生の話はファウスト（鉄のネクロマンサーのキャラクター）の最大魔法並みのダメージを私に与える。

長い長いお話が終わり教室へ、そして担任の先生のお話を聞いて学校が終わる。

午前授業、それは普段よりも学校が早く終わる日である。

普段よりも早く終わるといことは、それから遊ぶ時間がたくさんあるということである。

普通なら、友達なんていうのを持っている人なら「これから街に行って遊ばない？」とか「家でゲームやろうぜゲーム！」とか楽しいんだらうなあ。

けれど何度も言う通り私は友達が少ない……ってそもそも私に友達いたっけ？

こんな友達の少ない私が午前授業が終わった後向かうところと言えば、我が家か今では隣人部の部室くらいだ。優先度的には我が家95%部室5%（部室には金髪の化け物とむかつく神の使いがいるから）。

まあ比率うんぬんの前に、私はあんちゃんについていただけなんじゃが……。そもそも比率なんていらなかったんや。

そんな今日は部室へと向かう、理由は決まっている。

あんちゃんがおる以前に、今私はこの白紙だらけの宿題をなんとかしなければいかん。

本来ならあんちゃんと我が家に帰りあんちゃんに教えてもらいながらやるところだが、この学校の宿題は多すぎてあんちゃん一人だ

けじゃ終わりそうにない。

ただでさえ頼りのあんちゃんだけじゃ終わらないというのに、そんなあんちゃんは今回宿題を手伝ってはくれないときた。絶望じゃ、もう絶望しかないんじゃない……。

なので私は、あんちゃん以外の誰かに宿題を教えてほしいと頼まなければならぬ。というか選択肢はそれしかない。

幸いあんちゃんの優しさが残っていたのか、事前にあんちゃんから「お前の宿題の件はもうみんなに話してあるから頼めば教えてくれるはずだ。『頼めば』な」と言われている。頼むことを強調されたものの下準備は出来ているらしい。

部室に行くと部室には現在、博士（志熊理科）と怖い人（楠幸村）と金髪の化け物（柏崎せもぼぬめ）と神の使い（高山マリア）がいた。あんちゃんとお姉さんはまだ来ていないらしい。

部室のみんなは私が来た後一斉に私をチラ見し、そしてすぐに自分の作業に戻った。私を試しているということか……クツクツク、この偉大なる夜の王にはそれくらい造作もない……ことはないのだからなかつたんや。

ただ一人、金髪の化け物だけは手薬根（手薬煉）を引いて待っていた。腕を横に大きく広げ私を抱き殺すかのような類笑みで待ち構えているではないか……怖いわ、素で怖いわ。

とりあえずあの金髪の化け物はなるべく見ないようにして、なるべく他の人に頼もう。あの金髪の化け物に頼んだら最後……私は地獄の業火で焼かれて食われてしまうばい。

.....

・博士（志熊理科）に頼む。

「え……え〜とその、しゅくだいを……」

「ふふふ、やはり最初は私のところに来ましたね。勉強を教わるにあたり最初は上から数えて一番頭のいい人から当たっていく……頭の良い考え方ですよ小鳩さん」

「……そりゃどうも」

なんか初っ端から馬鹿にされた気がしたんじゃが……まあ最初は博士が無難か。

博士はまっどさいえんていすとで、とつても頭がよくて色々商品を開発しては売ったりしてるらしいし。超天才とか言われてるらしいし……。

数学や理科（教科の方ね）の宿題はこの人に教えてもらいながらやれば大丈夫なはず、数学と理科が終わるだけでも後先気が楽になるはずじゃ。

「さてさて、見たところ確かに中学二年生レベルとしては難しい方ですね。しかし私からすればこんなものは暇つぶしにもなりません」

博士は自信たっぷりに言う。その暇つぶしにもならないものを私は頭を振り絞りながら考えて結局できなかつただけだね。

最初は数学の問題集、開くと見るだけでもおぞましいあの地獄の数値が並びに並んでいる。多項式？関数？なんぞそれ？

とりあえず見てるだけでは終わらないので手をつけることに、しかし始まるや否や私は博士に質問攻めをしてしまう。

何がわからないのか？という質問に「全部」と答えてしまう私。

どこをどうわからないのかさえ分からない始末。

「小鳩さんの質問攻め、中々レベル高いですね〜」

博士はとうとうわけのわからないことまで言う始末。言うておく



けど私、あんたがたまに暴走して言ってる言葉の意味を微塵も理解できてへんからね。

時間をかけながらも教えてもらいながら徐々に解いていく、後半なんか「やってもらってる」に変わりつつあるのは気のせい？ねえ？「教えるより自分がやった方が早い」とか思われてへん？そんなこんなで宿題をやっていると……。

「あはは吸血鬼、お前こんな問題もわからないのか？」

と、神の使い（高山マリア）が数学の解けない私に指をさして笑っていた。

いいか神の使い、この世には聖者と呼ばれる頭のいい人間と愚者と呼ばれる頭の悪い人間に別れる。

私はいにく愚者の方であるが、聖者はその頭の良さが後に身を滅ぼすという。つまりお前は死ぬということだいい加減死ねこのクソガキ。

ええもん！どうせうち頭悪いけん！あんだみたいに何でもかんでもスラスラとけへんもんねー！！

「なら私がやってやろうか？その宿題ってやつ私がやってやろうか？あははー！！」

神の使いが宿題を頑張っている私にちよっかいをかけてくる。くうーこのクソガキ！！

私は無視を決め込んだがこのクソガキは黙りそうにない、構ってくれないのが気にいらぬのか知らないが非常にうっとおしかった。

「うーんしかしあれですね、こういう風に小さい子×小さい子というのもありなんですかねえ？」

「……はい？」

「いやいや小鳩さんとマリア先生の組み合わせですよ」  
「組み合わせってなんじゃ!？」

なんかこの宿題が暇になってきたのか知らないが、博士は突拍子もないことを言いだし始めた。

組み合わせがなんだの、小さい子同士でも過激なのをすれば絵になるかだの、どっちが攻めでどっちが受けなのかだの……攻め?受け?攻撃側と防御側ってこと?

「この場合、小鳩さんがマリア先生に穴を攻められるというのはどうでしょうか」

「あなたはさつきから何を言ってるんじゃ!?!どうでしょうかって一体全体なにがどうをどうでしょうか!?!」

「試しにやってみてください?いやこの場合私が武力でやらせることもできるかもしれませんがねえ」

なんか宿題をやる話から、もうなんか危ないことに変わりつつあった。

え?これってその……逃げた方がいいってことばい!?!

なるべく見ないようにしていた金髪の化け物(柏崎せもぼぬめ)の方へ目を向けると、「小鳩ちゃんが……襲われるってはおはあ……え?見えるの?こんなレア映像私見れちゃうの?」とか言ってる。あ、これ逃げないとあかんパターンや。

「なんだ?要はわたしが吸血鬼と」せつくす」すればいいのか?」

「お前は何を言ってるんじゃバカたれ!！」

「そうです!マリア先生は物分かりが早い!！」

「「そうです」じゃないやろ——————!！」

こうして私は狂化(バーサーカー化)した博士と何も理解してい

ないがとりあえず危険な神の使いから全力で逃げ出した。

あ！そっち言ったら金髪の化け物がある！私は自分を捨てる勢いのアクロバティックな動きをしながら金髪の化け物の陣地を踏まず回避する。

そして逃げた先はこの面子で一番マシであろう人物の所。時間もないしこの人に宿題を頼むことに……。

・怖い人（楠幸村）に頼む。

「わたくしですと社会ですね、にほんしの部分だけですがおちからになりましょう。これも兄貴のため兄貴の妹君のためです」

「よ……よろしくおねがします」

次は怖い人、顔は男とは思えないほど優しそうな顔をしているが中身が真つ黒な人。

とても怖い人なんてあだ名は付きそうにないくらい普段はのほほんと突っ立っているが、この人はテンションが上がると大変なことになるのを私は知っていた。

テンションが上がってるかどうかも判別付きづらいポーカーフェイス、けれどそれが行動に出た時どうなるか……。

ある時はまだ10歳の幼女相手にプロテインを無理やり飲ませ本気で泣かせる。ある時はお姉さん（三日月夜空）とゲームでお姉さんを本気で泣かせる（という事件がありました）。

合宿の時は落とし穴を掘ってお姉さんと金髪の化け物と博士と神の使いを罠にかけてあんちゃん二人でどこかへ行ったり（という事件がry）。その他一緒に肝試しに行った10歳の幼女を本気で泣かせたり……。

「そんなにみがまえなくてもだいじょうぶですよ」

身構えるなどは言うが、怖いものは怖い。

私はあんちゃんのみだからという理由なのか、私に対してのドS行為は未だに見られない。

しかし油断は禁物、テンションが上がったら何をしてくるかわからない。怖い……武士の化け物じゃ……。

「このあなうめもんだいをやればいいのですね」

「お……おねがします」

「あ、穴埋め……ですかあ？」

「いいからあんたは黙っとれ!!」

途中狂化した博士が口を挟みに来たがうつとおしかつたので向こうへ押しやった。

徐々に解かれてゆく日本史の問題、すごい……まるで最初からそこに答えがあつたかのように……。

あれかな、敵の時は恐ろしいけど味方にしたら頼りになる感じ？

「そうそうこのじだいはこんなことがあつたり……なんか楽しくなってきました」

「ひい!？」

「どうしました妹君？」

私は思わず声をあげて驚いてしまった。だって怖い人が楽しくなってきたと言つただから。

頼むから楽しくならんでくれ、しかも楽しくなってきたって言うても表情変わってへんやないかアホ!!

「しかしあれですね、妹君のそのひとみのいろはひじょうにおきれいですね。かたほうはじんこうてきなやつなのであれですが」

「ふえ？ま……まあ遺伝やし」

「すいこまれるようなあおいいろ、研ぎ澄まされた刃のようですね」

「ちょ……ちょっとかつこええなそれ……研ぎ澄まされた刃、かつこええかも」

「えぐりとりたいですね」

「んぎゃあああああああああああああああああああああああ  
あ！！」

私はすぐさま宿題を持って全力で怖い人の元から逃げ出した。  
いきなりなんちゆうこと言い出すんじゃアホー！そののっぺ  
りとした雰囲気と顔でそんなえげつないこと言うなやアホー！！  
この部屋にいたら絶対に地獄に突き落とされる。といった勢いで  
私は部屋を出てとにかく走った。

ドン！

「あいた！」

前も見ずに走っていたのか誰かにぶつかってしまった。  
私はすぐさま体制を立て直し、ぶつかった相手を見る。

ああ、怒られるんやろうな。怖い……。

「廊下を走るなこの……って小鳩？」

「小鳩、いったいどうしたんだ？こんなところ走って」

そこにいたのはお姉さんとあんちゃんだった。お姉さん……は最初髪を短くしていたから判別するまで時間がかかった。

どうやら私用を終え、これから部屋に向かう最中だったらしい。

「あ……あああああんちゃあああああんちゃあああああん！！」

私はいつものようにあんちゃんに泣きつく。

数分後私はなんとか落ち着きを取り戻し、事情を二人に説明した。

.....

「お前ら……もうちよつと普通に宿題教えてやるとかできないのか？まあ頼んだのはこつち側だけだよお」

「す……すいません先輩」

「ごめんなさいなのだお兄ちゃん」

「ごめん小鷹……って私は何もしてないわよ！？てか小鳩ちゃん私のところだけ来なかったし！！」

「面目ありません兄貴」

あんちゃんが抗議すると、他のみんなは謝っていた。

しかし怖くて逃げだしたのは私の方だし、よく考えるとこれっておかしい気がするばい。

結局、またあんちゃんに頼っちよつた。

「しかし少々難しかったか、てかそもそも隣人部のこいつらに物を頼むように言った俺も悪かったよ小鳩。頼めるのがこいつらしかないってことも十分知ってたのに……」

「ごめんあんちゃん……」

「お前は頑張ったよ、しゃあないここは兄貴である俺が一肌脱いでやるか」

「先輩が一肌脱ぐ！？」

「「あんだ（お前）はだまっとれ（てる）！！」「」

途中までも勘違いして口を挟む博士。私とあんちゃんは口を揃えて突っ込む。これが羽瀬川兄妹のコンビネーション技の一つ、<sup>ダブル</sup>魔突である。うん、大したかつこよくないな。

このまま黙ってれば、またあんちゃんに頼って終わってしまう。頼る相手はもういない……いや、まだ一人だけいる。

この中で私があんちゃん以外で比較的一番間近で話せる人、私と趣味思考が似通っている人。

もう……この人に頼むしかない。

「じゃあ帰って宿題やるか、こぼ……」

「まだ一人おる!!」

「え？」

そして私は、その人の前に立ち……大きな声で頼みごとをする。

「お……お姉さん！私の宿題を手伝って!!」

お姉さん、この部活の部長である三日月夜空がいる。

それほど親密というわけではないが、金髪の化け物に比べて100倍はマシな人物。

あれの100倍は接することができるなら、きつと大丈夫なはずでも、きつと「嫌だ」って返してくるんだろうな。「断る」とか。

お姉さんは短くなった髪の毛の先っぽを指で巻き取りながら数秒だんまり、そして……。

「……私でよければ力になろう」

「……え!？」

それは、とても意外な反応だった。



最後の一手（そしてお姉さんは死地へ……）（前書き）

第39話です。

「羽瀬川小鳩」視点。

## 最後の一手（そしてお姉さんは死地へ……）

学校が始まって2日目。宿題の期限は明日いっぱい。

宿題の調子はというと3割終わってたくらいか。だが全体的に手がついている部分がバラバラでどれも中途半端な感じになっている。

3割終わったとはいえ一教科も方付いていない、正直この2日目でラッシュをかけなければ確実に間に合わないだろう。

なので家に帰った後、日記と読書感想文は死ぬ気で終わらせた。朝の5時までかかってしまい朝の日の光を浴びた時は本物の吸血鬼のように溶けてしまいそうだった。

これで残りは手の付いていない国語と理科と古文と英語、半分終わっている数学と社会だけ……”だけ”は違うな、まだこんなにもこのこつちよる。死ぬ。

本当に溶けて消滅してしまいそうな私であるが、2日目は心強い？味方がいる。

「にしてもこの量……正直今からでも部室のメンバー全員にやらせた方が手っ取り早いんじゃないか？お前のためにならないとか言ってる暇もないくらいこの量だぞこれ、毎日30分は机に向かわないと終わらないくらいあるなこの宿題」

その心強い味方、お姉さん（三日月夜空）でさえ宿題の量の多さに頭を抱えていた。

毎日30分コツコツやらないといけない宿題に対し1分も手をつけていなかったのだ。楽しっていた分の代償は多い。

けどどやらないと怒られるし、頼れるのは部活関連の人たちだけだし……。

「な……なんとかしたいです」

「"なんとかしたい"ではなんともならないぞ、"なんとかしなければいけない"と考える」  
「す……すみません」

お姉さんの言葉に対して謝ることしかできない私、身近に接することが出来る方だとはいえお姉さんが怖いのは変わっていない。そんな私を見兼ね、お姉さんはため息を一つつく。

「別にお前を責めているわけじゃない、だからその……謝るな」

「ご……ごめんなさい」

「おい、また謝ってるぞ。まあいい、しかし学校の宿題なんだからクラスの人に写させてもらえれば話は早いんだがな……って」

お姉さんはそう言う途中で口を止めた。

きっと気がついたのだろう、その発言が地雷を踏んだことを。

「……そうだった。私たちはその写させてもらえる友達すらいなかったんだな」

「それで解決しなければならぬのも悲しくなってくるばい……」

「今の発言は無駄の極致だったな。発言したことすら罪悪感を覚える」

「そこまでかい……」

そう、お姉さんの言うとおりそんな友達がいるなら苦労はしないのである。

それなら夏休みが終わる10日前くらいから手は打っていただろうし、というかこの部活の部員たちに頼むのも早めにできることだったのだけれど……。

私には、あんちゃん以外の人に相談するという勇気を持ち合わせていなかった。今でこそ追い詰められているから相談せざる終えな

い状況だが、それでも他人が怖いのは変わりない。

これは変化ではない、ただ私が追い詰められているというだけ。追い詰められた人間が行動を強制されてるだけじゃ……。

「考えるだけでは話は進まん、とりあえず宿題に手をつけながらどうやってこの量の宿題を終わらせるかを考えるぞ」

「……頼りにしちよるばい」

「たまには先輩の威厳も見せなければな……それに、借りを返すなら今しかない」

お姉さんが最後に何かを言っていた気がするが、よく聞きとることができなかつた。

とりあえずお姉さんと一緒に宿題を始めることに。

ここまで来たらお姉さんに教えてもらいながらなんて余裕のあることはできないのだろう、お姉さんが私の宿題をどんどん解いていくという完全に人任せな感じになってきている。

本当にこれでいいのだろうか、なんて思いながらも私にはこれが選択肢はない。

と、問題を解いていき10分くらいたった時のことだ。突如お姉さんは言った。

「……効率が悪い上にお前のためになってない。やはりこれは意味のないことだ」

意味のないこと……とうとうそれを言われてしまった。

それは私自身に深く突き刺さる。頼むだけしかできない弱さと、頼んだ相手の嫌がる顔を見た時に感じる罪悪感。

やっってもらっているという自覚はあれど感謝を表に出すことが出来ず、相手の優しさを直接受け取ることが出来ない。

頼みを聞いてくれることは優しさのはずだ。ボランティアのはず

だ。だけど……。

「……やっぱり一人でなんとかするばい」

「一人でなんとかできると思っているのか？」

「……でも、やっぱり迷惑かけちよるし」

「迷惑がかかっていると言った覚えはないか？ただこのままでは意味がないと言っただけだ」

お姉さんは強い口調で言い、強い眼差しで私を睨む。

私は思わず怯える。けれど逃げ出したいと思っただけではない。

なぜなら、お姉さんのその威圧は決して無駄なものではないからだ。

あの金髪の化け物とは違い、私が嫌がるようなことをしているわけではない。

問題は、お姉さんのその威圧を私が嫌がるか嫌がらないかという点である。

嫌がれば……いつもと同じになってしまっくんかな。同じで……あんちゃんの後ろに隠れるだけ。

「別に今すぐお前の頭を鍛えなおすというわけではない、ただ……」

人間的に少しでも変わることができればなと思っている」

「人間的に……？」

「……お前は、まだ戻れる。私ほど遠回りをせずに済むはずだと私は思ってる」

お姉さんはそういつて私の元へ少しずつ近づいてくる。

そして私の肩をポンと叩き、そして強い口調で言った。

「……お前のクラスメートに頼むしかない。宿題を手伝ってもらえるよう、なんなら写させてもらえるようにな」

「え？そ……それは」

「無謀なことなのはわかっている。お前はこの学校に転校してまだ間もない。きつとその痛い言動と変な格好とかっこつけたカラコンとついでに馬鹿で間抜けでガキな部分のせいでクラスに馴染めていないのだろうが……」

「なんか後半からすごい悪口になってへんか！？つか普通に学校通っている時は制服や！ゴスロリ衣装は部室と家の時だけじゃ！！」

今の発言は正直傷がついた。この不老不死のレイシス・ヴィ・フエリシテイ・煌に癒えぬ傷を負わせるとはやはりこの人は魔王じゃ。まあレイシスうんぬんは置いておき、確かにクラスに馴染めないのは凶星や。転校してきてからまともな会話をしたことがない。

というかこつち来てからあんちゃん以外で初めてまともに会話したのはお姉さんじゃなからうか、なんで私この人とはまともな会話ができたのだろうか……ああ同類だからや。

「あなたも……似たような経験してるんじゃないの？」

「ああん！？」

うん、皮肉ったら全力で睨まれた。ちびるかと思った……。

「……まあそんな怖がるな。その通りだ私にも覚えがある。私は難しい本を読んでいるからその手の作品に疎いように見られがちだが、あれは単に他人に「何の本を読んでのん？」って聞かれたときに相手を遠ざけやすくするための作戦だよ」

「あなたは単に馴染めないとかってレベルじゃなくて、馴染めない以前に馴染む気ゼロやな……」

「色々あったからな、本来は純粹に楽しめる娯楽作品が好きなのだ。週刊少年ジャブも未だに卒業できていない」

「そ……そうなん？」

「……正直お前が調子に乗るだろうからあまり口には出さなかったが、鉄のネクロマンサーも結構好きだぞ」  
「ふえ!?!」

お姉さんのその言葉に、私はお手本のような反応を返してしまう。  
鉄のネクロマンサー（通称：くろねく）　それはこの私を闇の世界の虜にしたとても恐ろしい作品。

我々が見るアニメの王道をきちんと詰め込んでいる上、霊や死体を操るという設定が「生と死」という重いテーマに繋がり、「友情と裏切り」や「種族間での共存」等の重いテーマは大人のアニメファンをも。

第1シーズンが好評を博したためすぐさま第2シーズンの制作が決定し、これまた好評を博したため現在は第3シーズンが放送されている。

私の場合ハマり始めたのは第2シーズンからで、見た瞬間に気に入るすぐさまレンタル屋で第1シーズンを借りて3日かけて全話視聴。現在の私はかなりのくろねくマニアなのであった。

クッククック……あれは数万年の時をかけた光と闇の戦争　あ、ちょっとレイシスに戻りかけたばい。これも闇の力か……

「……ちなみに好きなキャラは？」

「ゴーシュ・エクスペリア・アポロゲイザー・空　くろねく第1シーズン第13話で登場した孤独のピエロ。大切な人に裏切られてしまった影響で闇の力に目覚めてしまった部分に共感してしまっちなあ」

「じ……十悪星編!?!」

「ゴーシュは終盤まで他人を信用せずに戦い続けたが、最後の最後でレイスの「何も信じられぬなら我を信じよ! 貴様のそれは墮落ではない、その強さを我は理解してやる!」という一言に心が折れ、最後はレイスを友と呼びセイクリッド・ナディア・コズミック・輝

の攻撃からレイスを庇って死んだのだ。あのシーンはよく覚えて  
いる」

十悪星編 それは第1シーズンで最も人気のストーリーである。  
くるねくの序盤の長編であり、今でも人気の名悪役や語り継がれ  
る名言はほとんどここから出ている。

くるねくを知っている人ならばほぼ必ず名シーン上位に選ぶ本当  
に面白い場面なのだ。クッククク……。

「クッククク、あれは我もテレビに噛みつきながら何度も何度も見  
た場面、私の心を一瞬で闇に染めた」

「くるねく話で盛り上がるうとしていているところ悪いが、先に宿題を  
なんとかしような」

「うぐ……ひ、人とくるねくについて語り合うのはその……は、初  
めてやからちよっぴり……」

私は思わず本音をこぼす。

そう、私はそうとうのマニアだが他人とこの話をしたことはなか  
った。

私がおう少し人付き合いがうまくいったら、くるねくを知ってる人  
たちといっぱい話ができるんだろうけども……。

そんな私の様子を見て、お姉さんはため息を一つ付き……。

「ふう……宿題がかたついたら今度お前とゆっくり話をしてやろう」

「ほ……本当？」

「約束だ。だからその……がんばろうじゃないか」

「……うん！」

私は勢いよく返事をする。

お姉さんというと、私の反応を見てちよっぴり頬を赤らめ髪



毛をいじっていた。

恥ずかしいのかな……。私もなんだか少し恥ずかしくなってきた。

「それで……写させてもらうと言うけれどどうすればいいんじゃない？」

「そんなもの頼むしかないだろう。お前がクラスメートの一人一人に宿題を写させてくださいってお願いすればいい。宿題は明日いっぱいだが全教科の宿題を見せてもらえれば間に合っはずだ」

お姉さんは当たり前のように言った。

確かに写させてもらいたければ頼めばいい、一言「宿題まだできてないんだけど写させてもらえないかな？」とか言えばいい。

簡単なことだ。断られれば他の人に頼めばいい話だし。けど……それは普通の人だからこそできることだ。

「……それはできひん」

私は思わずボソツとこぼした。

そう、私にはそれができない。何せクラスの人とはそこまでおしやべりをしたことがないのだから。

私から話しかけたことは一度もない、転校したばかりでクラスに馴染めていない、尚且つあんちゃん以外の人となんて今まで関わろうとしなかった私にはその案は酷なものだった。

「お前の気持ちはわかる。お前を気味悪がってる連中に対して頭を下げるだけでも苦汁をなめる思いをするというのに宿題を見せてもらえる可能性すら皆無だ。それに宿題を見せてくれたとしてもその思いには裏があり得るだろう。わかるよお前の気持ちは……」

お姉さんは恐らく自分の体験談を乗せて私にこう言ったんだと思う。

でもお姉さん、あなたは一つだけ間違っている。  
「けして彼らは私を”気味悪がつてなんていない”し、宿題を見せ  
てもらえる可能性が皆無”ではない”。  
むしろ、私のクラスの人たちは私を……。」

「だが他に選択肢がないのも事実だ。非リア充のお前があのクソリ  
ア充共に物を頼むしかもう手はないのだ。それにひよっとしたら……  
…お前は非リア充を卒業できるかもしれないしな」

「……お姉さん私は」

「みなまで言うな、先刻承知だ。私もお前の力になった以上やれる  
ことはしてやろう、今から中等部に行ってお前のクラスメートがど  
んな感じなのか視察に行つてくる」

「え？ふえ！？」

お姉さんは突如突拍子もないことを言いだした。これには私も思  
わず驚いてしまった。

中等部に視察に行くつて、そこまでせんでも……てか迷惑になる  
しというか私が少し迷惑かな。

しかしあの人嫌いで無愛想な魔王のお姉さんが、こんな私のため  
にリア充の戦場に行くというのだから断りづらい。

ましてや中学生なんて一番輝かしい時期のはずや、お姉さんにと  
つてはかなりのトラウマと化す時期でもあつたはずなのに。

「だ……大丈夫なん！？」

「案ずるな、私もここ最近でそれなりに成長したはずだ。なぐにち  
よっぴり中等部の校舎内で口から汚物を撒き散らすことになるかも  
しれないが気にすることはない」

「気にするわ！全然大丈夫じゃないやないか！！もう踏み入れた瞬  
間HP0の勢いやないか！！」

「だから心配するな、HPが1残つてれば行動可能だ」

「それ行動可能に入らへん！動いた瞬間アウトや！！非常にやばい状態だから！！」

自信満々に話すお姉さん、あれ、顔は真つ青だよお姉さん。

本当に大丈夫かこの人……と私は本気で心配するのだが、一度言いだしたことは地獄を味わっても成し遂げるがモットーのお姉さんはまるで引くつもりがない。

「さてと……行ってくるか、最悪怒りのあまりリア充の中学生相手に武力を行使してしまうかもしれないなあ」

「頼むからやめてくれ！！」

「ふっ……骨は拾ってくれよ」

「だ・か・ら！！」

と、死亡フラグを撒き散らしながらお姉さんは行ってしまった。言ってることと反対に重い足取りだったのは一体なんだっただろうか。

もはや今の私にお姉さんを止める術は持ち合わせていない、お姉さん……骨は拾っちゃるからな。

だが、そんな呑気なこと言うより一つ、私にはとある不安が生まれていた。

今のお姉さんがもし、クラスでの私の立場を知ってしまったらどうなってしまうのだろうか……。

もしお姉さんに嫌われてしまったら、私は……。

.....

その夜……。

あんちゃんはキッチンで今日の晩御飯を作っている。

私は私で宿題に手をつけているが、けして大きくは進まず成果は微々たるもの。

明日には宿題を出さなければいけないというのに、なにやっちょるのか私は……。

だけど怒られるのは嫌だし、手伝ってくれた人たちにも申し訳がないから宿題は何とかしたい。

頑張るしかない！と私が気合を入れた時だった。

(メール着信音)

私の携帯からメール着信音である「ゆけゆけゲルニカちゃん！」が流れる。

携帯を開き確認をすると、メールを送ってきたのはお姉さんだった。

内容は、「今からお前の家の近くの　公園に來い。話がある」というものだった。

話　時計を見ると午後7時を過ぎていた。

本来ならこんな時間に外を歩くのはよくない、けど私は今……お姉さんのところに行かなければいけないと思ったのだ。

行かなければ絶対に後悔すると思った。きっと大切な話なんだって……。

「あんちゃんごめん！ちょっと行ってくる！」

「おゝ気をつけろよ」

私は向かった。公園へ……お姉さんの待つ公園へ。

あんちゃん以外で初めて、私は私と向き合ってくれる人と出会った。

向き合えると……思える人と出会った。

お姉さんは語る　己の弱さと隠していたある真実を。  
私は叫ぶ　他人の優しさに対して目を向けられなかった事実を。  
私は教えられる　人が人に興味を抱く意味を。

変化した三日月夜空が……私の変化を促す。  
それは隣人部にとっての二つ目の奇跡となる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3974u/>

---

僕は友達が少ないIF

2012年1月12日00時57分発行